
小説 中野

ウィリアム・輝夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説 中野

【Nコード】

N6818G

【作者名】

ウィリアム・輝夫

【あらすじ】

六畳一間に住むさえない二丁の半年の生活記録にしたいと思っていました。ちょっと違う方向に行ってしまった。というか、どうなるのか作者もわかりませんが、一応、純文学ということにしてください。

最近、この「小説家になろう」で小説を書いている人々と交流を図ろうかなと思うのですが、どうやって図っていいのか、よくわかりません（笑）。

もし、感想とかコメントをくれたら、こちらももお返ししますので、是非ともよろしくです！

第1話 「正夫は二ト」

大きな希望をめぐってそれぞれの思いが交錯していた。いや、それは正夫の勘違いだったのかもしれない。正夫は急にそんなことを思いたくなっていたのである。別に、希望でなくなつたって良いのだ。出口、ということにしたって意味は変わらないであろう。要は、こんな停滞は嫌だと正夫は自覚しただけに過ぎなかった。

が扉は開こうとしない。すぐ近くにあるので開けば音が鳴るはずであるが、音はせず、正夫は部屋の万年床で寝ながら、廊下の共同便所の空きができるのを待っていた。誰かが入ると、途端に正夫も入りたくなつてくるのである。それほど便意があるとは思えないのであるが、これは自分の本能的な防御反応で、ここで我慢したらまずいとも思っているのだろうか。それとも、膀胱が他の人よりも大きいのもかもしれない。正夫の自在な膀胱が、本来あるべき正当である評価を受けていないだけなのかもしれない。自分のこととはいえ、さすがに膀胱内部のことはわからなかった。

ようやく人が去つてゆく音がしたので、自室のドアを開けて、冷たい木でできた廊下を歩き、西日のかすかな光が小さな流しの上にある窓から差し込んできて、流しの中に誰かの食べ終わった後のものらしき井がおいてあるのを確認することができた。そのすぐ右隣のドアを開け、中に入ると正夫は便器に向かって精一杯に用を足したのだった。もう膀胱に無理矢理なほどに力を入れて、飛び散るのもかまわない水勢でして、ある程度のものを空にしてゆくと、充實的な残尿感とともに、急にふと虚しくなる自分がいる。

虚脱感にも似た空白の後に襲ってきたのは、何かしなきゃいけないという強迫観念であった。考えてみると、正夫の人生というか日常は、強迫観念と虚無と睡眠によって成り立っているのにすぎないかもしれない。

もちろん、正確にはそんなこともないが、印象として書いてみた

ままであり、そうでありながら、正夫はあまりにもものんびりしている自分に対して、それほど致命的なものとは思っておらず、それは考えの力点を普通の社会とは違うところに置いているからかもしれない。人はそれを愚鈍というが、正夫の中ではわざと愚鈍を飼って、己の中の愚鈍を純粹培養して楽しんでいるようなところがあった。

正夫はテレビをつける。テレビの中で展開している一日が今日も同じように過ぎようとしていた。髪の毛の短い、逆三角形な頭の形をした、紺色のスーツを着ている女性アナウンサーと、中年太りをうまく黒ブチ眼鏡で誤魔化した歪んだ頬をしているお笑い芸人が、軽妙なやりとりをしていた。あんな女性とあのようにコミュニケーションを交わせるのはうらやましい。もし、あのお笑い芸人が自分だとしたら、公共の場であのようなコミュニケーションをとれるものではないに決まっている。

だが、それは決まっていたのであろうか？今、正夫はあのような女性とコミュニケーションをとる機会がないだけで、蓋を開けると意外なことに、「あのような女性」キラーであり、実は無敵の強さを誇る可能性だってなきにしもあらずだ。しかし、それは一時的なことであり、戦国時代の言葉で言えば、三日天下であり、結局は、白けた空気が流れて、正夫は居心地が悪くなってしまったのかも知れない。

正夫は何となく今風になれない自分がいて、口には出さないが、どう頑張ってもあのような女性を、気楽にゲットできるような、そんなタマではないのだと断定することにした。この場合はとりあえず本の中に付箋を貼って、その本を途中で読んだままぶん投げるかのように、かりそめの断定しておいて、思考の中のどこかの倉庫にしまっておき、必要になったら取り出しておこうという、そんな感じの結論であった。

いつそ、みんな忘れても良かった。正夫は、くだらないことの積み重ねであるアホな思考を、半面で楽しいと思いつつ、半面で呆れてもいたのだ。一体、正夫は何をしたいのか。まったく定まらない

まま、生活費は消えてゆくが、正夫は飲む・打つ・買うということをしなから、ある程度まとまった貯金があったために、あと半年は平気で何もせずに暮らせたのである。

だからといって求職活動をしない。ということではない。正夫はハローワークに行っていたし、その中で自分の趣向と合致するものがあつたら、連絡してみる気はあつたのだ。しかし、ハローワークに出かけて、コンピューターの画面をいろいろ見てゆくと、もうそれだけで現代社会の提供してくれたパノラマワイドな世界観に魅せられて、ぼんやりしてしまうのであつた。そして、気がつくと、アパートの部屋の万年床の上にいるのである。

それではだめだ。と思うこともなく、正夫は求職活動をした自分に妙な満足感を覚えていた。そのとき、急に、腐ったミカンのような臭気が漂って、布団をめくると、その下にバナナがあつたのを発見して、自分の嗅覚をいぶかしんだものである。

第2話 「ふぬけ…あるいは、書くことなし」

ダラダラと魂の抜けたような顔をして正夫はテレビを見続けていた。このままではダメと思いつつも、そうではないと、思ったり、そもそもダメって何よ？人は、そのままが自然なんだよ、などという反問が彼の中でうごめいて、うごめている内にどんどん忘却が彼の思考をクリーンにしてゆき、気がつくとはんやりテレビを見ている自分がいたが、テレビを見るという行為はそれほどダメな行為であろうか。いや、そうとも限らないかもしれない。

今、正夫は、昼のロードショーで、テレビ映画を見ていた。内容は、90年代に良く作られたサスペンスもので、短髪の金髪女性がふくよかな胸をさらして、絶叫したり、どう考えても悪事をしそうな男に対して微笑んだりしていた。その男の悪そうな面構えが、逆に去勢されたような善良な男たちの集まる村の中にいるその金髪女性には、とても魅力的に感じられたらしい。そして、善良そうな夫は夫で実はとんでもないことをしているらしいのだが、奥さんは気づかない。事件はどうなるのか、というところであった。

そこで保険会社のCMがしつこくしつこく流れる。正夫はそれによつて現実に戻される。この場合の現実とは、部屋の中にいて、テレビを見ている間抜けで臆病でそれでいて少し純粋な正夫自身であった。

この部屋は六畳一間で、本来は思ったよりも広いのだろうが、小さな冷蔵庫を置いて、さらに衣装箆笥があり、万年床が敷いてあるので、実感的には、四畳半くらいにしかない上に、部屋の隅の方は、漫画雑誌や週刊誌、男性用雑誌などで、散らかっていたために、さらに狭苦しく、窓も大きいがひとつの壁にしかないので、部屋にいるときの息苦しさを増進させていた。

小さな冷蔵庫は、彼の友人の市村卓夫という人物の同棲相手である、田原汀子という女性のものだった。それを、正夫にわけてくれ

ただ。正夫と、汀子は、少し仲が良い時期もあったが、最近はずつかり疎遠であった。これは多分、お互いの文学観（文学感？）の違いによるものである。ここで唐突に説明するが、正夫は純文学を書こうとしている者であった。そして、汀子はミステリー小説を書こうとしていたのだ。この二人の文学観がしっくりいくわけがない。正夫は変な曲がりくねった文章ばかり書いていたし、汀子は平板な雰囲気のある文章ばかり書いていた。そして彼の思考は曲がりくねったものであり常に歪んでいたから、彼女の文章の平板な価値を理解できるわけがないのである。いや、そんなことをいっただら、誰だってそれほど理解はしあえないが、うわべでは理解をしあっているようなふりをする。そんなものが人間関係というものである。そういうこともできたはずだが、別に正夫はそういう社交辞令をしなかった。よって、しっくりいかないが、これからはどうなるかはわからない。

この冷蔵庫は、高さ50センチ、幅70センチくらいの小さな箱であるが、使うことが一切なかった。部屋の中に入って三日で稼働しなくなった。たまにその存在を感じるとしたら、正夫が寝ているときに、誤って足をぶつけるときぐらいである。半年前に、何かを入れていて、最近になって、入れていたことに気づき、冷蔵庫をあけると、真っ黒いものが隅に置いてあって驚いたことがある。急いでその黒いものを捨てたが最終的に何だったかはわからなかった。

そして、衣装箆筒は、このアパートの部屋にもともと住んでいた、渡部博文のものである。渡部は、正夫の歪んだ文学観を理解できる知性はなかった。何故なら、彼の特徴は、自分で言っていたが無知性にあつたからである。しかし、何か凄いものがあるような気がして、彼の文学を褒めていたのだ。正夫は、ネット上のブログで、小説を公開していて、彼の文学ということはそのことを指す。ちなみに、正夫は、学生時代にサークルの中で発表した小説も全部ネットで公開していた。しかし、そのブログは、コメントがほぼゼロな廃墟のようなブログであった。たまに、エッチなサイトへの勧誘トラ

ツクバツクやコメントが書いてあって、それを削除する毎日である。

今、説明した二人は、学生時代の文学サークルの友人たちであった。ついでに、汀子の同棲相手の市村という男も、このサークルに入っていた。だが、それも、三年前のことである。卒業後の現在、渡部は東京にあるオフィス関係の備品会社の営業マンをしており、汀子は、携帯電話の会社で営業をしており、市村は、テレフォンアポイントメントの派遣社員をしていた。

話が横にそれたが、衣装箆笥の方も使わなかった。そもそも正夫に衣装が必要なかった。最低限のものが吊るされていれば良いのである。この箆笥は地震などがあるとガタガタ震えて、その揺れ方がいつでもぶっ倒れてやる、という感じのものだったから、非常に危険だった。しかし、正夫は怠惰だったので止め具をつけるということもしなかった。学生時代に中野のこの部屋に住んでいた渡部は、引越す際に、この衣装箆笥を、引越し会社に頼むとお金がかかるので、正夫にあげる、ということにして、そのままにして引越したのだ。正夫は、それでも使つかないかと思っただが、まったく使わないうちに自分でも驚いた。そして、止め具のないことにも二重に驚いたのである。

部屋はこの二つによって、決定的に四畳半になっていたが、さらに、ワープロまである。これは書院というワープロで、故郷の千葉のジャンク屋で買ったものだった。勇躍、中野に飛び込んできたのは、正夫は作家になろうと思っていたのである。しかし、それも、はかない夢であるんじゃないかなあ、と今思っているところである。

何故なら、正夫には書くことがないからだ。自分の生活はダラダラしていただけのものであったし、自分の友人たちはとりたてて小説に登場させるような面白いことを話すわけでもなく、面白い人たちでもない。彼ら、彼女たちは、自分を面白いと思っただけのことである。ところが、（というよりも、それは正夫も自分のことをそう思っ

いるのであるが)、正夫からしてみたら、それほど面白いことがあるとは、思えないのだ。

この手記には、あと数人が出るかもしれないが、それでも今現在、面白い小説などに書くことができそうな人物は皆無である。どれも、それなりに、リアリティーがあつて(当たり前だ。リアルなのだから)それでいて、退屈で、面白くない人物ばかりである。それは、しかし、彼らの方も正夫に対して感じていることであろう。正夫は面白くない。そして、人生と言うものは面白いものじゃないんだ。ということもここで述べておかなくてはいけない。

だから、正夫は小説なんか書くことができないのである。彼らのせいだ。彼らがつまらないから、才能のある正夫は小説を書くことができないのである。という何度もたどり着いた結論が、今、テレビのCMが終わってどうでもいいテレビ映画が再び流れ始めたときに、もう何度目かわからないが、正夫の脳を改めて襲った。

そうかもしれない。そうだとしたら、どうしたらいいのだろうか。いや、もうだから小説は諦めた方がいいのである。と思つて小説を書くのをやめて、断筆宣言したのが三日前であつたが、興味があつたらまた書くだらう。そもそもがこの場合の断筆宣言は自分が自分にしたものであるから、いつでも反故にできた。正夫はそういう適当な人間であつた。適当だから、こういう文章を書くことができるのだ。適当じゃなかったら、この文章は、吉田兼好の徒然草にでも全文の内容が書いてありますので、読まないでいいです、なんて文章を挿入することであらう。しかし、そこまで断定する気はない正夫であつた。

第3話 「繰り返しの日常」

何をしなくとも一日はあっという間に過ぎてゆく、ということに淡い感動を覚えたが、それも実は何度目だかわからない、と二ヒルに苦笑しつつも、その苦笑さえも何度目かはわからない、何故ならすべてが単調な繰り返しであり、つまり、日常というものは繰り返しのかなあ、というありきたりな結論に至りそうになったときに、正夫は急に空腹に耐え切れなくなって部屋から脱出した。

錆付いた階段を降りて、アパートのクソボロなたたずまいを背後に感じつつも、あまり車の通らない、一車線の道路が組み合わさった複雑な通りを少し歩くと、古本屋の隣にコンビニがあった。その古本屋は『純文堂』といって、最近流行している新古書店めいた、漫画やCDゲームを主に販売しているものではなく、純然たる昔ながらの古本屋であった。

正夫はその古本屋のおやじと何故か親しくなっていて、本をまけてもらったりしていたが、何故かという正夫の買う本が非常に渋い本だったからである。ちなみにまけてもらったのは一回しかなく、その一回は本の背表紙に、図書館のシールが貼ってあったからだ。古本屋のおやじには顔なじみがたくさんいて、その人々に古本屋は儲からないよ、と何度も何度も言っていた。もう、それは挨拶のようになっっていた。それも繰り返しの日常であるのだが、おじさんは気づきもしなかつたろう。正夫はその事実には気づいたものの、自分の生きている現実特に何の役に立たないこういう感想というものはすぐに忘れていってしまうものであり、そうやって人類は多くのものを忘れていって、覚えているものだけで歴史を構成して現在に至るのだ。

コンビニの中に入る。茶色い髪をした少し太った50くらいの女性が、レジをやっていた。この高齢化社会に、美人の若いコンビニ店員なんて望んではいけないのだ。若い子はもっと日の当たるとこ

るに出たがっているに決まっている。なんてことをふと正夫は思ったが、その日はたまたまそうであり、若い娘の日もあったかもしれない。だが、おばさんでも良いのだ。というよりも、おじさんでも良い。何なら人でなくとも良い。ロボでも宇宙人でも何でも良い。レジができるのなら。

正夫は雑誌コーナーで立ち読みをする。正夫は純文学というフィールドで何かをしようとしていたが、それは同時に全世界に対して丸腰で一人で立つということを意味していた。純文学というものは往々にしてそういうものなのであるが、そんな身である正夫にも、雑誌の面白さには素直に面白いと感してしまうのであった。雑誌には何か底知れない雑なパワーが誌面に溢れている。だから雑誌なのだろう。世間知というか、人生知というか、そういう有象無象、玉石混交が溢れかえっているではないか。そういうごった煮の情報知識や人間への知識が、人間といったら、渡部博文、市村卓也、田原汀子しか知らない、あと数人いるはずだが思い浮かばない正夫と比べて格段の面白さがあったといえよう。

『だが、その面白さは嘘だよ』

という言葉が、正夫の頭に浮かんだ。いや、浮かんだというよりも、明滅した。浮かんでは消えるその言葉が、再び浮かんだときに正夫はキャッチして、その言葉を手元に取り寄せて考えてみることにした。

急にすべての雑誌が詰まらないものに感じられてきた。こういったものは、生きてゆくために限られた人々が汗水たらして作ったガラクタである。そんなものに騙されるな正夫！お前は小市民になっではいけない。大市民になるのだ。いや、漢語でいうところの大人になるのだ。だから、そんな小人の読むようなものに影響されて時流に流されずに、濁流をむしろ遡り、源流に至って美しい滝の風景をスケッチ描写してゆけば良いのである。という風に、精神が方向性をもってきたので、しかたなく正夫は、レジの近くに陳列してあるカウンターフーズの『カラッと揚げ造君』のレモン風味を頼んだ。

50歳の女性は、ニコリともせず、そいつを手にすると、「袋に入れますか」ときいてきたので「いいです」と答えた。

「あっ！」

あと、マイルドセブン」

と注文を続ける。

そして、おばさんがマイルドセブンを一個、テーブルに置いたとき、

「二個ねっ」

と少し強めに正夫は言った。

正夫にその気はなかったが、これによって、あたかも自分がマイルドセブンを買うときは常に二個であり、その事実を事前に察知しておけよ、という意味表示になってしまっているという可能性もあった。その50歳の女性は、何かあったら逆にこっちがぶち切れてやる、という風な気の強そうな女性だったので、そんなことはどうでも良かったのかもしれない。そもそもがコンビニの店員は、それぐらいの図太い神経じゃないければ勤まらないような仕事かもしれない。なかった。

正夫はそこから、悪とは何かを考え始め、歩道を食べながら歩いていたが、そのために、うっかりして、道路上に『カラツと揚げ造君』を一個落としてしまった。これは、鶏の肉を一口サイズでコンパクトに唐揚げにしたもので、五個入っているのであるが、その中の一つがなくなると、購入価格の210円÷5として、42円の損失であるから、急いで三秒以内で拾って、食べた。いわゆる三秒ルールというやつだ。

「あのすいません。」

今日、休みなんで、そっちに行って良いですかね」

突然、携帯が鳴ったので、取ってみると友人の渡部であった。

「いいよ」

と正夫は答える。

「そして、これも繰り返しだっ」

「え、何ですか」

「いや」

正夫は携帯を手にして歩きながら苦笑いを浮かべる。

「何でもない」

第4話 「Tは悪人だったろうか？」

「でしようねえ。」

まあ、僕もそれは思うのですがね。

しかし、それは、Tだけに限ったことではないんでねえ。

では今から、一緒にそのことについて、語り合いますか」

と正夫の部屋に入ってきて、用意された粗末な座布団の上に座った友人の渡部博文は答えた。渡部は身長170センチで、髪の毛は前の方がつんと尖がっており、額は小さめで目は接近していた。そこからインドの貴公子に見えるときもあったが、東南アジア系の丁稚にも見えるときもあった。鼻は高く、唇はピンク色で、肌は少し浅黒いが、できもの等は一切なかった。すべすべともいえた。彼と会って特徴的なのは、その話し方で、彼はオフィス関係の備品の営業をしている割には、テキパキしたところはなく、いわゆる切れがなく、ところどころ名古屋弁が混じり、たまに坊さんの説教、というよりも繰言、をきいている気分になるときがある。

共通の友人の市村卓夫は、彼の話をして「会話の贅肉が多すぎる」と称したときがあったが、たしかにそれはそうであった。しかも、渡部自身も自覚しているみたいで、基本的に僕は話に結論をつけたくはないんですね、ということを宣言していた。それで営業の成績はどうなのか、よくわからないが、辞めさせられていないで、三年も続けているのだから、そこそこの成績はあるのだろう。

「不思議だよな」

「えっ、何がですか」

「いや、だから、Tがね、結構、あいつって良い奴って思うときの方が多いじゃない」

「まあ、そうですね」

「それがどうして、今回のようなことになったのかってことだよな」

「それは…つまり、うんつと、ですね。」

基本的に、Tは、悪いやつではないんですが、良い奴でもないってことなんじゃないですかね」

「いや、俺だって何も善人と付き合おうなんて思っているわけじゃないんだよ。」

だから、それはそれぞれの利己主義を貫けばいいんじゃないか、とは思うんだよ。けれども、前回のあれはないんじゃないかなって」

「まあ、僕も、逆切れ野郎と言われるときがあるんですが、この前のあいつは、まさに逆切れ状態でしたよね」

「あいつ、そういうところがあるよな。」

他は良い奴なのに」

「他は良い奴ですよ。」

あいつほど、他は良い奴はいないんじゃないでしょうかねえ。

『他は』という条件が付きませんがね」

「そうだよなあ。」

他は良い奴だよ、あいつ」

「ですよねえ。」

あつ、ところで、正夫さん、カップうどんいいですかね」

「おつと、そうだった」

前にこの部屋の割と細密な描写をしたときがあったが、そのときに書かなかったものがあるあつて、その中の一つに、ポットがあった。だが、あのときは押入れの中にあつたら、襖の向こう側だったので、描写しないで妥当だったのかもしれない。

これは、橋の下のリサイクルショップで買ったもので、たしか2000円だったような気がする。どこか中国製を思わせる唐の時代を思わせるイラストが書いてあるポットで、妙に細長い竜みtainのが、白地の空を飛翔していたが、それは非常に底辺を飛翔していたので、正夫は初め、竜とは気づかずに、たんなる模様かと思っていた。

渡部はカップうどんと、コンビニで買ってきた鶏肉のから揚げ弁当を、正夫の部屋の中央に、万年床をどかして、広げた新聞紙の上に乗せて、食べ始める。

正夫は正夫で彼に途中によるコンビニで弁当を買ってもらっており、それは『豪華なノリ弁』というもので、なかなか食べ甲斐があるものだった。さきほどの唐揚げでは足りなかったのである。

「けれども五十分も遅れるってのはないよなあ」

「そうですねえ」

「俺は、正直、切れたね」

「でしたよねえ。」

あいつも、そういう空気感じれば良いのに。

むしろ、俺が五十分遅れる？

当たり前のことじゃないかって、そんな空気でしたよね」

「だよねえ。」

ありえないだろう、そういうことって」

「僕もねえ、あれはいけないんじゃないかな、って思いましたよ。」

少なくとも、人の上に立つ人間があんなことをしちゃいけないですよね」

「まあ、あいつは、ある意味、人の上に立つ奴だがな」

「ですよねえ。」

自分勝手ですよねえ」

「えっ」

「いや、だから自分勝手」

「いや、それは違うな」

正夫の否定に、渡部は、カップうどんを食べる箸を止めた。

「自分勝手は言いすぎだよ。」

あいつは仕事でしかたなく遅れたって言っていたじゃないか。

それは自分勝手じゃないだろう」

「えええっ。」

「そうなんですか」

「そうだよ」

「じゃあ、何なんですか」

「うーん、何だろう。」

ちよつと、イタズラが過ぎたね…

つてところかなあ」

二人が話しているのは、学生時代から続く共通の友人であり、この小説に次出るか出ないのかわからないので、控えめに紹介しておくが、高校教師をしている男でTという。正夫と渡部は、一週間前にTと新宿東口の交番前で会ったのだが、五十分遅れたのだった。しかも前日には、五時に会うという約束をして、それが当日になって六時にずれ込んで、結局は、六時五十分になってしまったのだ。正夫は、寒い風の吹く中、五十分待っていたが、Tは、現れると、ものすごく高速に「あつ、すいません」と言い、(正夫には「あつさつせん」としか聞こえなかった)、「それにしても何でこんなところで待っているんですか。どこか喫茶店とかにいれば良かったのに」と、まるで、五十分待ち続けた正夫や渡部のことを馬鹿扱いして、しかも当日に自分の恋人を連れてくるというわけのわからないことをした上に、その翌日のミクシイの日記で、「それにしても、久しぶりに会った友人に開口一番、『じゃ、カラオケ行こう』は酷すぎるって思いませんか？」というような文章を書く男であった。「俺ね、第二次世界大戦前に日本が国際連合を脱退した意味がわかってきたよ」

と、正夫の中でふつつつと怒りが湧き上がってきて、正夫は鼻息が非常に荒くなった。

「わかりますね。」

もう絶交ですよね」

「絶交？」

正夫は目をギョロツとさせて、驚いたように渡部を見る。

「それはないね。」

考えたこともない。

っというか、大切な友人に、よくそんなこと言えるね」
今度は、渡部が驚く番であった。

第5話 「Tについて考える」

渡部は部屋の隅っこでしゃがんでPSPを始めた。彼はRPGマニアで、延々とモンスターを倒して、経験値を積んでレベルを上げる作業を続けることを、人生の無上の喜びとして生きている人間であったから、そのときの彼の目は、輝いているようにも見えた。この調子では、正夫の部屋に泊まるつもりであろう。正夫は、もう渡部とは七年にもわたるつきあいなので、結構、いろいろなことを予知できたのである。ところで、何故、渡部が正夫に対して敬語なのかというと、もともと正夫の方が先輩だったのだが、正夫が留年したことによって、同輩になってしまったのだ。

先ほど二人の話に出ていたTは、渡部よりさらに一年下であった。大学の文学サークルに、彼が入ってきたときのことを、正夫はよく覚えている。落ち着いていて非常に真面目そうな青年であった。しかし、それがふとしたことから、オタク青年であることが発覚し（それは自分からカミングアウトしたのかもしれない）、開き直ってオタクキャラで売ろうとしたが、それが不発に終わって、中途半端に受け入れられてしまい、学生生活を不発のままに終えた、という印象を正夫は持っていた。当人に言わせてみたら、「あれが俺の狙っていたポジションですよ」と表現するかもしれないし、強がりではなく現にそう思っているのかもしれないので、そこは非常に難しい。

そして、正夫が面白く感じたのは、彼の人望のなさであった。正夫は、Tと一緒にいると楽しいのだが、どうもTの楽しさを周りは認めていないんじゃないか、という搔痒感が常にあった。彼の楽しさは、真面目なオタク青年の仮面を被ったロリコンである、というそこに尽きるのではないだろうか。そのロリコンというところを知ることによって、初めて、彼の「真面目」だとか「オタク」だとかが再構成されて、独特な意味をもつ面白い人格に変わるんじゃない

だろうか、という気もしていたのである。

思えば、Tがサークル内のある女性に恋をしていたのであるが、それはあきらかなロリコン一直線ともいえるようなチョイスであった。彼女は、内気で、瞳が大きく小柄で、何かあるとすぐに顔を赤くする、とても可愛らしい女性でとても声が小さく、おしとやかで真面目で、綺麗であった。こう書くとき形容詞を連ねただけで、人物像がわからなくなるだろうから、アニメでたとえると、昔やっていた「お邪魔女ドレミ」に出てくる眼鏡をかけたおとなしい女の子にそっくりだった。しかも声がほぼ同一であった。ちなみに、学生時代に我々のサークルに、まさに「お邪魔女ドレミ」の三人の娘が、新入生として入ってきた時期があつて、そのとき、正夫は狂喜したものだつた。

というよりも、この過去の出来事は非常に重大な事件であり、この小説は、実は、彼女たちの思い出にいかにもアプローチするか、思い出の三人の娘たちと、いかに小説という空間を借りていちゃいちゃするのか、という試みでなされている、ということは、断っておいた方がいいかもしれない。それほどの重要キャラクターなので、頭の片隅にでも置いてもらって欲しい。彼女の名前を、小野田通子ということにする。

そしてTは彼女に恋をしてアプローチをしたのであるが、それに失敗してしまったのであつた。で、ぎくしゃくしたまま、二人の間には何も起こらなかつたのである。正夫は、Tの気持ち痛いほどよくわかつた。たしかに彼女は可愛かつた。正夫はひよつとしたらTよりも、小野田ちゃんには恋をしていたのかもしれない。

となると、ロリコンへの熱情では正夫の方が上になるのかもしれないが、しかし、ロリコンというものは精神的な文化であり、正夫にはそれほどアニメ的な知識やアニメで養った感性はなかつたから、そういうことを知っているTの方がハードなロリコンだったのかもしれない。ロリコンへの熱情という意味でも、正夫は現実の小野田ちゃんの方に比重を重くおいて惚れていたのであり、それをロリコ

ンという幻想と結びつけたわけではなく、もつと違うものと結び付けていたから、Tの方が上かもしれない。だが、正夫の抱いていた幻想が、ロリコンというジャンルでくれるのだとしたら、正夫の方が上かもしれない。いや、そもそもがこういうことで、上も下もないのかもしれない。書くだけ無駄だ。話を先に進めよう。

とにかく真面目でオタクでロリコンなTは、ダメ人間ともいえた。そこにおいて、正夫はTに親近感を覚えていた。というのも正夫自体が自他共に認めるダメ人間であった。しかし、Tはたんなるダメ人間と見せかけて、事務的には非常に有能な人間で、高校教師になるくらいであるから頭も秀才であり、妙に落ち着いた感じがあつて、初対面の人間に安心感を抱かせるところがあつた。だから、このダメ人間というのは、正夫の幻想だったのだろう。

「ところで正夫さん」

「はい」

「いつでも寝れるように、寝る準備をしてもいいですかね」

「やっぱり泊まるの」

「ええ。」

「だってせつかくの二連休なんで」

「そうか」

せつかくの二連休なのに何で正夫の部屋に泊まるのか、意味がわからないが彼の中では、意味が通じていたのだろう。彼は、この四畳半状態になつている部屋にでも平気で泊まる。そして、四畳半状態にしている主因の衣装箆筒については、一言も話さない。正夫も話さない。たまにドアを開いて空っぽなのをアピールするが、それでも渡部は、うつろな目をしてその空洞を見つめて、何も話さない。あたかもその物質が、そこに存在していないかのようだ。だから正夫は衣装箆筒については何も言わないが、今日こそ言つていいのかもしれない。

「あのさ。」

「衣装箆筒、邪魔なんだけど」

「ああ、そうですね」

渡部は、押し入れの下の方に布団をしいて、寝転んだ。

「あれ、どうしたらいいんだろうね」

「うーん。」

僕にはわかりませんね」

「つていつか、撤去してくんない」

「すみません。」

嫌です」

「えええっ」

「僕は、あなたにあの筆筒をあげたんですから、自分で始末してください。そもそもが、使えばいいんですよ。何で使わないんですか」

正夫はしばらく、時間をおいて悲しみによって生じた嗚咽を、押し殺した声で言った。

「ニート…だから」

第6話 「渡部の鋭い質問」

夜の十時ごろになって、正夫は渡部といろいろなことを話していたが、それはいつもの通りろくなことではなく、渡部は仕事と生活（大げさに言えば人生全般）の愚痴を、正夫は人生論的な、ためにはなりそうだが実質は無内容な精神的な雑言を、お互いの会話が交差することもあまりないままに、めいめいが好き勝手に話していた。しかし、それも尽きてきたので、正夫はゲームでもすることにした。渡部は、さつきから押し入れの下の段で延々とPSPをやっていた。

二人ともゲームマニアであったが、正夫は非常に不真面目なゲームマニアであった。一つのゲームをクリアまでせずに、いろいろなゲームをはしごしてゆくタイプだったのである。あれをやったりこれをやったりで、ゲームだけが部屋に集まる結果になった。今のところ、テレビの下の台に入るほどであったが、その内、はみ出すかもしれない。ちなみに、テレビの台の中は、ガラス棚になっていて、びっしりと字が印刷されているA4のコピー用紙がたくさんあった。それは、『僕と彼女とアカプルコ』という小説の原稿であった。正夫と渡部の共通の友人で、小説家志望の勝間速人のものである。後々、この小説に関係してくることになるかもしれないので書いておく。

ゲームは置くところがないが、それでも正夫は決して売らないことに決めていた。というのも後悔することが多い上に、前に売ったのをまた買うってことも結構多いからだ。正夫は、昔からゲームを選び続けていたから、ゲームを見る目はあるのだ。だから、自分のもっているゲームをまたやれば優良なゲームがあるんだから、それで楽しめる良いのである。思い出せば、これは正夫と渡部とのこれまた共通の友人の市村卓夫の常に言うことであった。

今日もそんななかなか面白いゲームの一つで、「トウームレイダ

「3」というものであった。これはプレイステーションのゲームで今やると、さすがにポリゴンの絵が汚くて、主人公キャラクターがダッチワイフにしか見えなかったり、当時では最優秀な、今では粗雑なポリゴンの地形などが見づらくて、頭がクラクラしたりするのだが、それでも楽しいことは楽しいゲームであった。たしか、映画化したとも思う。アンジェリーナ・ジョリーという人（名前に自信がないが）が主演をやって有名になったという話をきいたこともある。

だが、ゲームは一時間も続かない。正夫はゲームをやめてしまうと、テレビではニュースがやっていた。東南アジアのどこかの国でテロが発生したらしい。そんなのをぼんやり眺めながら、正夫は眠くなってきた自分を感じる。

「さあて、寝るかな」

「あ！正夫さん」

急に渡部が声をかけてきた。

「何」

「僕はですね：基本的には、それほど他人の行動に対して、疑問とつか：まあ、そういった質問をする、ってことがあまりないタイプなんですがね、きいていいですか」

「何だよ。」

長ったらしいよ。

下手の長丁場って言葉をきいたことがないのかい」

「ないです」

「そうか…。」

まあいい、続ける」

次の瞬間、渡部のきいた恐らく腹の底から搾り出すような、一生懸命な意思の結果である質問が、しんみりとうすくらしい部屋にこだました。

「何で仕事、せんのか？」

第7話 「正夫の思惑」

それは正夫の回避し続けた問いであり、一番、渡部が発しちゃいけない問いでもあったが、いざこややって友人の口から正面きつてぶつけられると、正夫はその質問に対して、多少は気合を入れて答えなくてはいけないために、寝ている状態から身を起こして正座した。

「何でつて。」

それは、良い仕事がないからだよ」

「正夫さんの中で良い仕事って何ですか」

「そうだなあ。」

こつ、暖かくなるような仕事だね」

「具体的には何ですか」

「わからん。」

ただ、多くの人の心を癒し、それによって俺の心も癒されるような仕事だな」

「仕事ですか。」

それは甘くないですか」

「甘くないよ。」

どこかに絶対そういう仕事はあるんだよ。

あつ、少なくともそれは派遣の仕事ではないから。

あれは悪魔のシステムだから」

「言いますねえ」

正夫は、正座から胡坐をかくことにして、手近にあったパツクのコーヒーを飲んでから続けた。

「人間っていうのは、自分で主体的に生きれている部分はほんの少いで、流されている部分が非常に多いと思うんだ。」

いや、これは人間全般ではないかもしれない。

これは俺だけの話かもしれないが、それでもやはり、俺が流れを

大切にしている、ということとは否定しないね。

流れあつて縁あつての人生だよ。

今の俺の流れは何もしない流れなんだ。

だから、今はそれで良いと思つてゐる。

人生なんていうのは、どこかで休んで、頑張つて、の繰り返しなんだよ。

今、俺は雌伏の時期だ。

これは半年は続けてゆこうと思つてゐる。

何故かはわからない」

「市村さんの影響ですかね」

正夫の先輩であり、心の師とも言える存在が、市村卓夫という男であつた。

彼は何もしないで、親の仕送りで生きていた時期が一年あつた。

彼の中では、それは鬱の時期であつたかもしれないが、それを学生時代に見ていた正夫は、正直、うらやましかつた。

もともと正夫は勤勉な性格だったので、ひよっとすると市村さんから、怠惰というものを学んだのかもしれない。

いや、正夫は勤勉だつたらうか。

彼は宿題とかは一切やらない性格であつたし、部屋の掃除もしないタイプであつたから、実は勤勉ではなかつたのである。

本当は怠け虫が、勤勉な顔をしていただけだつたのだ。

その本性を引き出してくれたのが、先輩である市村さんと正夫は勝手に思つてゐる。

もちろん、それは勝手である。

市村さんは普通に自分のペースで生活していただけであり、まさか正夫に自分が影響を与えたとは思わなかつたらう。

それにしても、何故だか知らないが、正夫にとって、たまに泊まりに行つたりして感じる市村さんの生活がとても楽しそうに思えるのだ。

それは何故だかはわからない。

ここ数年、彼は同棲をしているので、それが羨ましかったのか、
というところでもないのだ。

実は同棲の前から、何故か、市村さんの生活が羨ましくてしょう
がなかった。

いや、それは生活なんてことではなくて、市村自身が羨ましかっ
た、とも言える。

正夫は、自分のこの生活は、そのまんま市村さんの真似だと思っ
ている。

だが、どうも市村のようにはなれない。

それは多分、正夫は正夫であり、市村さんは市村さんであるとい
う当たり前の事実がそれを阻んでいるのである。

「その影響かもしれないな」

「だめですよ。」

良い部分を影響受けましょうよ」

「それが、あの彼の一年間のニートっぷりが忘れられないんだよ」

「たしかに、満喫という感じでしたが。」

「ちょっと鬱っぱかったらしいですよ」

「うーん。」

俺は、あんまり長期的な鬱って性格じゃないからそれは真似ない
が、それにしても俺は、あの人の生活に憧れているね」

「同棲にですか」

「同棲にも憧れている」

「誰と同棲するんですか」

「もちろん、小野田ちゃんだよ」

と俺は吼えた。

「あつ、Ｔからメールだ」

渡部は携帯を覗き込む。

「明日、会おう、ですって」

第8話 「T」高田伸司

「Tか」

正夫はアンニュイな表情で、ファミレスの窓についているほこりを見ながら呟いた。

「俺にとってTって何なんだろうな……」

翌日の昼の十二時にTは、中野駅から少しはなれたこのファミレスへとくる約束であった。渡部と、正夫は、あれからぐっすり寝て、朝飯も食べずにやってきたのだった。

このファミレスは少し古ぼけたどこにでもあるようなファミレスで、友人たちと会うときにはいつもこの店を利用していた。思えばここで、正夫は仲間たちに「俺は日本文芸大賞をとるんだ」と豪語したことがある。今でも、何で「ノーベル文学賞」って言わなかったのか、正夫は後悔していた。

「正夫さんにとってTってのは、多分、頼りにならない後輩ってところなんじゃないんですかねえ」

荒れた唇にリップクリームを塗りながら、渡部は答えた。

「うーん。」

頼りにはなる方だと思う。

しかも、もう卒業して三年もたって、後輩とかそういう間柄でもないな。

俺はときおり思うんだよ。

Tこそ、俺の先輩じゃないんじゃないかってな」

「そうですか。」

じゃあ、俺は何なんですか」

「もう確実に先輩だね」

「そうかなあ。」

本当にそう思ってますか？

正夫さんは、言っていることとやっていることが、いつもちぐは

ぐだからなあ」

「へえ。」

俺ってそんな風に思われているのか。

ま、そうかもしれないな。

しゃべりながら考える男だからね、俺は「

などというようなことを話しているうちに、そろそろ十二時になるうというときに、Tがやってきたのだった。

「あっさっす！」

と、また妙に簡素な挨拶をしてきた。

これは彼の癖なのだ。別に悪気はない。

と、正夫は自分に言いきかせる。

「にしても、あれだな」

「何ですか」

「小野田ちゃん、元気」

「何で俺にきくんですか。」

「知りませんよ」

Tは、黒いコートを脱いだ。そういえば、Tは黒づくめの服装をしていることが多かった。何か意味があるんだろうか。何か意味があっても、正夫にはそれを見抜くファッショ的な眼力はなかった。

この人物をTと書いているが、どうもこの調子では、この小説で ある程度大きな役割を果たすと思うので、高田伸司という名前をつけようと思う。

「最近さ、俺、小野田ちゃんに会いたくて、会いたくて、しょうがないんだよ。」

あの少し震えた声で、ニコニコしながら『正夫さん、どうしたんですかあ』って言うのをききたくて、ききたくてしょうがないんだよ。

どうにかしてくれないかな。

会いたいんだ、もう、死ぬほど」

「うーん。」

小野田ちゃんは、清松と仲が良いんですよ。

清松、俺、小野田ちゃんにご飯を食べる、ということにすれば、ひよっとしたら会えるかもしれないね

「ええつ。」

俺が呼んでいる。

っただけで、きてくれないの

「こないですね」

元丁の高田は、こういうとき、やけにきっぱり言う。まるで、きっぱり言うことを楽しんでるかのようである。

「何で、清松を間に挟まなきゃいけないんだよ。」

俺、あいつを嫌いなんだよ」

「そうなんですか。」

あいつ、良い奴ですよ」

「理由はよくわからないんだけど、何か嫌いなんだよな。何でだろう」

「コンプレックスみたいなのがあるんじゃないですか」
「かもな」

それから、かなり長い間、高田は渡部と仕事や近況の話をしていった。正夫は小野田ちゃんには会いたかったが、清松がいる席で小野田ちゃんと親しくなるきっかけを作るのは難しいと思った。そもそも、今何の仕事をしているんですか。という話になるだろう。そのときに「ニートです！」ではまずいではないか。これは清松とは関係がないかもしれないが、しかしながら、そういうとき、清松は俺を冷笑するに決まっている。そして、清松の冷笑が、すべてを崩壊させるのだ。正夫の立場はほぼゼロになる。そんな状況で、いけしやあしやあと女の子をくどけるか。正夫にはそんな度胸はなかった。

「あああああつ。」

どう考えても、小野田ちゃんには近づけない。

それが俺の宿命なのか」

と、二人が話している流れを無視して、正夫は叫んだ。

高田は

「知りませんよ」

と答えると渡部と話を続けた。

第9話 「コンプレックスって何だよ」

「コンプレックスって何だよ」

それから数分後に、正夫はファミレスのトイレに行つて用を足しながら心の中で呟いていた。

コンプレックスとは、つまり、清松がかつこいい男であるから、正夫は、清松に対して、ひがみ、ねたみ、そねみ、劣等感等の屈折した感情をもっている、ということになるではないか。だが、それは、そんなことはない。たしかに、清松という男は女受けが良いが、それだけの男である。正夫にしたって、女受けがものすごく悪いということも無い。それほど引け目に感じることはまったくないのだ。

それなのに

「嫌だなあ」

と正夫が言っただけで、即座に

「コンプレックスですか」

と言ってくる高田は何者であろうか。

彼がコンプレックス、という言葉を使ったとたんに、これまで勝っているか、負けているかわからない、この不透明な戦場は、明らかに敗色の濃いムードに包まれてしまうのである。イメージの力というのは大変なもので、あのときに、高田がコンプレックスという言葉を使わなければ良かったのに、と後悔する場面だつて出てきそうである。

これはもう高田の陰謀であつた。何故、そんな陰謀をたくらむのか。それは、正夫に軽々と、小野田ちゃんをゲットされたくないのである。こんなダメ人間の正夫にゲットされてしまったら、自分の価値観が崩壊するでも考えているのではないだろうか。もし、それが本当だとしたら、そんなチンケな価値観を崩壊させるためだけにでも、小野田ちゃんをゲットしなくてはならない。

「コンプレックス。」

「良い響きじゃないか」

高田の狡猾な計略にははまらないで、ギャフンと言わせてやる。高田と清松。この二人は協力者と見せかけて、正夫の足を引っ張るだろう。だが、そうになったら、足を引っ張られるとみせかけて、逆にこつちが足を引っ張ってやる。そして、この二人に、正夫の偉大さを叩き込まなくてはいけない。

特に清松は、どう考えても正夫を小馬鹿にしている部分があった。もうそれだけで、自分が正夫よりも馬鹿だ。と白状しているようなものである。何故なら、正夫は偉大だからだ。正夫は、自分って何て偉大なんだろう、って思っていた。

いや、それはナルシズムではなくて、それは高校時代に卒業したのだ。高校時代に、正夫は若い女性の国語教師（ちなみに、高田も高校の国語教師である。それは正夫に当てつけるためにわざと選んだのだろうか？）に告白をして、あっさり断られて以来、正夫は自分の実質というものを掴んでいた。その勘が

「イケル！」

と青信号を発したのだ。だから大丈夫。今まで、彼の勘はいろんなところで、彼を助けていた。具体的には何を助けていたのか忘れてしまったが、それでも何かの役には立っていたはずである。不思議と、自分には勘が働かないとの印象を感じたことはなかったのだから。

正夫は、トイレの鏡に映った、丸坊主で眼鏡をかけた団子鼻の大男である自分に喝を入れた。すべては精神である。必勝の精神で行けば、小野田ちゃんを自分のものにできる。そして、そこで元気を取り戻した正夫は、職を見つけるのだ。そして、一緒に小野田ちゃんと暮らすのだ。あんなアパートではなくもつとましなところで。小野田ちゃんも多少はお金を出してもらおう。ペットは飼わないようにした方がいいかもしれない。何故なら世話を見るのが面倒だからだ。あと中野を離れたい。何かこの中野というところは貧乏くさ

い印象があるので、いつそ千葉にでも引越そうかなとは思う。子供は何人ぐらいが良いだろうか。いや、その前に結婚式を神前にするかそれとも教会でやるか。

そんなことをぼんやり考えながら、ファミレスの席に戻ると、二人がたまたま黙っていたので、正夫は演説みたいなきことをした。

「あのさ。俺、君たちに言いたいことがあるんだ。俺はいつも弱気になって、本当の自分を取り逃がしてしまっただよ。というのも、中学時代にいじめにあって、それが原因なのかもしれない。俺は今、大学を卒業して、数年たったが、俺は『永遠のいじめられっ子』であり、『負け犬根性男』なんだよ。だから、いつも女に対して消極的になるんだが、それでも今回は、まさにそんな自分を克服するために、小野田ちゃんをゲットしようと思う。だから、高田、協力してくれ」

「ああ、いいですよ」

「ありがとう！」

「君は良い奴だ」

正夫は、高田の手を握った。ぬくもりが伝わってくる。思わず涙が出た。この瞬間、彼が神様に思えた。しかし、手を離すと、高田はまた冷酷なことを言ったのだ。

「でもその前に職を見つけるほうが先じゃ……」

「違う！」

「君はわかっちゃいない」

「何をですか」

「俺をわかっちゃいない」

「ええ」

「俺は、何でニートをやっているか、わかるか。わざわざニートをやってだな、その屈辱にまみれた生活を小説に書き、そして日常の中の聖なる瞬間というか、素晴らしいものを描き出し、多くの社会人たちに知ってもらいたいんだ。」

生活というものが、それだけでいかに良いものなのかを。日常の

素晴らしさを。ニートになっても困っちゃいけない。じつくりと、逆境を過ごして、力を蓄えて、社会に戻ればよろしい、とね。自殺なんかもつての他だ、とね。

俺は、だから、言い換えれば、提案型ニートなんだよ」

「提案型ニートって」

「そうだよ。俺は、だから、人々を啓蒙したいんだ。恐れることはないよね」

二人はしばらく黙ってしまったが、正夫がドリンクを取りに行くと、また関係ないことを話し始める。正夫にとって、これといった反応がないことは虚しかったが、しかし、それでもこういう意思表示をしたことは、今後、この二人との関係においてプラスになると信じて、ウーロン茶をチビチビと飲んだ。

第10話 「中野ブロードウェイ」

それから三人はどうしたかというところ、ファミレスでその後もランチを食べ、正夫はステーキ定食、渡部はハンバーグ定食、高田はコーヒー一杯とトースト、で昼食をすませて、何か重要なんだか重要じゃないんだかわからない世間話をしてから、外に出たのだった。

この三人がファミレスSにくる、ということは、次に行くのは、中野ブロードウェイに決まっていた。ここは、オタクスポットがあるシヨップピングモールみたいなところだと思えば良いだろう。前にも書いたが、高田が重度のオタクだったので、二人が気を利かせたのである。

中野ブロードウェイに行くまでに、四車線の道路沿いをしばらく歩くのであったが、その途中に交番があつて、交番の近くに小さな公園がある。お笑い芸人の卵のような人たちが、三人でポーズみたいなのをとっていた。この近くには演芸場もあるので、ひよつとすると、彼らは演芸場に出るのかもしれない。

通りがかつた三人は、その三人を目撃するが、特にどういう反応もすることもなく通り過ぎてゆく。

「ロンドンみたいだな」

と正夫は呟いた。

「えっ、何が」

渡部は尋ねた。

「今、ふと思つたんだよ。」

お笑い芸人がいて、劇場があつて、公園で練習している。

これはロンドンだって」

「ロンドンってそんなものあるんですか」

「あるんじゃないか」

「あるんですかねえ」

「俺はテレビで見たんだと思う。」

そっくりの光景がテレビであったんだよ」

「そうなんですか」

「うん。」

まあ、それがどうしたんですか。

ってきかれると困るんだが、どうも今、ロンドンというのが頭をよぎったんだ。

これは言っておかなきゃいけないって思ってな」

「そうなんですか。」

多分、そんなとつぴおしもないこと、言われても、僕は覚えていないと思うんですがね」

「覚えなくても良い。」

ただ、思ったんだよ。それだけだよ。

気にするな」

「へえ、そうですか。」

まあ、気にしろ、と言われても、気にしませんかね。

というか、気にできませんかね、そんな話」

渡部はそれ以上、追及しないで、三人は中野ブロードウエーの入り口から中に入った。そして、エスカレーターを上り、三階の「まんだらげ」へと向かったのだった。漫画専用の古本屋である。昔、飯島愛が「まんだらりんたら何たらりん…」みたいな内容の歌を歌っていたCMを正夫は思い出したが、二人はそれを知らなかった。

三人はバラバラになって、それぞれの好きな漫画を漁る。正夫は、主に、70年代の古い漫画が好きであった。最近の漫画はわからない。絵が見づらくて複雑で、ストーリーも幻想的か暴力的でわけがわからなくて、嫌いである。70年代の漫画の方がまだリアリティがあって好きだった。

一方、渡部は、通りに面した一冊100円の漫画が並んでいるところに行き、そこで多くの人々とともに立ち読みをし出した。彼は立ち読みの王様であり、本屋で三時間立ち読みで費やすほどの猛者

である。しかも、こういう古本屋は、ラッピングされていないので、彼は読み放題であった。彼の趣味は80年代の漫画であり、高橋留美子の「うる星やつら」などがストライクゾーンであった。渡部は、80年代的な妄想癡みたいところがあって、確かに、心のどこかで、バブル華やかなころの世界の夢を見ているピーターパンみたいなどころがあった。

そして、この小説において、たんなる脇役であったはずなのに、いつのまにかキーパーソンにまで昇格しつつある高田伸司は、90年代の漫画が好きであった。90年代になって確かに漫画は新しい方向にシフトした。彼は新し目なオタクなのである。だが、2000年以降になると、徐々に弱くなってくる。そこにオタツキーとしての彼の限界があった。

この三人の全く違う性向が何を物語っているのか、それは実は何も物語っていないかもしれないが、どことなく重要な気もしてくる。正夫は、70年代で、渡部は、80年代で、高田は、90年代を代表しているかもしれない。そう考えると、正夫の大雑把で破壊的に行き当たりばったりなところ、渡部の暗いんだか明るいんだかわからないとぼけたところ、高田の批評家的でネガティブであるが優しくもあるところは、それぞれの年代の世相に対応しているのかも知れなかった。

「俺たちの好みって本当に全く合わないな」

まんだらけを後にして、それから二三時間、中野ブロードウェイの中をウロウロして、いろいろなところに寄ってから、三階のメイドカフェ「おぎメイド」の奥の方のテーブル席につくと、正夫がそう言ったのであった。

「そうかもしれないねえ」

渡部はオレンジジュースを飲んでる。

「正夫さんの趣味がおかしいんですよ」

と、高田はパフェを食べていた。

「そうかなあ」

正夫は、ついさつき昼食を食べたにも関わらず、またオムレツを頼んでいる。これは正夫の胃袋の大きさも物語ってもいたが、このオムレツに可愛いメイドがケチャップで、猫の顔を描く、というサービスを楽しむために頼んだのもあった。

「俺なんか、高田の言う萌えなんていうのがわからんしな」

高田は、パフェを食べながら答える。

「さっきの娘、可愛かったじゃないですか。」

あのメイド娘」

「ああ」

「それが萌えるってことですよ」

「つまりは、それはロリータってことじゃないか」

「けれども、そう言うのと違うんですね。」

それはどこか客観的じゃないですか。

もっと、萌えるっていうのはどこか主観的なんですよ」

渡部はあごを引いて腕を組んだ。

「妄想ではいかんの」

「妄想じゃないんですね。」

いいですか、さっきの娘のゴスロリチックな服とか、整った顔、うるんだ瞳、優しい声、で、ときおり「いやん」とか言っていたでしょう。

あれを全身で感じて

萌え〜！！！！

って叫ぶ。

それこそが萌えなんですよ」

正夫の中で、比較的、高田は冷静なタイプだと思っていたが、このときの

「萌えー」

という声は店内に響いた。

カウンターの向こうで、麗しきメイドたちがこちらを見て、微笑んでいた。

「渡部がポツリと言う。
随分、舞い上がったるね……」

第11話 「正夫は小説家志望です」

中野ブロードウェイでウロウロしている内に、日は傾き沈んでいった。三人は、正夫の狭いアパートの部屋に集まった。渡部はすぐに定位置の、押入れの下に入り込んで、正夫は万年床を片付けて、粗末な座布団を高田のために用意した。

高田は、買ってきた漫画を読んだり、正夫の部屋にある唯一のオブリエ、ゼータガンダム未完成版などをいじくっていたが、二人が落ち着くと、話を始めた。

「ところで、正夫さんは、小説を書いているの」

「まあ、書いているね、シコシコと」

「ネットには発表していませんよね」

「うん。俺今、家にPCないし、携帯で指で文字書くの大変なんだよ」

「それを出版社に出すんですか」

「出すかどうかはわからない」

「いや、出さなきゃだめでしょう」

「何で」

「作家になりたいんでしょう。」

「正夫さんは」

「俺はね、何ていうのか、出版社に出してもどうにもならないって気がしてしょうがないんだよね」

「何ですか」

「小説が書き終わらないから、という事情もあるんだが」

「書き終えればいいじゃないですか」

「それが終わらないんだよ」

「途中で飽きちゃうんですか」

「それとも違うんだよ。」

「永久に続いちゃうんだよ」

「永久に」

「うん。もし、書き続けようとしたら、それは永久運動だからね。そもそもが現実こそが永久に繰り返す出来事が、延々、延々、続くものなんだから、それを書こうと思ったら、『小説は続くよ、どこまでも、野を越え山越え谷越えて』になっちゃうんだよ。無限の中に俺が溶け込んでしまっような気もするね」

「でもいつかは終わるでしょう」

「いや、終わらない。賭けても良いよ。」

本当に終わらないんだよ」

「じゃあ、どうするんですか」

「書き続けるしかないだろうね。」

終わらないんだから。」

原稿用紙一千枚でも、二千枚でも、続くだろうし」

「それを省略して推敲して出せばいいじゃないですか」

「ダメなんだ。」

そういうことをしようとすると、つまり作品を作ろうと力みすぎると、俺の場合は、その永久運動が閉じてしまっ、ピタッと止まってしまうんだな」

「それって何なんですか」

「だから、本気で書こうと思ったら、もういつまでも続くんだよ。退屈というのも越えてズンズンズンとね。お経みたいにリズムにまかせて延々と」

「多分、正夫さん、今、疲れているんじゃないのかなあ。」

精神状態がおかしいんだよ。」

こういうときは休んで、元気になったら小説を書けば良いだろうね。」

ところでどんな小説書いているんです」

「ん？」

こんなん書いているよ」

正夫は、テレビ台のガラス戸の奥にあるワープロの原稿用紙にび

つしり書かれた『俺と彼女とアカプルコ』という小説を高田に渡した。

前にさらっと書いたのであるが、この小説は、正夫のものではなくて、彼の友人の勝間速人というこれも同じく小説家志望の男のものであった。関係ないかもしれないが、この「小説家志望」という表現は、非常に滑稽である。小説家希望でも良いし、それだったら、誰にでもなれるのだ。しかし正夫は、小説家志望という自分のカテゴリーが好きだった。

下手をすると小説家よりも好きな肩書きだったかもしれない。

第12話 「俺と彼女とアカプルコ」

「これは…その…何て言うのか」

壁にもたれて体育座りのような感じで、しばらく長い間、神妙な顔をして高田は、原稿を見ていたが、恐らく半分くらい読み終えた後で、正夫に渡したのだった。自作の小説を読まれているのなら、緊張の一瞬であるが、他人の小説なので緊張も何も無い。

「作風変えましたか」

「まあ、変えたといえば、変えたし、変えなかったと言えば変えなかったかもしれない。作風っていつても、俺のは割りと、透明な作風だからね」

「そうですか。」

その…、これって非常に難しいんですね。

どこから話せばいいのか。

どうします？

建前だけの話にしますか。

それとも本音の話にしますか」

「うーん。

本音で」

「そうですか。」

これは、やばいですね。

多分、これを出版社に出したら一発で、ブラックリストに登録されて、正夫さん、あなたの作家生命はおしまいです。

それほどやばいです。作風を戻した方がいいですよ」

「いや、そんなことはないだろう。」

これは、俺の人生の中で、非常に大切な作品だよ。

いいか、これは、主人公の俺と、彼女と、アカプルコという猫との、二人と一匹の生活を丹念に描いたアットホームな小説なんだよ。

今の癒しを求めている世間にピッタリとマッチした小説だ。つて、言つてたんだから」

「誰がですか」

「いや、何でもない。」

こつちの話」

「だって、ずっと、こんな感じなんでしょう。」

これ誰も読みませんよ。」

本気で酷いもの。」

何か読んでて頭がクラクラするもの」

「いいじゃないか。」

時に人間は非常に難解なものに接すると、頭がクラクラするものらしい。それこそ、生みの苦しみ。この本を読むだけで知的な創造ができるんだよ」

「創造つて一体何ですか。」

これですか。」

自分で読み返したことがあります」

「あるよ。」

「一日、一回は読み返しているね」

「本当に。」

もうそれはやばいですよ。」

人間としてやばいです。」

俺はもう正夫さんの小説も読まないし、今後、小説のことは話さないでください」

「待て！」

そんなに凄いのか」

「そうですよ。」

ほら」

「じゃあ、ちょっと読んでみるか」

『「俺と彼女とアカプルコ」」

ハロー！

あたし、このアパートに一人で住んでいるわけじゃなくって、二人と一匹で住んでますっ！その二人の内訳は、あたいと、ステディの法子ちゃん、あたしの中ではのりピーって読んでますっ。キャッ。恥ずかしいっ。何か愛称ってこんなところで素になって書いてみると、すんごく羞恥心ビーム全開バリバリツみたいな感じ！

だから、もう胸の奥の方で、ガンガンビンビンチクチクビンビン、乳首ビンビンみたいな感じだけでも、胸の動悸を我慢して書いてゆこうと思いまゝす。

あたし、のりピーには、寡黙で、クールなヤングガイってことで通っているから、こんな日記がバレたらすんごくやばいんだけど、そういうのって、スリル満点だよな！ふふふっ、のりピーってあたしがこんなだって知らないんだろぅなあ。やった〜！あたしの勝利！もうね、それを考えるだけで笑っちゃうのよ。へ？もしこの日記がわかつちゃったら？そんなん、もう別れるしかないだろぅね。だって、のりピーすんごくシヨックだろぅし。

別にうぬぼれているわけじゃないんだよ。その兄さん。あたしだって、部分的に本気なんだから。もう部分的に超本気なんだから。けれども、個性的なあたしの性癖を受け入れてくれなきゃ、のりピーとはつきあえないかなあって思うんだもん、これ本当に。

もし、この恋が真実の愛ってやつになるんだったら、あたし、カミングアウトしちゃおっかなあ、って思っているんだけどね、ここだけの話。のりピーってあたしの中で、キャラ的にそれほど濃いかなあって思ったらすうでもないような気もするんだよなえ。

だから、頑張れ、のりピー！あたしゲットまで、まだまだ長い道のりだぞお。女の子って男のこと、ちっともわかってないからなあ。もうこの日記だって、あたしの核心へのヒントなんだからね。あたしにバレないように読まなきゃだめよ。いっそのこと、のりピーの

枕もとに置きちやおうかしら。だめ！あたしって冒険家。

のりピーって、あたしが普通のときは、女性物の下着をつけて、ブラジャーまでしているなんて、気づかないんだろうなって思うの。だって、あたし、そういうところはピシッとしているからね。わからないように、わからないようにしてるんだ。ま、バレたらバレたで面白いけれどもね。っていうか、そんなあたしって、可愛くない？

ま、真剣な話、バレたら多分、向こうは三日くらい寝込むと思うなあ。けど、それを乗り越えてきたら、あたしも、彼女に自分の心の扉を開けちやおうかなあ、って、まあ、つまり幼児プレイになるんだけどね、パンパース二丁で、ずっと『バアバア』って言い続けているあたしを、もしのりピーがあやしつけることができたら、あたし、もうそのときは、のりピーのこと一生面倒見続けちやおうかになって思うっていうか、面倒見られるの、あたしだけでもさっ『

「ごめん。

高田、本当のことを話す。

というか、俺の名誉のために聞いてくれ。

これは俺の小説じゃない。

俺の友人の勝間速人という人の小説だ。

まさか、これほど酷いなんて」

「酷いなんてもんじゃないですよ。

何ですか、この自己言及は…この調子で、お経みたいに、ずっと続くんですよ。

もうこれ、怖いですよ」

「意識の流れ、という感じなのかな」

正夫は『小説の書き方』みたいな本の中に紹介されていたうろおぼえの技法のひとつを言った。

「いや、意識の流れ、というよりもこれは…」

高田は断言した。

「アホのたれ流しです！」

第13話 「高田の説教」

夜も更けて、ねばつくような空気があたり立ち込め、正夫はそれを払拭しようとして、少し開いていた窓を全開させるが、なかなか室内の空気のにごりは治らない。それでも窓から入り込む春の夜の外気が、心地よい微風をともなつて、正夫の頬の火照りを少し解消してくれた。

さつきから、高田伸司の熱弁は続いていた。正夫は、それを聞くともなしに聞いているポーズをとっているが、本当は聞いてはいない。心の芯が彼の発言を拒んでいた。彼の中でふつつつと反発心が巻き起こっていた。

一方、渡部は自分に関係ない話なので、寝転びながらPSPをやっている。彼はいつでもPSPだ。まるで彼自身がPSPと直結してしまっているかのようであるが、多分、近い未来では、そういうことも起こりえる……というよりも、もうすでにそういう時代は始まっているのかもしれない。

高田は話しながら、ゆつくりとおやつを食べていた。今回のおやつは、ベビースターと餡の串団子である。しかし、すべてを食べるということではなくて、正夫にくれることになるのだろう。高田は結構小食なところがある。そう考えてみると、多くの人の前で高田は、たとえばステーキなどをパクつくという印象がない。いや、それは正夫の勘違いかもしれない。それが証拠に、彼はそれほど痩せているということもなかった。そういえば、昔、顎が外れたことがあるらしい。顎関節症というものにかかって、顎が外れやすくなったのだ。今の高田は、そんなことなどまったく思い出させない能弁ぶりであった。

「大体ね、フリーターとか、派遣社員とかは先がそんなにないですよ。いいですか、これからは、社員にいかにかに滑り込むかって時代な

んですよ。そしてキャリアを重ねていったらいいんです。フリーターじゃキャリアは重ならないでしょうに。

だから、文学なんていうのも、別に社員をやりながらできるんですから、社員になればいいんですよ。

就職しましょうよ」

と、とどのつまりは、このようなことを様々な多角的な要素から、話し続けていたのである。それに対して、正夫は、ときおり相槌をうつたり、反対をしたりしながら相手をしていた。正夫は寝転んでいた。何故か。面倒だからである。

正夫は、何をしても寝転びながらすることにしていた。彼が文学を志したのも、読書は寝転んでも読めるからである。文章も同じく寝転びながら書ける。こんな不真面目なことを高田に言ったら怒られるが……。しかし、この人生は、正夫の人生なのに、何故、そんなことを他人に怒られなきやいけないのだろうか。人生いろいろではないか。それは高田のように真面目に生きている人もいるかもしれないが、正夫のように不真面目に生きている人もいるのである。それをみんな、ならして、真面目な人だけにしてしまうというものかどうか。それは確かに、社会としては素晴らしいのである。みんなが働くこととすると、働き口がなくなってしまふのだ。そうだとしたら、甘んじて、正夫のような人間が、下に降りて、上に上がる人を支えるということにしても良いではないか。そして、正夫は不真面目であったか。正夫はニート期間の自分のことを、不真面目と思ったことはない。ニートとしては、彼は非常に真面目なニートなのである。だから他人から見ると完璧に不真面目に見えるのだ。ニートというものがそういう性質なのだからしょうがない。他にどうしろというのか。延々と暇な時間に写経でもし続ける、と言つのであるうか。「いや、だから働け！って言っているんですよ」

高田の弁説はピークに達した。そして、正夫の心の中の反発も同じくピークに達した。

「うーん。俺はね、やっぱり、そういう社会が個人に押し付ける、とかそういうのは嫌なんだよね。やっぱり、人間、今を楽しまなきゃだめなんだよ。今をいかに楽しむか、それは自由意志の問題だと思うんだ。」

高田君、人間は自由なんだよ」

「だから自由自由って、それは履き違えられた権利でしょう。今、ゆとり教育とか言われているじゃないですか。結局は、人間は勤勉に生きなきゃいけないんだよ」

「そんなことはない。それこそ、社会が人間に押し付けたプロパガンダだよ。俺は、自由意志に従って、雲のように風のように生きたいんだ。社員なんて、就職なんてまっぴらごめんだよ」

「それじゃあ、老後はどうするんですか」

「ホームレスをすれば良い。皆、ホームレスというものを誤解している。俺はもつと建設的なホームレスをやるつもりだ。俺は熱血ホームレスになるんだよ」

「病気とかになったら」

「死ぬまでさ」

「本当にそこまで腹をくくっていますか」

「いや、くくってない。」

ただね、高田さんよ、俺はこの半年間ニートという苦行を完成させたんだ。それは、もう自由意志であり、宿命なんだよ。その鉄の意志を、社会なんてものが侵犯することはできないね」

「その間に職業訓練でもすれば良いじゃないですか」

「俺はこうやって、寝転ぶのが訓練だと思ってるよ。」

孔子もこんな言葉を残している。

私は、今、寝転んで空を白雲が流れるのを見つめている。

腕を組んでそれを枕にして、白湯を飲んでいる。

それだけでもう十分だ。

正確な言葉は忘れたが、こういう心境だね。

今の俺の自由意志は。だから、これはそのままにさせてくれ。お願いだ」

「いや、それは正夫さんの人生だから、文句は言わないけれどもさ。

やはり、社会に通用するような人間になつた方がいいって」

「社会とは何かね」

「社会つて社会でしょうに」

「人が集まつて社会ができる。」

俺は、今、こうやって、人の根源を探求しようとしているんじゃないか。

その根源がわかったとき…

ふん？」

「…」

「俺の新しい人生が見つかる」

「正夫さんは昔からそんなこと言っているが、何か発見があつたんですか。フリーターなりそんな生活なりをしながら」

「うーん、ない」

「じゃ、ダメじゃないですか」

「けれども、今の俺は良いところまで行っているよ。」

ピークに達しつつあると思う」

「ピークつて何ですか」

「それは言葉じゃ上手く言えない何かだな。」

詩的に言えば、訪れのとときかな。

近いうちに天国のノックが聞こえる気がするんだ」

「もう、これだもんな」

「そろそろ終電の時間じゃないのか」

「そうですね。」

ま、とにかく、覚えておいてくださいよ。

就職しましょうよ。それでも小説は書けるんだから。世界が広がると思いますよ」

「では、世界とは、何かね」

「世界って世界でしょうに」

「それは広げるもんじゃないんだ。」

それはすぐそこにあるものなのだから。

部分は全体をなしている。

俺は、このニートという生活において、全世界を感じようとして
いるし、それは成功しつつある」

「本当ですか。」

あの勝間さんの小説のように」

「アカプルコのことか？」

いや、あれとは違う」

「……」

「あつ、今、五十歩百歩と思っただろう。」

違うんだって。

もう失礼しちゃうなあ」

「もう帰りますわ」

「ああ、まあ、俺も真剣に凄い小説書くからさ。」

期待しておいて」

「はあ」

ドアが閉まる。

「渡部、あいつのことをどう思う」

と正夫は万年床に再び、寝転びながらきいてみた。

「うーん、わかりません。」

まあ、彼がああ言っているのも事実ですよ。けれども、やりたい
ことがあるのなら、自己責任で生きていけばいいじゃないですか」

押入れの下でPSPをやりながら、渡部は答えた。

「ところで、そろそろ寝ていいですかね。」

電気消していいですか？」

第14話 「正夫、自論を展開する」

「ったく、あいつは、就職就職言い過ぎなんだよな」

翌日の日曜日の昼ごろ、正夫は、コンビニで買ってきた弁当を、渡部と食べながらぶつぶつ文句を言っていた。さっきまで郵便受けに入っていた新聞を見ると、主に自動車メーカーで大量の派遣社員の首が切られたのだという。

「今さ。」

日本には1700万の派遣、400万人のフリーターがいるらしい。

けれどもさ、こういう人たちが、動いて、社会は成り立っているんだよね。

だから、こういう人たちを大切にした方がいいよ」

「そうなんですかねえ」

「そもそも、俺なんかニートだけでもさ。」

人生って何かって言ったら、そんな、いかに自分の好きに生きるか、それを貫くか、にあると思うんだよ。

っていうか、それだけなんだよ」

「へえ」

「だって、この人生に幸せなんてないでしょう」

「ないんですか」

「ないよ。」

そんなもの幻想に過ぎない。

幸せなんてものは、人生にはないね。

それは妄想だ。

ただ、ワクワクする、楽しいなっということがあるだけなんだ。

それは、子供が砂場遊びしているのと同じようなワクワク感ね」

「ほっ」

「で、それは何をやったら出てくるか。」

んなもん、何をやったって出てくるんじゃないか？

だから、俺は何をやってもいいんだよ。

脳内麻薬ってやつだな。

ゲイバーのゲイにはなれないけれどもな」

「けれども社会的なステータスは必要でしょう」

「もうね、これだけ派遣が多いと、そんなのも、組織の中だけ、仕事上のものだけの肩書きでしかないと思うよ。ステータスなんて糞くらえだよ」

「結婚とかもできないかもよ」

「結婚なんてできなきゃ、しなきゃいいじゃないか。

あんなのも邪魔だよな。

子供ができたならそれを育てなきゃいけない。

けれども今や人口は増えすぎだ。

今の子供なんて育てても生意気だしいらねえよ」

「うん、そこまで、正夫さんが、できあがっているとは思わなかった」

「ごめん：俺もそこまでは断言できないが、とにかく、今生きている上で、ワクワクすることを追求してゆくこと。

それが一番なんだと思うよ。

そのためにはとにかく生きなきゃいけない。サバイバルしなきゃいけない。

そのためにまず、どうするか？まあ、そのために会社勤めした方が福利厚生はいいよな。そういう一面はあるよ。

けれどもとにかく、生きてゆくということと、ワクワクする楽しさというものを直結させてゆくこと。

それが今の世の中に一番大切なことなんだよ。

間違っても就職することが一番の条件じゃないね」

「それは違いますよ。

就職したら選択肢も広がりますよ」

「だが、同時に、組織の考えに慣らされて、自分でものを見て感じ

ることができなくなる。直観が鈍るね。今の人間に一番大切なのは、何がワクワクするかというのを見つける直観だよ。

就職しても見つかるかもしれないよ。

けれども就職は十分でも必要条件でもないね」

「そうかなあ」

「俺はとにかく今は小説に、ワクワクするものを感じているだからそれをするまでのことだ。

いや、そんなのは何でも良いんだよ。

会社勤めがワクワクするんならそれでいいんだよ。

そもそも「良い」って何だよ。

って俺は思うんだよね」

「えええつ。」

良いは良いじゃないんですか」

「良いなんてないね。」

だって、歴史IFじゃないが、今のこの現実以外のことは皆、空想でしかないんだから、人間は常に過去に縛られながら生きているんだよ。おぎゃあ、と生まれたときから、因果関係連鎖の中から抜け出すことはできないんだよ。

そう考えたら、自分の生という流れを深く考えて、どういう状況になってもワクワクすることを見つけないながら生き抜くこと。それでいいじゃないか。

たまたま、俺は小説にすごさを感じたんだよ。しかも今、どこにでも売っている小説ではなくて、もっと突き抜けたすごい小説を書きたいって思っているし、現に書いている。そこにワクワクするものが、今、生じているじゃないか」

「ですね。」

「楽しそうですものね」

「そうだよ。」

そして答えはそこにしかない。

現在にしかないんだよ、答えは。

過去にも未来にもないんだよ」

「それで正夫さんはいいかもしれませんが、そんな考えじゃ他人は救えませんよ」

「他人なんていないんだよ」

「えっ」

「他人なんてものは存在しない……」

部屋の隅の畳にしゃがみ込んで、新聞を見ていた渡部が目をやると、いつの間にか正夫は万年床に寝転んでいた。

「どういうことですか」

「俺は…今、ここにしかないんだよ…そして他人を感じることはできない…それは空想を巡らせられるだけ…他人には届かない…俺という存在がまずあって…そこからなんだよ…だから、俺は生きる…そもそもが『今』以外の生をどうやって想像できる？…今を重ねること…今に重なること…状況に適応するんじゃないやなくて、状況を適応させること…それは冒険なんだ…みんな冒険を回避して、安全な方…安全な方へ行こうとしている…そして暗くなっている…自殺するやつも出る…馬鹿じゃないか…くだらない高収入を求めて…一番大切な自分にマッチしたワクワク感を犠牲にしているんだよ…とにかく俺は就職はしない……」

「やはりそうなんですな。」

それは残念だ」

「残念なんかじゃないよ…俺はワクワクするものを掴んでいるんだから…この掴んでいているという感情こそ大切で…俺はそれと一体化している…だからそこには後悔はないが……」

「はい？」

「ちょっと昼寝させてくれ」

と言うと、正夫は寝てしまった。

しょうがないので、渡部は、また押し入れの下に行き、PSPを始めることにしたのだった。

第15話 「市村さんの家へ行く」1

そして午後二時になって、さすがに寝すぎた正夫はこれ以上寝ても意味がないので起きることにした。窓から日の光が暖かく差し込んで、春を感じさせる明るさであり、外にでも散歩に行こうかなあ、と思い、そういえば渡部が泊まりにきていることを思い出した。

「おい、起きてるか」

と声をかけると

「起きとるよ」

と返ってくる。

またPSPをやっているらしい。もうここまでくると筋金入りであり、これほどの執念深さというか執着は、正夫にはできなかつた。よほど、楽しいのだろう。

「楽しいか」

「まあ、普通ですね。」

あつ、そういえばさっき市村さんからメールがきてましたよ」

「ほう、市村さんから」

「家にこないか、とのことですよ」

「じゃあ、出発するか」

「行きますか」

ということ二人はアパートを出て、ごちゃごちゃした複雑な通りを抜けて、入り口の近くに鉄でできた大きな鞆が置いてある専門学校や、相田みつをの言葉が書かれている寺を過ぎて、道をどんどん進むと、左手に、昨日、高田と話したファミレスがあった。ファミレスは現在、非常に辛い時期であり、閉店している店が多いから続いて欲しいものである。十字路を進んで、さらに行くくと、コンビニがあつて、リバーティーというレンタルビデオ屋があつた。

正夫はここでよくAVを借りていた。正夫はAVマニアであつた。

正夫にはいろいろなこだわりがあったが、それは、この小説の主旨とは外れることになるので、詳しくは書かないでおくが、たとえば麻美ゆまというAV嬢が好きだった、ということは書いても良いかもしれない。何故なら、麻美ゆまは結構メジャーな女優だからである。巨乳でありながら、けなげで明るくてエロの演技がうまい女優であった。そして、次席には、風間ゆみ、ということも書いて良いだろう。これは典型的な絵に描いたような濃い熟した演技をしてくれる熟女である。そして、ここまで書いたら三人目も書かせて欲しい。麻生岬。彼女は顔が浅黒くて、いつもニヤニヤしていてスケベそうな女性なのだ。そして、そんなスケベな感じで、男をド壺に陥れるのである。あのニヤニヤ笑っている顔を見ると、底なしの蟻地獄に落とされてゆくような気がする。

この三人は、もしかすると、正夫の学生時代に好きだった三人に対応するかもしれない。今、正夫が当面の目標にしている小野田ちゃんというのは、そうするとキャラクター的には、麻生岬のパートになる。何故なら三人の娘の中で一番暗くて影が薄いのが彼女だからだ。しかし、もし小野田ちゃんがそんな隠微な女性だったらどうなるだろう。それは毎日ハッスルであるっただけのことだ。

と、いつもの通り、ろくでもないことを考えていると、渡部がどうでもいいことを話しかけてきた。

「これからの日本はどうなるんでしょうかねえ。」

「こんなに派遣が切られて。」

「派遣社員の失業は八万数千人だとか」

「うむ。そうか。」

「そんなものかもしれないな」

「ああ、日本が心配だ」

「本当にそう思っている？」

「思っとるよ」

「そう。」

俺はどうでもいいよ。って思っている。

だって日本は世界で二位なんだから」

「何が」

「何となく、アメリカが一位で、日本が二位なんだよ。

だから大丈夫さ」

「それ本当に根拠不明な自信ですね」

「自信なんてみんな根拠不明じゃないか」

「んなこともないですよ」

道路を挟んだ向こう側に生鮮食物を売るスーパーや、女子高が見える。正夫はたまに朝八時ごろに、歩くと、女子高生の群れの中に突っ込むときがある。そのときに少し快感を感じていた。

「それにしても、惜しかった。」

「ここには、中華料理があっただよ」

コインランドリーを過ぎて、今は沖縄料理の店になっているところの脇を歩きながら、正夫は慨嘆する。

「その中華料理屋は安くて、とつてもうまかつたし、たまに綺麗な中国の女の子が給仕をしていたんだよ。これはなかなか良いサービスで、あまり生粋の中国美人って見ないだろう？それがなくなってしまうんだもん。まあ、さっきの鞆の箱のある専門学校の近くに、380円の全国展開しているラーメン屋ができれば良いけれどもな」

「そうですね。」

もう、いつもあのファミレスで会うことになっていますよね。

俺たちは」

「あそこも悪くはないんだけどもいつもあそこで会うには飽きるよな」

「ですよね」

「ま、どこで会っても飽きるんだけれどもな…」

それはお前たちが面白くないからだよ。

と、つけくわえようとしたが、正夫はそんな無茶苦茶なこととはしなかった。

そして、冷静になって考えてみると、それは正夫が詰まらないからかもしれないのだ。彼らの本当に面白い部分を出し切れていないのが、正夫なのかもしれない。ひよっとすると彼らは、正夫以外のところではものすごく面白いのかも知れない。面白いのを正夫の退屈さが消していて、実は、彼らは正夫と会うのが苦痛なのかもしれない。しかし、もし正夫を拒んだから可哀想であるし、正夫はすぐに凹むやつなので、自殺でもしたらしょうがないと、付き合っ続けてる、のかも知れない。

だが、そうであっても正夫は生きる。彼らは俺と会おうとしてるんだから、まあ、会う価値はそれでもあると思ってるのだろう。ボランティアとでも思っているのかも知れないが、そういう気持ちがある内は会うことにしよう。そして、そういう気持ちが無くても会うことにしたいのは、他にすることがないからである。

ここまで読んだ読者は

「じゃ、仕事しろよ」

ときつと思われるかも知れないが、だからこそ、ニートは辛いのだ。ニートという以上は仕事をしてはいけない。そういう制約があるのである。その制約をどうやって生き抜くか。これは業である。まだ日常の細かいところまで決まっていた方が良く。この自由は地獄だ。と言う人だっけていてもおかしくはない。だが、正夫はそういう人間ではなくて、ただ、のらりくらりと生きている。その不安に対する強靱な耐性は、ただの怠け者という言葉で片付くような簡単なものではあったが、もちろん、それ以上の何かがあったはずである、多分。

第16話 「市村さんの家へ行く」2

正夫はブックオフの前を通り過ぎようとして、一瞬、立ち寄ろうかとも思ったが、もしそれをしてしまうと、一時間くらい時間をくう可能性もあるのでやめた。そもそも正夫は今ポケットに、夏目漱石の「それから」という小説の文庫本を入れているのである。まだ読み途中で、全体が300ページの内、100くらいまでしか行っていないので、もしここで本を買ってしまったら、積読つんどくになっってしまう。しかし、そうでなくともそうなる可能性はあった。というのも初め、正夫は、自分のような二トのことを書いた小説かと思っ
て読んでいたのであるが、この小説の主人公は全然二トではなくて、金持ちの息子でぶらぶらしている高等遊民なのである。

正夫のような生活上に切迫感はなく、友人を救うために金策に走ろうとしたら、家族から断られるなんてエピソードがかるうじて自分の境遇に近いがそれだけのものであって、別に親も「勘当だ」とか怒るわけでもなく、そのまま人は平静に暮らしているのらしい。ただ、100ページになるにおよんで、ちよつと精神がいかれていくような描写が出てきて、そこが気にかかるが、正夫の中ではそんなことは日常茶飯事であったから別に、それほど驚くようなことでもないが、いや、正夫はむしろ正常の方であった。

昔から思うのだが、正夫は頑丈な男だった。周囲からよくそういう風なことを言われるのだが、それはまるで当人に、神経の繊細さがない、と言われているようなものであったが、事実として、正夫はそうであったから、これはもう文学というものとは無縁の存在だったのかもしれない。しかし、それでも小説家をやるということはなかなか根性のあることである。本質的に無理なのにやり続ける。まさにこれは、正夫の中の恋愛でもそうであった。

正夫は反恋愛体質といっても良かったであろう。そのようなシチュエーションになるといついつい、意味もなく笑ってしまったり、へ

まなことをしてぶち壊してしまうのだ。

「ああ、俺にとつての恋愛は、遠い日の対岸の火事だな」

「何ですか、それ」

「つまり、俺は反恋愛体質だということだよ」

「そうかもしれないね」

僕はね、基本的に、恋愛体質なんだけれどもなあ。

妄想がどんどん沸いてくるんですよ。

妄念という奴ですかね。

もうそれで頭がハイになってしょうもないときがありますね。

その反動として鬱にもなりますもの。

正夫さんってそういうのありますか」

「あるね。」

あるけれども、俺はたとえば北朝鮮とかはものすごく好きだよ」

「えっ」

「あの国が好きだね。」

いや、金將軍は嫌いだし、ちゃんとした民主制になれば良いとは思

思うがそれとは別に、好きだね」

「はあ、そうですね」

そして、二人は、右手に中野ブロードウエーの入り口や、百円ショップがある十字路につく。ここの横断歩道を渡り右に曲がって進む必要があった。途中、たこ焼き屋があつて、たこ焼きを食べたい気がしたが、たこ焼きならどこでも食べられるだろうと、無視して先に行く。が、しばらくすると、また、たこ焼きが食べたくなつた。

「恋愛というものも、こういうものかもしれないな」

と渡部に説明すると

「違いますよっ」

と冗談めいて渡部は否定した。

第17話 「市村さんの家へ行く」3

二人は先ほどまで大通りを西に進んでいた。ちなみにこの通りの名は早稲田通りなのであるが、正夫は東に進んで早稲田まで行ったことはなかったし、早稲田に用もなかったので、あまり実感がわかなかった。いや、早稲田大学には一回行った記憶がある。早稲田通りを歩いてではなくて、電車で行ったのだ。前に紹介した名作「俺と彼女とアカプルコ」の作者、友人勝間氏の母校なので、その縁で行ったのかもしれない。学食のマグロ丼を食べたら、ご飯が固かった。というよりもカラカラになっていたことがあった。もちろん、これは偶然のことだろうし、数年前のことであるから、今は改善されていることであろう。

早稲田通りを北へ曲がる。国道420号線で、ここら一帯の地名は電信柱によると新井であった。さらに北へとずっと行くと新井薬師がある。これは寺で、薬師如来を祀っているぐらいなのだから多分、健康に良いのだろう。湧き水を飲むと十年若返るとかいう水があるかもしれない。

だが、そこまでは行かない。そこに行く前に、北西に斜めに伸びている道があるのでそこに入る、つまり左折するのであった。国道420号線沿いは、銀杏並木で、新緑に渡る薫風がさわやかに感じられた。独特な建物がいくつもあった。児童劇団のビルや、おもちゃ博物館などである。しかし、その中でもとりわけ正夫の目を引いたのは、エロショップであった。エロショップとは正夫の造語であり、エロに関したティープなものを売っている店の略である。

正夫はこの国道420号線沿いの店で、いくつかのエロDVDを買った覚えがある。市村さんのアパートに泊まった帰りに、ふらふらと歩いているときに、寄って買ったのだろう。ちなみに、正夫はエロDVDなどを見抜く目があまりなかった。しかし、市村さんにはエロを確かに見抜く眼力があつた。前に凄かったのは彼が旅先で

何気なく買った「ママは変態バニー」という官能小説が、ある雑誌でこの一年で一番エロい官能小説と紹介されていたことである。それほど、市村さんはエロに造詣が深かった。

正夫は彼ほど深くはエロの世界に踏み込んではいなかった。だから、DVDを買うときも、メジャーなものが多い。前述した三人の娘や、如月カレン、小澤マリアなどを主に買っていた。特に小澤マリアなどは最近、本当に多くエロ雑誌の表紙で見かける。誰かが和製ブルック・シールズと言っていたが、何となくそれもわかる。あの鹿のような可憐な瞳、そして均整のとれた体つき、地味すぎず派手過ぎない性格、どれをとっても一流のAV女優であった。

最近、ハーフヤクオーターなど外国人と血の繋がった、あつと驚くほど美人なAV女優が多い。これも日本が一等国になったという証であろうか。別に二等国でも三等国でもどうでも良いがAV女優が美人になることには、正夫は大賛成であった。そのことを渡部に言うと、顔をしかめる。

「正夫さんは不潔ですね」

「そういうの、ダメなの」

「僕はね、グラビアアイドルのイメージDVDとかは持ってますし、エロアニメのDVDも持ってますが、AVそのものはないですね」

「けれども、市村さんが延々と見ているじゃない。」

あれはどうなの」

「だから、あれが流されているときは、僕は見ていませんよ。」

大抵、寝ていますもの」

「まあな。」

市村さんがたまに黒人女性のDVDを流すときがあるが、あれには正直ついていけないな」

「でしょう。」

けれども、普通のAVを見るんなら似たようなものじゃないですか」

「似ているが違つな。」

っていうか、そっちだって、グラビアを見るんなら似ているようなものじゃないか」

「いや、あれは芸術ですから」

「だったら、何だって芸術だよ」

などと話しながら、二人は国道420号線を左折して、斜めの道を進んだのだった。

第18話 「市村さんの家へ行く」4

斜めの道を行くとすぐちよつとしたスーパーがあつて、そこを過ぎるとマンシヨンやビルが並んでいて、そこを過ぎている途中で、蜂の石像が飾つてある特徴的な玄関の不動産屋があつて目を引いた。正夫は、自分の出身地の千葉市の稲毛に、「宇宙平和幸福促進協会」という看板を掲げた不動産屋があつたこと、同じく千葉市の星久喜というところにガンダムやゴジラの石像が門前に飾つてある石屋があることを思い出した。

発想が自由な中小企業というものはいろいろあるもんだなあ、と思ひ、ふと、自分はそういうところに就職する…もしくはそういう会社を立ち上げる、ということを考えて。できなくもない話ではない。前に、高田に語つたように自分は「提案型ニート」なのである。ということとは、こんな自分が会社を作つて、世の中に範を示した方がつとり早いではないか。小説なんて迂遠過ぎる。一気に会社を作る。これは非常に面白いアイデアであるが、正夫は「何で稼ぐか」という肝心なことが思い浮かばなかつた。とはいえ、これは面白いアイデアである。

とにかく正夫は何かを作りたかつたのだ。誰かと会話しているときも、歩いているときも、何をしているときも、作ろう、作ろうと考えている。それが彼の中では習慣になつてしまつていた。何故かはわからないが、昔からそうなのだ。自分が何かを作つたとき、それが他人がどう見ようと、批判しようと幸せなのである。もちろん褒められたらそれが一番嬉しいが、しかし、褒める作業というものは、相手の理想を述べるだけで、その理想は正夫とは関係がない。褒める人がするべきことはその理想を追求することであるから、正夫は正夫の理想を追求しなきゃいけない。だが別に正夫には理想がなかつた。何か反射的にものを作ることが多かつた。反射的に作っているから、それほど、理想を考える時間もないのである。

「ああ、作りたいたい」

と呟いた。

「何ですか、急に」

「今、無性に作りたいたんだよ」

「子作り」

「まあ、それもあるよ。それも否定しないよ。それもあるよ。けれども、それを含めて、もっと大きく作りたいたい」

「それはいいことですね」

と渡部は賛同したが、それ以上、その話をつつこんでいくことはなかった。

そのまま真っ直ぐ進むと、南北に続く道と交差して、斜めの道は消失する。平和の森公園が見える。満開の桜の花が咲いていた。正夫は、森の中を散歩したくなっていたが、できるだけ急いで、市村さんの家に行った方が良かったことをまた思い出し、南北の道路を北へと行く。

昔、中古品を売っていた「ガラクタ屋」や、セブンイレブンがあったが、今はもうなかった。セブンイレブンでは、本を座って読んで、白髪頭のオーナーに怒られたものである。彼がもう店を続けるのは限界と感じて閉店したのだろう。中古品屋の方は、中に面白そうなガラクタが並んでいて、こういう店の店主ならやりたいなあ、と正夫は思っていたが、できて数年で潰れてしまった。

西武新宿線沼袋駅が見えてきた。向かいに松屋がある。そこで正夫はよくトマトハンバーグ定食や焼き肉定食を食べたものだった。妙に肉感的な中年女性の店員が記憶に残っている。

駅の自動改札口を通ると、段差があつて、壁には「やめよう、車内での迷惑行為」

というポスターが貼つてあつて、狼が悪さをしていた。

プラットホームの丸い椅子に座る前に正夫は、コカコーラの缶を買つた。そしてプルタブを開けて、飲む。いつも一気に飲めないが、今日だけは一気に飲めた。

何故か、市村さんと対面するときに備えて、正夫の体が戦闘準備をしているのである。というのが、正夫の勝手な解釈だった。

「あっ」

渡部が言う。

「電車が来ましたよ」

灰色の地に青いカラーをした電車が、プラットホームに左手から滑り込んできて、止まる。ドアが開く。喪服のようなものを着た太った化粧の厚い中年女性が降りてくる。その女性が出ると、車両は空っぽになった。

第19話 「市村さんの家へ行く」5

電車は沼袋を出発して家々や建物の間を進んでゆく。中野区のそれほど派手ではない雑然たる町並みを車窓から眺めながら、千葉出身の正夫は、東京と言っても本当に一部のところが高層ビルなどが立ち並んで現代的なだけで、あとはほとんどがこういう下町なんだよなあ、と実感していた。

そして、地元の千葉に関しては、正夫は、最近行ってみて、改めてボロボロだなあ、という印象を受けていた。千葉駅も周辺は人通りが多いもののかつての活気というかパワーはそれほど感じられないうし、モノレールなどの建物はいかにも大仰で、一種の迫力があつたが、それでも町を歩くと、寂れている部分があるような感じがした。

とにかく、東京の繁華街のように、あんな明るさを千葉がもつことは今後不可能ではないのか、という気になった。だが、そうだからこそ千葉で一旗挙げるのも面白いかもしれない。逆手をうつのだ。電車は野方に停車して再び出発した。正夫は、野方にはよく立ち寄ってブックオフなどで面白い物をしていた。今や他にすることがないので、狂的な古本愛好家と中古ゲームマニアになつてしまった正夫と、ブックオフとは切つても切れない仲であり、もしブックオフが人間で、結婚できるものならしたいほどで、それなら就職すればいいんじゃないか、というが、それは違つていた。だとすると、正夫にとって、ブックオフは愛人だったのかもしれない。ブックオフにせよ、千葉にせよ、正夫はどこか、くすんだ物が好きだったのかもしれない。

そう考えると、東京でもこの中野なんていうところは、ほとんど千葉と差がない、といわれれば怒られるかもしれないが、住んでいてそれほどの違和感がなかった。ただ、千葉と比べて、変わった人

が多いという特徴はある。芸人だとか、ミュージシャンとか、そっち関係の人がよくうろついている。千葉にも中野とは違った変わった人がうろついている。郊外に住んで、自分の世界しか見えない人が異様なファッションをして歩いてた。いや、何を隠そう、正夫もそんな人間の一人だったのかもしれない。

電車は都立家政で止まる。正夫は都立家政の駅で降りて町を歩いたことはないが、通りかかったことはある。そもそも都立家政とは何であろうか？明治時代に、都立で家政の専門学校が作られて、昔の女学生たちはそこで家政を学んだのだ、という白黒ニュース映画の一場面みたいな映像さえ混じった、非常にもつともらしい記憶が、正夫の中に蘇ったが本当かどうかはわからない。

「ニートって辛くないですか」

急に渡部がきいてきた。

「それほどでもないよ。」

何だよ、急に」

「いや、今、ふと思っただんです。」

今、ホームレスみたいな人がダンボールを運んでいたのを見て、

ふとね……」

「いや、ニートはホームレスじゃないからね」

「まあ、それはわかるんですが」

何故か渡部の顔は悲しげだった。

電車は、目的地の鷺宮に着く。ここから歩いて五分のところ、先輩である市村卓夫の家があるのだ。いや、十分かもしれない。正確に時間を測ったわけではないのでわからない。

プラットホームに降り、階段を上がる。自動改札機を通ると、右側に、昔の歌の安いCDを売っている売店があった。いつもは和菓子みたいなのを売っているのに珍しい。少し覗くと、500円くらいのクラシクな映画もあった。最近、正夫は、フレッド・アステアに夢中なので何かないか探すが、マリリン・モンロー特集とやらで、マリリンのはあるが、アステアのはなかった。

「ああ、なかったな、フレッド・アステア……」

正夫は呟く。後ろで無表情で待っていた渡部は

「終わりましたか」

ときいてきた。

「あ、ごめん。」

「行こう」

二人は鷺宮駅の階段を降りた。

第20話 「市村さんの家へ行く」6

鷺宮の駅前は、狭苦しい感じがした。左手に、菓子屋とサボテンというトンカツ屋と寿司屋が並んでいた。右手は、少し複雑になっていて、アイスクリーム屋のある建物と、通路を挟んでそのさらに右手にはドラッグストアがあった。右手の端の方は、東西に伸びる商店街みたいになっており、丁字路のようになって、さらに東側の奥の方に伸びている。

「鷺宮に着きましたか」

正夫は市村に電話した。

「あ、マサさん、きたか。」

今、ランニング中なんだけれど」

「そうですか」

「うちに汀子が待っているから、先に行っておいて」

「わかりました」

ここで読者は混乱するかもしれないが、今まで、正夫は渡部に対しては、普通のタメ語だったのがここでは敬語になっている。まあ、敬語というか丁寧語であろうが。それは何故かというと、正夫にとって、市村は先輩だったからである。しかし、そんな序列なんかどうでもいいじゃないか、とも今となっては思えるのだが、延々と学生時代の習慣が抜けないのだ。

「途中で何か買って来た方がいいですかね」

「ん〜。」

まあ、買って…

来た方がいいかね？

あんまり食材ないから」

「そうですか。」

わかりました」

正夫にとっては、市村さんのアパートに着くまでに何か食べるも

のを買うことが楽しみの中のひとつであった。狭苦しいとはいえ駅前なので売店もいろいろある。

駅の左手のサボテン 60パーセント

駅の左手の寿司屋 20パーセント

道路を挟んだ向こうのオリジン弁当 10パーセント

その他

大体がこのような確率で正夫は、市村さんのところへ行く途中に食べるものを買ってくる。本人から頼まれない限りは贈り物や土産などは持って行かなかった。市村さんもそれほど土産を欲しいわけでもないし、そもそもが正夫にそんな財政的な余裕がなかった。たまに、甘いものを市村さんが求めるときがあったが、それでも大抵は対価としてお金をくれた。

「今日はどうしようかな。
どうする」

「別に何でもいいですよ」

渡部は食い物に関することになる、いつも何でも良い、となる。それは何故かという、多分、本当に何でも良いのだろう。渡部は確かに食い物に好き嫌いがなさそうであった。極度のもったいながり屋だったので、出されたものは何でも食べるタイプだったのだ。

正夫は、左手の店の前の道を歩き、南北に伸びる道路にさしかかり横断歩道を渡る。この通りは確か中杉通りといった。狭い道で、そこをバスなどが結構頻繁に通るので危険極まりない。南はすぐ踏み切りになっていて、北には、マクドナルド、セブンイレブン、ファミリーマート、中華料理屋、弁当屋などがひしめいていた。ゴリラブックスという古本マニアの正夫をうならせるような古本屋が昔あったが今はもう潰れている。

道路を渡るとすぐにオリジン弁当があった。何でオリジンという名前なんだろう。そもそもオリジンとは何であろうか。正確な言葉

の意味は、正夫にはわからなかった。源流とか、起源とかいった意味であつたらうが、それが弁当とどう繋がるんだろうか？この弁当が弁当世界の元祖だとも主張したいのだから。まあ、そうだとしても、別に異論はないが。

店番の顔の四角い美人の中年女性が良く響いたソプラノの声でいらっしやいませ、と挨拶をしてきた。このオリジンという店において、気をつけるべきことは、周りに陳列されている小分けされた惣菜類などには目もくれずに、カウンターまで行き、弁当を頼むことである。そうしないと、ついつい惣菜類を多めに買ってしまい、弁当だつたら400円くらいですむところを、1200円ぐらゐまで使ってしまうことさえあるのだ。人間の欲望に弱い性質を裏手に取つた汚いシステムであるが、しかし、逆にいえばこれほど素晴らしい贅沢もない。

正夫はノリ弁を頼み、渡部は白身魚フライ弁当を頼んだ。待つている間に、正夫は厨房の中を覗いてみた。少し痩せ気味な中年女性がいて、フライを揚げていた。タイマーが鳴ると油から引き上げる。

渡部は正夫以上に儉約家であつたから、周囲の惣菜には目もくれようとはしなかった。さすが、と正夫は褒めたくなつたが、それは店を出てからにした。

「当たり前じゃないですか。

買うわけがないでしょう」

「名古屋の貯め倒れ、とはいつたものだね」

と正夫は答えたが、はたして、そんな言葉があつたかどうかはわからなくなつた。あつたはずだと思う。それを渡部に再確認しても良いかもしれないが、嫌味になりそうなので、二度ときかなかつた。

渡部は基本的に、自分がわからないことをいつてこられても、普通に受け流す男である。で、再度確認すると全然覚えていないのだ。そついう男だつた。別に馬鹿というわけではなくて、自分に關係な

いこと、興味のないことに関する対応能力が低いのだ。多分、昨日、正夫が述べた「提案型ニート理論」も、渡部の頭は消化していないに決まっている。だが彼は強がりなところがあって、決して「わからない」とはいわなかった。きかれて「覚えておりませんわ」と答えるだけであつた。それは自分には必要がないことだから、わかる義務さえもない、という理屈なのだろう。それは馬鹿ではなくて、剛毅朴訥とか、そういう意味なのだと思う。

「それにしても、渡部は儉約家だよな。」

ときどき、腹が立つほど儉約家だよな。」

「そこはね。基本的に僕は変えませぬ。やはりお金というものは大切だし、僕はね、環境とかそういうことにも配慮したいのよ。本気で」

「もつたいない運動みたいなしそつだなあ」

「あれはいいですね。僕もあれには賛同しますよ。偉大なる日本語ですよ。もつたいない、とは」

「だよな。」

まあ、別に俺も反対する気はないんだが」

「僕はね、お箸でさえ、マイ箸をもっているんですよ。さっきの弁当屋でも割り箸はもらわなかったんですから」

「おお！それはいいね！俺もやろうかな」

「やったらいいですよ」

「あとね、知っている」

「何ですか」

「ニートってのは、あれは環境対策にもなっているんだよ。できるだけ省エネで暮らすニートがほとんどなんだから」

「それは手前味噌つてやつですね」

というと渡部は先を歩き出した。

まだ三時半ごろであつたから、夕食には早かったかもしれないが、市村さんのアパートに着くと、結局、ウダウダして外に出なかったから、とにかく弁当は必要なのであつた。あと、市村さんアパート

から歩いて行ける周囲に、夜もやっているコンビニがない、という事情もあったのであるが。

第21話 「市村さんの家に着く」

中杉通り沿いにあるオリジン弁当と、その隣の漫画喫茶への階段があるビルの間道があつて、そこをしばらく進む。ラーメン屋やパチンコ屋などがあつて、パチンコ屋には、何とか感謝祭というビラが貼つてあつたが、毎日が感謝祭なので、スルーしてゆく。正夫はラーメン屋にはあまり寄らなかつた。ラーメンは好きなのであるが、店主の存在感をあつかましく感じるのだ。そもそもラーメンなんてものは、正夫はある程度は一緒だと思つているし、死ぬほど旨いラーメンなどというのも食べたことがないので、ラーメン屋への思い入れはまつたくない。

住宅地を右に曲がり、そこをしばらく行くと十字路に差し掛かり、左に曲がると中学校がある。体育館があつて、何故かその体育館はいつも扉が開いていて、中が見えるようになっていた。現代の女子中学生はどうなっているんだろうか、とたまに覗くが、別にどうもなっていない。そう、ブルマーは廃止されたようだ。もちろん、そんなに集中して見るわけでもなく、通りがかりにチラリと眺めるだけである。しかも女子中学生が体育館にいる、ということがあまりない。いても、ほぼ一瞬であり、美人が目止まるということは一度もなかつた。

中学校を過ぎると、事務所みたいな建物がある。そこを越えると線路が見えてくる。西武新宿線であり、さきほど自分たちが乗つていた線路である。鷺宮駅の先は、下井草駅である。間違つて下井草に行ったことは一回あるがどんな町だかは記憶になかつた。

線路に沿つて右に曲がり、坂道を進むと、左手は小さい踏み切りがあつて、線路が直進している。右手には、畑が広がっている。さらに行くと、右手の畑はマンションになる。坂道はゆつたりと伸びていて、数分歩くと、左の線路が踏み切りになる狭い丁字路になる。突き当りには、変電所があつて、

『ボール遊びでボールが転がっても、危険だから建物の中に入らないでね』

という看板がある。

その丁字路を右に曲がると雑貨屋があつて、市村さんのアパートから一番近い店がここであつた。ここは、しかしながら、夜は結構早く締まってしまうので、夜になると市村さんの周囲には店らしき店はなくなってしまうのである、と前に書いたような状況になるのだ。

だから、市村さんは

「ここは陸の孤島だよ」

と自嘲することがあつた。

しかし、まさかそれを

「そうですね」

とも返せない。

その雑貨屋の奥さんは、はなまるマーケットという番組に出る主婦のリポーターの誰かに似ていた、という話をしたことがあるが、要は普通の中年女性である。カウンターの奥が居間になっていて、お店のすぐ隣が一家団欒みたになつていた。この店にはあまり弁当がない。菓子類、酒などは十分にあるのだが、もう少し弁当を用意して欲しい。だからといって、「じゃあ、毎日買うか？」ときかれたら決して買わないのが、わがままな消費者の一意見であつた。その雑貨屋から、しばらく歩くと、市村さんのアパートである。二人は階段を上がつて、扉の前に立ちノックした。春だというのに、天気は曇りでどんよりとした暗い感じの一日である。

扉は少し間が開いていて、細い隙間から、誰かが玄関にくるのが見えた。市村さんと同棲している汀子ちゃんであつた。

「あ、マサさん、どうも」

この二人には、正夫はマサさんと呼ばれていた。

汀子ちゃんは、白いジャージを着て、頭はボサボサなのは、さっきまで寝ていたのであろう。正夫と渡部は、家に入り、渡部はさっ

そく風呂に入る。

正夫は上着を脱いで、キッチンから、四畳半に行き、四畳半と六畳の間にかかっているハンガーに自分の上着をかける。四畳半にはこたつがあつて、巨大なテレビがある。たしか32インチだったと思う。リモコンを押すとスィングするのだ。何かのバラエティーの再放送みたいなのがやっていた。

渡部が風呂に入っている間に、正夫は弁当を食べる。こたつの上には、いくつもの湯のみがあつて、そこにはお茶が入っていた。そのお茶の上に、スポーツ新聞が被せてある。そのスポーツ新聞を、カーペットに敷いて、その上に弁当を並べる。そして食べるのだ。

「マサさん、最近、どう」

みたいなことを汀子ちゃんがかきいてきた。

「うーん。」

最近はニートっぷりに磨きがかかつてきたね」

とか適当なことを言うと、正夫は食べた。食べながら、ふと気になつてのできいてみた。

「あれ？」

市村さんは、いつごろからランニングを始めたの」

「うーん。」

「ついさっき」

「そう」

ほら、きた。と正夫は思った。たまに市村氏は、来客があるのに、何だかわからない行動をすることがある。こういう場合は、来客がくるころには家にいたほうが良いのだろう。しかし、渡部が風呂に入り、正夫が風呂に入り、二人が出るころには、ランニングが終わるだろうから、それが一番ちょうど良い時間だったかもしれない。そもそも他人の家に厄介になるのに、そんなに文句も言えないし、しよつちゆう来ているので実はそれほど深刻に語ることもないのだ。だから、別に何でも良かった。下手をしたら訪問しなくても良かった。

正夫は黙々と弁当を食べる。部屋の隅に、いくつもの本が重なっていた。オシヨー・ラジニーシの仏教哲学の本であった。これは一般人にもわかりやすく宗教について述べた本であり、すべての本を通して、オシヨーは瞑想の大切さを説いている。瞑想とは内なる宇宙である自分への探求であり、雑念^{マインド}を止めて、静かに見つめること。それができれば、人は、真の自分に気づき目覚め、覚醒して、日々を悟りながら生活することができる。というような内容の本であった。その間に、武術の本や、別の坊さんの本などがあった。

市村さんは空手をやっていて、体を鍛えていたのである。だからランニングなどもするわけである。武術は、彼にとって、正夫の二トのようなもので、生きがいであり、生きる意味であり、生きる目的であった。市村さんは話していると、何でも武術にたとえた。自分が就職しないで派遣社員になっているのも、もとを正せば武術であった。彼にとっては森羅万象が武術なのだ。正夫にとっての二トがそうであったように。

汀子ちゃんは、テレビを見ていた。正夫は何か話そうかとしたが、話すとして何を話すかというところ、ろくなことがない。文学論？しかし、向こうはミステリー好きな人間である。正夫はミステリーというものを好まなかった。何故かエラーリー・クインとか、エドガー・アラン・ポーとかは読んでいたが、それでも現代のミステリーはわからなかった。となると純文学みたいなことを語らなきゃならないが、それは別に向こうが求めていることでもないだろう。しかも別に正夫も語るうとは思わなかった。だから、暇になつたので、テレビを見るのも、向こうが見ていることだし、何だから、ポケットから、夏目漱石の「それから」を出して読んでいた。しかし、それも五秒でやめて、汀子ちゃんが特にテレビを見ていないようだったのでゲームでもやることにした。

第22話 「ゲームをやりながらの夢想」

ゲームはプレイステーション2の「機動戦士ガンダム 連邦VSジオンDX」であった。正夫はこのゲームをわざわざ家から、ここでやるためにもってきたのだった。電源をセットして、ゲームのディスクを本体に入れて、そうすると、暗い画面から、プレイステ2の画面になり、そして、連邦VSジオンのスタート画面になって、そこで「ヒュウ！」というアニメ「機動戦士ガンダム」のCM挿入のさいの女性コーラス（というか効果音？）が流れて、いくつかのモードの選択画面になって、そこで「ミッション」、「続ける」を選んで、ジオン軍でやっていたから、ジオン軍側でのゲームプレイを続行した。

正夫は、このゲームに通じた人といろいろ話していたが、まだまだ熟練の腕前にはなっていないかった。軍事階級で言うと、「上等兵」であった。伍長にさえもなっていない。何て言うことであろうか。それほど操作が難しいというわけでもないのであるが、敵の行動を把握して、それに応じて動くということがなかなかできなかった。

それができれば、腕前も上がるが、そのような余裕が生まれない。何回も何回も死ぬほど繰り返し返せば、わかるようになるかもしれないが、そうなるには一年、二年もかかるかもしれない。楽器とか弾けそうである。もっとも正夫は楽器を弾こうなんてことは思ったこともないし、多分、根気が続かないだろう。このゲームもそうだ。多分、正夫はこのゲームを手放して、市村さんに貸してしまうかもしれない。市村さんは、空手で学んだ根気よさをゲームに応用してどんどん上達してゆくだろう。

正夫はそのときには他のゲームをしている。そして、市村さんに貸すに違いない。別に市村さんに貸すためにゲームをしているわけではないのであるが、そんなゲームが多すぎた。そして、市村さんの家から引き取って、自分のアパートのテレビの台の中に押し込め

るのだ。その内、ゲームでテレビの台はパンクするだろう。

正夫はゲームデザイナーにでもなれば良かった、なんて思った。自分なら周囲の人間が驚くような革命的なゲームを5つくらいは作れるだろうと思った。そうしたら億万長者だ。しかし、俺の案は受け入れられないだろう。俺のような天才を見ると嫉妬するやつが現れて、すべてを滅茶苦茶にするのだ。アメリカに日本が勝てないところはそこである。日本人は天才というものを毛嫌いする。そして多くの人々に理解できるような秀作的な作品しかできないのだ。天才的なものは「一発屋」として、少し崇められて、すぐに引きづり落とされる。それが運命である。

だから、正夫は二ト界において、天才を目指すしかなかった。二ト界で天才でも、誰も嫉妬しない。むしろ、そんなの天才じゃないじゃん。と笑われる。そこが狙い目なのである。他の人は二トに可能性があるなんてことは思わない。だが、そこを突っ切る。二トでもこんなに凄いんだというところを見せてくれる！

「世の人間よ、馬鹿にするんじゃないやねえ。食らえ、これが二ト魂だアア」

と正夫は心の中で叫んで、ザクバズーカーを、敵のモビルスーツに対して放ったが、そいつはあっさりと横ステップをしてかわして、ミサイルを撃つてきて、正夫の乗っていたザクは上半身を分離させて爆発する。

「うおおおおおおお。」

「負けたア」

と叫んでいると、市村さんが帰ってきた。

「おおマサさん、きていたか」

ジャージ姿で、市村さんは首にタオルを巻いていた。

「やっているね。」

「連邦VSジオン」

「ですね。」

「今、死にましたわ」

「あ、ワベさん、風呂終わったみたいだね」

渡部は風呂場のすぐ近くで、タオルで頭を拭きながら、着替えの服を着ていた。

「じゃ、俺も風呂に入るか」

「それが終わったら入りますよ」

「そうだね」

と言うと、市村さんはテレビの前から風呂の方へと姿を消したが、実は風呂場はすぐ右手にあって、キッチンと一体化していた。この家は、キッチン、四畳半、六畳とその三つが団子のように繋がっていたから、すぐそこに渡部はいたのだった。

「はつきりいって、この狭いアパートに、四人泊まるのは無理だね」

と市村さんはよく言っていたが、それでも泊まりは強行される。

何故か。

何故なんだろう。

いや、それこそが友情の証なのかもしれない。

第23話 「市村さんとはどんな人だったか」

そして、正夫は市村さんについて夢想する。読者の皆様方におかれましては、この正夫の無意味な夢想の長々しさにイライラしているかもしれないが、正夫はアクションスターではないので、必然的にアクションは少なくなり、その代わりに夢想が増えることになる。何故かという点、夢想以外に書くことがそれほどないからである。

多分、読者の皆様方におかれましては、この小説にドラマ的な盛り上がりをも期待している向きがあるかもしれませんが、残念ながら、正夫という男は、ドラマ壊しでありドラマ破りの常習犯であり、彼の前ではあらゆるドラマもお笑いコントの金盃のような笑いの小道具になってしまうのだ。自分にそんな傾向があるのを感じていたのは、小学校六年生のときに、笑いすぎて、周囲がつけられて笑うので、卒業式に行けないことがあって、それ以来であった。

よって、正夫と市村さんとの出会いもそれほどドラマチックではない。それが証拠に、正夫自体、いつ出会ったのか正確には覚えていない。大学のサークルの先輩後輩であったことは覚えているものの、決定的なエピソードとか場面がなかった。そうはいつても、市村さんが初対面の印象をどう語ったかは覚えている。

「あいつは、何か暗い奴だったな。部屋の隅にいて本を読んでいるようなそんなやつだったよ」

事実としてそれはそうであった。そのとき、大学のサークルに入ったばかりなので、会話する相手もいなかったのである。しかし、そういう事情を割り引いても、正夫の本質はそこにあった。

正夫には高校時代の友人がいて、その彼が昔、自分のことも含めて自嘲的にこう言っていた。

「俺たちはアウトサイダーだよなっ、なっ！」

高校時代の友人にそう言わせるような雰囲気、正夫は持っていたことは確実なのだ。

だがそれよりも市村さんのことであるが、彼は西洋のハンサムな俳優のような外貌をしていた。鼻はすらりとしていたし、眉はしっかりしていたし、両眼は意志が強そうであった。彼は南国土佐の出身であり、土佐にはそういう男性が多い。戦国武将のような顔立ちともいえた。彼の難点といえば多少、背が低いところであるが、それもそれほどではない。イタリア系みたいな濃い顔立ちともいえた。そういえば、若いころのダスティン・ホフマンにも似ていた。あれほど鼻は高くはないが。

ちなみに、正夫は典型的な千葉県人であり、背が高く図体もでかく顔も大きかった。市村さんは正夫のことを「阿藤快に似ている」といつていたが、それは顔の長さとおごの大きさ、別の人は「伊集院光に似ている」といつていたが、それは目が離れているところと鼻の低さを現わしていた。中学生時代に「サツマイモのようなやつだ」といわれたが、それは頭がとんがっていて、形がサツマイモそのままなのである。なるほど、確かにこれではなかなかドラマはやってこない。

こんな二人が一緒にいるとなると、これは凸凹コンビといわざるを得ない。そして、二人は正に凸凹コンビであった。二人の仲が親密になったのは、サークルの合宿で、「嘘」というギャグをやったからである。

どんなギャグかというと、それはギャグでさえないかもしれないのであるが、くだらないもので、何かを話した後に「嘘」と付け加えるっただけのことである。それを延々とお互いにやり合って、笑い合う、ただそれだけのことである。

たとえば、正夫が

「もう寝ようか…嘘！」

といつて一人で笑うと、それを市村さんが

「もう、嘘嘘いうのやめないか…嘘！」

といつて、それをもう一人の同輩が

「あなたも嘘嘘いつて、頭がおかしくなりますよ…嘘！」

というよ、

「えっ、頭がおかしくならないのかよ。

ウツヒヤツヒヤツヒヤ」

と笑い合うのである。

多分、読者の皆様方は何がおかしいかさっぱりわからないかもしれないが、それは、皆様方が低脳だからである…嘘！

とかそういう使い方をするのだ…嘘！

いや、これは本当のことであり、そんなことをやりあって、笑っていたのであり、これはしかも延々とやることによって、さらにおかしくなるのだ…嘘！

って、それは本場で、笑いの常習性というものであるとか、それは別に昔から、正夫はよく笑う男であって、ひとりであるときもたまに思い出し笑いをしてることがよくあった、そして笑わせることも天才的にうまかった…嘘！

こうやって嘘嘘書いても話が進まないのです、市村さんの紹介に移ろうかと思っただが、もうそんなに書くこともない。現在、テレアポの派遣社員をやっているが、あと一週間で契約が切れて、それが終わったら無職のニートライフを楽しもうと常に公言していた。そんなところには正夫は男らしさを感じていたが、しかしニート道ということでは正夫の方が先達であり、いばつても良いくらいなのだ。

ニートは未来が暗い、ということを除いては非常に楽しいものであった。だが、人間は未来を切り開く必要があるのです、正夫も何とかなきゃいけないな、と真剣に考え始めていたのであった

…嘘！

第24話 「瞬間的な鬱に襲われる」

市村さんが風呂から上がってきて、スポーツマンらしい裸身をさらしたまま、タオルを首にぶらさげてフルチンスタイルで現れる。

「最近、痔がすごくくてなあ…」

あつ、マサさん、空いたよ」

「正夫、行きまーす！」

と、もはや定番過ぎて面白くも何ともないガンダムジョークを叫んでから、正夫は風呂場へとダツシュした。

正夫は裸になって、自分の体の何とも表現しようのない情けなさを直視した。別にギリシア神像のようになれ、とまではいわないが、これではみっともない。しょぼい長身プロレスラー、もしくは、昔、ドリフの大爆笑で見た、いかりあ長介の裸身のようになっている。

腹筋が割れているということもなく、プヨプヨポコポコしていて胴長で、嫌になってしまう。

風呂のシャワーのつまみを回すと熱すぎるか冷たすぎるか決して丁度良い温度にならないシャワーが振り注ぐ。今日は冷た目にした。風呂の小さな窓の棧に置いてある小さなサボテンの鉢を再発見した。よく外に落ちないものだ。このサボテンを一番初めに見たのは学生時代であった。一体、自分はあれから成長しているのだろうか。

正夫は急に自分が悲しくなった。多分、そのサボテンとは直接関係がないのであるが、たまに正夫はすごく悲しくなり、ニートである自分を悲観するときがある。自分はこんな境遇に落ち込んでしまってもう浮上することはないだろう。このまま下層市民のような質素な生活を続けて、ぶっ倒れていつか死んでゆく定めなのである。と、そう思うと、涙さえ出てきたが、涙はシャワーですぐに流せた。

それにしても、今、俯いて自分の男性の象徴を眺めているが、何というしょぼくれた皮の被った竹の子野郎であるのか。巨大化すれば人並み以上なのであるが、いつも巨大化しているわけにはいかな

いし、寂しいものである。

数ヶ月前に、風俗に行ったときに、源氏名は、みなみちゃんという女性から

「まあ、何て高性能な子 なの！」

と褒められたことがあった。

それは相手によるのである。みなみちゃんはとても可愛くて綺麗なので、張り切れたのである。多分、30くらいではあるが、眉が丸いアーチを描いていて、目が細く、乳房が丸くて、くびれており、おしとやかで、どこか江戸時代の女郎を思わせる。

初めて会ったときに

「脱ぎましようよ。」

あたしばかり裸じゃ恥ずかしい」

なんていって、男の良い壺を突いてくる素晴らしい女性で、できるのなら結婚しても良かったくらいである。

今の正夫はお金を風俗になんか使うわけにはいかない。風俗抜きのもラトリウムであり、それはルールのひとつであった。というよりも、それは唯一のルールだったかもしれない。ニートが風俗なんかに行つては緊張感がないではないか。

と、話がとつ散らかつてきたが、つまりは少し正夫は鬱になった。そして、ニートやめようかな、とも思った。ニートをやめたら、すぐに、みなみちゃんに会いに行くだろう。そして、自分の高性能のイチモツを褒めてもらうのである。しかし、それほど風俗に行き慣れていない正夫は、指名するというのが恥ずかしくてできない可能性もある。向こうだって仕事だし、覚えてないだろうし、それをどうこうする、というのが非常に恥ずかしい。やはり、行かないかもしれない。もっとも、別の人でも良い。適当に褒めてくれるに違いない。褒めてくれたら良いのである。はめてくれる、ということも前提条件であるが。

しかし、そんな正夫の脳裏に浮かんだのは、小野田ちゃんであった。いや、駄目だ、俺。ニート期間中に、小野田ちゃんにアタック

するのだ。これに失敗しようが成功しようがどうでも良い。そのために俺は二トをやっているのだ。そういうイベントをひとつ突破して大きくなりたい。俺の二トは武士道であり騎士道なのだ。この気持ちが他人にわかるはずはない。人は俺を馬鹿者と思うだろう。だが、今、俺の目的はそこだ。

その執念が、正夫の中に沸き起こり、二ト続行とあいなった。しかし、この肩書きがものをいう社会において、二トという立場で、彼女をものにできるだろうか。

そこが心配である。

だが、やれる。正夫ならやれるんじゃないか。何故なら正夫はたんなる二トではなくて、提案型二トだからだ。彼は社会を啓蒙するという大きな役目を背負っているのである。その宿命に従って歩まなくてはいけない。

「正夫、ただいま、青春まつさかりです！」

と意味不明なことを叫んで、正夫は風呂を出ると、隣の部屋ではこたつを囲んで、汀子ちゃん、市村さんがテレビを見ていた。渡部は、少し離れて、布団の上にしゃがんで新聞を読んでいる。

第25話 「シーマ店長との死闘」

「最近、どうよ」

市村さんがストレッチをしながらきいてきた。

「最近…はですね、うーん、何かあったかなあ」

「何も無いの」

「うーん、だってニートですからね。あんま事件とかないですよ」

「つまらないなあ」

「まあ、ゲームの機動戦士ガンダムにはまっているくらいですかね」

「マサさん、お茶どーぞ」

と汀子ちゃんがお茶を運んでくれた。

「あ、どうも。」

そういえば、最近、汀子ちゃんはどうしているの」

「うーん、普通」

「普通って、やっぱり、みんなそんなもんだよねえ」

「ところで、マサさんって、何でコンビニやめちゃったの」

「あ、コンビニはね…」

正夫は、一週間前まで、あるコンビニの夜勤だったのであるが、そのコンビニのFFで、大きなチキンナゲットみたいのを売っていて、それには当然のことながら、ケチャップとマスタードがつくだろうと、一緒にお客に出していたところ、どうやらつける必要がなかったらしく、そのコンビニの女店長が

「あんたわね、ずぼらだから、そんなことすんのよ」

って激怒したのに逆切れしたのだった。

「っていうか、じゃあ、ケチャップ、マスタードはつけない、って説明してくださいよ。」

説明しなきゃわからないでしょ！」

するとその女店長は顔を真っ赤にして

「ナゲツトに何でそんなものつけるのよ！

つけないのが常識でしょう」

と怒鳴り散らしてきた。

「はあ？」

あなた、何が常識かどうかなんてわかってねえじゃん！

マクドナルドなんか、ナゲツトにつけてんじゃん！

んなことも知らねえ、アホが常識なんて言葉使うんじゃない！

この因業ババア！

死ね死ね死ね！」

と心の中で思ったが、それは噛み殺して、

「んじゃあ、わかりました。

俺常識ないんでやめさせてもらいますわ。

二週間後に…」

「あなたなんか、今日づけでやめちゃえばいいのよ！」

と被せるように女店長は咆哮をあげた。

「てめえは人間やめやがれ！」

この叶恭子のなりそこない！

死ぬだけじゃ、飽きたりねえ、地獄に落ちろ！」

と正夫は叫びたくなるのを押し殺し、

「はあ、そうですか。」

こんなクソきたねえ掃き溜めみたいな店は、一刻も早くやめたくてしょうがなかったんですが、わかりましたよ。

やめてやらあ」

と、結局は暴言罵倒を、お客にきこえるように喚いたのだった。

「はっはっは。

マサさん…やりすぎだから」

と市村さんは大笑いした。

「確か、その店長って、シーマ店長でしょう。」

ガンダム、スターダストメモリーの、女士官、シーマ・ガラハウ

にそっくりな女店長！」

「そうです！」

本当にそっくりなんですよ。

陰湿な性格までそっくりですからね。

前に遅刻を繰り返していたバイトがいて、（まあ、そいつも悪いんですが）そいつに向かって土下座を強要して最後には

「ドッゲツザ！」

ドッゲツザ！」

ってあの毒々しい低音ヴォイスでふしをつけて叫んだような人です。すね。

ホストの漫画に出てくる性格が滅茶苦茶悪いじわるなおばさんの典型みたいなの……。

とにかく、俺は許せなかった。

だって、ナゲットにケチャップは普通つくでしょう。

その一点においてだけでも、万死に値するミスですよ。

しかも、その無知でもって激怒してくるなんて……」

「まあ、それは正しいが」

「それに俺、もうある程度の金があるんで、いいですよ。

その店、代わりにシフトに入ってくれる人とかいるし」

「しかし、そんな事件があったとは……」

「そうですねえ。」

そういえば、話すことあったんだった。

しかも、三日後に、その女店長から、給料もらってます。

どれほど罵倒されるか」

「あっ、給料、手渡しなんだねえ」

「ええ」

「波乱万丈ってやつじゃないか」

「あっ、あと高田に会ったんだった」

「ほう、それは面白そうだな。

どうだった」

「うーん、それに関しては、じっくり語りましょう！」

（作者注 これは似たような事件はありましたが、基本的にフィクションです！

小説なのでできるだけ面白く書いてみましたが、事実ではありません！

っていつか、この話に出てくる店長はそこまで悪人ではありませんので…あしからず！）

第26話 「シーマ店長からの抗議」

ここまで小説中野を書いてきて、作者である俺は、自分で書いておきながらも、この小説は何て長いんだろう、何て無内容なんだろうとあきれ果ててしまった。

あきれ果てた上に、最近、俺は自分のブログに

「生きるとは…

こういうことだ！」

みたいな日記を書いてしまい、ある人からは

「説得力が無いよ、あんた」

とコメントを書かれて、ある人からは

「上から目線でものを言うな！」

というコメントを書かれてしまった。

もちろんのこと、俺みたいな人間が

「生きるとは…

こういうことだ！」

なんてことを書くのは、非常に僭越であり、恥ずかしいことであるが、しかし、それはそうとして、じゃあ、論として、それはどうなのよ。

という気も一方ではするのである。

何で人は、その人の、人となりと、言っていることを照合させようと急ぎすぎるのだろうか？

まずはそれを論としてきいてみて、自分の中で咀嚼して確かめてみるよ、そしてそれを自分で考えてみるよ。

と俺は声を大にして言いたいのだ。

この小説もそうである。

俺みたいなるくでもない人間が二トのことを書いて、そんな小説はろくでもないものであるが、そうであるからこそ、それは何かしらのものになるんじゃないだろうか。

立派な人が立派な人のことを書いてもしようがないではないか。

そんなものを読んでどうしようと言うのだ。

それだったら偉人伝、聖書、現代のものを読まなくてもいくらでも参考にできるものはある。

むしろ、この人生というものは、まず問いかけを設定して、その問いかけをもとに、銘々が、自分で、考えるものであって、一気に「偉い人が言ったから」

で盲信しちゃうつてのは、一番やっちゃいけないことなのである。それは非常に危険な権威主義であり自分自身の思考の放棄であり思考停止である。

どんなるくでもない人間からでも、その人の問いかけを通じて、自分の人生を見ることができないのではないだろうか。立派な人でも問いかけを発するときにはイーブンである。そもそも人は失敗をしたときにしか問いかけを発しないからである。失敗は成功のもと、というが何もなくスーッと成功してしまっただらそもそもがそれは教訓になれやしない。

そして、そんな風に考えると俺が、

「生きるとは…」

こういうことだ！」

と言うときに、そこには何かがあることを気付くだらう。そこには失敗に裏付けられた叡智があるのだ。失敗しているからこそわかることがあるはずである。

いや、とにかく俺の書くこと、そして、俺の小説をひとつの人生への問いかけ、つまりはひとつの意見として、きいて欲しい。それは説得力がないかもしれないが、では、本当にまったく説得力がな

いか、というところでもないのだ。

人間が腹から正直にものを書いておるときには、何かが出てくるのである。そのきらめきを見つめて欲しい。俺が書こうとしていることは、立派な教訓物語ではない、生きている人間の後先考えない生の実感を書こうとしているのである。

自分の中でうまくまとまったなあ、と思ったときに携帯が鳴った。

「あのさ、佐藤君」

「あつ、シーマ店長！」

「あれ、どういうこと？」

「え？何ですか」

「中野25話よ…あれ酷いわね」

「あれですか」

「あれじゃあ、私が極悪人みたいじゃない。

あんた、

ドツゲツザ

ドツゲツザ

ドツゲツザ

なんてあれ、あたしが本気でやっていると思った？

冗談よ。

あれ、そもそもが何で本気で歌いながらドツゲザなのよ。

ありえないじゃない。

あれは冗談よ」

「あ、そうなんですか」

「もうね、あと、あたしのこと因業ババアとか言うのをやめてちょうだい！ナゲツトだって、軽く言っただけでしょ。結果として、ケチャップはつけないんだから！

これだけは、事実なんだから」

「事実ですが」

「事実でしょう。だったらいいじゃない。とにかく、第25話はやめね！あれは中止、発行禁止！もし公表したら名誉毀損で訴えるから」

「あ、わかりました。」

「じゃあ、こうしましょう！」

「あれはNGってことで…」

「小説を仕切りなおします」

「そうよ、まったく、そもそもがニートのあなたの小説と、あたしと全然関係ないことじゃない！」

「ですよ…ね」

「あんだね！何か憤懣でもあったの」

「憤懣はいつでもありますよ。」

「たとえば、俺は自分の日記に『生きるとはこういうことだ』ってブログに書いたたら、『説得力ないよ』『上から目線なんだよ』ってコメントがきたんですよ」

「当たり前じゃない。」

「あんたみたいになるくでもない人間が小説なんか書いたって誰も見るわけがないじゃない。」

「あたしだってあんたそのもの自体に興味がないもの」

「だって、あなたはイケメンしか興味がないんでしょう。」

「それは興味がないでしょう」

「うるさい。とにかく、あんなのは削除よ！」

「サックジヨ！」

「サックジヨ！」

「サックジヨ！」

「ってというか性格そのまんまじゃないですか」「うるさい。」

「NG！」

「仕切りなおしよ！」

というわけで、読者の皆さんにはご迷惑をおかけしますが時間は、正夫が風呂から上がったところまで巻き戻される。そこにおいて、コンビニの話題をすることはないだろう。

そう、俺はシーマ店長の軍門に降ったのだ。俺は転向したのだ。しかし、それもしょうがないではないか。名誉毀損で訴えられたらたまったものではない。

こんな小説ごときで……。

あ、いや、読者の皆さん、今の発言は嘘です！何でもないです。

俺はこの小説をこの正直な人間の情熱の吐露を、心から一生懸命描いています。この小説に命をかけています！

だからご安心を。

第27話 「高田伸司は偉いやつ」

「最近どうよ」

と市村さんがきいてきた。

「うーん、まあ、最近って、何もないかなあ。

ニートだし、俺」

市村さんはストレッチを始める。

「何かないの。」

そういえば、コンビニやめたのは一週間前だよな」

「ええ」

正夫は、自分のやめたコンビニに関して何か言おうとしたが、言うほどのこともない、と考え直して口をつぐんだ。

「やめたことはやめたんですが、お金はありますしねえ。あと半年分はもつようなお金はあるんですよ」

「結局、マサさんはあんまりお金を使わないからねえ」

「ですねえ。」

あと、そうだった、高田と渡部と三人で会ったんだった」

「どうだった、高田のやつは」

「うーん、いつもの通り、説教をくりましたね」

「あいつはそういうやつだからね。俺も前に会って、彼の説教をきいて凹んだよ。凹んだ上に、何の役にも立たないから、二重に腹が立ったね」

「そういうところありますよね。あいつの説教をきくと、変に凹むんですよ。そういえば、俺も学生時代にあいつに泣かされた記憶がありますからね。で、何について説教をされて泣かされたのかまったく覚えていないんですよ。何か知らないけれども、このままじゃ俺は駄目なのか、と思わされて涙が出てきたんですね。」

そういう意味ではあの無内容な説教能力は、あいつの才能かもしれない」

「あいつは普段は悪いやつじゃないんだが、いったん絡みだすと、蛇みたいなやつになるからね」

「まったく、その通りですね」

と言つて二人は笑つた。

「いくら何でも、蛇つて、それは言い過ぎか。

蛇じゃないけれども、こつ、何か…、何だろうな」

と市村さんは訂正した。

「蛇じゃないんですね。」

蛇というか、うーん、何でしょう」

「ま、うまい喻えが見つからないけれども、しつこいよね。」

おかしい話で、あいつ普段は妙にさわやかじゃないか」

「ですね。」

けれども、あいつの、さわやかさつて、かつこい男のさわやかさじゃないんですね。

どこかこつ、オタクっぽい、さわやかさ。ジャポニカ学習帳のC Mに出てくる博士みたいなさわやかさ、なんだけれども」

「そうそうそう！」

あいつ自身、いとうせいこうみたいなところあるじゃない」

「ですよね。」

あんな、さわやかさ」

「あれで押すつて手もあつたんだろうが、学生時代には失敗したね、あいつ」

「自分の素質をわかつていなかった。」

あのオタク的なさわやかさつて、最近になつて、『蹴りたい背中』とか、女性たちの小説とかで、キュート！つて思われるようになったじゃないですか。あれをもつと推し進めて欲しかった。そうしたらものすごくもてたのに」

「そうではなくて、酒を飲んだら暴れる、という無頼派的なキャラを作ろうとした…というか、まあ、もともと、そういうやつなんだけれども」

「あれはだめですね。せつかく、皆の中で、オタク的なさわやかさでもって、母性本能をくすぐりそうなキャラになりつつあったのに、実は酒癖が悪いとかになると、最悪じゃないですか。」

「誰だよ、そいつ、って話になるじゃないですか」

「でも、ロリコンってことになるしね」

「彼は、ぶりっ子するべきだったのかも知れない。」

オタク的なさわやかさを演出しつつ、僕は…、恋とかよくわかんないけれども、こんなに一生懸命やっています！みたいなね、そんな必死になってかきとくんですよ。そういうキャラになれば、それはもてキャラかもしれない。で、年下の女の子にもてあそばれる、眼鏡青年キャラになればいいんですね」

「そうだよ。それが、とんでもないことに、っていうか、不発みに終わってしまったねえ。」

「まあ、不発だからこそ好感がもてるんだが」

「ですね、もし、そんな『オタクもて眼鏡青年キャラ』になったら、俺はあいつとは親しくならなかったもの」

「俺もそれは思った。少なくともあいつは自分に正直だから」

「あいつの代の後輩とかさ、見ました？」

俺はね、正直、反吐が出るんですよ。あいつはいいにしても、あいつらの世代の後輩って、これ世代論かもしれないけれども、オタクにしても妙にござっぱりしていて、もてそうなやつばかりなんですよね。ミュージシャンのゆずみたいなのカッコをしていたりとか。で、そういうやつの方がまたもてるんだわ、これが。学生生活をエンジョイしているの」

「もうね、学生生活をエンジョイっていうのはだめだね。学生生活はグダグダ暗く過ごすものだよ。あそこは人生修業の場なんだから」

「そうなんですか」

「俺なんか学生時代、暗かったよ。けれどもね、やっぱり、学生時代は暗くなきゃだめだよ。そうじゃないと、人間として信用できない」

いね」

「ですよねえ。俺も暗かった」

「だって、世の中に出たら、学生時代よかったなあ、ってなっちゃうじゃない。だから、学生時代は暗い方がいいんだよ。振り返りたくない過去がいっぱいあるから。」

だから、あいつは多分出世するね。背後にかかえているものが暗いから」

「もう出世していますよ。自分の先輩たちを説教するくらいなんだから」

「あいつが出世というか、俺たちが陥没しているだけなんだけれどもな」

「はっはっはっは。」

そもそも学生時代に最大の不発つてのは俺だしね」

「いや、マサさんはある意味、大爆発したからいいじゃないか」

「いいことなんて、これっぽっちもないですよ。」

俺は思うに、俺は、部屋の隅っこで本を読んでいるような暗い人間でいたほうが良かったかもしれない。」

もともとベースがそんなものだから」

「うーん…。それもどうなんだろう。」

そんなことよりも、あいつ、説教以外で何か言っていた？」

「何か言っていた記憶があるんですがね。」

説教の印象が大きくて、何を言っていたか忘れました」

「やっぱり、先生だからね。あいつの説教スキルは、先生って職業を与えることによって、飛躍的にアップしただろうね」

「ですね。説教というか雄弁術、というか弁論術みたいになるかもしれない。」

まあ、あいつの言うことにも一理あるんでねえ」

「一理というか百理くらいあるけれどもねえ」

テーブルの上には、たくさんの焼いた肉が一口サイズにして皿の上に置いてあった。市村さんはたらふく肉を食べる。それでも運動

をしているから太らないのである。正夫も肉を好きだったので、瓶に入った市販の焼肉のタレをつけて、どんどん口の中に運んだ。咀嚼されて肉が肉汁をじわりと出してどんどん口の中で小さくなる。

渡部も汀子ちゃんもそこそこ食べていたが、一番食べているのは、市村さんだったかもしれない。

「はあ、食った食った。」

もう眠たくなっちゃったなあ」

と時計を見ると、まだ午後六時だった。

第28話 「市村貞夫も偉いやつ」

正夫はこたつに下半身を入れて寝転んで、天井をしばらく見てから、自分のお腹の中に満ちて現在消化中の食後の肉を感じつつも、ひよつとすると、市村さんの痔は、この肉食中心の生活が原因かもしれない、などと思ったりもしたが、そもそも正夫自身が食生活に無頓着なので、特に何のアドバイスをすることもできないなあ、と息を吐き、吸い込んでから、また吐くついでに思いついたことを話したのだった。

「まあ、それにしても、市村さんって、俺にしてみたら結構、うらやましいというか何か悠々自適に生活しているように思えるんですよ。汀子ちゃんとも仲良くやっているし」

「そうかなあ、いろいろあるよ、これでも」

「俺なんか、まあ、自分がそれほど生きてきて辛いとは思わないけれども、市村さんみたいな生活の実感はないと思うんですよ。多分、常に脳内麻薬が出ているような生活をしているんじゃないか、って思うわけですね」

「そうか、何でだろう」

「普通じゃないか」

「いや、そうじゃないなあ」

「やっぱり、自分の身体を中心に考えているからかなあ、なんて思うんですね」

「ま、武術は…そうだね」

「俺はね、武術に生き、武術に死にたいのよ」

「それは誰かに殺されたいってことですか」

「と渡部が口をはさんできた」

「違う違う。できれば死なない方がそれは俺だっていいよ。死なないにこしたことはないが、死ぬとしても武術と常に一体化して、死にたいって考えているね」

正夫は鼻をかむ。

「そこなんですよねえ。俺にはそんな風なものがないんですよ。俺が言えることって、まあ、小説とかがそうかももしれないけれども、小説って、武術と全く違うんですね。」

よく小説のことを話すときに引き合いに出されるけれども、飢えた人間を前にして小説は何をできるか、なんて設問があるんですね。」

結局、何もできないんですよ。」

飢えたらパンをまず食べるじゃないですか。小説なんて関係ないですよ。」

その点、武術ってのは、いかに飢えないかってスキルでもあるわけでしょう。」

武術をマスターしていたら、飢えないじゃないですか。武術って、広義に考えると、生存のための技術なんだから。」

小説って虚業なんですよ。必要ないもんなんです。そういう弱さがある。」

「そうか。まあ、別に虚業でも実業でもいいじゃないか、って俺は思うけれどもねえ。」

「いや、俺はね、だから本当は武術とかやりたかったんですよ。今からだって、できないことはないでしょうが、もう自分の心が武術向きじゃないんですね。俺、おおよそ、武術とは正反対ですよ。発想が。」

「どうやって、ズルをして生き延びるか、ってことばかり考えていますもの。」

何て言うかね、男らしくないんですよ。」

卑怯だし嘘つくし、自分が不利になつたらすぐに逃げるし。」

「あ、けれども、武術ってそんなもんだよ。武術ってというのは相手を倒すためには手段を選ばないんだから。」

「俺は、相手を倒さないんですね。逃げるから。もうね、自分が生

き残るためならどんな嘘でもつけるしね」

「それこそが武術なんですよ、マサさん」

「えっ、そうなの!」

「武術つてのは、弱い人間がいかに強い外敵から身を守るって技術なんだから、それでいいんですよ」

「じゃあ、俺のこの小説つてのは武術だったのか」

「ペンは剣よりも強し、と言っしね。まあ、そういう部分はあるんじゃないか、と」

「ですかねえ。」

いや、けれども、武術つて身体性とかと関わってくるんですね。

常に自分の身体と会話をしているわけだ。そういうのに健全さを感じますね」

「それはそうだね。俺は小説つてそんなに読まないんだよ。確かに身体ということと関係がない小説が多いからね」

「身体と精神つて、俺はそれほど離れてはないとは思っんですが、そういう小説ないですよねえ」

「ないねえ。まあ、俺に関して言えば、空手をやり続ける。ひたすらに。それだけだよ。後はもう何も考えない。仕事も金も生き残るに必要なだけあればいいんだよ」

「俺は将来のことをどうしても考えちゃうんです。小説を書くにしてもどうやって、これをもとに飯の種にするか、とか、そんなことを考えちゃうなあ」

「将来か、なせばなる。でいいじゃないか。俺は生き抜く自信は不思議とあるんだ。だって、生き抜くということが武術なんだからね」

「市村さんと話していると何でも武術になっちゃうなあ。けれども、俺もそんな熱くなれるようなものが欲しいなあ」

と思っただときに、正夫の頭に浮かんだのは、小野田ちゃんであった。

「ふっふっふ」

思わず笑みがこぼれる。

「どうした、急に」

「いや、何でもありません。俺には熱くなれるものがあつたんだ。それは、小野田ちゃんです！」

「またマサさんのしょうもない癖が始まった」

と渡部はつぶやいた。

「しょうもない、って言うなよ。俺は真剣なんですよ。いつか小野田ちゃんに会って、俺は告白しようと思っっているんですね。とにかく、今はそれを思うと熱くなりますね」

「マサさんって小野田ちゃんが好きだったの」

と汀子ちゃんがきいてきた。

「うん。今はそうだね。ま、昔は違つたかもしれないが、今はそうだよ」

「何それ」

と汀子ちゃんが言うのに被せるように市村さんが力説した。

「じゃあ、それをやればいいんだよ。一回だけの人生なんだから。

人生に正解はないよ。だったら、やりたいことをやればいい。俺はそう考えているだけだね。」

だから、今、こんなことになっているのかもしれないがね。俺も派遣社員やめて、別の仕事を探さるうしね」

「いや、それが自分にとって良いと思うのなら進むべきでしょうね。市村さんは武術に生きてください。俺は小野田ちゃんときあつて、自分の体勢を立て直しますよ。」

今のままじゃだめだ」

「だめなのか」

「そうですね。俺、正直、今グラグラなんですよ。ニートになつてしまつて何をするんだ、と目的が定まらないんですね」

「正夫さん、それを解決する良い方法がありますよ」

とまた渡部が割り込んできた。

「何だ」

「アフガンに派兵に行くことです」

「お前が行けよ」

と正夫は笑って寝転んだ。

「ああ、小野田ちゃん、小野田ちゃん。

会いたいよおお。

会いたいよおお。

小野田ちゃん、会いたい。

小野田ちゅわん、会いたいよお」

「けれども、本当に会えるのかね。

前にパンチ寸止めしたんでしょ」

「あ、パンチ寸止め事件：ありましたねえ」

正夫は、不意に、自分の中で小野田ちゃんとのつきあいの歴史を、三人に、語りたくてしょうがなくなってきた。小野田ちゃんとのつきあいの歴史の中で、一番大きなイベントと言ったら、一部の人間には悪名高き、

「パンチ寸止め事件」

であろう。

しかし、歴史というものは立場を変えることによって、まったくその出来事の意味を変えてしまうものである。

読者の皆様方もこれから語られる、正夫と小野田ちゃんとの歴史を一望してみても、はたしてこの恋にどれほどの勝算があるかどうか、考えて欲しい。

もちろん、その際に

「パンチ寸止め事件」

という一大イベントのもつ意味は非常に大きなウエイトを占めると思われる。

第29話 「小野田ちゃんについて 1」

小野田通子ちゃんについて書く、ということは、つまりは正夫が学生時代に通っていたサークルについて書くということに他ならない。正夫は、今ここにおいて書かれることのようなことを、頭の中に記憶しており、それを前提に、今、鷺宮のアパートで市村さんやその他の人間と会話をしているのだから、予備知識としても紹介する必要はある。

が、実はその情報はあまりにも膨大であり、もしそれを思いつく限り書き込んでいたらいつまでたっても小説は進まないだろう。もともこの小説はすんなり進まないようにできているが、その速度がこれ以上低下したら、一体誰が読むのだろう、という危惧もある。だが、もはや、ここまでくると、もう何が何だか書いている当人もわからなくなり始めているから、そこら辺の加減もなかなか難しい、ということも告白しなくてはいけない。

そもそもこの小説『中野』とは、中野について記述しなければいけないのに、中野そのものとはまるで関係のないどうでもいい人間関係や、正夫の二トのことなどが延々綴られている。もちろん、こんなことでは駄目であり、もっと本来ならベクトルを、中野そのものに向けるべきである。

しかも、正夫の通っていた大学は千代田区にあった。それでは、中野とはまるで関係がない。しかも小野田ちゃんは神奈川に住んでいたような気もする。その上、小野田ちゃんと正夫はどう考えても疎遠であり、正夫が「いけるかもしれない」と勘違いしているだけ、ということ、読者の皆様も薄々感じていることであろう。

この恋の成就の可能性は薄いし、しかも正夫という男は、「行くぞ！行くぞ！」と言っておいて、昔から決して行かない男である。これは読者の皆様には新情報かもしれないが、実は正夫は臆病であ

った。彼は実は石橋を叩いて渡る慎重派なのだ。彼のニートというのも実は周到に計算された行為の結果…ではないが、彼自身は死なないように、お金のこともちゃんと計算されている。彼は自分ではそんなことは言わないが、裏ではそのような謀と説明してはおかしいかもしれないが、そのようなややこしいものがある。

だが今回は、正夫は多分本気で行く気であった。というのも、正夫は小野田ちゃんなんかどうでもいいと思っっているのかもしれない。ほとんどやけっぱちなのである。彼は何故か前進するときは、いつもやけっぱちであった。

とはいっても本当に正夫が行くかどうかはわからない。彼は状況に流れやすい男であるから、その状況というものが必要になってくるのだ。こう考えると読者の皆様は、何でこんなどうでもいい男を主人公に選んだんだ、と疑問に思うかもしれないが、もうここまできてしまつては引き返せなくなっている。ここで急に主人公を高田伸司にして、たとえば「彼が結婚して家を買うまで…」みたいな物語にしたら、どうなるだろうか。はつきりいって、小説としてグダグダである。市村さんを主役にしても、どうもおかしなことになっている。もちろん、渡部なんかでは主役は務まらない。

もうここまでできたら、正夫に頑張ってもらうしかないのだ。そして、この正夫という詰まらないニートの生活の周辺で、読者の皆様が一番喜びそうな物語を描くとしたら、小野田通子ちゃんのことなのである。

しかし、読者の皆様方よ！

もし、これから正夫と小野田ちゃんとの関係性を、ここに紹介してゆくとしたら、皆様は呆れるかもしれない。そして、正夫のことを、

「こいつ、使えねえな」

と思うかもしれない。

それほど、正夫が小野田ちゃんにしたことはアホである。というのも、このときの正夫には計算がなかったからである。あわよくば

後輩を自分のものにしてやる、なんて野心がなかったために、彼の中の本性が大爆発して、あのような悲劇転じて喜劇のような事態になってしまったのである。

とここまで書いて作者は、この長いだけの小説をさらに長くしてしまったことに今さらながらに気がつき唾然とする。だが、このパートは小説に必要な部分である。ここにさりげなく書いたことが、次回への伏線になっている可能性もなきにしもあらずなのである。

「このネズミ野郎！」

正夫は、実の父にそう喚かれたことがある。だが、残念ながら、それは事実である。何故ならニートとはネズミみたいなものではないか。セコセコして隙を伺っているのだ。もちろん、この自分の存在をそんなに他言はできない。だが、正夫は何かをしてくれるだろう。少なくとも何らかの痕跡を残してはくれるだろう。

そう願いつつこの稿を終わりにしたいと思う。

第30話 「小野田ちゃんについて 2」

正夫は大学二年生のときに、あるサークルに入った。前に文学系サークルと紹介していたものの、それはある意味において嘘であり、実は児童文化研究会の創作班というところだったのである。ちなみに、このサークルは、児童班と人形班と創作班にわかれていた。創作班は、子供相手に絵本を作ったり童話や小説を書くところであった。

正夫はもつと本格的な文学サークルに入りたかったのであるが、二つのサークルに入ったものの、正直、詰まらなくなって、児童文化研究会の創作班に流れてきたのである。

そのころの創作班の班長は福田さんといって、歯が出ていて、やけにふさふさな七三分けの髪をした、眼鏡をかけた男であり、いつもチベット産の赤い毛糸で作った靴を持ち歩いている、くせのある人物であった。どうくせがあるのかというと、やけに饒舌で、彼の言によると、彼ほど客観的な人はいないのであるが、最終的には主観的で、独断的な人物なのであるう、と皆に言われていた。ここらへんが非常に難しい。

彼は、おしゃべりで周囲を明るくさせていたが、反面、うっとおしくも感じさせていた。といよりも、七三で、七割うっとおしがられた。

彼のギャグセンスは、シユールとは違うのであるが、意味のわからないものである。前に酒の席で、

「得意の一発芸をやります」

といつて、目を見開き、歯をげっ歯類のように剥き出しにして、つまみの大根の千切りの入った器を持ち上げ、

「まあ、奥さん！」

こんなところに大根のきざんだのがたくさん、ありますわね！」

と叫んで

「ムシャムシャムシャ！」

と食べた。

周囲は一瞬シーンとしたが、彼は食べ終わると礼をしたのだった。

「一発芸、終わります」

これについて、誰も何もコメントができなくて、そもそもそれは芸なのか、何なのか、頭でも狂ったんじゃないだろうか、と本気で心配する人も一部いたが、本当に冷たい無反応ということになって、座が白ける。すると、福田さんは

「…いいんだよ…いいんだよ…僕の才能は…伝わらないんだから…」

みたいなことを口をすぼめて悲しい表情でいうのである。

こんなエピソードをあげて、人物の説明とするのは非常に遺憾であろうが、福田さんはそういう人だった。そんな彼の強引な饒舌の説得力に引かれて、正夫は創作班に入ったのだった。ただ、正夫が入ったのは、かわいい女の子がいたという事情にもよる。参考のために説明しておく、正夫がちょっと入ってすぐにやめた文学系のサークルには女の子は皆無だった。そして、福田さんとその同じ学年だったのが、市村さんであった。正夫は、福田さんとは疎遠になり、だんだん市村さんと親しくなって現在に至っている。

正夫が三年になると、創作班には三人のかわいい女性の新入生が入ってきた。その内の一人が小野田ちゃんだった。そして男も入ってきたがみんな辞めてゆき、その中で唯一残ったのが、高田伸司だったのである。

高田伸司は入ってすぐに、小野田ちゃんを気に入ってしまった。というのも、小野田ちゃんは小柄で内気で肌は少し浅黒いが綺麗な女性だったからである。見方によってはロリコンチックでもあった。

と、このくだりは、前にも書いたところであるが、正夫は、も

つと詳細にこのときのあらましを思い出していた。

たしか、小野田ちゃんと高田は学部学科が同じで同じ講義があったのである。そのときに高田がいきなり小野田ちゃんの隣に座って「やあ」

といってきたのだった。

そのとき、小野田ちゃんは高田に恐怖を感じたのだという。講義中は一言も口をきかず、講義が終わるとダッシュで、小野田ちゃんは逃げたのだった。

しかし、逃げられると追いたくなるのが人間の本能というものであり、高田はそんなうぶな小野田ちゃんを気に入って手を変え品を変え、いろいろなアプローチをしたのだった。だが小野田ちゃんは逃げに逃げ、しまいにはその他の二人の娘たちに打ち明けて、最終的には、高田は

「女の敵」

といわれるようになってしまったのである。

正夫からしてみれば、高田はおとなしそうな眼鏡青年であったし、同じくおとなしそうな小野田ちゃんとは似合いそうなものだったが、何故、そういうことが起きるのだろうか。

考えてみると不思議なことであるが、この事情の裏には何か正夫が知らないようなことがあったのかもしれない。

例えば、講義で一緒になったときに、いきなり手を忍び込ませて尻を撫でながら日常会話をするとか、そのような劇画シャワー（もしくはエロトピア）みたいなことがあったのかもしれない。いや、それはあからさまであるが、もっと何か控えめな何かがあったのだ。ウェイディングドレスをいきなり持ってきて「君のサイズと合わせたおいたから！」というとか、自分の情熱のポエムを九十分間録音したテープを渡すとか、自分の精液を瓶の中に入れて贈るとか、一日中視姦するとか、家まで尾行して夜道に突然現れて

「君を守っているんだよ」

というとか、もう墓まで用意しているとか、新婚旅行の合成写真

を見せるとか、予想される息子娘の合成写真を見せるとか、オーダーメイドの下着を作るとか、貞操帯を贈るとか……いや、そんな変態的なことでないにしても、何かしらのことをしたに決まっているのだ。

その結果として、

「女の敵」

と高田伸司はいわれるようになったのだ。

だが、男である以上は、誰にしたって女の敵である。そもそもが女にしたって女の敵ではないか。正夫にしたって女の敵である。だから別に高田は気にしないでもいいのであるが、やはり気にするのが人間というものである。

第31話 「小野田ちゃんについて 3」

「あつ、これは内気なんだな」

と小野田ちゃんと一目あってから、正夫は直観した…というよりも、そんなことは誰でもわかることで、彼女の緊張っぷりというのは尋常ではなかった。逆に、よくそんな緊張したままで、人に接することができるなあ、それはある意味において度胸あるなあ、と思うことさえあった。

とにかく何をいつても、驚いた目をして身を引きながらに笑い、小さな声で、

「えー、そうなんですか…」

と応じるのが彼女であった。

だから、正夫は小野田ちゃんと一対一で向かい合ってしゃべるということをしなかった。もし何か変なことをして、泣かれでもしたら大変だからである。正夫自体が女の敵になってしまう。

読者はここで首をかしげるかもしれない。前に正夫は、自分なんかも女の敵なのだから、高田は気にしないでいい。と書いたはずであるが、正夫自身が、そういう評判を気にしているのだ。正夫にはそういう矛盾したところがある。というよりも正夫は、そんな矛盾の結晶体みたいなところがあった。

小野田ちゃんを初めとした三人の娘たちはどれもそれぞれ美しく綺麗でぴちぴちしていた。とはいっても、どんな女性にも当人が気づかなかつたり、一般的な尺度では当てはまらなかつたりするだけで、必ず魅力があるものである。それが速効性か、遅効性かの差なのである。そんなことはわざわざ作者に言われなくてもわかるだろうが、正夫はそのときは、三人の娘の即効性の魅力の毒にやられていた。

たとえば、ミツチャといわれている三人の娘の中では中くらいのアニメ「おジャ魔女どれみ」でいえば、青い髪をした関西弁を使う

女の子（名前は忘れた）にあたる娘と一緒に作業していたときのことである。創作班の出し物の背景を絵の具で塗っていたときに、正夫はこんなことをいった。

「茶色つていつても、いろんな茶色があるねえ。」

「どの色にしようかなあ…。」

「うーん…と、」

「ミツチャー！」

これは、つまり、俺はミツチャ（茶）にする、という意味であり、つまりちよつと艶めいた冗談であった。

するとミツチャは顔を赤らめて

「先輩、最低…」

なんていうのである。

ちなみに、その一部始終を見ていた市村さんは

「こいつ…腐つてやがる…」

と思つたらしい。

それほど、正夫は三人の娘に対して有頂天であり、この世の春を満喫していたのである。今にして思うと、そんなことぐらいでよくも脳天気になれたものであった。もつとも、基本的に正夫は脳天気であり、脳天気でなければ、ニートなんてできるものではない。しかも脳天気というこの漢字でさえ当たっているかもわからない。

正夫は三人とそんな風に明るく接しながら、特にそれほど小野田ちゃんに執心することはなかったのであるが、心のどこかでは、小野田ちゃんのことを滑稽に思っていた。

あの内気さがおかしくておかしくてしようがなかった。

だから、徐々にその内気さをからかうような方向に行っていたことは確かであり、そのひとつが、もうサークルを引退していた福田さんと、彼女を引き合わせたことであった。何かの作業をしているときに、移動をしないいけないことがあって一時間歩いて移動する必要があったので、そのときに紹介して一緒に歩かせたのである。

福田さんは女性に関してはどうな女性に対しても満更ではない夕

イブであり、得意そうに、いつもしゃべる何だかわからない雑学、
というか雑な思いつきを、ベラベラしゃべり、それに対して小野田
ちゃんは緊張しながら、

「…はい」

「…そうなんですか」

「…ええ」

と応対していた。

正夫はそれを後ろからきいていて、笑い転げそうになった。

「そもそもね…僕はね、恋愛をアクセサリ化しちゃいけない…っ
て思うんだよね…何か、僕はそんなに心に迫っていないはずなのに、
その恋愛つてものを、大切にしようなんて思っている輩が多すぎる
と思うんだ…」

だって、自分の好きな人に優しいのは…当たり前…当たり前のこと
となんだよ」

というと、福田さんは口をすぼめて遠くを見るのである。

その謎の間が終わると

「とにかく、僕はね…恋愛を…アクセサリ化しちゃいけないと思
うんだよ」

と続けて、またさつき話したようなことを今度は角度を変えて話
すのであった。

初対面の新生入生に何で彼は

「恋愛をアクセサリ化させちゃいけない」

なんてことをいうのか、まあ、よくよく考えてみると意味がわか
らない話であったが、それが福田イズムであった。それはどんな底
意があるのか、多分、何も無いのかもしれないが、ずっしりと変な
インパクトを与える、心に響く言葉である。

福田さんは、話がたまに芝居がかかるときがある。そんなときに、
基本的に彼は大根役者であったから、声の調子が妙にゆっくりとな
って、割舌が悪くなるのだ。

昔、正夫はこの大根役者から屋上で演技法のレッスンを受けたこ

とがあっただが、

「僕は、月の明かりの下でたくさん泣いた」という台詞があるとする。

彼は歯を剥き出して叫ぶのだ。

「ぼふは…」

つひいの…

あかりの…

したで…

たあ〜くさん

ないた…」

この台詞の中には、福田イズムが凝縮されているが、その中でも一番目立つのが

「たあ〜くさん」

であろう。

福田さんの

「たあ〜くさん」

は何かそれをきいていると、本当に「たくさん」な気にさせられるのである。もう生きていることに「たくさん」だ。満タンだ。という気にさせる。非常に充実感がある「たくさん」なのである。だから普通の人が彼の台詞をきくとほとんど何をいつているのか、わからない。伝わらない。あまりにもゆっくりで、ゆっくりしているがために、細部に変な意味が出てきてしまい、全体を見渡すことができなくなるのである。

正夫たちは、この福田さんの真似を本当に飽きるほど、気が狂うほどやった。基本的に前歯を剥き出しにして、

「オホホホホ」

とやれば誰でも真似ができる。

しかも福田式の妙な抑揚を真似して、台詞の終盤にさしかかると情感たつぷりに盛り上げて引き伸ばし、最後に遠くを見て悲しそうに口をすぼめるのであった。

後輩たちは福田さんの真似をしたが、実は福田さんの先輩たちも福田さんの真似を陰でしていたそうで、福田さんの先輩のひとりも真似をしすぎて、前歯を出しすぎたために、前歯がいつも当たるあごにできものができたほどであった。

そんな人物が小野田ちゃんと一緒に歩く。そして、何だかわからない自説を延々と展開する。それに対して心中震えながら

「ええ…そうなんですか」

「はい…わかります」

「その…そうですね」

と応じる彼女。

正夫は、これほど笑える組み合わせはない、と今でも思い出すと笑ってしまうのであった。

第32話 「福田さんについて」

ひよつとすると福田さんのことを必要以上に誇張してアホのよう
に書いてしまったかもしれないが、彼は実は紳士だった、という
ことは書き加えても良いのかもしれない。というよりも、彼は典型
的な紳士ではなかったろうか。今まで書いたことを裏返しにしてみ
ると、彼には芝居がかったところ、女性には必要以上に親切なとこ
ろ、会話で周囲を明るくさせるところ、彼の周りはゴシップで溢れ
ているところ、これらを総合して考えると、彼は紳士なのであった。

彼以上に紳士である人間は、あの当時、あのサークルにはいなか
ったかもしれない。ただ紳士なんてものを受け入れない時代性とい
うか地方性というか、そういう独特な場の魔力が働いて、彼が滑稽
に見えただけなのである。

彼は胃潰瘍になって入院したことがある。しばらくして、顔色が
悪いまま退院してきたがそのときに言った台詞が

「あのね…みんな僕のこと…悪く言い過ぎ…」

だから…こんなことになるんだよ…」
であった。

そして、その後の宴席などで、自分がいかにサークルに貢献して
いるかをえんえんとサークル員たちの前で話したのだった。

「僕はね…良い方…良い方に、持ってゆこうとしているんだよ。
だけれどもね…ジャマが必ず入るんだよ。」

僕が左と言うと、右と言う人がいるし、右と言うと左と言う人が
いるんだよ。

そういう人たちはジャマが生きがいなんだろうね。

そんなことを考えているうちに胃が痛くなってきたね。

あ、大丈夫、班長は続けるから…

続けて欲しくない人がいるようだけれども……」

ちなみに、福田さんが話しているときは周囲の人間は意図的に遠ざかって、それをきいている正夫と福田さんだけの会話になりがちであったが、それは何故であろうか。彼には引力とは正反対の斥力が働いていて人を引き離す能力があるのだろうか。

しかも気がつくと、正夫は、福田の一番弟子みたいなことになっていた。だが結局は、正夫も福田と距離をとらざるをえなくなる。創作班内でもいい内乱が発生して、敵同志みだいになったのだ。その反乱とは、たしか「ポンコツ博士」という子供向けの出し物を、人形劇にするか、紙芝居にするかということ、長時間の議論になり、ついには罵声が飛び交い、泣く人も現れた、別名「ポンコツ博士の乱」といわれる有名な事件であった。

そのとき、正夫は他の人に対してこんなことを叫んでいた。

「大体ね、あの人は班長なのに、調停能力がなさすぎるんだよ。

みんなが言い争っていたときに、あの人は何をしていた？

歯を出していただけじゃないか！」

ちなみに、このスピーチは我ながらよくできたものだ、と密かに

正夫は自慢していた。

そして、福田さんが四年になって引退するときには、すっかり彼は憔悴しており……そもそもが、正夫の記憶違いで、「ポンコツ博士の乱」が原因で、福田さんは胃潰瘍になったのかもしれない……彼の昔の陽気な饒舌は、三割引きくらいになっていて、それでも普通の人よりもかなり饒舌であったが、最後の最後で、例の一発芸をやる。

「まあ、奥さん……」

こんなところに大根の刻んだのがあるわ……」

すると途中で

「消える！」

という罵声が響く。

福田さんは悲しそうな顔をして、

「わかった…やめるよ…」

とやめそうになったのを、正夫は、

「待ってください。」

俺は見たい。

あなたのあの一発芸は、あなただけしかできないんです！

先輩、見せてください！

あの一発芸を！」

「おお、正夫君。」

ありがとう！」

そして、福田はムシャムシャと食べる。

食べ終わって周囲を見回すと、誰も無反応。

それを見て、正夫は腹をかかえて笑った。

「福田さん…あんた…凄すぎるよ」

そして、宴もたけなわのころになると、急に渡部が泣き出した。

「ええっ、どうしたの」

「何か俺、急に福田さんがやめると思うと、涙が出てきましたよ」

「っていうか、お前、全然、可愛がられてなかったじゃん」

「いや、もうね…悲しいわ」

この原因不明の涙によつて、福田さんはようやく華々しく引退を

飾ることができたのだった。

話はこれで終わらない。あの人望のなかった福田さんは、就職活

動では大成功を収める。

大手の旅行代理店に、グランドキャニオンの旅行計画書を出して、

その企画が褒められて、就職することができたのだった。

しかもその数年後には、凄く綺麗な奥さんと結婚して、幸せにや

っているのだという。正夫は写真で見たことが一回あったかもしれない。

本当に、スリムで綺麗な奥さんで、何で彼がゲットできたの

か理解ができない。

どうもそれが自慢らしく、福田さんは奥さんを連れて、いろいろ

な人に会っているらしい。正夫は、一回、会う約束をしたのである

が、コンビ二夜勤がその日にあつて、ダルいのでドタキャンしたら、それ以降まったく連絡はなくて、現在に至っている。

こうやって考えてみると、福田さんは紳士なのだ。確か色彩のデザイン関係の資格もとっていた。班長をしていたとき、議論などの調停は下手糞であつたが、レジユメだけは完璧であつた。彼は紳士らしく、形はピシヤツと決める男であつた。彼のサークルの雑誌に書いた小説も内容はなかつたが、形だけは立派に決まっています、その形のファンになつた人も何人かいた記憶もある。あのわけのわからない演技にしても、形は決まっていた。だから少し間延びしていたが誰も下手とはいえず、一種、何か異様な存在感を誇つたものになつていた。

多分、就職に成功したのも、形を決めることができたからであるう。

観光旅行なんてものはまさに形が勝負であり、自分たちの旅行が形に決まつて、しつかり運営できていたのなら、後はどうでもいいものであるから、なおさら福田さんには合っていたのだ。

そして、福田さんのこと思い、正夫は自分のことを思うに、自分は形ができていない、形ができていないからニートなんだな、と反省せざるをえない部分もあつた。

第33話 「小野田ちゃんについて 4」

内気という性格について、いろいろな見方があると思うが、小野田ちゃんに限らず、人は誰しも内気なのである。内気というと、その人が成長していない若い人間に思われるかもしれないが、実は、計算高い一面もある。とくに女性はよく内気ぶる。そして、相手の出方を待つのだ。日本人によくあるタイプなのかもしれない。内気になっていれば間違いがない、というのは非常に日本的な処世術かもしれない。いわゆる島国根性というものである。

内気というのは自力で何とかする、ではなくて他力によって、流れを見て、自分からアクションを起こせたら起こしそうでなかったら静観、ということである。だから、積極的な人は内気な人を見るとイライラするのだ。

正夫も内気なタイプであったが、それでもこの小野田ちゃんには勝てなかった。だが、もうここまで書いてきて、正夫は過去の小野田ちゃんのことなんぞどうでも良くなってきた。

もう、内気、内気、内気！

はい終了！
である。

そんなものは人の性格であり、いろんな性格の人がいて、いろんなことがあって、いろいろなのが人生であり、世の中であり、そんなものだから、一人の内気な女性に関わってどうなるということもない。

内気である。

それがどうしたことであろう。

内気だ。

結構、結構、結構。

正夫は、小野田ちゃんなんか知りもしない。知るきっかけもない

し、てげかり（てがかり）もないし、どうでもいいのだ。
恋なんてどうでもいい。

どうでもいいところに光が差すのが恋なんではないだろうか。
いや、これは恋ではない。
ひよっとしたら博愛かもしれない。

いや、博愛でもなく、たんなる暇つぶし、他にやることがないから、擬似的な恋慕に身を焦がすのが、いいんだろう。

人間、動物的な部分もあるし、そんなもんだ。

これは、遊びだ。

ゲームみたいなものだ。

『ときメモ』みたいなものだ。

弾け飛べ！

死ね！

自分！

破裂しろ！

消えろ！

吼えろ！

ワオ！

という気持ちになって、正夫は過去に小野田ちゃんにテロ行為を働いたことがある。

あれは、たしか、小野田ちゃんが二年のときに、創作班から人形班に移った事件の直後であった。小野田ちゃんが移ったことによつて、他の二人の新入生も移った。

どうして移りたいのか二人に説明するときに、

「高田が嫌だから」と泣いたらしい。

というわけで、最終的に、創作班には、新入生が「女の敵」高田しかいなくなつたのである。

その寂しさに怒った正夫は、部室の廊下で談笑している小野田ち

やんに向かつて、十メートルぐらい助走をつけて、駆けつけて
「うりゃああああああ！」

せいやあああ

と拳を、小野田ちゃんの鼻先に伸ばしたのである。
数センチでぶつかるところだった。

小野田ちゃんは仰天して逃げ出した。

これが悪名高い『内気な小野田ちゃんにパンチ寸止め事件』である。

後に、正夫はこうコメントしている。

「一言でいえば、歌手の渡辺美里の歌みたいな感じかな。

オープンユアハート

ね！

俺のあのパンチは、内気な彼女に喝を入れたのよ。

男の子に言い寄られたくらい何だ。

よくあることなんだよ。

だからクヨクヨするな。

って、俺はそういう表現を、あのパンチ寸止めによってやったわけ。

わかる？

だから、あれは先輩としての俺の最大限の愛情表現だから。

多分、小野田ちゃんもわかってくれたと思うよ。

だって、その後でも普通に仲が良いもの」

第34話 「小野田ちゃんについて」5

もう記憶も薄れかかってきて、小野田ちゃんについて正直、書くこともしんどくなってきているのであるが、この『小野田ちゃんについて』は、十まで続けようと思う。

それはできあがってみたら、事実を百倍にも水増ししたものになっ
てしまいものすごく読者からしてみたら退屈かもしれないが、それ
でも十まで『小野田ちゃんについて』を書くことをやめないだろ
う。

というのも退屈というものを恐れていては何もできないからであ
る。

人間の本质というものは非常に退屈である。ある人間と本気でつ
き合おうと思つたら、面白い部分だけ、いいとこどりしようとする
人がいるが、それではだめである。

むしろ、「嫌なとこ取り」をすることこそが、人間関係解決への
妙手であろう。「嫌なところ」を愛することが、その人間を知るこ
とである。正確には、愛するではなくて、飼いならすであろうが。
しかし、正夫はSではない。Sではないが、そういう部分がない人
間関係というものはありえない。嫌なところは誰にでもある。普通
にある。

嫌なところは長所であるところと同じだったりするところもある。
考えてみたら人間の長所なんてみんな嫌なものである。人間は長所
をえることにより、相手にその長所でもって恩を売ろうとしている
部分もあるのだから。

正夫は昔、ある夢を見たことがある。

それは、学校のトイレで小便をするときであった。

正夫が小便をしていると、すぐ横に小野田ちゃんがいて、男の棒

にふれて上下に揺らして、

「これって何ですか」

ときいてきたのである。

小便は指の動きに合わせて上下していた。

「これは、あれだよ。」

「ちんぽだよ」

「ちんぽこって何ですか」

小便はまた上下に揺れた。

というこんな夢であった。

この夢を正夫はいろいろな人に話したものである。これはどういうことか、どういう意味なのか、皆でいろいろ話されたが、結果的に、正夫は潜在的に小野田ちゃんを好きなのだ、ということになった。

ところで、この夢の舞台の学校は、正夫が中学時代に通っていた中学であり、たまに夢に出てくるのだ。

この前も、中学校の一階から三階にある三年B組の教室に行こうとして、崖になっていたり、行き止まりになっていたり、ものすごく細い階段ですぐわきに落ちたら死ぬみたいになっていたり、なかなか一階からたどり着けないという夢も見た。

正夫は中学時代にいじめにあっていたから、その心理が復活したのかもしれない。正夫もまた内気であったし、ニートのほとんどは内気なのではないだろうか。

それはそうと、前回の話であるが、正夫は小野田ちゃんにパンチを寸止めたのではなくて、「内気な自分にパンチを寸止めた」のかもしれない。

「それはあるかもしれないねえなって、思って」

話がここまでできて、誰かの声がする。

誰だろう。

「あ、マサさん、久しぶり。

俺、小田だけれども。

ほら、小田和孝!」

「あ、小田君、何でこんな回想シーンに」

「だって、そのことに関しては俺が出てくるのが一番なんじゃないかなってさ。ま、あまり出てくる必然性がないけれども」

読者の皆様方は、この小田という人物は既出かもしれない、と思っただかもしれないが、まったく新登場の新人物である。

彼は、正夫の「嫌なところ」をよく知っている。

つまり親友みたいなものであった。

第35話 「小野田ちゃんについて 6」

「あれじゃねえかなって…思ってた」

どこだかわからない薄暗い部屋のソファに座って、正夫の友人の小田和孝は両方の指をからませて、質問に答えている。

「だから、マサさんって、俺、昔から思っていたんだけど、あの人がって、結局、内気なんですよ。内気だから文学をやるうなんて考えているわけでしょう。けれどもなかなか文学って、内気だからできるってわけじゃなくて、それが裏返んなきゃいけないのかなあ、とは思うね。たんなるオナニーじゃなくて、裏返ったオナニーね。これ、なかなか難しいことだと思うけれども、高名な文学者はみんなやっていることで、オナニーそのまんまってのは見ていてキツイでしょう。」

けれども、マサさんって、裏返らないからね。そこが辛いところで、俺はいつまでもいい続けるけれども、何で手を出さないのかなって、いや、冗談抜きで。

別にあの三人の女の子のどれかに手を出せばいいじゃないですか。それなのに、なかなか、ちんたらちんたらしているだけで、結局、自爆みたいなことしちゃうでしょう。そこが悪いんでね。もうそろそろ、そういうところに気づいたほうがいいんじゃないかって、俺、冗談抜きでそれは思うんですよ。人望とかはあるんだから」

この小田氏の語っていることは、彼が酒に酔っ払って正夫に言ったことそのままであった。確かにそれはそうなのである。正夫はしかし、どうやれば、ニートを裏返すことができるのだろうか。そもそもニートというものは、裏返ることができるのだろうか。正夫はいちじくを剥いて、裏返したときのことを思い浮かべる。果肉がいくつにも裂けて小さな山のように、いや、それは赤い山脈のようになっていた。ああいう風に綺麗に裏返ればいいのだろうか、しかし、

それへの方法がわからない。まるで、ゲロを吐きたいのに吐けない酔っ払いのように、正夫は、自分のことを思ったが、実はよく酔っ払うのは小田本人であった。

「ああ、そういうえば、小田にあつてないなあ」

と正夫は市村さんにつぶやく。

「回想中に悪いが、マサさん、プリン食べるか。」

百円スーパで買ってきたのが冷蔵庫にあるというから、あげるよ」

「あ、悪いですね」

「で、小野田ちゃんについてまだ何かないの。」

小田は関係ないでしょう」

「あ、すみません。」

プリンをくれた上に、話の進行まで手伝ってもらっちゃって」

「いや、いいんだよ。」

あいつはまた別のときに出せばいいじゃない。

それとき、気になっているんだが、俺はあそこまでカッコよくもないぜ。

あれは良く書きすぎだよ」

「そうですね。」

少なくとも俺にとっては、なかなかなもんですよ」

「そうかなあ。」

ま、プリンでも食べな」

「あ、どうもどうも」

正夫はプリンを食べる。ふんわりとしてプリツとした皮膜をスプーンで破り、口の中に運ぶ。プリンの一口目の感動は、二口、三口となると忘れ去られてゆく。

多分、小野田ちゃんのこと、彼女にも瑞々しい魅力があったはずなのだ。それなのにスルスルと、忘却によって薄れてゆく。すべては通じている。何かしらに通じている。

生きる、とは通じることである。

今、正夫はプリンを食べている。同じ空の下で、小野田ちゃんもプリンを食べているかもしれない。

正夫は窓の方を見つめた。窓の外は闇であろう。小野田ちゃんはこの窓の外にある東京を越えた神奈川、もしくは、他のどこかにいるのだ。

「ああ、俺はどうなるんだろう」

ふと正夫はつぶやいていた。

「俺は寄る辺ない、ニートだ。」

もう好きな娘の記憶さえもない。

好きだったかもわからない。

好きとは何だろう。

わからない。

もう、俺は生きているのか死んでいるのかさえわからない。

ああ、たったひとつのこのプリンだけが、現世と来世を結び付けている。

俺は今、プリンを食っている。

ああ、プリンよ、なくなるな。

その光沢を俺にもっと良く見せておくれ」

「うーん、何だかわからんが、これは重症だ。」

多分、マサさん、小野田ちゃんのこととはもう考えずに寝たほうがいいと思うよ。

脳に悪いよ」

「そうですね。」

何か、脳にくるものがある」

「あ、そういえばマサさん。」

脳にもっと悪くなるかもしれないけど」

と汀子ちゃんが声をかけてきた。

「創作班の文集にある、小野田ちゃんの詩を見つけたよ」

「ええっ、彼女、詩なんて書いていたの」

「書いていたも何もマサさん、随分褒めていたじゃない」

「そんなことあったっけ」

ピンク色の文集が手渡される。

そこには、正夫の小説「ピンクサファイヤな夜」もあった。これは、シックな都会の恋愛を綴ったジュニアノベルであり、正夫の作品の中で、一番まとも、と評価が高い。クルーザーに乗った三人の男が二人の女性を誘い、主人公の男性が感激のあまりクルーザーから海に飛び込んで、心臓発作で死にそうになるが女の子の人工呼吸で助かる、という話であった。

しかし、そんなことよりも小野田ちゃんのポエムを読まなくてはいけない。どこにあるだろうか。ページをめくる手がもどかしい。
「あった。」

『ぼかぼか雲にサンキューさん！』

(ペンネーム) かる ぱっちょ

だ！」

正夫は、じっくりと三回くらいこのポエムを読んだ。そして、何を思ったのであろうか。次回は、小野田ちゃんのポエムを載せます。お楽しみに！

第36話 「小野田ちゃんについて」

海を越えると

山があつた

山を越えると

谷があつた

それから

雲はふわりふわりと

浮かんでは

人々を見下ろして

恨みに思い

雷を落とす

一番不幸な人を

狙つて

ずばああああん

なんてことは

したくない

のはやまやまだが

たまに人にあたるのは

放電現象だから

いたしかたが

ございませんぞ

それからまた

谷があつて

谷間があつて

家があつて

胡麻があつて
それを借りて
近所へと行き
ぼかぼかした雲を
眺めている

雲はいろいろな
形になる

ナパーム弾

拳銃

バズーカー砲

キャノン砲

ロケット

いろいろな

形になつて

あたしの網膜を

指で突き破る

ぼかぼか雲は

ゆつくりと

恨みを含んで

飛んでいる

それは原爆の記憶を

呼び起こして

人間を震わせる

いつも原子力で

地球を変えられると

考えている人間の

傲慢をいつかは

懲らしてあげたいのだ

そんな優しい気持ちで

ぽかぽか雲は

子供たちを見守り

あるときは神隠しに

誘って

ああぽかぽか

ぽかぽかと

漂っている

騙している

欺いている

裏切っている

光っているのは

ナイフの山だ

いつか降るだろう

いつか降るだろう

それはたくさん地表に

降り積もり

大きな

大きな

ピラミッドになって

ぽかぽか雲は

スフィンクスに憧れています

スフィンクスの額には

愛する人のために
殺せますか
と書かれてある
古代シユメール語で
もしくはそれに近い
英語以外の
違う言葉で

謎だけが世界に漂っている
それをつかもうと一生懸命に
なっているのは
一握りのユダヤ資本
フリーメーソン！

わーい
回った
回った
わーい
回った
回った
回った
ルーレットが回った
わーい
回った
回った
回った

お花畑が回っている

アリス！
アリス！
ほら時間よ

絞首刑の時間ですよ！

あらお母さん
そんなマスクなんか

被っちゃって
斧なんかもっちゃって
どうしたの

アリス！

アリス！

起きるのよ

起きるのよ

現実から幻想へ逃げないと
こつなるわよ！

キラン

シュピン

ぽかぽか雲は

そうやって

ぽかぽか雲に

なりました

第37話 「小野田ちゃんについて 8」

「あれなんじゃないかな……」

また暗い部屋になり、謎の男、小田が現れる。今度はサングラスをかけて、葉巻を吸っている。

「マサさんって、ナマの女性が苦手なんじゃないかなって思って……俺、そこが最大の問題だと思うんですよ。俺、浪人中に、女の子と同棲していたけれども、やっぱり自慢するわけじゃねえけれども、そういう経験とか欲しいなって思って。そうじゃないと、えんえん、男版負け犬の遠吠えみたいで、みっともないからさ……冗談抜きで」

そんな景色が、一瞬、正夫の中で浮かんだが、首を振って目の前の小野田ちゃんのポエムに集中する。

「これはどういことなんでしようかね」

市村さんは、何回か見て、

「うーん。」

俺、詩はどうもわからないんだよ」

と汀子ちゃんに渡す。

「これはね、多分、欲求不満かもしれない。

ぼかぼか雲になりたい、という考えの裏には、何かどす黒いものがあるからね。

だから、これは、自分を破壊したいって、衝動もあるかもしれない。

もしくは、本当にただ純粹に雲になりたい、とも読めるなあ。

まあ、他人のことだからわかんないけど」

「うーん」

正夫は、もう一回、彼女のポエムを読んでみて、いつか千代田区にある大学の児童文化研究会の部室で、彼女と創作について話した記憶の断片を思い出した。

「あたしはね、正夫さん。」

何かこう月並みなものが嫌なんですよ。

けれども、童話みたいにしたいなあ、とは思っているんですがね。

こんなあたしだつて、作家性があると思つんですよ。

だから、こんな、ぽかぽか雲でもことさらに、危険な語句を使つたんだけど、これは本位じゃなくて、このポエムの主題は、

みんなに幸せをばらまきたい。

つてことなんですよ

「ふーん。」

けれども、幸せつてばら撒けるのかね。

ひよつとしたら、ばら撒いてみたら、ものすごく迷惑なものかもしれないよ。

俺はこの詩は、死の商人とか、そういうものを連想するんだけど、

「正夫先輩はこれだから、嫌になつちゃうな。」

何かあたしのお父さんみたい」

「お父さんみたいかな」

「凄く似ている。」

お父さんは、パンチ寸止めなんかしないけど」

「あ、あのときはごめん。」

違うんだ…。」

あれは」

小野田ちゃんは、そのときワンピースを着ていて、春めいた菜の花を髻髻とさせる服装をしていた。正夫の前で椅子に座っていたが、ピョンと立ち上がり、腕を後ろに組んで

「わかつてるつて。」

「正夫先輩の本心」

「あ…。」

「その」

こういうとき、正夫はいつも失語症的になる。

「正夫さんは、あのとき、何となくノリでやったんでしょ？」
と朗らかに彼女は歌うようにいうと、そのまま部屋を出て行った。

「あ…。」

ちが…。」

しかし、数秒後に入り口から顔を出して

「嘘！」

正夫さんの真剣な気持ち、すごく伝わったよ
といったのだった。

「嘘だろ」

と市村さんは反論する。

「そんなエピソード、なかっただろ！」
いつになく強気だ。

「まあ、嘘といえば、嘘ですね」

と正夫はプリンを食べながら、こんな嘘をついた自分に赤面する。

第38話 「小野田ちゃんについて」9

だが、小野田ちゃんについて何を思い出そうというのか。正直、もうネタ切れであり書くこともなければ思い出すこともなく、行き止まりでありおしまいであり袋小路である。

本当に正夫は小野田ちゃんに恋をしているのか。というよりも恋をしているとは何なのか。皆が確信的に、「恋とは…」「愛とは…」と語るときの正夫にとってはお説教じみているそうだった恋は本当に恋なのであるうか。それは実は違っていて、恋とは、もっと別なもの、そうあの空に漂うぼかばか雲のようなものかもしれない。

しかし、ここで恋〓小野田ちゃんのポエムに描かれたぼかばか雲とすると、何だか意味がわからなくなってしまう。意味がわからなくなってしまうが、どうも、それがしっくりきているような気がする。

正夫は、小野田ちゃんの書いたポエムを解釈したいが、それは恋である、ということにして、それで終わってもいいのかもしれない。今、正夫は、小野田ちゃんの「ぼかばか雲」のポエムについて思っているが、なかなかあれは思い出そうとしてすぐに思い出せるものではなくて、もう一回読んでみなくてはならない。しかし、あえてそれをせずに、今の正夫のイメージで考えてみると、小野田ちゃんのポエムには何か鋭利な刃物があって、それが、正夫の鯉の削り節みたいな精神的な部分を彫琢しているような気がする。

だが、正夫の精神は鯉の削り節ではない。ここがやかいなところであり、実際には何も起きていないのかもしれない。しかし、確実に何かが起きている。ステージが開けてきている。

手に触れられないような形状としてまとまらないような、そうであって体を暖かくさせる謎の空間、それは光が差し込んではいるが、

同時に陰もあつて、明暗だけではなくていろいろな不純物がごろごろしているものがあつて、それは現実と同じように雑然としていて、とらえどころがない、命の通じる何かであり、根源であり末端であり出発点であり終着点であるような何か。

それを恋と総称してしまつて、良いのであろうか。いや、それは何かしらではあるが、恋ではなくて、恋と卑小に解釈できない何か、正夫の胸に兆している。

もつと考えると、ゲームでいえば二人同時プレイがしたい、ということになるのかもしれない。この今出くわしている自分の人生というが現実を、一人ではなくて二人で分かち合いたいともいうような…。

正夫はつまり寂しがり屋なのだ。中学時代、正夫には友人がいたものかなり寂しかった。それが今に至るまで続いており、今、こうやって友人に囲まれているものの、それでも何か物足りないのである。

それは当たり前前で、友人たちは自分たちの生を生きていて、その途上で正夫と付き合っている。それは片手間で付き合っているものであり、皆、それぞれの人生に忙しいのだ。正夫も自分の人生に忙しい。しかし、今の正夫の人生は、寄り道状態であり、目的がはっきりしていない。もし、わかち合う人がいたら、

「何やってんの」

と肩を叩いて笑うかもしれない。

「それは違うでしょ。」

こうでしょ」

というかもしれない。

「おい、こつちだ」

と手招きするかもしれない。

ああ、もう美人とかブスとか何でもいいのだ。自分の人生というワインを酌み交わす誰かが欲しい。人生の果実をとにもむしゃぶりつくしたい。一緒にクツキングしたい。ともに恋の味を味わいたい。

「へえ、そうなんですか」といわれたい。

小野田ちゃんの魅力は、少し引きがちに笑いながら

「へえ、そうなんですか」

というところに、98パーセントくらいあるのかもしれない。

「へえ、そうなんですか」

と正夫は小野田ちゃんに一言いわれれば、それだけで解消される思いかもしれない、なんて考え始めている。

あの高めに「へえ」と始まり、転がるような声で「そうなんですかああ」と途中で下がり、最後には上がり調子で終わるあの小野田ちゃんの声、まさにアニメ的な声、あれを一日百回聴きたい。

「だから…俺、思うに…」

急に暗室になって、椅子に座ってサングラスをかけた、小田が現れる。

「マサさんって、あれなんじゃねえかなって…やっぱり、アニメ声が好きなんじゃねえっすか。」

どこかで、正夫さんは、小野田ちゃんの声に、欲情しているものがあった、それがアニメ声で、小野田ちゃんは眼鏡かけてねえけれども、おとなしい眼鏡っ子みたいな二次元キャラクターがあった、それに萌えているだけじゃねえっすか。

俺、だから、もうちょっと、マサさんには現実には現実には目を向けて欲しいなって思ってる。そんなことばかりしているから、ニートになるんだし、一回現実には、同棲でも何でもしてみればわかるんじゃないやねえかなって。

俺、関係ねえけど、一回、浪人生のときに女と同棲したことがあって、そのときに、女ってやっかいだなあ、って。別に、付き合っても人生変わらなねえなって、やっかいなものが増えるだけだなって感じがしているんだけど、これ、冗談抜きで。

ま、それがどうした、つていわれれば、何でもないけれども、それでもやっぱ、マサさんは、一回妄想をクリアーしてほしいな、つて、まあ、俺のいつていることは、単純にそれだけなんだけれども……」

正夫は、自分の友人兼自分専用の批評家、正夫評論家の小田だったらこんなことをいうに違いない、と思い、それはそうなんだけれども、そんなガチャガチャした批判の声を無視して、小野田ちゃんがかもし出してくる妄想のプールに全身を横たえていると、声がする。

小野田ちゃんとは違ってもっと落ち着いた声である。市村さんの恋人の汀子ちゃんの声であった。この声には癒し的な空気が漲っていて、それもそれで良かった。

関係ないかもしれないが、こんなエピソードがある。

汀子ちゃんに、正夫が惚れていた時期があつて、そのことを市村が汀子ちゃんにいった。

「で、マサさんは、私のどこに惚れていたのときくと

「太股が良かったらしい」

と市村は報告して、

「アホか……」

と汀子ちゃんをがっかりさせたらしい。

事実、彼女は太股が良かった。

彼女が一番初めに、サークルの部室にきたときに、黒いタイツを履いていて、それは編みタイツだった記憶があるのだが、それが妙に大人っぽくて、魅力的に思えたものである。あの落ち着いた声もいい。

だが、それは関係ないことだ、話を続けよう。

「マサさん、そういえば、小野田ちゃんの詩に書いたマサさんの感想文なんていうのもあるよ」

ちなみに、あのサークルでの文献は、全部、市村さんの家にある。正夫は、文献をすぐになくす癖があった。現に、あのサークルの文集なんて一冊も持っていない。

それにしても、当時の正夫は、彼女の「ぽかぽか雲」をどう評していたのだろうか。どうせろくな批評は書いていないに決まっているが、そのころの気持ちがよくわかりそうなもので、ここに紹介してみたいと思う。

第39話 「小野田ちゃんについて 10」

「今回、文集に収録された作品の中で、この、かるぱっちょ（小野田ちゃんのペンネーム）さんの「ぽかぽか雲にサンキューさん」は出色の作品である、というよりも、他の作品がろくでもない、という噂もなきにしもあらずであるが。

こうして、冒頭に褒めるようなことを書いておいて、何なのであるが、私は詩について、それほど専門的な知識をもっているわけではなくて、萩原朔太郎などには通じているものの、一向に、詩そのものについては、わからない、というか、わかるうとしてはいけないのだろうが、素人である、ということは断ってもいいだろう。

断るついでに、この「ぽかぽか雲」について、それほど詳しく覚えていてるか、というとなかなか、それも難しい。今、手元がないので、なかなか読み直すことができないが、多分、素晴らしい作品なのだと思う。

そうでなかったら、わざわざ私が、感想文で、褒めようなんてことはしないからである。

私は、基本的に、感想文では、対象の作品をけなすことしかしていないような気さえする。

それは違うのであるし、人によって手加減もしているし、厳密に言えば、いくらでも言い逃れはできるのであるが、しかし、そうでありながら畢竟、なかなか褒めるといことはしてこなかった印象が非常に強い。

こういう感想文は、相手の顔が見えるので、結局、手紙みたいなものになってしまう。

だからやりにくいのだ。

本来ならば、けなすことも、褒めることもやりづらい。

が、けなすことだけはしっかりとやる。

だから、私は人気者ではないのである。

かるぱつちよさんの話に戻るが、そもそも、このかるぱつちよ、というペンネームからしてすでに不敵である。

何を考えて、かるぱつちよにしたのか、そして何を考えて「ぼかぼか雲」を題材にしたのか、私にはまったくわからない。

他人だからわかるはずないのであるが、この

かるぱつちよ

ぼかぼか雲

という配列には何かしらの主観的な意味があるのだろう。

そう考えながらも、同時進行的に、私はこの作品には積極的な意味を認めたくない気がしている。

意味を認めずに、ただたんに「ぼかぼか雲」を見た連想なんだ、と思えば、この詩はすんなりと、頭の中に入ってゆくだろう。

誰かが笑いながら、

「アハハハハハ。」

これはメルヘンということに関する、疑義提出だよ」

といていたが、これは引退した福田班長なのであるが、彼はアホである。

そういうものでさえなく、これは純粋な無意味であり、ぼかぼか雲なのだ。

これは、福田さんが、班長ではなくて、出っ歯そのものなのであるにも相当している。

いや、これは、冗談であるが…私は、こんな冗談を書いて、本当によく人を傷つけているものだ。

この感想にしたって、冗談かもしれない。だが、私はもう冗談しか書けない。専門的なことは誰かが書くだろう。私は、この紙に、私でしか書けないことを書こう。

と、決意しておいて、これ以上、特に書くことがないことに漠然とした不安を感じつつも、それでも先を進めると、

かるぱっちょ

って一体、何だったんだろう。

わからない。

だが、私にしたって、『暴大八車』というペンネームで書いていた時期もあった。

今、私はこのサークルを引退しているが、（この感想は、正夫が大学四年生のときに書かれた）数ヶ月前に、人形班の公演を見たときに、私は、驚きを禁じえなかった。

どうやら、その公演は、先輩たちが引退する公演らしくて、肝心の劇は素人のもので、話がグダグダで、子供の発想を出ない最悪のものであったのであるが、終わりに、幕が閉まらないのである。

幕が開いたまま、幕を閉める人が裏方でいきなり泣き出したのだ。

そして、その人が泣くことによって、泣くことが感染して、裏方がほとんど皆、泣き出したのである。

幕は、泣き顔の黒子によって閉められて、しばらく裏方は、号泣の嵐になった。

私は、それを見て、呆れるを通り越して、むしろ感動…、いや、その感動を通り越して、また呆れた。

彼らにとっては、人形劇の外見なんか、構成、演出、出来具合なんかは二の次、三の次なのである。

私は、あれを見て

「あつ、大学のサークルって終わっている」と真剣に思った。

これは多分、全国の大学のサークルにいえることなのであろう。断言したい。

もちろん、こんなことでは、大学のサークルから、何かしらの力ルチャーが生まれることは、決してない。これは、しかし、教育と

いうものが、ここ最近、人間を管理するものへと変質したからと関係しているのかもしれない。

ゆとり教育、というものの問題は、管理教育というものへの変遷へと関わってゆき、ほとんどの人間は、この大量消費社会において管理されるものへとなってゆくのである。一部の管理の枠組みを作る側と、大量の管理される側が存在するという、こついった世界になることは確かだと思う。資本家と労働家ではなくて、管理するものとされる側の世界になるのだ。格差なんていうのも、実は、そういう構図である。もちろん、文化というものは、そういった世界に対するカウンターパンチであるが、現代の文化が、それほどの役割を担えるだろうか。

土台、無理である。

いや、無理かどうかはわからないが、もはや大学がそのカウンターパンチを発生させられる機関になれるかどうか、ということであり、それは無理なのである。

少なくとも、この大学の児童文化研究会はそうだ。

(だが、児童文化研究会がどうして、そんな役割を担わなくてはいけないのか、それはよくわからない)

というわけで、もう私は感想を書くのも馬鹿らしくなってしまうた。

これは、ぼかぼか雲が馬鹿らしいのではなくて、私のやっていること、やってきた大学サークルの活動が馬鹿らしいということである。

この、ぼかぼか雲は、管理教育の管理という寓意をもっている。

かどうかは知らないが、もう、こついったことすべてが私にはどうでもいことになっている。

私は、私の道を行こう。

さらば、児童文化研究会！

さらば、管理教育の出先機関！』

この感想を最後に正夫は児童文化研究会と手を切ったのだった。考えてみると本当にろくでもないサークルであった。

実は、このサークルの隣には、

『貧乏くささを守る会』

というサークルがあり、その会長の松本氏は、

『全貧連』

として、現代でも活躍していて、ある雑誌に文章を連載しているほどのカリスマになっていた。

実は、正夫もそのサークルに一週間だけ出入りしていた時期があったのであるが、あそこに居続ければよかったかもしれない。

そして、地下活動みたいなことを続ける、それもよかったかもしれないが、今だって、地下活動みたいな生活であり、変わらないといえ、変わらないではないか、とも思える。

この

『小野田ちゃんについて』

の話は、これで終わりであるが、そもそも小野田ちゃんについてまったく切り込めなかった。

それは後に切り込むことになるのかもしれないが、正夫は、このまま切り込まないほうが美しいのかなとも思った。

野に咲いている花を刈り込むこともあるまい。

と、何かポエムみたいなたとえば、頭の中に浮かんだが、誰かがいつていたが、比喻というのは実は対象を卑小なものに限定させてしまう。

この場合も限定させてしまっている。

現実は無限である。

正夫は、誰かの中に、小野田ちゃんを見つかるかもしれない。それは小野田ちゃんではないかもしれない。小野田ちゃんとは似ても似つかない存在かもしれない。

そして、それは他ならぬ、正夫自身が小野田ちゃんなのかもしれない。

正夫は、市村さんのアパートにある姿見で自分の顔を見る。

いつもの典型的なさえない日本人の、かつこよくない自分が映つて、正夫は、ため息をついた。

「ああ…。」

俺のどこに小野田ちゃんがある、というのだろうか」

それをきいた市村さんが毛布を運びながらつぶやいた。

「それはどこにもないだろ。」

そんなことよりも、マサさん、布団敷くから寝てくれ」

「はい。」

「どうもすみません」

第40話 「鷲宮の夜 1」

部屋の電気は消されて、漆黒の闇が辺りを包むがしばらくするとどこに何があるかわかるようになる。正夫は、寝るときは誰よりも早く、起きるときも誰よりも早い男であったが、今週はニートだったために、疲れていず、それほど睡眠しようという気も起きなかった。上半身は分厚い毛布、下半身は炬燵の中に入れて、天井を見上げた。蛍光灯の傘をじっくりと眺めていると、心がいつも落ち着くのだが、何故だか、心臓がドキドキしている。自分の心臓なのにコントロールできない。どうしてだろう。いや、そもそも心臓はなかなかコントロールできるものじゃなかったのかもしれない。

小野田ちゃんについて随分熱っぽく語りすぎてしまい、その影響でこのような感じになったのだろうか。正夫の心には、さざなみが立つような、魚の小骨みたいなのがひっかかった。あまり親しくもないのに気楽に語りすぎたために起きた、これは小野田ちゃんの逆襲だろうか。

だが、正夫は不眠に関してはエキスパートであった。コンビニ夜勤をずっとやっていたから、不眠をどうやり過ごすか、ということに関しては、慣れたものであった。とにかくじっと体を横たえて、体力を消費しないことである。そのままでしたら、自然状態ならば、眠ることができるはずであり、眠りの神がやってくる。

自然状態でなければ、話は別であるが。もともと眠れなくても、ニートだから困らない。この暗い中で五時間でも七時間でも、じっとしていれば勝手に夜が明けるだろう。家でもう一回、眠りなおせば良いだけである。これぞ、ニートの特権であり、だからニートはやめられないのだ。

という人もいるだろう。正夫は一生ニートなんていうのは真つ平ごめんだ、と考えていた。この小説はニートの側に立った小説では決してない。むしろ、ニートを外側から見つつも、ニートになって

いる人間の小説である。だから、ニートというものは何なのかと考えるためには、資料不足であろう。どこかにニート界のゲバラとでもいおうか、生粋のニートで一生を過ごす覚悟のある人物がいるはずで、小説は、そういう人間に任せようと、正夫は思っている。

そこから、正夫は自分の邁進しようとしている文学のことについて思った。多分、俗受けするような小説は書けないし、純文学でも無理である。正夫なりに何か新しい小説を書ければ良いのであるが、そんなものはあらかた誰かがやり尽くしている。今さら、それをやって、新しいものでごさい、なんていうのもおかしい話だ。

と客観的に考えるとそうなのであるが、主観的に考えると

「いや、自分は違う。

俺はできる」

と肯定的になっている。何故か開き直ってしまえている自分がいる。この根拠のない自己肯定は何なのであろうか。とても馬鹿らしいことであるが、生きるとは馬鹿を貫くことだ、と誰かもいつていたし、そう感じられるのだったら感じるままに生きてゆくしかあるまい。

世にニートというものがあるのも、何かしらのものなのだ。それは働きたくないというたんに消極的な意味だけではない。「方丈記」を書いた吉田兼好だってニートだった。いや、あれはホームレスか。いずれにせよ、隠居している、出世間という意味では同じである。

まだまだ正夫はニートというものが何かを知らない。ニート道初段である。これからニートというものを探索してゆかなくてはいけない。ファクションとしてのニートでは駄目だ！アクセサリーのニートでは駄目だ。

「正夫君」

急に暗闇の中から、歯の出た福田さんの顔が浮かんでくる。

「恋愛は、ねえ。

アクセサリー、じゃ、

ないんだよ！」

というと、福田さんは口をすぼめて、悲しそうな目をして、闇の中に消える。

恋愛というものも何かしらのものなのだ。正夫は、恋愛、ニート、文学をすべて究めたい気でいた。この三つを極めることができるのなら、人間として非常に立派なものになっているに違いない。少なくとも、何がおきても、大丈夫な人間になれる。

正夫はそんな熱い思いを胸に抱きながら、その熱さのために余計に眠れなくなっていた。正夫の入っている炬燵には、市村さんも入っている。市村さんは分厚いジャンパーを着て寝ていた。考えてみれば、かわいそうな話である。家主にも関わらず、どうしてこういう目に遭うのだろうか。しかし、空手オーラが彼を包んでいる、だから大丈夫だ、と正夫は勝手に思うことにした。

闇の中に取り残されて、正夫は何かしらを考えていた。それはガラスの破片に映った景色のように支離滅裂で、どれをどういうことはいえなかったが、それらがひとまとまりになって「何か」とはいえた。だから、正夫は何かを考えていた。そして、何かをしようとしていた。それはとんでもなくくだらないことだったかもしれないが、やはり立派に「何か」であった。

この部屋の巨大なテレビの脇の壁にはボードがあつて、正夫と市村さんの共通の友人たちの写真が貼つてある。正夫は寝転んでいるところを撮られていた。まさに正夫らしい場面であり、正夫は寝転んでいる自分こそ、自然なんだと思つた。その写真群の中央には、ニッコリ笑っている市村さんと、汀子ちゃんの写真がある。市村さんは結構照れ症で、あまり自己演出めいたことはしないのであるが、これはささやかな生活の演出なのかもしれない。そして、その周囲に、今まで小説に出てきた面子の顔ぶれが並んでいる。オールキヤストであった。

正夫は、彼ら彼女らのことを、暗い部屋では直接見ることができない写真の記憶をもとに、もう一回思い出して、考え直す、つまり心の中で反芻することにした。

第41話 「鷲宮の夜 2」

あそこら辺にみんなの写真があるんだよなあ、と思いながら、正夫は寝転んでみると、不意に、みんなの顔が浮かびがわってきた。まるで星のように輝いて、円周を描いている。そして、中心にいるのは正夫の顔であった。みんなの顔、即ち、市村さん、汀子ちゃん、渡部、高田、小野田ちゃん、小田、勝間、福田などの顔が、まるで、正夫を守るかのように、虹色に発光してクルクル回っている。

「きれいだ…。」

これと同じ光景をどこかで見たことがある」

それは、小学校の図書館にあった、「織田信長」という小学生向けの本であった。

戦乱の世の中を慨嘆して、天皇が、空を眺めているときに、侍従がいったのだ。

「各地の群雄が、あなた様を、この戦乱から守ろうとしているのです。」

そして、その星の頂点に立つの北極星があなたなのです。

北には、伊達輝宗、上杉謙信、

東には、北条氏政、織田信長、武田信玄、

西には、毛利元就、宇喜田忠家、

南には、長曾我部元親、大友宗麟。

すべて、あなたのことを守ろうとしているのです！」

正夫の中では、どこでどういつながりでこんなシーンが出てくるのか忘れたが、それは非常に感動的なシーンであった。つながりがわからないのに、感動したのは何故だがわからないが、正夫はそういうところがよくあった。しかも、厳密に言えば、別に守っているわけではなくて、天下をとろうとしているわけなのであるが、結

局は、朝廷にとっては、滅ぼされない限りは、守られていることになる。ひよっと、すると、正夫はそんなロジックに感動したのかもしれない。

とまれ、正夫はそれぞれの群雄の顔を思い出したのだった。

市村さん…

彼は、イタリア人みたいなどころがある精悍な土佐の人間である。彼は、その空手道でつちかった経験で、何か重要な示唆を正夫に与えてくれるに違いない。

汀子ちゃん…

彼女はミステリー好きな小説家志望の女性であり、その先鋭化した感性が、正夫の情操教育の役に立つときがくるかもしれない。

渡部…

そのあまりにも自由な野放図な何を考えて生きているんだかわからない自然児っぷりが、正夫に、生きるとは何かを教えてくれるかもしれない。

高田…

その内面からほとばしる、衝動的な破壊力が、素晴らしい説教となつて、現代の闇の閉ざされた社会に、大きな光明を与えるかもしれない。そして、「小野田ちゃんを紹介してくれるかもしれない」

小野田ちゃん…

彼女はすべての恵み、炎、情熱の平原、いや、大陸、母、大地そのもの…、正夫は彼女にアプローチするのではなく、彼女に還る…まるで子宮回帰のような、もしくは永劫回帰のような、身を震わす、地獄もしくは天国の源。

小田…

彼は、正夫専門評論家、皮肉、辛らつにして、自身は非常に繊細な神経の持ち主で、人から見られてると手を震わせる。四角い顔、まさに、高田のような…いや、どっちも四角いってだけの話。

勝間：

「俺と彼女とアカプルコ」の作者であり、変態的な、頭頂部が正夫と同じで尖がっている、そして、精神のほうも正夫と同じで尖がっている、エリート大学院生。

福田さん：

反面教師としてしか、もしくはギャグとしてしか登場しないだろう、希代の反マキャベリストでありながら、出っ歯。でありながら、エリート会社員でありながら、掛け算ができない、でありながら奥さんが綺麗な先輩、でありながら疎遠な人！

そういったすべての顔が回って回って、まるで光の渦のようになり、正夫の中で明滅して、闇は光に切り替わり、正夫は深い眠りの世界へと旅立ったのだった。

第42話 「鷲宮の夜 3」

闇夜の中を川が流れている。その川に、まるで流木のように正夫は流されていた。いつからそうなったのかもわからないし、何でそうなったのかもわからない。不思議なことに体が浮いて、上空を見上げることで、川の両岸を見ることはできた。

空は無限にそうであるかのように闇が続いている。両岸には葦がいくつも生えていて、川はあっちへ曲がったり、こっちへ曲がったりして、尽きるように思えるかと思えば、また広がりまるで海のような広さになったかと思えば、狭まって急流になり、いくつもの段になって、流されている正夫の背中に川底がぶつかって、正夫はバウンドしたりしたが、それでも正夫は、うつぶせにはならないで、常に仰向けになって流されて、空を眺めていた。

「俺は流木。

三千年前から。

環境の奴隷になっている」

と、昔のロックバンド「大黃蛇」の歌を思い出しながらも、正夫はこのままではいけない。このままでは流される。いや、今、現に、流されている。と思っている。

そんなところへ、闇夜を切り裂くように、ひとつの大きな顔が現れる。

正夫の友人、渡部博文であった。

「マサさん、何やっているの」

「ん？」

流されているんだよ」

正夫は暢気な自分を演じようとした。

自分の好きでやっているかのように思わせよう、と何故か、今の境遇とはまるでちぐはぐな風にあった。

それをしばらく見て、渡部はどう反応したか。

渡部は目を見開いて、

「オポポポポポポ」

とつぶやいた。

あっ！

これはハイになった渡部だ。彼はハイになると別人になる。この

「オポポポポ」

というのは、プレイステーションで「シャドータワー」というゲームがあつて、そのゲームに出てくる敵のモンスターの声であつた。

たしか

「オポポポポポ」

ではない、と思う。

正確には

「オボボボ、オボボボ」

なのであるが、渡部が延々と一年、二年と真似をしているうちに、そのギャグは変な熟成をしまい、

「オポポポポポ」

になつてしまったのだ。

しかも、そこに前述した福田さんの真似もブレンドされて、歯をむき出しにして、

「オポポポポポオ！」

と、書いてもわからないかもしれないが、語尾が尻上がりになるようになっている。

「オポポポポポ」

正夫はそれを眺めながら、何故か、不意に涙が出てきた。感動したのである。今さらに、渡部の先輩である福田さんを思う心に、何故か異様に感動した。どうしてだかはわからないが、送別会であまり懇意にしていない渡部が泣いた理由がわかってきたような気がした。

そして、正夫は、自分の送別会をそろそろしなければいけないこ

とを知る。自分の消滅する場面が、目に見えるかのように、あと十分もないかのように、死んだ後の新聞記事の文面とか、フジテレビのどのキャスターがレポートするか、とか、はっきりと予想されてしまった。

正夫は足を先頭にして泳いでいたので、目を下に向けると、足先のしばらく向こうで、川は、少し上を向きながらも、ばつさりそこで折れて見えなくなっていて、それは水平線のようになっており、つまりその先は滝だ、ということを示していた。

「死ぬ！」

死ぬ！

滝に飲み込まれて死ぬ！」

と正夫は叫んだが、闇夜の中にくっきり浮かんだ渡部の顔は、無表情に一瞬懸命にもみえる目で

「オポポポポポ」

「オポポポポポ」

と繰り返していた。

「それ、何だよ」

「あ、俺、何かを念じるときは、1 2 1 2 1 2 1 2、なんですよ」
「何で」

「知らないです」

そのまま、正夫は、川に流されて、岸にまでたどりついた。

正夫は、立ち上がる。

そして、濡れた服をどうしようかと、歩き始めた。

岸の辺りは、森になっていて、小さな木でできた小屋があって、
そこから、斧をかついだ小田が出てきた。

「あ、マサさん！」

「お久しぶり！」

「うおっ。」

「何しているんだ」

「俺さ、都会が自分には合わないんじゃないかなって思って、木を
伐採して生活をするにしたらんだよ」

「ほう」

「そうしたら、元気になったよ。」

「前より、爽やかになれたよ」

「そうか」

「やっぱり、自然に囲まれて生活するのが最高の幸せだよね」

「ふーん」

と正夫が感心しているとどこかから聞き覚えのある声がする。

「オポポポポポ」

「オポポポポポ」

「何だ、あの声は」

と、小田は声のする方を向くと、顔面が蒼白になる。

「あれは…うわああああ！」

「オポポポポポ」

「オポポポポポ」

不気味な声が森中にこだました。

第44話 「鷲宮の夜 5」

「マサさん。

マサさん」

渡部の大きな顔が、闇夜の空に顔だけアップで現れる。

「高田の12121212121212…ってやつね。

あれ、01010101010101010…の間違いだよ。

オポポポポポポポ」

というと、渡部は、小田を睨みつけてから消えていった。

正夫は、はつとする。高田は「1212121212121212…」と念じていたが、それでは意味が通じないのである。

そもそもは、前に何かあったときに、正夫が

「ところで、高田って、このことどう思う？」

「ちよつと、待ってください！

01、01、01…。

あ、わかりました」

と答えたところから始まったのである。

そこから、

「あいつの頭の中は、二進法でできていて、コンピューターみたいになっているんだ」

と正夫がいいふらしたのである。

だが、何で

「01010101010…」

とつぶやいたのであろうか。

多分、何かあったのだらう。

面白い漫画のシーンでもつぶやきながら回想していたのだらうか。

そういえば、諸星大二郎の漫画「孔子暗黒伝」の最後のシーンで

「01010101010…」

というコンピュータの二進法と、中国最古の占いの本、易経の陰と陽を表す記号との奇妙な類似性を紹介していた。

そこから、コンピュータは昔存在したのである。という驚きの結末を提示していたのであるが、多分、それと高田の

「010101010101…」

はまったく関係がないと思う。

「マサさん、そんなことはどうでもいいよ。

それよりも、林業いいよ。

マサさんもニートなんかやってないで林業やった方がいいよ」

と小田が勝手に人の思考に入り込んでしゃべり始めた。

「やめろ！」

人の思考に入り込むな！」

と、正夫が小田をたしなめると、目が覚めたみたいで、鷺宮のアパートの一室であった。

「あ、マサさん。

起きたの」

市村さんが、早朝のニュースをイヤホンをつけて見ていた。

「ジャンパーだけで寝れましたか」

と正夫がきく。

「いや、寝れんよ。

あいつじゃないけれどね。

うふふふ」

と市村さんが笑った。

これは、渡部の口調を真似したのである。

渡部は、昔、寒い夜中、皆で寝るときに、毛布も何もつけないで一人でじっとしていたことがあって、一声かければ、毛布をもらえたのに、一切、声をかけずに、寝られないまま数時間過ごしたという笑い話になっている故事があつて、そんな意味が

「寝れんよ」

という言葉の裏にあった。

「いや、冗談抜きにね。」

あいつの気持ちが変わったよ。

本当にね、やっぱり、四人が泊まるって無理があるんだよ。

今度からは、三人にしよう。

っていうか、三人でも無理があるんだよ。

もうね、なかなか人を泊めることはできないね」

「ですよね。」

同棲していることですし。

俺もね、悪いな、とは思っているんですよ。

だからしょっちゅうは、やめますんで。

まあ、数ヶ月に一回、半年に一回でもいいんじゃないか、と」

「だね」

「ところで、今何時ですか」

「五時半だね」

「じゃあ、行くか」

「こんな時間に出るのか」

「はい。」

俺、早朝に、一人で歩くのが好きなんですよ。

何かいいじゃないですか。

家まで歩いて帰ろうと思うんです」

「やっぱり、マサさんって変わっているね!」

「誰だつて変わっているんですよ、多分。」

それが表に出るか、出ないかだけですよ」

正夫は、財布、携帯、眼鏡を用意して、すつかり、水木しげるの漫画の登場人物の一般人男性みたいな、さえない男っぷりを発揮すると、髪の毛がまだボーボーであったが、それをも省みずに、市村さんのアパートから出たのだった。

階段を音を立てないように、降りないと、一階の韓国人のおばさんに文句をいわれるので、そつと、足先に神経を集中しながら降り

る。一階の韓国人のおばさんの隣には、黒人が住んでいて、たまに六人ぐらい集まっているときがあって、市村さんは脅威を覚えることがあるのだという。

そんなことをぼんやり思いながら、朝もやのたちこめる道路を、左に曲がって、とぼとぼと、シャッターが閉まっている雑貨屋の前に出て、正夫は、伸びをする。

月曜日の朝。

ブルーマンデーというが、今の正夫には、そういう勤め人特有の心のしこりはまったくくない。ただただ、広漠とした時間が何の味付けもされずに横たわっている。

「ああ、ニートっていいな！

この自由ったらないな」

熟睡したために、両目から涙が出ていた。

第45話 「正夫的に最終回」

正夫は、自分の目の前に展開している中野の景色を必死に自分の脳の中に記憶として刻み込もうとしたが、町の建物や道の構成やちよつとした陰、空気、匂いがすべて正夫の認識から通り抜けてゆき、正夫は自分の感覚がおぼめくような、実態が揺れているような、不可思議な雰囲気にもまれて幻惑されて、この中野の道筋のことを、記憶に入れる気力さえなくなってゆく。

前に憂鬱な月曜日と書いたが、確かに、月曜日の憂鬱を回避することはできて、その一瞬間において、しばしの間、大きな喜びがあるのであるが、その喜びは、なかなかプラスのままには留まらずに、少し落ち込んだ精神状態へと、より戻しをするのだ。

歡喜が逆に、別世界の憂鬱を呼び込む。その憂鬱とは、無為の憂鬱であり、仕事もしない俺は、何をしているんだらうという焦燥である。

ニートにつきものこうした憂鬱に正夫は支配されて、足取りは遅くなり、いつそのことそのまま地べたに寝て、道路の中に埋まりこんでしまいたい。そうになると、正夫にとって、周囲の景色は灰色になり、機械的になり、ただ防御としてのみ、見渡すだけで一人で正夫は、道という記号を頼りにたどってゆくことだけになる。

「はっ。

人は道を辿るだけなのかもしれない」

正夫のさつき感じた自由感こそ、偽者ではなかったのであろうか。自由なんてないのだ。みんな銘々が道を背負っている。その道に沿って進んでいるだけなのだ。彼らの人生観は、たまたま辿っている彼らの道によってすぐに分別できるのだ。

「チクタクバンバン

チクタクバンバン」

と正夫は歌った。確か、そんなおもちゃがあった。決まった道し

か進めない時計型のロボットを、床のタイルをうまく組み合わせ、ゴールへ誘導するか、もしくはは一定時間、進ませるといふようなそんなおもちゃがあったはずだ。

「やはり、俺は運命の奴隷なんだ。環境の奴隷なんだ。」

そして…何より、欲望の奴隷なんだ」

地の底から、否定的な何かしらの声がつつと沸きあがって、正夫の心を攻める。正夫は自分が恥ずかしくなる。そして、白くなる。白く、石灰石のようになって、どこかで佇むだけの老人になるのが、正夫の宿命なのであろうか。

「死ぬ…。」

このままでは俺は死ぬ。

何て重たい圧力が俺を苦しめている。

Gだ、Gがきつい。

助けてくれ。

うわああああああ。

引力が俺を歩かせる！

地球が俺を支えている！

太陽が飛んでいる」

正夫は、そう心の中でつぶやきながら、歩くことだけはやめなかった。歩かないと止まってしまふからだ。朝の綺麗な景色は、冥府の景色と様変わりした。

「ああ。」

もう、駄目だ。

二トだから、俺は駄目だ。

世界が牢獄だ。

天地がひっくり返っている。

海が煮えている。

空が燃えている。

俺には何が、何がある。

俺にはこの蜘蛛の糸のような道しかない。

その道でさえ終点は死だ。

もっともどんな道だって終点は死だが。

あああ、一刻一秒が死へと向かっている。

俺は、生きて生きて生きて、どんなに白熱しても死ぬ。

まさに、その生きるのが白く光って、その分だけ暗くなる。

二極化が俺を襲っている。

人生とは、生と死の冷戦だ！」

正夫は、とたんに、自分を取り囲んでいる、いや、自分を取り囲んでさえもない、すべてがおかしくなって、急に歯を剥き出しにして叫んだ。

「あら、こんなところに道があるわ！」

奥さん、道っていったら進むものよ。

正夫、逝ってきまあああす！」

そして、正夫は飛ぶ。

下界を悲しい目をして見つめながら、自分の棲み処のある暗い谷へと帰っていった。

第46話 「高田伸司からの手紙 1」

読者の方々、はじめまして。

いや、はじめまして、と書くのもおかしいかもしれませんが。と
いいますのも、私はすでに、この小説「中野」において、高田伸司
という名前で登場しているからです。この小説の主人公は、私より
も二学年上である正夫さんでしたが、彼はこの小説「中野」の続き
をどうしたらいいのか、考えているうちにノイローゼみたいな状態
になって、休養したいということなので、恐らく数回、私がこの小
説の進行役をおおせつかることになりました。

それにしても、正夫さんがどのようにこの小説を展開させてゆき
たいのか、ということをお私にまわすたく知らないのです、どうやって、
この小説を膨らみのあるものへとまとめてゆくのか、見当が付きま
せん。私は、正夫さんの学生時代の作品をいくつか読んでいたこと
があつて、彼の実力を買つてはいたんですが、それももう数年前の
ことであるし、今回の小説は、正夫さんの今まで作ってきた作品と
がらりと変わっています。

しかも、正夫さん自体もこの小説をどうやって進行させたいの
か、わからないということですので、こちらとしても非常に困惑
せざるをえない。けれども、私をピンチヒッターとして指名してく
れたことに関しては、正夫さんはさすがに眼力があるなあ、とは思
いますね。

私は高校の国語の教師なので、小説とは何かということとはわかっ
ているつもりです。多分、正夫さんよりも、小説へのアプローチの
深さというものは、もっているのではないでしょう。正夫さんが
どのような本を読んでいるのかわかりませんが、私だって難しい本の
ひとつやふたつ、読むのです。

しかも相手は独学と来ている。噂によると正夫さんは塾講師にな

ろうとして、自分の文字の書き順が滅茶苦茶なので、それを直さねばならない、と指摘されて、面倒になってやめたいです。それを考えれば、私は正夫さんよりも、書き順に関しては上にあるわけであるし、多分、正夫さんは古典の文法なんていうものとか、日本語の文法的な事柄なども全く知らないでしょう。

そういう意味では、私は適役なのですが、しかしながら、正夫さんがこの小説で何をしたいのかがさっぱり見えてきません。

彼は、何に迷っているんでしょうか。そして、いきなり最終回にしてしまったのは何故なのでしょうか。

読者の皆様以上に私が困っている次第です。（これは冒頭に書いた通りです。つまり私は同じことを二回書いています。しかし、修正する時間ありません。あしからず）

ただ、それでも私は、この小説を続けなくてはいけません。しかしながら、私は多忙であり、この小説に関わっている時間はそれほどないので、多分、一筆書きみたいにぞんざいになるかもしれない。とはいっても、この小説が問題として取り扱っている事柄に関して、いくつかの新しい情報を皆様に投げかけることはできますので、そこから書いてゆこうと思います。

どうなるかは知りません。それこそ、明日には明日の風が吹く、でしょう。この小説自体がそうやって続いてきたことであるわけだし。

第47話 「高田伸司からの手紙 2」

さて、学校の仕事も終わりそうなので、ここに書き込ませていただきますが、やはり、私は忙しいので、それほどの時間を割くこともできません。本来なら、正夫さんがやればいいのですが、どうも彼の休養は、長くなるみたいですな。

一応、メールで送ったんですよ。

「俺、いつまでやってればいいですかね」
「死ぬまで…。」

いや、俺も回復するから、マジで。

それまで何とか守ってくれ。

頼む。

お前は頼りになる唯一の後輩だから！」

こうまで書かれては、やっていかないと男がすたる、というものです。では、何を書こうか、って、前に書いた部分を見返すと、読者の皆様に提供できる新情報を私がつけている、って予告していましたね。

そこに関してじっくり書いてゆきましょう。

その前にこの小説の出来事の順序の説明をした方がいいのかもしれないですね。

多分、以下のような流れになっている、と思われるんですね。これは正確ではないかもしれませんが、何せ、読み返す時間がないのでご勘弁願います。

金曜日。

渡部さんが正夫さんの家に来る。

私（高田）の愚痴を言う。

土曜日。

私（高田）と、渡部さんと三人で中野ブロードウェイに行く。中野ブロードウェイの近くのファミレスS（サンデーズサンですが、何でSと略したんでしょうかね？）で会う。

小野田ちゃんをゲットする宣言をする。

ニートはいいのか悪いのか、私と議論する。

勝間さんの小説「俺と彼女とアカプルコ」を私に見せる。

日曜日。

市村さんの家に向かう。

市村さんと会って話す。

小野田ちゃんについて、延々と語る。（回想??）

鷺宮で夢を見る。

と、ということなのですが、そういうことが起きる、さらに一週間前に、私と渡部さんと正夫さんは会っているのです。

これは、確か、かなり序盤、つまり金曜日の段階で、私のことを「T」といつつも、書いていたことだと思います。

しかし、私は本当に、この小説において、大きな位置を占めることができませんでしたね。

それは多分、正夫さんも考えてはいなかったことでしょうが、私は薄々勘付いていました。というのも、他の人たちは、ほぼみんな小説に関してうといですからね。一応、皆、創作班の出身なのですが、真面目に創作やっていたのは、私が正夫さんか汀子さんくらいじゃないでしょうかね。

他の人たちは、多分、「てにをは」も書けないんじゃないか、という危惧もありますね。というか、正夫さんにしてからも十分に「てにをは」を書けていないような気がしますから。

だから、正夫さんは、私のことを頼りにしているのでしょう。あまり、頼りにされても困りますが、まあ、これくらいならしてあげ

てもいいのかもしれない。

そろそろ時間がないので切り上げたいと思います。

次回は、一週間前に何が起こったか、です。

それでは、皆さん、寒いですがお体に気をつけてください。

第48話 「高田伸司からの手紙 3」

三月にもなるうとしていっているのになかなか寒さは変わらない毎日ですが、皆様はどうお過ごしでしょうか？

なんて時候の挨拶を入れてみましたが、どうも書くことがなくてこうやって形から入らなきゃいけないのかなあ、なんて思っている始末ですね。

なかなか、正夫さんの方も復活までは時間がかかるみたいで、あれからまたメールを送ったんですよ、そうしたら

「いやあ、君はなかなかの文章家だ。

評判いいよ」

ですって。

いや、それほどでもないんですがね。というか、書くことが限られてきているんで、そろそろバトンタッチしなきゃジリ貧というか、何を書くかわからないぞ！と、彼にいいたいですが、話の本題に戻りましょう。

確か、この小説の始まる一週間前（いや数日前か？）に、四人で新宿で会った話ですね。あと一人は、私の妹です。あ、妹といっても、私の恋人のことですね。私は自分の恋人のことを妹と呼んでいます。この呼称の中には、平安時代の和歌では、恋人のことを妹と呼んでいたのと、今のオタク的な状況と、リンクさせているって意味もありますが、ま、深い意味はないです。

あのときは、学校の雑務で会うのが一時間遅れたんですね。で、正夫さんが遅れたことをなじるような、そんなことがあった記憶はあります。しかも当日になっていきなり恋人を連れてくる、ということにも驚いたらいいですね。久しぶりに会ったのに、結構、不機嫌でした。多分、一時間待たされたからでしょうが、しかし、この

仕事、なかなか終わるときにピタツと終われない事情があるんでね。だから喫茶店ででも待っていていけばいいのに、彼ら二人は寒い中、新宿駅前の交差点で立っているんですよ。渡部さんは腕組みをしながら立っていました。

「おう、じゃ、カラオケ行こう」

と、正夫さんは、いきなり声をかけてきましたが、これはどうなんでしょうかね。

やはりここは、

「やあ、久しぶり。」

仕事のほうはどうかね」

とかねぎらいの言葉が欲しいところですね。

ま、一時間遅れたからでしょうがね。

しかも妹の到着はそれよりさらにずれ込みましたからね。

結局、六時に会う約束が、七時十五分になってしまったのですね。

「さあ、どこに行きましょうか」

と私は歩き始めました。

正夫さんは、カラオケといていましたが、私は無視して、食べ物屋を探します。

「いや…だから、カラオケ…」

とこだわるので、

「カラオケ本気でいきたいんですか」

というと、

「うん…まあ、別にどこでもいいけれども、俺が思うに、この金曜の夜は、カラオケが一番すいているんじゃないかと」

「お金がもつたないから、どこか食べ物屋にしましょうよ」

と四人で新宿東口から歩いて、飲食店めぐりが始まったんですが、どこも満員なんですな。

これには驚きました。

で、延々、三十分くらい歩いて、結局、カラオケにでも行くかつ

て話になったわけです。

「だから、俺のいった通りじゃないか！」

と正夫さんは叫んでいましたね。

何か、正夫さんは非常にカリカリしていましたね。

「いや、あんた、そんなにカリカリしなさんなよ」

と私はいいたかったです。ま、妹とかいるんで黙っていました。

渡部さんは、いつものとおりで、髪の毛がいつものとおりの彼になっていて、髪がテカテカしているんですね。

あと正夫さんもいつもの通り、寝癖があつたり、髭を薄く生やして、風来坊的な風貌で、考えてみると二人とも、野坊主というか野武士というか、何か在野武将というか、そんな感じがしますね。

正夫さんは二トだからしょうがないんですが、何で渡部さんは、あんな感じなんですかね。

ま、他人のことだからどうでもいいけれども。

妹には、ちょっといきなり会わせるには、何か差し支えがあるかな、とも思いましたが、実は、私はこういういわば、極限状態で、慌てている妹を見るのが好きなので、特に何をするとということもなく黙って見ていましたが、主に渡部さんに話しかけていたみたいですね。渡部さんに活路を見出したようです。

それには、あの件も絡んでいたのかもしれない。今、正夫さんは、PCのミクシイで発見したうちの妹に、いきなり馴れ馴れしくメールを送ってきて、妹が困っていたのを思い出しました。

あれは何だったんですか。

正夫さんって初対面の女性に、そんなに馴れ馴れしい人だったのか、考え込んでしまいます。

妹にとってしてみれば、フリークライミングみたいなもので、なかなか足場やつかみどころを探すのが難しかったのではないのでしょうか。

何せ、正夫さん、異常なほどにカリカリしていましたから。

「マサさんって将来的に、泉谷しげるみたいになるんじゃないかなって思ってる…ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！」

と小田さんが笑っていたのを思い出しましたね。

私の手紙は、もう私自身がそれほどやる気もなく、（読者の皆様、すみません！）そして、もう書くこともそれほどなくなっているのですが、それでも続きます。ひよっとしたら今回が最後かもしれない。最後だったら嬉しいんですが、しかし、なかなか予断は許しませんね。もしかすると、正夫さんは小説を書くのを放棄して、今度は、私が主役の小説になるかもしれない。手紙がずっと続くという形式の、何だかわからない小説。ま、それでもいいかもしれない。前回の話について、正夫さんからの感想のメールを紹介しましょう。

「悪くはないんじゃないか、と思う。けれども、こもっちゃっているよね。」

こもっちゃだめだと思うよ。
どういったらいいのか、個人の憤懣を表に出さないで、スーと流すのがいいと思うんだよ。

あの映画「おくりびと」なんてまさにそうだよ。非常に、清明としてこう、よどみがない。よどみは、あっちゃだめだよ。

やっぱり、小説ってのは、どこか清涼飲料水的な部分が必要だと思う。「

お前は、誰だよ！

って、初め読んだときに腹が立ちましたね。これは誰もが感じるのだと思います。この小説「中野」なんて、ほとんど、「よどみに浮かぶうたかた」みたいな小説じゃないですか。

自分が、あれほど、よどんでおいて、何をいつているんだ。

って、憤懣が浮かんできましたが、もちろん、怒りを鎮めなくて

はいけません。

では、話を続けましょう。

新宿の夜、私たち四人は二時間くらいカラオケをした後で…まあ、このカラオケの内容はそれほど特記することもないでしょう。大したことではありません。私の妹は、なかなか歌がうまかったなあ、っていうか、それも当たり前のこと、彼女はカラオケ好きなんです。後は、正夫さんはマイペースに松山千春系の歌を歌っていたし、渡部さんは控えめだったし、それくらいじゃないですか…花園神社というところに行きました。

夜風が非常に寒くて、私の妹は風邪をひいたらしいですね。その神社境内のとても広い階段で、私たち四人は座っているいろんな話をしました。結局、私はこうやって話がかつたんですね。カラオケをしたいわけじゃないんです。そこを正夫さんはわかっていなかった。

で、その話の内容は何だろう、ってことですが、正直、かなりの部分を忘れてしまっていますね。確か、渡部さんが会社の愚痴を話していて、妹はその聞き手になって、私が相槌をうつつ、とかそんな感じだったかもしれません。そして、正夫さんは、こんなことをいっていましたね。

「昨日、俺、コンビニ夜勤やめたんだけどもさ。で、何をしようか、ってことなんだけれども、半年くらいニートやるのかなあ、って思っているんだよね。自分でもよくわからないが、ニートっていうのに憧れている。と、同時に世の中のニートに対するイメージの悪さを何とかしたい、と思っているんだ。ニート道を極める…そこまでできるかどうか知れないが、それをやってみたい。ニートを極めるってのは、多分、これ悟りをえるのと同じようなことだと思うよ。今の社会のことなんかどうでも良くなっちゃうんだから。これは仙人みたいになる。雲の上に乗るってことかもしれない」

みたいなことを話していましたね。私は、丁度、正夫さんに貸そ

うと思つていた本があつて、それは「C」という小説で、その本の帯が、「兄はニートで死んでいった。妹である主人公は、何故、兄はニートで死なねばならなかったのか、を探求する文学巨編」

みたいに書いてあつて、これははつきりいつて、正夫さんのいつていることと正反対なんだけれども渡しましたね。

その本をもらつて、少し暗い顔をして正夫さんはいいました。

「お前、空気読んでる？」

それとも、俺の話、きいてないの？」

しかし、それでも正夫さんはもつたいない屋がりなので、もちろん、本をもらつて鞆の中に入れていました。

第50話 「正夫、復活しました」

正夫は、別に病気で伏していたわけではなくて、普通に生きていただけであるが、しばらくの間、後輩である高田にまかせ切りにしていて、何だか、こういう小説って、自分がやらなくてもいいような気がしてきた。少なくとも、他の小説の主人公のように、肩肘をはずずに、ある程度、さぼってもいいのではないか、むしろ、そういう部分が、この小説「中野」を中野らしくさせるのではないかとさえ思えてきた。

本当は、正夫は、鷺宮から帰路に向かうその道程を、詩的に美文で綴る予定だったのであるが、何でひっくり返ったかというとなかなかそれができなかったからである。

小説内の時間において、五日間、一見、正夫は休んでいた。というか普通に生きていた。その間に、実はいろいろなことがあった。いや、普通の人の日常と比べれば少ないほうだが、あったことはあったのだ。

例えば、前に勤めていたコンビニに行き、シーマ店長から給料をもらった。シーマ店長は、「もし暇ならいつでもきてね」ということを話していた。

「二度と行くものか」

と正夫は思ったが、別にそれほど意固地にならなくてもこれはいいことである。

そして、帰りの途中で、やはり家の近くにあるコンビニによる。これは前にちらっと書いた、50代くらいのおばさんが昼にいたコンビニであるが、その日は、眼鏡っ子であった。

妙に親しげにしてくる女の子で、正夫がスパゲティを頼んだとき、

「まだまだ寒いですからねえ。」

これくらいで、いいですかあ」

なんて話しかけてきた。

「そうですね。」

これくらいでいいですよ」

といつつも、正夫はこの眼鏡娘と小野田ちゃんが似ているような気がした。小野田ちゃんは眼鏡をかけていないが眼鏡つ子みみたいなところがあった。いや、眼鏡をかけていたか？

頭の中では、小野田ちゃんのことをぼんやり考えていたまま、アパートへと階段を登ると、勝間君がいた。

「やあ」

あつ。正夫は、すっかり読んでいることになっている。「俺と彼女とアカプルコ」のことを思い出した。

「おひさしぶり」

勝間君は、神経質そうに目をしばたたかせる。

彼は非常に痩せていて、それでいて長身で、どこか幽霊みたいなところがあつて、それでいて優しさがあつた。

まあ、何だかわからない、ということである。

「で、どう。」

「よ…読んだ」

勝間君は、小説のことをきいてきた。

「うん、まだ。」

途中なんだ。

とりあえず、中で話そう」

「うん」

勝間君をアパートの中に入れる。

「僕あの小説はね、小野田ちゃんをヒロインにしたんだよ」

と、正夫がお茶をわかしていると、勝間君はいきなり衝撃的なことを話した。

実は、小説志望者仲間の勝間君も、創作班に顔を出していて、創作班の人々のことを細かく覚えていたのであつた。

「まさか、あのオカマ言葉の主人公のモデルって」

勝間君は笑いながらいった。

「もちろん、君だよ」

それならば、「俺と彼女とアカプルコ」を、紹介するだけで、この小説「中野」のサイドストーリー…というかメインストーリー（！）になるじゃないか、と正夫は思ったが、それは盗作であるような罪悪感もあった。

とはいえ、微妙に変えたらばれないか、と思い直した。

結局、小説なんてみんなそんなものだし。

勝間君とは、最近読んだ文学の話をして…：そういえば漱石の「それから」は読み途中でそのままであった…：適当にあしらって帰し、ほとんど読んでいない「俺と彼女とアカプルコ」を読み直すことにした。

第51話 「俺と彼女とアカブルコ」1

(以下、勝間氏の小説本文です)

「ハロー！」

あたし、このアパートに一人で住んでいるわけじゃなくって、二人と一匹で住んでますっ！その二人の内訳は、あたいと、ステディの法子ちゃん、あたしの中ではのりピーって読んでますっ。キャツ。恥ずかしいっ。何か愛称ってこんなところで素になって書いてみると、すんごく羞恥心ビーム全開バリバリツみたいな感じ！

だから、もう胸の奥の方で、ガンガンビンビンチクチクビンビン、乳首ビンビンみたいな感じだけでも、胸の動悸を我慢して書いてゆこうと思いまゝす。

あたし、のりピーには、寡黙で、クールなヤングガイってことで通っているから、こんな日記がバレたらすんごくやばいんだけど、そういうのって、スリル満点だよな！ふふふっ、のりピーってあたしがこんなだって知らないんだろうなあ。やった〜！あたしの勝利！もうね、それを考えるだけで笑っちゃうのよ。へ？もしこの日記がわかつちゃったら？そんなん、もう別れるしかないだろうね。だって、のりピーすんごくシヨックだろうし。

別にうぬぼれているわけじゃないんだよ。その兄さん。あたしだって、部分的に本気なんだから。もう部分的に超本気なんだから。けれども、個性的なあたしの性癖を受け入れてくれなきゃ、のりピーとはつきあえないかなあって思うんだもん、これ本当に。

もし、この恋が真実の愛ってやつになるんだったら、あたし、カミングアウトしちゃおっかなあ、って思っているんだけどね、ここだけの話。のりピーってあたしの中で、キャラ的にそれほど、濃いかなあって思ったらすうでもないような気もするんだよねえ。

だから、頑張れ、のりピー！あたしゲットまで、まだまだ長い道のりだぞお。女の子って男のこと、ちっともわかってないからなあ。もうこの日記だって、あたしの核心へのヒントなんだからね。あたしにバレないように読まなきゃだめよ。いっそのこと、のりピーの枕もとに置いてちやおうかしら。だめ！あたしって冒険家。

のりピーって、あたしが普通のときは、女性物の下着をつけて、ブラジャーまでしているなんて、気づかないんだろうなって思うの。だって、あたし、そういうところはピシッとしているからね。わからないように、わからないようにしてるんだ。ま、バレたらバレたで面白いけれどもね。ってというか、そんなあたしって、可愛くない？

ま、真剣な話、バレたら多分、向こうは三日くらい寝込むと思うなあ。けど、それを乗り越えてきたら、あたしも、彼女に自分の心の扉を開けちゃおうかなあ、って、まあ、つまり幼児プレイになるんだけどね、パンパースー丁で、ずっと『バアバア』って言い続けているあたしを、もしのりピーがあやしつけることができたら、あたし、もうそのときは、のりピーのこと一生面倒見続けちゃおうかなって思うってというか、面倒見られるの、あたしだけでもさっ。

けれども、まあ、何ていうか、あたしの内面って、こんな感じだけれどもさっ。のりピーってすぐ、少女漫画に出てくる男性チックにあたしのこと、脳内補完しちゃうんだからもう大変、あたしそんなに美男子じゃないのにねえ。

あっ、のりピーが帰ってきた。

「ただいまー」

「法子、どうだった？今日は」

あたし、ここは精一杯、男らしい声でいうの。だって、女ってそうしてもらいたいもんなんですよ。

「うーん。大変だった。会議とか長引いちゃって」

「そうか、プロジェクトの方は進んでいるのか」

「うん。ばつちり」

あつ、いい忘れていたけれども、のりピーは、社長秘書をやっているんだっただ。

「で、太平さんの方はどうなの」

この太平つてのがあたしの名前ね。春日太平つてのがあたしの名前なの。こんな男らしい名前にしてくれたパパやママに感謝っみたいな。

「うーん。非常に難しかった。

今、プレステで、ウィザードリフっていうのをやっているんだが、序盤の進め方が難しくくて、すぐに死んじゃうんだよ。

見る」

「うん。見てみよっかな」

「ほい、こんな感じ」

テレビ画面に映っているのは、外国人みたいな何だかわからない顔が六つ。これは、このゲームの冒険者のこと。

ちなみに、六人の冒険者たちの名前は、

イチムラ

タカダ

ワタベ

カツマ

テイコ

ノリピー

だつて。

あつ、やばい、ノリコとすべきところをノリピーなんてやっちやっている。

このままじゃ、あたしの性癖がばれるかもしれない。

「ねえ、ちよつと…」

あたしのこと、のりピーって」

少し、のりピー、引き気味だったから、あたし、ニヒルに笑ったの。

「面白い冗談だろう。」

あ、料理できているよ。

一緒に食べよう」

「わっ、ありがとう」

あたしって、こういうスイッチ変換みたいにして誤魔化すの本当に得意なんだから。バレたらバレたでかわまわないのに。

このあたしの性癖』

とここまで読んで、正夫は背筋がゾツとした。正夫がモデルにしても、いつ、こんなオカマめいたことをいったらうか。正夫は酔っ払ったりするとたまに、石原慎太郎の真似をすることはあるが、こんなオカマ的な口調はしない。何でそうなるんだろう。これはまだまだ先に謎が隠されているに違いない、と思った。

第52話 「俺と彼女とアカブルコ」2

『 月 日（日付けまあす！キャハッ）

のりピーに惚れ直しちゃうところってどこかなあつ、って思ったときに、ハッとしたのは、あたし、のりピーのどこに惚れたんだっけ、ってことなんだけれども、まあ、「ピー」に惚れたって部分はなきにしもあらずだけれども、「ピー」って別に法子ちゃん本人と関係がないじゃん、って思うんだよねえ。

つまりどうということかというところ、まともじゃないんだよねあ、ってことだけれども、あたしって、もともとまともじゃない人間だからしょうがないかもしれない。だって、まともって何よ。そんなもん、ないんでしょ。ないからこそ、あるように見せたがっているってのが人間なんじゃないの。

最近、占いとかすごいブームでしょ。あれもまともじゃないから、何かにまとめて欲しい、って大衆の気持ちの現れでしょうね。それは切実なもんよ。

大衆はアンハッピーだよ。だから、あたしみたいなアンチ大衆は、いつでもハッピーなのね。何であいつらって、粹にはめてものごとを考えようとするのかね。拳句の果てに鬱病なんかになっちゃうんでしょ。粹にはめるから、そういうことになるのよ。って何で気づかないのかねえ。

って、話が大幅にずれたから、修正すると、惚れ直すってことあるかなあ、っていうか、あたし、のりピーにそんなに惚れているのかなあ、まだまだ、足りない至らない搔痒感があるわねえ。

ま、人生なんてそんなもん、なんて開き直っちゃっている自分があるけれどもね。あたしなんて粹にはまらない男だからさ。もうね、いつか、あたし、糸の切れた凧のように飛んで行っちゃうかもしれ

ない。

今、あたし、家でグダグダしてます。あつ、紹介し忘れたか、紹介したかも忘れちゃったけれども、あたし、ニートやってまあす！一応、小説家志望なんていつていますが、実はニートです。

「ピンポン」

あつ、ベルが鳴っている。

玄関に行こうつと。

「あ、わたし、滝川と申す者です」

「はい」

何か、ハゲ坊主の男がいきなり現れたわ。どうしよう。

「何ですか」

「わたしね、お宅の法子さんと親しいものなんですよ」

いきなりドアを開けて、玄関に座り始めた。

「はい」

「でね…。」

わたし、こういうところに入っているんです。知ってます」

と名刺を渡してきた。

名刺には

日本燐光振興協会 中野支部長 滝川正行

と書いてあったの。

「わたし、一応、中野の支部長なんですよ」

「はい…」

「でね、法子さんからお宅の話を伺っていましたね。」

お宅、働いてないんでしょう」

「はい」

「で、法子さんのお金で食わせてもらっているんでしょう」

「はい」

「だから、どうですか。」

うちの協会に入りませんかっ、話をしに…」

「ちよつと待つてくださいよ。」

「関係ないじゃないですか」

「えっ」

「僕が、法子さんの家で居候していることと、法子さんの入っている協会に入ることは、関係がないでしょう」

「いや、関係があるとはいってませんよ」

「いや、何か、関係があるようにいつていたじゃないですか」

「いや、そうじゃないって。」

「わからない人だなあ。」

「一から説明しますね」

「説明って」

「どうせ暇だからいいでしょ」

あたし、もう、徹底的に抗戦することにした。だって、あたしが二トトなのをダシに使って、新興宗教を売りつけてくるってどういうこと？信じられないでしょ。

そのことをこの日記にも延々書くんで、皆、応援よろしくね』

正夫はここまで読んで、いつのまにか、作中の太平さん本人が、法子のどこに惚れ直したかについて、言及を忘れていることに気づいたが、それは実は大きな伏線なのかもしれない、と勝手に解釈して、少なくとも白熱してきたので、読み進んだ。

第53話 「俺と彼女とアカプルコ」 3

『こいつ、何考えているんだろう。あたしがニートってことはそれは情けないことだけれども、それはのりピーに食わせてもらっているけれども、何でそうだから、この協会に入らなければならないの。

わけがわからない。

「あつ、今、わけがわからないって思ったでしょう」

スキンヘッドの男は、玄関のマットに座って、鞆から資料を出してきた。

「はい、これが資料です」

「はい、じゃないんだよ。」

「はいじゃ…」

「いや、だつて、これは渡さなきゃいけないんだから。ほら、受け取って」

「いりませんよ。」

俺、入るなんて一言もいってませんから」

「わかつてる。」

わかつている。

そうだからこそ、今、お話をするんでしょう」

「いや、俺、そもそも、お話もきこうとは思いませんから。」

出てってください。

この家から」

「出てって…この家、あなたの家じゃないじゃん」

「何でそんな馴れ馴れしいんですか」

「あ、ごめんなさい。」

そもそもが、ここはあなたの家じゃないでしょう。

結婚もしていないでしょう」

「それが、どうしたんですか。」

あなたにどう関係あるんですか

「わたしは、一応、法子さんから、お話をしてもいいように、確認をとってここにきているんですよ」

「本当ですか。」

「じゃあ、俺、きいてみますよ」

「ああ、いいですよ」

「わかりました。」

「今、電話してみますよ」

「はい、どうぞ」

あたし、ポケットから携帯を取り出して、のりピーに電話したんだ。

「はい……」

「あのさ、日本燐光新興協会の中野支部長の滝川さんって知っている」

「あ、滝川さんね。」

「うん」

「その人が君の許可をえて、ここにきているって話なんだけれども」

いきなり滝川が動き出した。

「あ、かわって、かわって」

滝川は、あたしの携帯をとったの。

「法子ちゃん、法子ちゃん。」

あのね、今日さ、ほら、君の彼氏のこと、きいてさ、ほらうちの組織ってそういう勧誘とか厳しいじゃない。だから、誘おうと思っ
て、家に来ちゃったんだけれどもさ……」

「前もって確認とって、ないじゃない！」

あたしは叫んだの。

「いや、いや、ちょっと待って……あんたはいいから。」

「いいよね……ほら、うちの組織、そういうの厳しいからさ。」

ほら、俺、支部長だからそれなりに、数合わせというか、点数ほしいのよ。

お願い。

うん…わかった。こっちは適当に何とかしておく。

法子ちゃんだって、困るでしょ。

わかってるって。

大丈夫。

向こうはニートだから…社会性とかないから…ちよろいちよろい…」

というと、滝川は、あたしに携帯を返した。

「何ですか。

あなた。

人のこと、ニートとかいったり、ちよろいとかいったり、あなた何様なんですか」

「いや、これはそういうことじゃないから。

法子ちゃんには、法子ちゃんを安心させるために、ほら、いわなきやいけないことがあるんだから。

いずれにせよ、あなたが、法子ちゃんに食わせてもらっている、つてことは事実でしょ」

「だあ、

かあ

ら…！」

あたしの顔は真っ赤になった。

「それは関係ないだろ！」

「いや、関係ないけれどもさ。

関係ないけれども、そういうことも含めて事実じゃない。

わたしは、法子ちゃんのことにも心配だし、あなたのことにも心配なんだよ」

「会ってすぐの人に何で俺が心配されなきゃいけないんですか」

「それは…」

ハゲ坊主の男はしばらく言い淀んで、ハンカチで汗を拭いていたが、ついにはつきりと言い放つ。

「君が法子ちゃんに食わせてもらっているから。」

ニートだから」

「だ・

か・

ら！

あなたに関係ないだろおおお！」

あたしはついに絶叫した。』

第54話 「俺と彼女とアカブルコ 4」

「滝川正行…」

普段、人の名前を覚えないうちでも、くつきりと覚えたわ。それは何でかというのと、人間に本来備わっている野生的な防御本能がさせたに違いない。

滝川は、あたしが絶叫した後、しばらく黙って、あたしを見つめていた。スキンヘッドの、50くらいの男、まないたのように広い顔をして、どこか下品で、そして遅い感じもする、それでいて、世俗から離れているような感じもするのは、太い眉のせいかしら。それが、ラフなジャージを着て散歩途中みたいな風に玄関にやってきて、こうまであたしの心を掻き乱した。

「いや、関係ないとかいうけれどもね。」

それを言ったら何だって関係ないじゃない。

僕だって、あなたのこと、知りませんよ」

「そうですね。」

じゃあ、ここから出てってくださいよ」

「待って、待って。」

この話には続きがあつて…、お互いがお互いを知らん振りしていたら、寂しい世の中になるんじゃないですか、と私はいいたいんですよ」

「それはそうですが、じゃあ、何も知らない人を相手に、ニートだとかいきなり失礼なことをいつてきて、そんなのが寂しくない世の中なんですか。」

それなら寂しい世の中の方がまだましでしょう」

「いや、そのね。」

ニートっていったことは詫びますよ。それはとても失礼なことです。ごめんなさい。ごめんなさい。ただね、そういう失礼を越えて、私は、あなたにお伝えしたいことがあるんですよ」

「それ宗教でしょう」

「宗教とかそういうのじゃないです」

「いや、宗教じゃないですか。新興宗教じゃないですか。どう考え
たってそうでしょう」

「違いますね」

「何で」

「だって、真理なんですから。真理を知るっていうのは、もうこれ
は根本的な生きる、そのものことでしょう」

「だって、そうだからといって、宗教じゃないですか」

「これは、今まで私たちが、思ってきた宗教とは全く違っていてこと
を、私はいいたいんですよ」

「けど、宗教なんですよ」

「はい、宗教は宗教です」

「だから！」

宗教じゃないか。

あなた、一体何なんだよ」

あたしは、髪をかきむしった。

「私は何ですかって？」

滝川正行は、礼をして、言い放つ。

「真理を知ろうと思う者です」

「いや、それは…ね」

「もう、こうやって玄関で話すのも何ですから、上がっていいです
かね。」

「すみません」

滝川は、玄関から靴を脱いで、とうとう居間までできてしまった。

あたしは、制止しようとしたが、

「だって、ここ、あなたの家じゃないですから。私は法子さんから、
承諾をえましたから。私は法子さんの所属する支部のリーダーなん
です。幹部なんです。ま、ま、ま、いいですから、話をし
ましよう。」

あなたは素晴らしい人だからわかってくれると思います。
あなたは素晴らしい人だから。

もう本当に素晴らしい人なんだから、ってことをお教えしますよ」

と強引に、椅子に座った。

「先ほど、ニートと、私がいったことに関しては詫びさせていただきます。けれども、私どもにとって、ニートとかそういうことは、それほど大したことではないんですよ。私は、ニートだから会社員だから、とか差別はしませんから。だから、そんなわけ隔てない気持ちで、ふと出てしまっただけです」

「はあ。」

別に、そんなことは、どうでもいいんですけどもね。

あの一、そこに座られても、どうしようもないんですが」

「話しましょうよ。」

「太平さん」

滝川は満面の笑顔をこちらに向けてきた。

「もう強引だなあ」

わたしもテーブルにつく。

「私は、あなたに楽になっただけです。」

だってあなたは素晴らしい人なんですもの」

「そんな…繰り返さないでくださいよ」

「だって、本当のことですもの。会ってすぐに、あっ、この人となら、わかりあえるって気がしたんですよ。こうビビッとね」

「いや、だって、それは…もう困っちゃったなあ」

「こんな素晴らしい人が、一人で迷っている。私はそう思ったんです。あれ、猫ちゃん、かわいいですね」

アカプルコだった。赤い毛をした猫だったので、赤だからアカプルコと、あたしがフィーリングでつけた名前なんだけれども、実はこいつ、人間を見抜く目がある。アカプルコが、初対面で親しくする場合は、善い人間であり、警戒する人間は悪い人間なのだ。

しかし、アカプルコは、あっさりと滝川に降参してしまった。体中を撫でられて気持ちよくなっているみたいである。

「かわいい猫ですねえ」

あたし、ここまで、滝川さんと接してきて、自分は間違っていたのではないか、と思えてきた。ひよっとして、この男、滝川正行はとっても善い人なんじゃないか。だって、そうでなかったら、こんなにあたしが拒んでいるのに、まったく悪い顔ひとつしないんだもの。

っていうか、あたしの心の底から、何かジーンとくるものが浮かび始めてきた。それが何だかはわからないけれども、何か、あつ、この人とならわかり合えるかもしれないって、そんな気持ちが出てきた。

「お名前は何ていうんですか」

「アカプルコです」

「じゃあ、アカちゃんだ。」

「かわいいっ」

スキンヘッドの男、渡辺正行は、アカプルコを抱きかかえて、頬擦りした。しかし、それは強引なものではなくて、あくまでもソフトな親愛の情を伝えるためのものである。アカプルコは、まんざらでもなく、嫌がりもせず、男の愛撫を受け入れて、寝室の方へと去ってゆく。

それを見たら

「俺も別に暇なんで、話くらいならきいてもいいですよ」

と、あたしはつい、そんなことをいってしまった。』

第55話 「俺と彼女とアカプルコ 最終回」

「ああああ。」

読むのめんどくせえ！」

と叫ぶと正夫は、勝間氏の原稿をゴミ箱の中にぶち込んだ。実は、三十分くらいしか読んでいないが、それでも彼は自分の貴重な自由な時間を、勝間氏に奪われたような気がした。

「あああああ。」

ああああ。

あうっ。

マイティーボンジャック！」

と意味もなく正夫は叫んだ。

多分、本当の小説家になるためには、あの勝間氏の小説のようなつまらないものを延々と読まなくてはいけないのだ。しかし、自分にはそういう忍耐強さがない。

本なんて自分読めない。ゲームも続かない。アルバイトも三日でやめちゃう。(って、コンビニ夜勤は続いたが)、それを思うに、正夫は自分の行く末が不安になってきた。自分は長続きしない性格なんだ。こんな性格だと、多分、誰も相手してくれないに決まっている。ああ、自分、もう駄目！駄目！駄目！

と、原稿用紙を捨てた自分を責めるが、それでもゴミ箱から原稿を取り出すようなことはしない。一生しないだろう。そもそも数日後には、ゴミ箱の中身は処分されるが。

「ああ、自由度なんだよ。」

俺は自由度が欲しいんだよ」

と正夫は叫んだ。

するとドアを叩く音がする。

「はい」

開けると、勝間君だった。

彼は、痩せていて、神経質な顔をしていて、それでもどこか善人めいた表情をしているときもあったが、実はものすごい業をかかえていそうな内面をワツと見せる人物でもあった。それは「俺と彼女とアカプルコ」でも証明済みだろう。

「あの小説、何で俺がオカマなんだよ」

「いや、別に君のことをオカマといっているのではなしに、究極の男を放棄した状態つてのを描きたかったんだよ」

「俺が男を放棄しているつていうのかい」

「ある意味においてはそうだろうよ。」

「だって、戦わないんだもん！」

「はっ！」

君は、俺に小野田ちゃん相手に戦えと聞いたかったんだな」

「そつだよ」

そのとき、正夫は、勝間君のあるエピソードを思い出した。彼は、カラオケに行ったときに、滅多に歌わないが、マイクを渡されて、歌った歌が凄かった。

「ウララララランラランラ！」

ララララッラン！

ウララララララララ！

ララララらラン！

ラーバンバ！

ラーバンバ！」

などと、中南米辺りの異国の歌を熱唱したのだ。

彼みたいな純粹すぎるほど純粹な日本人が、マイクをつかんで、とりつかれたように俯いて、

「ウラララララララン！」

ララララらラン！」

というのには非常に衝撃的であった。

マラソンランナーがいきなり重量挙げをしたような…ものすごい

違和感、畑違い全開な感じで、何だか妙に印象に残っていた。

彼の書いたどんな小説よりも、その記憶のほうが確実にインパクトは大きかった。

「小説、俺、途中で読むのやめちゃった」

と正夫はいう。

「そうかい。」

それはしょうがない」

というと勝間君は、正夫のアパートから出て行き、その後、二度と正夫と会うことはないのであった。

「俺はそろそろ、本気で小野田ちゃんを攻めなくてはいけない」

と正夫は思った。

「何故なら、深刻に、他にやることがないから」

ニート生活は、もう三週間になるが、本当に真剣に辛くなってきた。何だかすごく寂しいのだ。その寂しさを紛らわすために、正夫はいろいろなことを計画するのだが、それはすべて金が必要だった。そういう意味でも世の中、金なのだ。

図書館で借りる本を読むだけで、ずっと過ごしてゆくわけにはいかない。常に何かしらの雑費は必要なのである。それが正夫の正体であり、今、正夫はファミコンの「マイティーボンジャック」をやっているが、それにしあって、中野ブロードウエーの「トマトショップ??」とかいう店で買ったのだ。

ちなみに、小野田ちゃんを入手する工作をするのにも金がいる。

第56話 「小野田ちゃんにアタック」1

「俺は何なんだ」

虚空に向かつて、正夫は叫んだ。

「俺は何なんだ。

俺は何なんだ。

俺は何なんだ」

それを脅迫的に繰り返して、ようやく心が落ち着いてきた。そして、携帯を手にとる。学生時代の名簿をみて、記録された小野田ちゃんの番号へと電話する。

「あのー、すみません」

「はい……」

と小さな声が答える。

「あのー、俺、正夫！」

「覚えている」

「覚えていますよ。」

大学のときの先輩ですね。

懐かしいです」

「お、

お久しぶり」

「久しぶりですね。

今、何しています」

「何？え？仕事。

うーんと、今は休職中なんだよね」

「求職しているんですか。

大変ですねえ」

「うん、まあ、休職だからそんなに大変じゃないと思うけれども」

「いや、今、景気が悪いじゃないですか。」

だから、求職つてむつかしいですよ」
話がおかしくなっている。

「あつ、この人、休職を求職と思っっているんだ」

正夫はしかし、その間違いを訂正しないことにした。

「そう…そうだよねえ。」

俺も今、ほらニートじゃないですか。だから何とかしようとは思っているんだけどね」

「あの先輩がニートだなんて。」

何か、昔から弾けていた人だなあ、って思っていたんですが」

「学生時代は弾けていたが、今はもうねじくれた、いじけた、暗い人間になっちゃったよ」

「そうなんですかあ」

あつ、出た。

何だろう。彼女のこの心温まる優しい声は。高い声でありながら、耳にキンキンするということはなく、どこかで妙に安定していてリズムカルに、正夫の心にたどり着いて、花の香りのように健やかに癒してくれるのだ。生きる活力を与えてくれるのだ。

「いや、それはいいすぎか。」

そこまで、暗くもないけれどもね。

ま、周囲の人間は暗いつて思うかもしれないけれどもね。

やはり、明るいほうかもね」

「やっぱり、昔の先輩は弾けていたからなあ」

「そうかな。」

あんまり覚えていないんだけども」

「私は覚えていますよお」

やばい、癒される。

何て、眼鏡つ子的なりアクションをしてくれる娘だ！

「俺はね、昨日は、夢を見たんだよ。」

俺は、君たちのいるH大学にいたんだが、その前に千葉商科大学にいたんだけど、夢の中でその大学の学生をしていて、未だに、

卒業できないんだ。

で、俺は、何故か自宅から、知らないおじさんの車に乗せられて、商科大のある市川に行くんだよ。

その車には、商科大学の学生がいるんだ。中でもイチャイチャしている男女のカップルがいてね。

そいつらを遠い目で俺は眺めているんだよ。

車が止まると、そいつらは学生生活をエンジョイしているって感じで、大学に向かうんだ。

俺は別の道を行くんだ。

駅までつくと、何故か、そこは何回か行ったことのある渋谷の駅で、俺は自分の家に着くまで何分かかるか、考えているんだ。

で、そこから、

「ランボー21」

という映画の場面になるんだ。

何で、ランボー21かはわからない。

俺がその映画の監督になっていて、それは何か知らないが、近未来物なんだよ。

で、光線銃とか持って、人間の二倍もある何故かオレンジ色のタイツを履いた男たちと、俺は戦うわけ」

「ふーん。

何かファンタスティックな夢ですね」

「でしょう！

って、別にだからどうした、ってことでもないんだけどねども。

っていつか、ごめん。

全然、どうでもいいことを長々と語ってしまった！」

「いや、昔から正夫さんってファンタスティックなところ、あったじゃないですか。

私、正夫さんの小説、大好きでしたよ」

「ええ、本当に」

「うん。本当です」

「そうか…。」

へええ、そうなんだ！」

正夫は、小野田ちゃんの口コミを思わず真似してしまった。
これまでの携帯電話トークで、

「これはいけるかも」

という思いが心をよぎったことはいつまでもない。

第57話 「小野田ちゃんにアタック」2

「あのさっ。」

その、あれじゃないかなって、そのっ！

で…」

「え？

何ですかあ

「で…」

「…」

「電通とか勤めたいなあって、思っているんだ」

「そりゃ無理でしょう」

「無理かなあ。

そうかもね。

ハハハハハハ」

正夫は、もちろん、デートといおうとしたのであるが、しかし、舌がもつれてうまくいえなかった。もう一回挑戦してみよう。

「それでね…」

「で…」

「何」

「で…」

デトックスって知っている」

「知りません」

「体の余分な廃棄物を、綺麗にしてくれるようなそんな健康法があつて、たしかそれがデトックスとかいっていたような気がする。

やってみたら

「ぶっつん。

そうなんですか。

興味ないですよ。

「一応、健康なんで」

「で…」

「デデン太鼓！」

「え？」

「たまに、デデン太鼓とか叩いてみたくならない？」

「俺、今、ふとそれを思ったんだよ」

「あ〜」

「あのポンポコ鳴らすやつですよねえ。」

「確かに楽しいかもしれない」

「デート！」

「え？」

「いや…いや。」

「その、マリーネ・デートリツヒがね…」

「つて、ごめん！」

「そんな人知らない」

「はあ」

「デートしない？」

「デート！」

「デート！」

「デート！」

正夫はこのとき、しまった。と思った。せき止められたものが一気に噴出したように、三連発も連呼してしまった。これではおかしな人間と思われるかもしれない。いや、もうすでに、ここまでの不自然な展開でおかしな奴と思われることは確かであるし、そもそもが、パンチ寸止めなんかしている段階で、おかしな人間に決定しているのだ。どこの人間が意味もなくパンチ寸止めなんかするだろうか。そんなことをする奴なんかいない。正夫、お前だけだ！と誰かがあざ笑っているような、そんな感じが今した。だが、そんなことよりも、今、事態は、非常に大変な方向へと緊迫している。どうして、オブラートに包むようにいわなかったんだらうか。これで

ははじめっから狙っている感百パーセントじゃないか！

「え？」

デート

「いや、デートというかね」

声が裏返る。

「違うんだよ。そういう意味ではなくて、まあ、一緒に、どうだい、中野でもふらつかないかい？っていうことで。中野って面白いよ。行ったことがある」

「ないですが…」

「そう！」

じゃあ、一回、どうだい。いや、何も嫌ならいいんだけども。

無理して…その…」

「いいですよ…」

「あんまりそっちの方もさ、ほら、都合があるだろうし…」

「って、いいの！」

「はい…別に暇だし」

「わあああおう！」

「何かすごいテンション高いですね」

「あ、ごめん！」

「二ートだからしょうがないんだよ」

「誰か連れてきてもいいですかね」

「あつ、別にいいよ」

「それじゃあ…」

というわけで、あっさりとデートにこぎつけることができたのだ。本来なら、高田を通じて、清松とコンタクトをとり、清松と一緒に、苦虫を噛み潰したような顔を必死に押し隠しながら、無理矢理なスマイルで三人でデートをしなくてはいけなかったが、直接交渉ができたとは素晴らしかった！

今週の日曜日に、中野駅で会うことになったのである。日曜日まで数日間、正夫は夢のようなできごとに我を忘れて、ルンルン気

分で過ごしていたが、前日になって、電話がくる。

「はい」

「あ、正夫さんですか」

「へえ」

「あっ！」

俺、清松です！」

「えええっ」

「明日、三人で中野を歩くことになったみたいなんで、一応、挨拶でもしておこつかなあつて、電話しました」

「ええええっ！」

清松君つて！

ええええっ！

俺、直接交渉に成功っ…

えええええっ！

意味ないじゃん！」

「はあ？」

何ですか」

「いえいえ、何でもない」

正夫は、世の中つてなかなか思ったとおりにつまぐいかないなあ、と空を仰いで嘆いたのだった。

第58話 「高田伸司の結婚」 1

たしか本編は、中野において、正夫が小野田ちゃんと電話をして会おうとしたら、清松が同道することになって、悪夢のような結末を予測させるようなところで中断したままであった。（作者は、数週間この小説を放置していたのである。というのも、何かやる気が起きなかったからである）

今回、私が書こうとしているのは、この小説「中野」における番外編みたいなものであり、直接、中野と関係があるかどうかは知らないが、登場人物は、皆、中野に出てくる人物である。

あるとき、正夫の朋友の市村さんからメールが来た。

「知っているか。」

高田が結婚するらしいんだよ」

正夫は、そのメールを受け取っていたので、普通に

「そうですねえ。」

これは出るしかないですねえ」

と返したのだった。

しかし、それに対しての返答はなくて、市村さんは、高田の結婚式を欠席することにしたのだった。

メールによると、

「バイトが休めないため」

であった。

しかし、それが本当に、アルバイトのせいかどうかはわからない。（このころ、市村は、ファミレスの厨房のバイトをしていた）

正夫は正直、いくら祝儀のお金を払うのが嫌だからって、他でもない後輩なのに参加しようよ。

とは思った。

というのも、

「もし高田が結婚したら金がかかるな」

という会話を前にしたことがあったからである。

だが、これは誰もが思うことであろう。

これは断じて、正夫が悪人なのではないし、正夫の猜疑心が強いのではない。

もうこれは、自動的な人情の問題であり、そうだったら、こうなる、という確実な脈絡において、そうならざるをえない部分であり、詰め将棋みたいなものであり、それは

「高田が結婚」

というイベントが市村さんをこのような罠に陥れたのだ。

という見方だってできる。

下手をしたら諸悪の根源は、高田かもしれない。

何で、こんなに早く結婚するのか、もう一年くらい待ってもいいのではないか。

とは、正夫も思うことであった。

だが、そこには何の根拠もない。

ただ、感覚的に、もう一年、ということである。

しかし、結婚式は行われる。

これはしょうがない事実なのだ。

誰も止めることはできない。

正夫でさえ、市村さんでさえ、止めることができないのだった。

理由はわからないが事態は動き始めていた。

市村さんを残して…。

結婚式場は、浜松町のホテルである。そこで、正夫は渡部に半年振りぐらいに再会した。ここで読者は、あれ？と思うかもしれないが、実は、渡部は名古屋で働いていた。東京で働いている渡部は、別の世界の間人である。

渡部は

「正夫さん、はなくそが出とるがなや」
と大声で注意する。

正夫は、鼻かぜをひいていて、そういうこともあるだろうと思っ
てトイレに行ったら、まさにそうだった。

そうだったが、彼は何で、あんな大音声で注意するんだろうか。
もちろん、それは、渡部の渡部たるところである。

それはそうと、鏡を見て、正夫は思った。

この小説は、今回をもって分裂させてもらう。

事実の方が、ストーリーの陳腐さに悲鳴をあげたからだ。私がこ
れから書くのは事実である。それ以前は、すべて、正夫の妄想だ。
わかりにくいかもしれないが、もう小説は進んでいる。

トイレから出た正夫は、青いドレスを着た、小さな人形のような
現実の小野田ちゃんを見た。このまま、嘘を書いていてもしょうが
ない。本当のレベルに移行しようじゃないか。

さもないと、全部が全部、陳腐だ。

「あゝ懐かしい。

正夫さんだあ」

と小野田ちゃんはいった。

正夫は赤面した。

自分は、彼女とイチャイチャする恋物語を書くつもりとしていたが、
実は、彼女は、五年前に結婚していたのであった。

正夫は現実の小野田ちゃんを見て、その小柄なギリシアチックな
顔を見て、変わってないなあと思った。そして、やはり彼女では自
分の妄想をとりつかせる余地がないなあと改めて感じたのだった。

小説「中野」の愛読者に、はしさん、という方がいるのであるが、
彼は数日前、正夫に会ったときに、

「多分、小説、中野の一番の面白いところは、小野田ちゃんと正夫
さんの恋物語にあると思うんです」

といていた。

正夫はそれをきいたときに頷いたが、しかし、それは本当なのだ

ろうか。という気もしたのだ。

だから、今回は、こうなったら、小野田ちゃんとの恋物語というフィクションを破壊しようと思う。

「ったく、マサさんはだらしがないなあ」

と渡部がいうのを無視して、正夫は現実の小野田ちゃんと話す。

「それにしても君は結婚しても、小野田なんだねえ」

くりくりした大きな目をこちらに向けて、鈴のころころ転がるような小さな声で小野田ちゃんは応答する。

「へえ、そうなんですう。」

夫の方に小野田という名前にしてもらっているんです」

「養子なの」

「養子じゃないんですね」

「ほう」

意味がわからなかったが、そういうこともあるだろうなあ、って思った。

正夫は、レセプションが始まるまで、ふと考えた。

何で、高田は小野田ちゃんを呼んだのだろうか。

過去にあのような事件があったのであるが、あれは解決しているのか。

高田は、まさか、

「君に断られた俺もこうして結婚したぜ！」

と小野田ちゃんに見せたかったのかもしれない。

この式は、高田なりのVサインだったのだ。

だが、Vサインではない結婚式というものがありえるかどうか…。

「マサさん。どうしたんですか」

「ふへえ」

「何か、痩せた…というか、顔が青ざめて、頬がこけて、病氣の人みたいなんです」

「俺が…か」

正夫は、自分の顔を鏡で見る。

まさに、青ざめた病人のような顔であった。

「実は、俺。」

土曜日に、朝9時から6時まで昼勤に出て、それから6時間して、夜勤を、夜9時半から朝9時までやって、そのまんま、電車で千葉から浜松町まできて、現在に至るんだよ」

「そら、顔も青いわ」

と渡部は感嘆した。

読者にまた説明しなくてはいけないが、現実の正夫は、中野に住んでいない。

千葉に住んでいる。

もはやこの小説には中野的な部分さえない。

第59話 「高田伸司の結婚 2」

結婚式の行われるホテルはものすごく大きく壮麗で、まあ、ボロくさいところで、わざわざ結婚する人もいないが、天井には、シャンドリアが並んで、目をクラクラさせたし、川のようなものが流れるのをガラスで囲んだボードが立てかけてあったり、その真っ白なまるで天国の宮殿のような中を、コーラス隊、楽隊が、純白の丫鬟を着てうろろしたり、さすがなものであった。

控え室には昔の大学の児童文化研究会のOB達が並んでいた。今回は、その人々について語ろうと思う。

小説「中野」において、そして、正夫の人生において、悪役みたいになっていく清松もいた。彼は、保育士であった。前よりも、痩せて、目が飛び出ているような印象を受けたが、彼は、スタイルも良くハンサムであった。

「あつ、マサさん。」

「おひさしぶりっす」

「おう、どうも。」

「保育士をやっているんだって？」

「そうっすねえ。」

「っていうか幼稚園で働いているんですが」

「どうなの？儲かるの？」

「いやあ、儲かないっすよお。」

「普通の会社員の半額くらいなもんじゃないですか」

「最近、保育園が、バンバン立てられるように、法律が緩和されるって話もあるんだけど、どうなの？」

「保育園って儲けるためにやるもんじゃないっすよお。」

「うちの会社の保育園の部門なんて、だめですもん」

「へえ」

というような会話をしたが、正直、こんな会話で合っていたかどうかもわからない。

実は、数年前に、渡部の結婚式が名古屋で行われたときに、高田伸司と

「清松は四つの仕事を同時にしているか否か」

で議論して、もうそれは結婚式そっちのけで議論して、周囲の人間に、

「声が大きいですよ」

と注意されるほどであったが、あれは何だったのだろうか。

今の清松は、四つの仕事を同時にやっているのだろうか。

それとも、あれは、もっと違う話なのか。

四つの仕事を同時にやっていたら、もっと儲かると思うのだが。

それとも、それは正夫の聞き間違いで、

「四つの業務を同時にこなしている」

だったかもしれない。

幼稚園がお寺になっていて、ある時間になると鐘をつかなくてはいけないらしいのだ。

というよりも、もう記憶がグチャグチャで、よくわからない。

まさか、お寺の僧、棺桶屋、保育士、事務を同時にこなしているのだろうか？

いや、もうどうでもいい。

とにかく、清松はいつもの清松だった。

そして、ミツチャもいた。

小説「中野」において、正夫の過去の記憶に出てくる、新入生の三人の娘の中の一人である。

ミツチャは、昔のまま、声にどこか甘いものがあったし、目がキョロキョロしていて、どこかテンみたいな小動物的な魅力があった。

「あ、マサさんだあ」

というミツチャは笑う。

「お久しぶりです」

というような会話しかなかったような気がする。

彼女も結婚していて名前が変わっていた。

これで、小野田ちゃんも含めて、三人の娘の中の二人まで紹介できた。

三人の娘の内のもう一人は、どうなっているのかよくわからない。

きけば、わかるだろうが、多分、結婚でもして幸せに暮らしているであろう。

そして、小説には出てこないH口がいた。彼女は、言語リハビリの介護士になっっているのだという。介護士になるために、親から借金して、名古屋で二年専門学校に通い、今、東京で親の借金を返ししながら、介護士（いや、看護師か？）をしているらしい。

そんな話をしていたときに、渡部が

「実は、うちの奥さんはPTだからね」

という。

「PT？」

PTA？」

とその分野がわからない正夫がいうと、

「それは違いますよ」

隣のH地という女性が笑っていた。

H口さんと、H地さんの出番はこれくらいである。

いや、何なら、とことんまで書き込んでもいいのだが…、たとえば、H地さんのエピソードなんか面白いのであるが、しかし、そうなるという意味もなく話が膨大になるのでカットしよう。

他にも正夫のブレインともいえる二人の人物がいるのであるが、小田は、何故か新婦の来賓席にいて話せなかったし、キンちゃんの方は、結婚式の時刻を間違えていて、セレモニーには出れずに、披露宴に出席したのだった。正夫も実はぎりぎりセーフだったのであるが、これなら遅刻しても大したことなかったのかもしれない。

さあ、セレモニーが始まった。教会の礼拝堂のようところで、新郎側、新婦側の二つの席にわかれており、関係者たちがたくさんいた。新婦の友人が全身あでやかなピンク色のドレスを着て、非常に綺麗であった。彼女は、披露宴で歌を歌うのである。まあ、そのことに関しては、後で書こう。というか、正夫は、「ああ、あの女性綺麗だなあ」と、暇があったら、そのピンク色のドレスばかり目で追いかけていた。ピンク色のバラの花が、彼女にまわりついているみたいで、彼女自身が花になったかのようにとても美しいのだ。

神父は、禿げてはいるが、顔は、ハリソン・フォードみたいな人であった。その他にも、コーラスや司会者や、よくわからない、いろんなスタッフがいて、結婚式つて人手がいるもんなんだなあ、って正夫は感心した。

新郎、新婦が入場する。

高田伸司の方は白い燕尾服を着て、笑顔がなかなか決まっていた。こいつは、高校時代から、ほとんど姿格好が変わらない。昔、会ったまんまであった。たしか、大学一年のころ、よく部室に現れては、

「こんなところで無意味な時間を使いたくない」

といつも部室でグダグダしている正夫に、あてつけのようにはいつては、消えたり、かと思ったら現れたりした、あのときのまんまで

あつた。

新婦の方も、前に、新宿で一回会つたのだが、そのときは、普通の女性かなあ、って思つていたのであるが、花嫁姿になつたところを改めてみると、凄く綺麗であつた。何か、内側からキラキラ輝くものがあつた。

高田伸司の話によると、

「話していると面白い」

らしいのであるが、前に会つたときもそんな印象があつた。実は、あたし、腐女子かもしれない。オカマバーにも行つたことありますよ。なんてあつけらかんと話していた。

皆で賛美歌を歌う。

いきなり起立して、いきなり歌わなきゃいけない。

それには弱つたが、後ろにコーラス隊がいるので、まあ、別に歌わなくても何とか成立するのであるが、

歌っている内に、正夫もノツテきたのであるが、しかし、ある部分になつて戸惑つた。

最後の部分に

「労わりたまわん」

という歌詞があるのだ。

これ、どう読むんだろう。

ふりがなもない。

実は、この

「労わりたまわん」

に来賓の多くの人があひつかかり、声を出さないもの、間違つた言葉をいうものが多く現れたが、どうやら

「いたわりたまわん」

だつたらしい。

油断していると、思わぬところに罠がしかけられているものだ。

気をつけよう。

そして、指輪交換、キスが行われて、セレモニーは、無事に終わ

る。

キスは、さすがに西洋式のすっげえディープなキスではなく、ちよん、という感じであった。

二人が移動すると、巨大な風船が空に浮かんでいて、紐が垂れ下がっていた。

それを引くと、風船が天井まで飛んで、

「パン」

と割れて、色とりどりの小さな風船と、花びらが落ちれてくるようになっっていた。

「いやあ、結婚式っていいなあ」

と、正夫は渡部に呟いた

第61話 「高田伸司の結婚」 4

さて、それから、野外で撮影ということになって、皆は、式場から、岸边というか、港のすぐ近くに出る。この式場自体が、港沿いに立てられているのですぐに行ける。たくさん浮き輪をつけた船が停泊していた。

そこで、キンちゃんが登場する。彼は警察の内勤をしている。少年課らしい。昔と比べて、顔が少しふくらしたような気がしたが、それほどでもない。元陸上部だけあって、全体的にはすらりとしている。今見ると、漫画「YAWARA」の登場人物、柔道部の脇役に似ている。

「おっ、マサさん」

「あれ、どうしたの」

「俺、遅れちゃったんですよ。

式終わっちゃいましたか」

「いや、セレモニーは終わったが、まあ、披露宴はまだだから
「そうっすか。」

俺、午後一時に開演かって、勝手に勘違いしちゃってて」

「まあ、しょうがないねえ。」

誰でもあるよ、そういうの」

みたいな会話をしていると、小田がやってくる。

「あっ、どうも」

「小田君も、久しぶりだよねえ」

「たしか、マサさんとは30のときに一回会いましたよね」

「だねえ。」

二年前か」

「そうですね」

「今でも倉庫をやっているのかい」

「そつすねえ。

結構、忙しくなってきたんですよ」

「ふうん」

ここに、渡部と、小田と、キンちゃんと、俺が揃った。昔の仲良しカルテット、というか、渡部と小田は相変わらず反目しているが

W

その四人を写真にとろうと、ミッチャがニコニコしてやってきた。

「あつ、写真とらせてくださいっ。

四人の写真とりたいです」

キンちゃんは苦笑いしている。

「俺たち四人の写真をとると、そのカメラ、壊れるよ」

「呪われているのか、俺たちは」

と正夫は笑った。

話は、正夫のコンビニの話になったが、

「まあ、出店しようと思っているんだが、金がたまないんだよねえ」

と説明する。

渡部は、ミクシイの日記を読んだみたいで

「マサさんの両親の問題は結構、複雑なんですよねえ」という。

しかし、それを説明するのもくだくだしくなるので

「まあ、それはいいじゃないか」

とっておいた。

ミッチャと、渡部はしばらく会話する。

「その鞆、何なの」

と渡部が質問する。

「えっ。

これは普通の鞆ですよ」

「そつ？」

どこで買ったの」

「え〜。」

覚えてないなあ」

「いやあ、うちの嫁が銀座で買い物をしていて、そういうの、気に入るなあって思って」

「そうですか。」

普通の鞆ですよ」

と、何か会話がとんちんかんだった。

多分、渡部が無理やりに、鞆にかこつけてトークしようとしたのだらう。

昔、渡部は、埼玉に住んでいるNというサークル員に、

「中野にいいサンダルないですかね」

ときいたことがある。

彼が中野に住んでいるからだ。

もちろん、Nは、答えようがない。

そんな故事があったので、正夫はいった。

「あれ？」

鞆じゃなくてサンダルじゃないの」

すると小田が笑った。

「っていうか、こいつ、変わってないですよね。」

昔のまんまっすよね。

よくこいつ、結婚できたなあ、って俺思って。

いや、冗談抜きで…」

「俺もそれは思った。」

昔のまんまなんだよ」

「何か、人間って変わらねえなって、思って…」

それから披露宴の会場に移り、飲み物は、アルコール類とウーロン茶とオレンジだった。

俺と、キンちゃん、渡部は同じ席であったが、小田は違う席で

あつた。

小田は、グラスに酒を入れて、ニヤニヤしながら

「やあ、マサさんと同じ席か」

なんて座ろうとしたが、席が違っていた。

「あつ、あつちか」

と行ってグラスをふらふら持って去ってゆく。

「あいつ、酒飲むんだろうなあ」

正夫は渡部にいう。

「あいつさ、お前のこと、変わってねえ、とかいっておきながら、

あいつこそ、変わってねえなあ」

「そうですねえ」

小田は、宴席では会話をするよりも、一人で酒をしこたまのんで、

一人でニコニコというかニヤニヤしているキャラであった。

もう酒飲みモードに入っている。

彼のことを、日陰者の酒飲み説教糞じじいと、名づけたのは正夫

であった。

「あゝ。

マサ先輩。

同じ席だったんですかああ」

と、同じ席にやってきた女性がいる。

声は、考えてみると、小野田ちゃんに似ているK村奈々瀬であつ

た。

声は似ているが、彼女は、もつと頭の回転が速くて、次から次へ

と、早口で、話ができるタイプだった。

丸い眼鏡をかけて、顔が赤くて、これはこれで綺麗というか、あ

つ、可愛い、ってタイプである。

正夫のいる創作班の新入生だった。

その次の年に、K村という男が入ってきて、奈々瀬と結婚して、

彼女はK村奈々瀬になるのだ。

「この席、本当に創作班ですねえ」

夫のK村もやってきた。

クロぶち眼鏡をしていて、大柄で、髪の毛は長めで、肌が浅黒い。

こいつも変わらない。

前に茶髪にして、髪をバーって毛羽立たせて、イケ面的にしようとしていたみたいだが、今は戻っている。

児童館というところで働いているらしい。

「君たち、夫婦になっちゃったんだもんなあ」
非常に懐かしい。

「何か、みんな変わってないなあ」

と、正夫はつぶやいて、テーブル席に突っ伏す。

「一番、変わったの、マサさんですよ。」

坊主頭にして…。

しかも、何か顔が青白いんですが…大丈夫ですか。

うちんところによくくる薬中の患者みだいになってますよ」

と警察のキンちゃんがいう。

「いやいや…。」

これは、夜勤をやって無理してきたんだよ。

さつきもいったけれども、本当に今、しんどい。

俺、昔もコンビニ夜勤の後で、しんどそうだったよなあ。

そういう意味では変わらねえなあ」

「マサさんって二次会にはこないんですか」

「こないよ。」

っていうか死ぬ」

「そうですかあ」

K村夫妻との会話になった。結婚して三年目で子供はいなくて、二人とも共働きらしい。

「そういうのって×××っていうんですよねえ」
と奈々瀬さんがいう。

「えっ×××？」

キンちゃんがぎよんとする。

「俺、 県の田舎者だからわからねえわ」
夫も突っ込む。

「それって東京でもいわないよ」

「あつ。」

そうなんですかあ。

じゃあ、これあたしだけの造語かもしんない。

そういうことよくあるんですよ。」

と何か恥じ入っていた。

キンちゃんは理由はわからないが、K村夫婦に、式はいくらかか
ったか、婚約指輪はいくらかかったか、本当にいろいろ詳しく聞いて
いた。

「でもねえ。

私たち、ハネムーンはグワムだったんですけどあ。

三日三晩雨でしたよあ。」

それには、

「かわいそうだな。

グワム行つて雨つて。

することないじゃん」

と正夫は笑ってしまった。

「どっちかが、雨男、雨女なのかなあ」

と渡部がきくと

「はあい。

あたしが雨女なんですう」

みたいに答える。

何か、奈々瀬ちゃんも変わらないなあ、と正夫は、椅子の上でぐ
ったりなりながら、ぼんやり思った。

「そういえば、K村が、入ってきたとき、俺は三年だったか」
と正夫が呟く。

「いやいやいや。

マサさん！

しっかりしてくださいよ。

マサさんは、四年でしたから」

「あっ、そうだった」

「そうですよ。」

高田が三年なんですから」

「あっ、そうか。」

まあ、それはいいとして、俺は、K村を、近くの喫茶店に呼んだんだよ。

「覚えている」

「覚えています。」

「覚えています」

「そうかあ。」

で、その喫茶店、シャノワールで、俺と市村さんとで

『いかにこの児童文化研究会を生き延びるか』

について語り合ったんだよな」

「話している内容は忘れましたが、行ったことは覚えていますよ」

「そうかあ。」

俺はそこで、このサークルで生き延びる秘訣は、二つある。

1 入部早々、女の子に告白するな！

2 清松、Sにごまをすって取り入るべし

この二つを教えたんだよ。

そうしたら、ほら、君なんか会長になっちゃったんだから。

これは先輩の俺のおかげだよ」

と笑う。

「いやあ、何をいつていたのが覚えていないですよ。」

「けど、懐かしいですねえ」

「今もあのサークルあるのかねえ」

「ありますよ。」

俺、この前行きましたもの。

もうね、変なおやじがきている、みたいな空気になっていますがねえ」

「へえ。」

また、公演中に泣いたりするのかねえ」

「あつ、そういうことありましたね」

「俺、ビツクリしたよ。」

人形劇の途中でさ。

まあ、劇そのものは終わってたんだけど、劇が終わったとたんに、裏方全体がみんな号泣し始めちゃってさ。

幕がいつまでたっても閉じないの。

それで、泣きながら黒子が出てきて、幕を閉じたら、みんないつせいに、

『ウワー』

ってすごかったよ。

っていうか、お客にしてみれば、何がなんだかわからない世界だよ、あれ」

「実はね。」

あれから、卒業公演では公演中に泣くってのが伝統になっています」

「伝統になっているのかよ」

「この前も、ワンワン裏で泣いてましから」

「嫌な伝統だな。」

それ」

と、このような話をしたら、他の人にも受けたみたいだった。

「マサさんって本当にどうでもいいこと、覚えていますなあ」

と渡部。

「あつ、覚えるついでに、カイトって名前のサークル員いたよねえ。」

今、何やっているんだろう」

「あつ、あいつは、今、焼き鳥屋をやっています」

「へえ」

カイト＝焼き鳥屋。

こうして、正夫の脳内にどうでもいい情報がまたインプットされ

た。

第63話 「高田伸司の結婚 6」

披露宴の方はつつがなく開かれてどんどん進められていた。黄緑色の四角い巨大なケーキを、高田伸司がスプーンですくって、嫁に食べさせる、「ファーストバイト」なんてことをさせたりしていたが、これは嫁が婿に食べさせたのかもしれない。

高田の叔父さんや、高田は学校の先生をしているのであるがその校長先生が祝辞を述べていた。高田の叔父さんではなかったかもしれない。ひよっとすると、花嫁側の親戚の人かもしれないが、そのポマードをつけた役者然としていた。あつ、確か、高田には、エキストラのバイトを延々している役者の叔父さんがいる。という話をきいたことがある。もしかすると、この叔父さんは、役者さんなのかもしれない。というのも顔が役者みたいなのだ。髪も前髪がクルツと巻いていて、小じゃれている。その人が

「ご遺族：あつ、いや：ご家族の皆様」

とかんだのに、正夫は少し笑ってしまった。

そして、校長先生のスピーチはなかなかのもので、

「私ははつきりいって、高田先生のことをそんなに知りません。

赴任してすぐからです。けれども、一回見た授業で、彼が漢字の書き取りの練習を子供にさせているときに、宙に指で字を書かせて、本当にクラスの皆が実践できているかどうか、彼は目でじつと見ていました。だから、彼は立派な教師なんです」と

といていた。

しかし、これも良く考えると、30人が、先生の向かいで、同時に逆字の形で漢字を書くのを、わざわざ確認できるかどうかは非常にあやしいというか、多分、高田の意図はそういうところにはないような気がしたが、その一回きいているだけでは、あまりよくわからないことを、例に挙げて、

「彼には責任感があるんです」

と畳み掛けるところなんかは、さすがに校長先生だと思った。
というよりも、眠い。

正夫は、こういう祝辞を長時間、きくのが本当につらいので、できるだけ食うことに集中しようと思った。

こっちは、お見舞金として、三万円用意しているのだ。そのもとをとるためには、食い物を味わわなくてはいけない。ちなみに、正夫はバイト先の人々に

「不況で物価が下がっているのに何で、お祝儀は、下がらないのかねえ」

とぼやいていた。

結論からいうと、料理はうまかった。

まず、

『赤ワインでポシェしたフォアグラの冷製と鴨肉のミソ風味』

小さな肉切れ、これが鴨肉であり、まったりした分厚いチーズみたいな食感の食い物、これがフォアグラであった。セロリとか…いや違うかもしれないが、何か細い野菜が置いてあって、茶色いソースが一筆書きのようにかかっていた。

感想

残念。もう少しで僕のハートをゲットできるチャンスだったんだが、思うに、鴨肉の印象が少し薄かったね！もっとソースを奮発するといいと思うよ、シェフ！

『アスパラガスのクリームパスタ』

これはやたらに大きな白い皿の中央にもものすごく小さな凹んだ部分があつて、そこに白クリーム風の芋虫みたいな形状のパスタと、アスパラガスがあつた。

感想

納得。さすがいいものを作っついていやがる。こいつはいける。しかも大皿に、この少なさ。もう少しほしいと思わせるが、後で考えると、これでいいような…実は適量なんだね！シェフ！あんだ料理つてもんを知っているよ！

『ミントのグラニテ』

感想 不明

うーん。あのさ、グラニテってそもそも何？思い出せないが、ま
ずくはなかったぜ！シェフ！

『牛フィレ肉のステーキと子羊のロースト ペルシャード風 旬野菜和え』

感想

いや…シェフが悪いんじゃないんだ…だが、夜勤明けでステーキ食うと…、胃が消化しきれないステーキを消化させようと頑張るんだよ。で、体力がものすごく消費されるんだ…。まあ、精がつくから、いいかもしれないが…うおおお…何か気持ち悪くなってきた。

『フレッシュクリームのパナコッタ 季節のフルーツとともに』

感想

シェーフ！

おお！

何てこったい！

まさに、なーんてこった。

パンナコッタ！

って、パンナコッタはうまかったんだが、そこに添えられていた、星型の黄緑色したものが、酸味がかり過ぎていて、食って口の中でピリピリして、思わず戻しそうになった。

しかも周りをみると、黄緑色の巨峰とかで、俺のだけ、星型の謎の果物なのだ。

何だ、あれ。

口の中に入れると、歯磨き粉みたいな感じになるのだ。

これだけは残させてもらった。

悪いな、シエフ！

第64話 「高田伸司の結婚」 7

一方、テーブル席でも会話は続いていた。

正夫は、このテーブル席で、K村夫妻、キンちゃん、渡部というと、まるで、昔の創作班の班長だった時代が蘇ってくるような感じがした。

あの時代は、班長として、さぼれるだけ活動をさぼり、激怒した高田と議論になって、泣かされたという悲しい事件があつたくらいであるから、ろくなものではないのであるが。

といつても、その事件、コンビニバイトの夜勤明けで眠くてしょうがないときに、高田が延々話かけてくるので、

「やめてくれ。あっち行ってくれよ」
って泣いただけだが。

キンちゃんは、今、警察で少年課にいるらしい。

「やっぱりね。」

子供たちが、ぐれちゃうのは、百パーセント家庭環境ですね。

片親とか、親が教育を放置しているのがほとんどなんです。

俺も、そういう子達を相手していて、ああ、家庭なんだなあ、って良く思いますもの」

「そうかあ」

と、少年犯罪について、いろいろ突っ込んだ話をきいた。大体、二三人以上の集団で、万引きとかの悪さをするらしい。

「あいつら、平気で嘘をつくし、一人じゃ何もできないのが多いですよ」

「取調べするときに、殴ったりするの」

「いやいやいや。」

殴っちゃったら、こっちが訴えられちゃうからねえ。

けれども、怒鳴ることは多いですよ」

「そうなのかあ」

何かそれをしゃべっているときのキンちゃん、戦闘モード入っているかのようで、妙にたくましく感じられた。(ちなみに、恋人募集中のことなので、もし、誰か付き合いたい人いましたら、私のところまでメッセージください)

「はあ、今度、結婚式開くのは俺かな」

と正夫は意味もなく呟いた。

すると渡部が熱っぽく主張する。

「あのね…、正夫さん…。」

僕はね、正夫さんでも全然、結婚できると思うんですよ。

だから、諦めないでくださいね」

「いや…諦めてないし。」

っていうか、そういう風にいうのって、逆に失礼だよ」

「いや、僕はね、思うんですよ。」

とにかく、正夫さんには落ち着いてほしいですね」

「だよなあ。」

結婚式か…

できるだけ、安くあげて、祝儀をたんまりもらって、儲けようか

なあ…

で、離婚して、一年に一回式をして…」

「それ悪質だわ」

と渡部は絶句した。

披露宴の方はさらに進んでいた。お色直しで、衣装の色を当てる
籤にて、

「当たっている人の中から、一人にプレゼントをあげます」
という催しがあって、

「K村奈々瀬さんです」

と目の前の彼女が呼ばれる。

「へええ。」

あたしなんですかあ。

わああ。

やったあああ

と奈々瀬ちゃんは大喜び。

で、赤い袋に入った何かをもらったが、正夫はニコニコしているだけで、それをきく気力もなかった。

正直、体力の限界であり、丁度、このときステーキを食べて、内蔵が忙しく活動をしているときで、眠気の限界でもあった。

「うおおおお。」

俺の体、もってくれええ」

正夫は体調が悪いためにもう帰りたくなってきたが、そんな正夫を無視して式は続いてゆく。

宴も酣、ということ、新郎新婦のご友人の出し物になった。新婦のご友人のピンク色のドレスを着た可愛い子ちゃんが、ギターをもつてもう一人の友人と登場する。いや、その人は姉だったかもしれない。もうそこら辺、記憶にない。ちなみに、もう一人の友人も結構、綺麗だった。茶色い髪の毛をグルグル巻きにして、非常におしゃれだ。

さらにこれは余談であるが、正夫の隣にいる渡部も、髪の毛をグルグルにして、かつこつけようとしていたみたいであるが、これは失敗して、寝癖みたいになっている。いや、しかし、それは完璧に寝癖ではなくて、何か中途半端に、そういう髪型もありなのかな、寝癖なのかなという境界線上にあるので、誰も突っ込めない状態になっていた。

ギターをかき鳴らして、その女性は、
「六十万分の一步」
という歌を歌う。

歌の方は、考えられないような角度からくるパンチ、という表現が、この歌を評するには一番妥当なのかもしれない。正夫も今まで色々な歌をきいたことがあるが、彼女の歌は、そういう正調な歌の中にはない、非常に独特な、一種の歪曲があつて、これははからずも、たまに正夫がカラオケで熱唱して思いつき音を外すことがあるが、それに似ていた。もちろん、一介のたんなる人である正夫のカラオケの音程外しと、アーティストとしての彼女のそれは同根なものではない。形態が似ているだけだ。

同じレベルで、考えてはいけない。

正夫は聞いているうちに、彼女の発する内面的な精神的波動において、実は得体の知れない何かが発動しているのを感じた。マイクを通じて、彼女の発する声の渦の中に、混沌がどよめいていた。信じられないような方向に進んでゆく音程というか、ハーモニーが毛羽立ってくるというか、不協和音がいくつも並んで縄跳びしているような、そういう鳥肌的な部分もあったが、たまに、朗読調になっているところもあり、そこに至ると一息休憩をするのであるが、また妙な盛り上がりで歌が進んでゆく。

これは彼女の内面宇宙を発表するひとつのアートだったのかもしれない。環境音楽を超えた環境音楽。イーजीリスニングを超えたイーजीリスニング。音痴な歌…いや…新たな音楽史の第一歩…。気がつくのと、演奏は終わっていた。

渡部は俺に聞いてきた。

「六十万分の一歩って歌は本当にあるの」

「うーん、あるんじゃない。

あるんだらうけど…」。

それを俺に質問する君の感性は間違っていないよ」

正夫は、逆に、そのピンク色のドレスを着た女性が愛しくなってきた。

「多分、ギター演奏は一音も外していないと思うから、まあ、催しとしては成功かもね」

「はあ」

と渡部も応じる。

それから、高田の友人である、髪に白いものがまじった40くらいの妙に爽やかな男性が出てくる。

「実は、僕は前まで高校教師でした。

で…あるとき、高田君がいつてきたんです。

『さん！

一緒に小学の教師の勉強をしましょうよ』

僕は自分の耳を疑いました。

『だけどさっ。』

僕、いい年こいたおっさんだよ。

採用してくれるところないよ』

『調べればありますよ』

そして、確かにネットで調べたらありました。

それから勉強の日々が始まります。

そして、次の年、高田君は受かり、僕は落第しました」

恨み節かよ。

と、正夫は思った。

ここで

「てめえ、俺の時間をかえせ！

うりゃああああ」

って叫んだら面白かったが、しかし、その次の年に、彼は受かったのだった。

「僕でも小学の教師になれたのです！

感激でした！

高田君、ありがとう！

高田君と一緒に旅行に行ったときに、電車に乗って、そう、青春十八切符で行ったのですが、いきなり教育について熱い議論が始まりました。

僕は、こいつ年下の癖に、ガンガン言ってくるなあって思いました」

おっ、これは面白い方向だ。

「てめえ、議論ばっかりで、説教くせえんだよ。

俺なんか泣かされたんだ。

ざけんじゃねええ。

っていつか、うぜえんだよ」

って叫ぶのかなあ、と思ったら、

「いや、それも教育熱心な彼のひたむきさの表れだと、僕は思うの

です」

と綺麗にまとめてしまった。

「皆さんに、僕は愛を説きたいです。

皆さん、愛とは何でしょう。

それはいろいろな言葉があると思うのですが、僕は、こう思っています。

愛が何かである、それはそうなのですが、まずは、その愛を表に出しましょう！

自分が誰かのことを好き、感謝している、信頼している。

そういうことを、照れないで、どんどん言っていけばいいんだと僕は思います。

僕にとつて、高田君は、本当に素晴らしい友人です。

ありがとうございます。

高田君。

ありがとうございます。

この出会い

といつて、彼は爽やかに、チューリップ、財津和夫の歌を歌い上げる。

これは朗読調で、彼の声の良さからいって、外しようがない鉄板の歌であった。

パフォーマンス的に百点満点じゃないかな。

と正夫は感心した。

けれども、あのピンク色のドレスの女性は、パフォーマンスというものを越しているから、百二十点あげるわ。俺が審査員だったら。

とも思った。

非常に長々と述べてきた結婚式であるが、今回が最後である。正直いって、式で正夫の周辺に起きたことは、ほとんど網羅している。考えてみると、これは、国語教師だった彼への最高のプレゼントになるんじゃないだろうか。まあ、一部というか、かなり茶化した部分もあるが、いや、それでもある人間の冠婚葬祭をこれほど執拗に述べた文章はなかなかない。

それはそうとして、高田の弟が出てくる。高田は顔が四角くて、正夫が、PCのミクシイで彼を紹介する紹介文に

「彼は将来的には、村上龍か、片岡鶴太郎になるかもしれない」と書いているのは、彼の顔の四角さを表現した、なかなかグツツな喩えであったが、弟は全然似ていない。

頭の形は細長くて、身長も兄より高くて、八の字眉で、性格がよさそうな顔をしている好青年である。

二人、並んでいると、本当にどっちが弟でどっちが兄だかわからないなかなか珍しい兄弟だった。

で、その弟のプレゼンで、お祝いメッセージの映像がスクロールに流される。あれはプロジェクターであったか、その機械で、教室の中にいるたくさんの小学生たちの並んでいる姿が映し出された。

「高田先生。

「ご結婚、おめでとうございます」

真ん中の子供がいうと、

「あめでとつございます」

とみんなでいう。

そう、卒業の言葉みたいな感じでひとつひとつ、言葉を唱和させるのである。

「先生が結婚しても、僕たちは先生の子供です」

「子供です！」

「先生はとっても優しかったです」

「優しかったです」

「先生は面白いです」

「面白いです」

で、みんなで、ウルトラマンの替え歌で、

「高田先生」

と歌ったのだった。

その歌詞までは正確には覚えていないが、これはひょっとして高田が考えたのかもしれない。

そういうことを考えそうなタイプであった。

映写機は、今度は、小田和正の歌に合わせて、高田伸司と、結婚相手の花嫁さんの写真がどんどん映される。

そこで印象的だったのは、高田伸司の姿は、本当に高校生から変わっていない。髪型も、何もかも、そのままである。何で、そのままなのか、聞きたくなるほどそのまままであった。このまま六十まで、そのままなのか。別に変えてもいいと思うのだが、この変えないというところが、彼のポリシーなのであろう。

で、正夫が思ったのは、この音楽で、二人の過去を紹介するといふのは、渡部が結婚式でやったことである。しかも、渡部のときも小田和正の同じ曲であった。渡部のときに笑ったのは、渡部と敵同志の間柄である小田が大写しになっているところであった。式にも当然のことながら参加できない小田が、ものすごく目立っているのである。

そのとき、正夫と高田は大笑いしたが、どうやら、それを覚えていたみたいで、今度は、この式には参加していない市村さんが、ものすごく大きなポーズをしている写真が二葉、紹介されていた。

「おお。」

市村先輩！

出てますよ。

出てますよおお」

と正夫は笑ってしまった。

「部室の中央で、木刀をかまえてポーズをとっている市村先輩…、あんたどうして、欠席しちゃったんだあ」

っていつか、これはわざとなのだろうか。

わざとだとしたら、なかなか、面白いことをしてくれたものである。

で、仲良くなっている二人がいろいろなところに旅行に行ったところが映される。

大阪城を背景に取った写真では

「某坂城」

と書かれてあったり、どこかに必ず、笑いを用意しておこうということを考えていたのか。確かに、この式自体、笑いの仕掛けがいろいろなところで用意されていたのかもしれない。

司会者のナレーションによると、

「二人は初めて会ったときには、恋愛感情はなかったのですが、伸司さんは、彼女の話していて楽しい面白いところと、彼女は伸司さんの凛々しいところが気に入って、どんどん仲は深くなったのです」

らしい。

最後、高田は、スピーチで

「これから、僕たちは、終始笑いの絶えないような面白い家庭を作ろうと思っています」

ということを宣言していた。

それを聞いていると、正夫の中で、出会ったときのことから、いろいろあったことを思い出してしまい、ついつい泣きそうに…は、ならず、正直、これから家に帰るまで、浜松町から千葉まで、自分の体が持つかなあということが心配だった。

まあ、家に無事に着いたので良かったが…教訓として、夜勤明けに結婚式には行かないこと、ということをも自分の胸に刻んでおきたいと思う。

とにかく、高田はこれからどんな家庭を築くのか、それが楽しみだ。できたら、落ち着いたときに、彼に会って、結婚式の感想やら、いろいろな裏話をきいてみたいと思う。

第67話 「小野田ちゃんにアタック 3」

出し抜けにいきなり高田伸司の結婚を述べた後で、さて小説「中野」を再開して前に突き進もうとしても、どうもテンションが下がってしまうのはどうしようもない、というか、何か自分の書いていることがいかにくだらないフィクションであるか、登場人物たちを目前にして痛感した次第である。

しかし、ここまで読んでくれた読者たちのためにも、そして何よりこの長い小説をここまで書いてきた自分のためにも、この小説を続けなくてはならない。

仮にくだらないフィクションだとしても、せつかくだからフィクションなりに、それなりのものを成立させなくてはならない。

現実と、俺の描く空想世界は、あの結婚式において衝突して火花を散らしたが、その火花を描けるってことだけでも、何らかの価値のあることなのかもしれないのだ。

小野田ちゃんとのデートになる直前の夜に、あの傑作小説「俺と彼女とアカプルコ」の著者である勝間速人から電話がかかってきた。正夫は携帯を変えたばかりなので、少しとるのに手間取る。新しい携帯は、どういったらいいのか、スライド形式になっていて、二つの四角がシュパツと、重なり合ったり、滑り込んでひとつの長方形になったりした。

「君の小説、読んだよ」

「あつ、どうも」

「感想をいうと、何だろつかなあ。グダグダってことかなあ。何か、余分な贅肉がつきすぎかもなあ」

「そりゃ、そうなんだ。」

けれども、贅肉でもついてなきや、この小説、実は何にもないん

だよ。虚なんだよ」

「そうか。」

まあ、いろいろ難癖をつけたいが、一番は、俺が二度とこの家には訪れなかった、って書いているところかもしれない」

「だって、俺の家を出る、君の背中を見ていると、そんな気がしたんだよ」

「そんな小人物じゃないよ。」

俺は。

まあ、あの小説、略して「俺アカ」は君の興味を持続させることができなかったからね。

それは俺の落ち度かもしれない」

「いやいや。」

実は、俺は、小説って自分が好きだなあ、って強烈に思う人のしか読めないタイプなんだよ。

現に、夏目漱石の「それから」なんていうのも放置だからね」

「あれほど、ゴチャゴチャ語っていたのに放置かい」

「あれって、ニートのことじゃないんだもの。」

ブルジョアなんだもの」

「君だってニートじゃないじゃない」

「俺、ニートじゃないかなあ。」

精神的には、いつだってニートだけれども」

というような話になって、話はどんどん拡散してゆき、取りとめもなくってゆくので、ここでは詳しくは述べないが、正夫は常に精神的には自分はニートだと思っていたことは、注目すべき事実かもしれない。

彼は小学四年のときに、ジャガーズというリトルリーグに入っていたが、一年たって、自分が何故野球をしているのか、わからなくなつて辞めたのだった。それから、野球関係の人々とは常に対立して、勢い、正夫はメジャー街道から裏道に突き進んだのかもしれない。休日にいつもやっていた野球のかわりに、TVゲームをや

るようになり、小説を読むようになったのだ。

それが正夫の現在のルーツであるかもしれない。彼が野球が上手かったら、今、こんな小説など書かなかったであろう。野球は天才的に下手であった。

「お前の投球は手で投げているんだ！」

と常にいるんな人にいわれた。

「お前の投げはパチンコ投げだあ」
ともいわれた。

だから、できるだけ、後ろに腕を伸ばして、それから投げるのであるが、それでも、というか、そうするとなおさら、腰が入らずに手で投げることになるのである。腰はいつでも入ってなかった。バットをもたせても、良く飛ばなかった。一回、ものすごく詰まったまま、ホームランになった。グラウンドが狭いからホームランになったのであるが、これでは駄目だなあと打球を見て思った。

実は、正夫は、この小説のグダグダ書かれている年齢に及んで、ようやく腰の入れ方がわかったのかもしれない。正確には、腰を支点にしないで、尾てい骨と背筋を使って体を動かすのだ。腰に支点を置きすぎちゃうと、腰を痛めることになる。最終的には、支点をなくすのが目標らしいが：つまりは、身体を通じて、地球、重力とどうつきあうか、という壮大な話になるのである。

現在の正夫は、それができつつあったように、自分では思えていた。本当は小説の主人公があまりそういうことでは困るのであるが、けれども事実、正夫は、最近、何だか地軸と仲がいい。重力のことがわかってきたような気になっている。それはしかし、気が大きいだけの話かもしれない。曖昧なので、どうともいえないが、下手をするとその話はまた出てくるかもしれないので、伏線としてここに書いておこう。

デート当日の朝、正夫は心臓が締め付けられそうであった。自分がまるで、暗黒大陸に挑む航海士みたいな気分させられた。小学

生のときも、たまに学校に行こうとして、そういう気分になるときがあった。そんなときは、友人の顔を思い浮かべて、何とか学校に行こうとしたものであるが、今回はそれほど酷くはないが、何か、自分が生きていてはいけないのではないか、という暗い気分になった。

先ほどまで、幾分熱っぽく詳細に書いていた小説外小説「高田伸司の結婚」において、小野田ちゃん存在をはるか遠くに感じていたのであるが、まさに、直感がNOと叫んでいた。

同行する清松も嘲笑っているに違いない。

「えっ」

とあのハンサムではあるがどこか魚を思わせる大きな目をきらりとさせて、やつは、幾分投げやりな感じの落ち着かない少し早い口調で、こういつているに決まっているのだ。

「マサさんが、小野田ちゃんを狙っているの？」

あの人、バカだよねえ。

キャラクター的に、小野田ちゃんにはふさわしくないって、何でわかんないんだらうかねえ。あんな

『荒くれニート』

みたいな人が、気楽にゲットできる人間じゃないよ。そもそもさ。

二人が楽しそうに話しているところを見たことがないもの。

本当に、あの人はいろいろ笑わせてくれるね。

ま、そこがマサさんのいいところかもしれないけど」

第68話 「小野田ちゃんにアタック 4」

朝日が妙に照りつけてくる駅前図書館の前の通りを歩いて、正夫はようやく中野駅にたどり着くと、

「あつ、マサさん」

といて現れたのは、黒いコートを着た高田伸司だった。

「もう、だめじゃん。」

この時点でだめじゃん。

何でおまえがいるのよ」

「いやあ、妹（恋人）も連れてこようかって思ったんですが無理だったみたいで」

「そういうことじゃなくて何で、きてんの」

「そりゃ、来るでしょう」

「あつ、マサさん、これはどうも」

と革ジャンを着て、サングラスをかけた清松もやってきた。手に缶コーヒーをもっている。

「小野田ちゃん、十分くらい遅刻するみたいですね」

「もうね。」

君たち、本当に頑張ってくれるのかね」

「何をですか」

清松は長い首を傾けて、きいてきた。

サングラスの向こうで大きな目がこちらを見ている。

「いや、だから…、」

俺は、彼女をゲットするためにだね…こういう場を作ったわけで」

「プッ」

と、高田伸司が口から変な音を出した。

「あつ、今、笑ったな」

「笑ってませんよ」

「いや、今、絶対、笑った。」

こんな二ートの俺では彼女はできないって思っているんだ。

俺の人生そのものへの冒涇だ、それは」

「いや、被害妄想ですって」

「なーんてね」

と正夫は、苦笑いをしてごまかした。危ないところであった。いつものように、高田の前で怒り、醜態をさらすことによって、ライバルである清松に、

「こいつ人間小さいな」

と思われるところであった。

いや、もう思われているかもしれないが。

正夫は、何故だか、今日の自分はいっばいいっばいと実感した。

「あつ小野田ちゃんがきましたよ」

それから数分、ぎくしゃくした会話が三人の間でかわされた後で、人ごみの中からまるで妖精のような小野田ちゃんが現れる。

「綺麗じゃないか」

小柄なギリシア彫刻みたいな、何か、綺麗という言葉が結晶化したみたいなルックスをしていた。しかも、それほど派手ではなくて、服装などはとても落ち着いているのだ。

「あつ、だめだ。」

これは俺には合わない」

と正夫はとつさに思ってしまった。

「何てことだ。」

何て綺麗過ぎるんだ。

オー、マイガット」

正夫は、自分が家の中において、ずっとここ数日、ファイナルファンタジー6しかやっていなかったの、久々に遭遇する生身の女性にあがっているだけなのであるが、そんな自分にも気づかず動転してしまった。

第69話 「小野田ちゃんにアタック 5」

とりつくろつうことのできないもうボロボロになってしまったセーターのどこを触れても毛糸が崩れてゆく。そんな記憶が正夫にはあった。結局、そのセーターは捨てたが、まさに今日のデート(？)こそ、そういうものではなかったろうか。

駅前が集まった一行は、そのまま中野サンモール通りまで歩く。活気ある人ごみはごちゃごちゃしていて、歩きづらい。ロータリーの中央に、雑誌新聞が売られている。何かの政治活動のビラをばらまいている同じ制服を着た人々。

フランク・シナトラとサキソフォン奏者のケリーGの共演した「ワン・フォー・マイ・ベイビー」が流れているアーケード街を通り、何となく道を外れて、ミスタードーナツへ行く。その途中、正夫と高田、清松と小野田ちゃんが話して歩くような感じだった。

もう正夫は帰りたくなっていた。というのもどう考えても反応がよろしくないからである。自分から「デート」といつておいて、あつ、これはもう駄目だな、と実感できた。ニート生活で鍛えた動物的な勘でわかった。

ミスタードーナツのテーブルに四人で着き、それぞれ思い思いのドーナツや飲み物を買う。烏龍茶をちびちび飲みながら、正夫はまさに

ワン フォー マイベイビー

ワン モア フォー ザロード

という気分になってきた。

どういふことかというのと、つまりさっきのシナトラの歌の歌詞なのであるが、これはマスターに向かって

「彼女に乾杯してくれ。」

そして、私の残りの長い人生にも乾杯してくれ」という歌なのであった。

これは、歳をとったシナトラが、ある若い女性に恋をした。しかし、彼女は夢を叶えるために、旅に出た。二人は別れる。そして、シナトラは、酒場でマスター相手にそのことを話す、という内容の歌であった。

小野田ちゃんには何か夢があるのだろうか。

しかし、それはこんなニートなんかやっている正夫には関係のないものなのだ。としばらく感傷的になったが、そもそもが自分は何で小野田ちゃんを好きだという幻想を描いていたのだろうか。実際に会ってみると、何か自分の考えている人間と全然違っていった。

いや、実際もいいのであるが、そこにも付き合っただけに何かがあるのだろうか、それとは別のものを正夫は思っていたのだ。この差は何であろうか。それが妄想と現実との差であるのだろうか。しかし、そう考えると一体、正夫は何のために生きているのだろうか。考えてみると自分の生きている意味って、妄想するただけに生きているのか。何て詰まらない一生だろうか。何だか無性に反省したくなってきた。

「まあ、とにかく小野田ちゃんもそういうことなんだねえ」

と正夫は小野田ちゃんの話に割り込んだ。

「そうなんです」

「俺もね。それは非常に思うことだね。だってやっぱり、あれでしょう。小野田ちゃんがそう思うということとは、もう完璧に、小野田ちゃんがそう思う必然性があるわけさ。逆に言えば、必然性が小野田ちゃんをそうさせている。というか、これはもう運命論でもあるね。だって、小野田ちゃんがそう思うんだから。まあ、そこには個人の意思ってのはあるのだからうけれども、個人の意思というものは、なかなか自分の環境から離れないものだからね。」

お里が知れる。なんて言葉もあるじゃない。どうしても育ちが出

るね。そう考えると、俺なんか千葉の片田舎で育っているものだからさ。昔リトルリーグで、「おまえ、顔が千葉っばいよな」っておじさんに頭を撫でられながらいわれたこともあるしね。結局、そういうことなんだな」

「そうですね」

「でしょ。」

「うんうん」

「正夫は、烏龍茶を飲んで続けた。」

「だから、俺なんかはあれじゃないかなっていつも思うんだよ。小野田ちゃんというものがここにある。そして、それを思う俺がいる。どこかでこの二つは無限のバリエーションを感じさせるね。どういったらいいのか、つまり……」

「正夫さん。そんなに難しいことではないですよ。」

「要は、休日以外に出るか、家で遊ぶかってことでしょ。」

「と高田が突っ込んできた。」

「それはそうだよ。」

けれども、ほら、俺は提案型二トなわけだから、そういうことも少し哲学チックに考えてみたいわけだよ」

「哲学というか、くだくだしいだけじゃないですか」

「そうともいうかもしれないな」

正夫は烏龍茶を飲みながら小野田ちゃんの反応を待ったが、こっちははまるで無視をして、清松の方を向いて、まったく違うことを話し出した。

「清松は、驚くほど無作法に」

「そんなわけないだろ」

「と小野田ちゃんを小突くと笑った。」

「うわっ。」

「親密度の段階で、俺、負けている」

「正夫はその二人を見て、ひしひしと自分がここに来たことの空しさを感じたのだった。」

清松はそういう男だ。何だか知らないが女に馴れ馴れしくて、それでいて、最終的に、割りと女にもてない。本当の意味で女の友人だといえる人間は意外と少ない、というか、いないのかもしれない。それでも自転車操業のように、女と慣れ慣れしくする。それは彼のポリシーなのだ。女と慣れ慣れしくするために彼は生きている。そうやって洒脱な自分を演出する。

しかし、本当は寂しい生活を送っているに違いない。

と勝手に正夫は清松のことをそういう人物だと思って、自分を慰めることにした。とはいえ、真に、慰められるのは、小野田ちゃんとの心理的距離を何とか埋めることである。

だが、ここで、正夫のメンドクサイ病が始まった。もうメンドクサイ。そんな苦勞をして、強引に小野田ちゃんを引き寄せて何になるというのか。いつそ、向こうから「正夫さん、愛しています」と告白して欲しい。もういやだ。ああ家に帰って寝たい。もう、生きるのがいやだ。いやだ。いやだ。ああ、就職とか考えるのもいや。いやいやいや。もうだめ。いやいやいや。もう、ああ、いやだ。いやいやよも好きの内、というが、好きであっても動きたくない。ああ、棚からぼた餅みたいな恋愛がないだろうか。それこそ正夫の望む恋愛である。

「ちよつと、トイレ行ってきます」

清松が席を立った。チャンス到来である。

正夫は急に眼光が鋭くなったことであろう。まさに獲物を狙う獣みたいな感じである。

ここで素早く彼女のハートをキャッチする素晴らしい会話をして、清松の暴走（と正夫は思っている）を止めなくてはいけない。

第70話 「小野田ちゃんにアタック 6」

「最近、何しているの」

と正夫は小野田ちゃんに話しかけた。

「最近ですか。」

普通ですね。

ま、生きてます」

「生きてるのはわかるよ。

死んでいたら大事だからね。

それにしても、仕事のほうはどうだい。

何か事務をやっていたんだったよねえ」

「ええ」

しかし、正夫には自分に事務の仕事の経験がないし、それほど小野田ちゃんの仕事に興味もなくなってきた上に、この場にいるすべての人間に悪いのであるが、だんだんこの場に、この状況に、飽きてきた。

何で自分がホストみたいになって、この二人を相手しなきゃいけないのだろうか。彼らは彼ら二人で、何とかするに決まっている。だとしたら自分はしゃべらなくてもいいではないか。

正夫は、自分では自分を面白いやつとは思っていたが、最近は何もうそれほど自分が面白いということ周囲に躍起になって表現しなくてもいいかな、と思えてきた。というのも何か、自分の限界に気づいてきたような気がするのだ。面白いことは面白いのであるが、それは自分にしかわからない面白さなのかもしれない。それは幻想妄想なのだ。本当は普通の凡人いや、それ以下のニートなのだ。

今まで、正夫は、自分には無限の能力があると思いついてきたが、実はそんなことがないのかもしれない。と、そんな若者にはあるまじき、倦怠感みたいな、自分疲れというか、もつとも自分以外の人間にはなれないのであるが、とにかく、そんなもやもやした無気力

な状態になった。

「まあ、頑張っているってのはいいことだよね」と正夫は、投げやりにいうと黙ってしまった。

三人は無言状態になる。

高田が、何かするのかと思ったら、何もしなかった。

三人は黙々と、ドーナツを食べる。

このまま清松が帰ってきて、清松の話によって、この場が活気を取り戻すと、つまり、正夫の完敗になる。だが、もう何でも良かった。

もう正夫は戦闘する気さえなくなっていた。完全に電池切れであった。

何故であろうか。

ひよつとすると、三ヶ月（読者よ。正夫がニート生活をして、もう、そんなに月日がたっているのである）のニート生活が正夫を蝕んだのかもしれない。

正夫は日常行動はできるのであるが、一日に何か一つ、特別なことをやる、そのエネルギーしかなかった。この場合は、「中野のミスタードーナツに、四人で行く」、この行動でもうエネルギーが切れた。もう嫌になってきた。もう泥の中に入りたくなってきた。

「ああ、帰りてえ」

と呟きそうになって、正夫は口を閉じた。

何かだんだん腹が立ってきて、もう一回、小野田ちゃんに寸止めパンチをして、この場から逃げ去ろうかとも一瞬思ったが、それでも、何か、無理矢理会話することにした。

「ところで、高田は、今付き合っている彼女とどこで会ったの」

「ネットで、カラオケの集まりがあって、そこで知り合ったんですね」

「へえ。」

「いいねえ」

本当はこの場ではそれほど高田のなれそめなんかには興味はなかったが、丁度、話が小野田ちゃんにふれる話になれた。

「それにしても小野田ちゃんには、いい人がいるのかい」

何かおやじみたいなお話方であるが、疲れている正夫にはそれが限界だった。

「いないです」

「小野田ちゃんって綺麗なのに、何でいないの？」

不思議だな。

俺がなっちゃんおうかな」

と正夫はいつて、小野田ちゃんは黙ってしまった。

顔が赤くなつて目が潤んでいる。

「嫌です」

「いや…ほら、何いってんだよ。」

冗談だよ。

もう、冗談に真面目にリアクションしなくていいよ。

本当にもうさ。

アハハハハハハハ」

と正夫は笑った。

「どうしたんですか」

と清松がやってくる。

「あ、とうとうきたね。あつ、俺さ、トイレに行ってくるわ。うん、大がしてくなつてきた。じゃあ、沸かせておいて、そんじゃあね」

トイレに駆け込んで、正夫はトイレの鏡で自分を見た。

「おい、正夫。」

わかっている。

シヨックだったんだろ。

いくら、何でもあそこまではつきりいうもんじゃないし、いくら絶望的なことがわかつている状況でも、ああまで断られると凹む、それはわかっている。

けれどもしょうがない、ああいう女性なんだ。

良くも悪くもオブラートに包むということができないんだ。
むしろこれは良かったかもしれない。

その程度の女性なんだ。

おまえには合わないよ。

ああ、合わないさ。

だから、ここは笑顔で過ごそうじゃないか。

うるたえちゃいけない。

いいか、ここは大人のところを見せるんだ。

わかったな。

正夫！

おまえは、あの中で年長者であり、先輩なんだ。

子供みたいなところを見せるな。

とにかく、威厳を大切にしろ」

と正夫は、必死に自分にいきかせ、個室に入り、便座の上に座ると、トイレットペーパーをカラカラと引きちぎり、三分間だけ泣いた。

第71話 「小野田ちゃんにアタック 7」

もう正夫は意気消沈して、まるで石像のようになって、何があってもニコニコしているだけで、

「うん」

「そっだね」

「すごいね」

と相槌マシンと化した。しかも目に生気がないので、それは不気味な相槌であつた。そして、たまにため息をついて外を見つめるだけになつた。

何故だか知らないが、そんな正夫に、高田伸司がしつこく話しかけてくる。

「正夫さん。」

最近、新聞で見たんですが」

「うん」

「日本の人口の65歳以上が占める割合は、もう20パーセントを越しているらしいですね。しかも75歳以上は、すでに10パーセントもいるんですよ」

「うん」

「知っていたんですか」

「うん」

「へえ。」

で、どう思います」

「すごいね」

「すごいですよね。」

けれども、これってチャンスなのかもしれない」

「うん」

「俺たち若い人間は、その内、さらに必要とされるようになります」

「や」

「そうだね」

「だから、今は、何をしてもいい時代なのかもしれませぬね」

「そうだね」

「前に正夫さんがいつていたけれども」

「うん」

「生きていればいい、みたいなことを」

「へえ、すごいね」

「自分でいつていたんですよ」

「うん」

「つて人の話、きいてます」

正夫はぼんやりと、親しげに話している小野田ちゃんと清松を見ながら呟いた。

「うん、きいているよ。」

ただね、今、俺はもう何でもよくなってきた。

今の形の日本は滅ぶね。

それだけは確かだ。

結局、移民とか受け入れることになるだろうねえ。

俺は、どうすればいいのか。

わからない。

ただ、お先は真つ暗だね。

つていうか、俺のハートが真つ暗だよ」

四人がカラオケに行くので、正夫も失意ではあつたが、家に帰つても時間的に暇だったので、ついてゆくことにした。こうなつたら、皆がどんなに苦痛そうにしても、フルコーラスで、あまり知られていない松山千春のマイナーな曲を大声で歌い上げて、周囲に迷惑がられてやる。「男と女」あたりがいいだろう。

それにしても、四人揃つて歩いているのに、何て悲しい気分なんだろうか。さつき食べたドーナツの味でさえ記憶にない。吹きすさぶ風が、正夫のむき出しの傷ついた心に、直接当たっているかのようだ。

中野サンモールのごちゃごちゃした通りを抜けて、小さなカラオケルームに行く。

そこで一番初めに、「イデオン」を歌ったのが清松だった。憎たらしいことに結構うまくて、思わず拍手してしまった。清松は声というものをあまり意識させない非常に透明なくせのない声で、何かきいていると、彼の無個性がよくわかった。が、逆にその無個性が、妙に心地いいのだ。考えてみると、彼という人間は実はそういう人間なのかもしれない。自力よりも他力というようないいね。

清松君。

俺、その歌、使わせてもらうわ」

と正夫はいったが、それは本心だった。

高田は、「エアーマンが倒せない」を歌った。

高田は、声が少し高くかすれてうらがえるような歌い方で、基本的にどの歌を歌っても、その歌い方で、一方的に押し切るという感じであった。それがはまるときもあればはまらないときもあったが、概ね、歌いこんでいて、うまかった。歌のチョイスもなかなかしゃれのきいた歌を歌ってくれる。

そして、小野田ちゃんの番であった。彼女は、あまり抑揚のない声で、自分の好きな椎名林檎とか、名前が記憶できないアルファベットの名前の女の歌手の歌を歌った。抑揚がないので、何か歌っているのか、台詞を棒読みしているのかよくわからなかったし、声も小さいので何だかわからなかったが満足しているのだろう。

正夫は、松山千春一辺倒だった。

「男と女」という歌は殺人的に遅くて、そうでなくとも松山千春の歌は、のろのろしていて興味のない人には退屈だった。彼のライブでは、「おい、俺の歌をきいて途中で寝るなよ」と彼が冗談めいていっているのだ。まさにそんな感じだった。

しかし、それは正夫という人間の退屈さとリンクしていた。何か最近、自分は退屈な人間になるために生まれてきたのだ。と思うよ

うになつてきた。最近というよりもさつき「嫌です」と小野田ちゃんに拒絶されてから、そういうことを考えるようになってきた。自分は詰まらない。自分は退屈だ。

しかし、そういうことを白状するとすぐに周囲は「大丈夫だよ」といつてくるのだ。それに対して、正夫は「上から目線で見るとこれは俺だけの問題じゃない！人類全体の問題なんだよ」と叫びたくなる。そう、人類全体が、現在、衰亡しようとしている。正夫が詰まらないのも、そのせいに決まっているのだ。だから人類全体のためにも、正夫は踏ん張りたいと思う。

これからも世界中の人々が平和でありますように、正夫は全力で、松山千春をゆつくりと歌い、そして歌い終わった後の、周囲の中途半端なりアクションの中で、ふと正夫は、本当の幸せ、ってこういうことかもしれない。と思った。

実は松山千春も「平凡」や「凡庸」という歌の中で、そのようなことを説いているのであった。正夫は歌っていて、松山千春に説教されているような気分になった。

そして数時間後、すっかり癒されて、帰ろうかと思ったら、清松がいう。

「実は三次会は関口さんと一緒に飲み会なんですが行きますか」
ほら出てきた。

関口だ。

前にも書いたが、後輩に

「このサークルで生き延びるには、清松と関口にゴマをすれ」

とアドバイスしたカリスマの男である。

清松はそれほど人気者ではなかったが、関口は圧倒的に人気者であった。ひよつとすると、清松は虎の威を借りる狐みたいな存在だったかもしれない。

だが、それでも大したものであり、正夫なんかは、そんなご機嫌をとる、ということさえもできない。

「クソッ、

また、関口さん関口さん、始まったよ」

正夫は心の中で毒づいた。カリスマ関口さんは、このサークルの人々にまるで寄生虫のように張り付いて、何かが起こるたびに、自分主催で飲み会を開くのだ。

正夫は、自分の中にはそういうカリスマ的な要素がなかったので、うらやましい反面、男だから当然、嫉妬した。そして、それは現在進行形で嫉妬し続けている。

自分はいっぱしの人間にもなれないのだ。今、この中で年長なのは俺なのに主導権一つも握れない。ああ、もうだめだ。もう人間としてだめだ。俺は人の後ろをついてゆくだけの、金魚のふん野郎に決定だ。

としばし自責した後で

「じゃあ、参加するよ」

といった。

及ばずながら、何か爪あとをつけてやろうか。
とも思った。

もちろん、いつもそう思って、何もできずに帰るのが落ちなのであるが。

第72話 「小野田ちゃんにアタック 最終回」

その日の夜、暗いアパートの一室で、正夫は一人布団に入りながら、天井を見上げて今日あったことを、あれやこれや考えていた。あれから何があったのかというと、お決まりのサークルOBの飲み会であり、どうやら、正夫が小野田ちゃんに会おうと電話をしたら、小野田ちゃんが清松に電話をして、清松は高田やその他にも電話して、まるで連鎖反応のように人が集まっていったらしい。そして、これは前にも書いたが、その人の渦の中心となるのが、関口だった。

以前、正夫は自分と親しい人たちにこう毒づいたことがある。

「サークルのやつら。」

あいつらは、何があっても

『関口さん、関口さん』

神輿をかつぐように

『関口さん、関口さん、わっしよい、わっしよい

わっしよい、わっしよい、関口さん、関口さん』

だよ。

で神輿の上には関口がいて甲高い声で

『モリモリいきますよ。』

モリモリいきますよ。』

つていうんだよ。

あいつらは、児童文化なんかどうでもいいんだよ。

もはや、あのサークルは関口文化研究会なんだよ。』

今日の飲み会もまさにそういう飲み会であり、ほとんど関口ワールド、関口を称える会みたいになっていた。

彼はいつものように座の中心で

「ニヤハハハ」

と笑っていた。

正夫自身は、実をいうとそれほど関口個人を気に食わないわけではなかった。意外にも、関口とは、「永井真理子」というシンガーソングライターがいて、その人の発表した「キャッチボール」というCDがものすごく好きということで話が合って盛り上がったこともあったのだ。

しかし、正夫は昔から権威に逆らう男であつたから…、これは多分、無意識的なもので、いつも思うのだが表面上は、温厚そうにしているのに気がつく、いつも権力に逆らっているのだ。いけない、いけないと思つても真つ先に権力に歯向かうのが正夫であつた。

だから、何だか知らない間に、関口との対立構造を作り上げていたのだ。何故かはわからない。しかし、カリスマ的な人間と対立すると、正夫ははつきりつて、ものすごく「さえない男」ということが目立つてしまつたのであつた。

たとえば、関口はいつも睡眠が三時間な話を得意そうにしていたが、正夫は今睡眠は十時間はないと生きている意味はないと思つている。しかも、寝ていないときは大体ボーとしているから、正夫の一日は、関口の四、五日の密度なのかもしれない。

そして、関口はワーキングホリデーというのをやって、カナダかオーストラリアにて仕事をしていたときのことを熱く語つていた。カナダかオーストラリアかどっちかだったのであるが、どっちであろうかは忘れた。ひよつとすると両方行つたのかもしれない。

そんな話をしてわいている酒宴の端の方に、いつも集まっている親正夫派の連中がいた。こういう飲み会には必ずくる小田和孝、そして何が何だかわからないままに会社帰りで参加したが、結局、他に話す人がいなくてここにいる渡部博文、酒を飲むとたちが悪くなるので誰も相手にしたくない高田伸司であつた。

正夫は腹が立つたので、もうこうなつたらもとをとつてやるうつまみを食べまくつた。たこ焼き、ホヤ、焼肉、焼きそば、さんまの焼いたの、とにかくいやがらせのように食いまくつた。小田は小田で、正夫にひたすらに何かを語りかけていたが、正夫には話しの

内容よりも、

「あれじゃねえかな…」

「いや、冗談抜きで…」

「だから、俺思うに、それはやっぱりバランスだし…」

という言葉が気にかかった。彼の話は、上の三語が常にいろんなところに頻出してきて、むしろ、話の内容よりも、その三語をいいたいがためだけに話しているんじゃないかな、と思えるときもあった。

渡部は渡部で、たまに、小田が冗談交じりで、冷やかしてくるのに、怒ったりしていた。

いつもの飲み会であったがちよっとしたハプニングがあった。

高田伸司が、正夫の胸倉をつかんで

「あんた一体、何なんだ！」

と叫んだのだ。

「いや、俺は俺だよ」

といつても通じない。

「マサさん。」

あんた、一体…、俺の先輩か！

むにゃむにゃ」

といつて、うつむいてしまう。もはや完全に悪酔い状態であった。

それから、帰りに居酒屋の看板を蹴ったり、駅の自動改札機に向かってポケットから「SUIKA」を取り出して、何故かぶん投げた。駅員に注意されたり、いろいろわけのわからないことをしていたが、したり顔の（何故かこういうとき、いつも小田はしたり顔であった）小田に連れられて帰って行ったのだ。

すべては昔どおりのことであったが、そうであるがゆえに、小野田ちゃんにはまったく近づくことができなかった。しかも間接的に断られた。これは先輩として非常にわかりやすい失態であった。陰で、清松と関口は喜んでいるに違いない。

すべてが予定調和で悲しいほどに絶望的であったが

「ウフフフ」

と正夫は布団の上で思い出し笑いをしていた。
実はほんの少しの光明があったのだ。

小野田ちゃんの友人のミツチャという女性がいて、その女性が正夫にまるで女房のようにつきつきりで、お皿をもってきてくれたり、世間話につきあってくれたりしたのである。

何故か知らないが、正夫のことを甘ったるい声で

「マサさんったら」

と行って、肩をつんと指ではじいたり、

「マサさん。顔赤いですねえ。熱でもあるんですかあ」

なんていって、手で額に触れてきたりした。

正夫はそういうボディータッチに弱い、というか女性のやることなら何でも弱かった。

「いや…そのアハハハ」

「もうね、それはウフフフ」

とその飲み会では、すっかり上機嫌になり、しかもメルアドさえもゲットできたのである。

ひょっとして、今までの小野田ちゃんのこと、というのは、大いなる序章だったのかもしれない。

「俺の恋愛小説のマドンナは、実はミツチャだったのか…」

とミツチャの姿を思い浮かべた。

声がまるで蜜そのもののように甘ったるくて、それでいて搾りたてのミルクのようにどこか幼い余韻のようなものを漂わせていて、黒目がちな目はたまにトロンとしていて、唇が肉感的で、額は大きく、まるでテンカイタチのようになると表情が変わる小動物的な魅力のある、それでいて、いいたいことははっきりという、小野田ちゃんの内気さとは、対極的な魅惑的な女性だった。

正夫が暗い天井の上に、ミツチャの姿を思い浮かべて、一人でエヘラエヘラ笑っていると、いきなり、携帯が光り、メール着信が知

らされる。

「うひゃっ。

ミツチャか」

と正夫が驚いていると、ミツチャではなくて、先輩の市村貞夫のメールであった。

「マサさん。

最近、ニートで暇だろ。

じゃあ、俺と空手の兄弟子と一緒に山荘に行かない？

二泊三日なんだけれども、どう」

というお誘いであった。

第73話 「山荘にて 1」

市村さんの空手の兄弟子である美園秀幸とはどのような人であったか、というと、体が大きくて、頭が天然パーマで、目がとても細く、鼻がとんがっていて、空手家という肩書きを前面に押し出せば、女性にもてそうな感じの好青年であった。市村さんよりも二歳上、ということとは正夫からしてみたら、四歳上である。

彼とは、前にも一緒に遊んだことがあって、そのときは、カラオケボックスで、おニヤン子クラブの歌を振り付けつきで、熱唱してくれた。そしてその場の空気の流れが、大の男が熱心にそれをやるのに対して、誰も突っ込むことも、笑って流すこともできずに、その場はそれで終わり、何故かそのことについて、それ以上誰も話すこともなく、あの「おニヤン子の歌」は、美園さんの中での、というか周囲の中での黒歴史になったのであった。

その他にもゲームにも詳しくて、市村さんの親友である正夫に、いろいろなゲームをくれた。プレイステーションの「シビルライゼーション」「信長の野望 将星録」「ラングリッサー1、2」、ゲームボーイカラー本体と、「ウィザードリィ外伝3」「風来のシレン GB版」などである。他にもあったかもしれない。

彼は現在、トラックの運転手をしていた。そこに至るまでが波乱の人生だということは、市村さんからきいていた。彼は高校のころ、成績がよかつたらしくて、勉強なんてつまらないもんだね、と余裕であったのであるが、受験期に病気をやってしまい、浪人して無気力になり、大学受験をあきらめて、コンピューター専門学校に通うが、そこでも何だか自分に合わないなあと思って、それでも何とか卒業して、コンビニでバイトするが、いきなり客に暴言を吐いたり、一緒に働いている自分に襲い掛かってくる、どう考えてもわけのわからないやつと一緒に働かされて、それも嫌になって現在に至るのだ。

彼の父は、名前を誰もが知っているさる大企業の重役で、彼は金持ちの息子であったから、正夫からしてみたら恵まれているなあと思つのであるが、しかし、金持ちには金持ちでいろいろあるらしく、親子喧嘩で、父親が、なぎなたをもちだして、息子を斬ろうとしてきて、逃げたこともあるらしい。

それでも今回のように気楽に、山荘にまで行けるといふことは、やはりとてもうらやましい身分であり、美園さんはやっぱりいいなあ、ということを手に乗って正夫は何度も呟いていた。

正夫は後部座席にいて、隣には市村さんの同棲相手の汀子ちゃんがついて、運転席には美園さん、助手席に市村さんがいた。前の二人は、空手の技術論とか関係者とか、かなり深い話をしていて、話に割って入ることもできなかつた。だから、暇なのでぼんやりと窓から外を眺めていた。

東京から西へ西へと車は進んで行き、ビルの都会から草深き田園地帯へとどんどん風景は変わってゆき、ついには高い山低い山が連なるところに出て、神奈川県を過ぎたのかなあと考えたが、正夫は地理についてはまったく知らないの、自信がなかつた。しかし、新緑の山々が織り成す美しい景色に、正夫は何だかもうそれだけで癒されたような気がしたし、きてよかつたなあとは思つたのであつた。とはいえ、長時間、車に乗っているので癒されつつも、どこか疲れているような気もした。自然もそこまでは絶対的に、正夫に影響を与えないということか。

急に変なものを見つける。非常に高い丘があつて、その上に巨大な天狗の石像がいくつもあつたのだ。あれは何だろう、と隣の汀子ちゃんにきくと、彼女も驚いていた。結局、何だかわからなかつた。

他にも、田園風景の中に突然、西洋の城みたいなのが現れて、それはラブホテルということがわかつたり、急に、電飾の花のたくさん咲いたような巨大な建物があつて、そこはパチンコ屋だつたり、人間ってたくましいなあ、なんて勝手に感慨にふけるのであつた。

車内にて暇だった正夫は、隣にいる市村さんの恋人である汀子ちゃんについて追憶にふけたのだった。彼女と会ったのは、サークルであり、彼女が大学二年、正夫が大学三年のころであるから、もう5、6年も前の話になる。彼女は、二部生で、夜の講義の前にサークル活動をしようと部室にやってきたのだった。たしか、新入生歓迎コンパで、あの（出っ歯の）福田班長に強引に誘われたという話をきいたことがある。福田班長は、汀子ちゃんに手紙を何回か出したこともあるらしい。汀子ちゃんよりもつき合いが長い正夫は、福田さんから手紙を受け取ったことがない。多分、正夫が女ではないからであろう。福田さんが汀子ちゃんに対しても網を張っていたと声を大にしていうつもりはないが、その疑いはあったと、ここに記述しておきたい。

部室にやってきた彼女を見て、正夫は

「何て素晴らしいふとももだ！」

と思ったことは特筆すべきことである。そのときの彼女の服装が、仕事帰りのOL的で、黒っぽい上着に、何故か黒い網タイツだったのだ。話していて、そのふとももが異様に意識させられて、サークルの紹介をしている間、人間と話をしているのか、ふとももと話をしているのかわからなくなってきたくらいである。しかも、椅子の上で足を組んでいて、すごくそれが魅力的であった。

もうそんなエピソードがあったので、正夫の中で、汀子ちゃんというと、生粋の熟女、という印象が根付いてしまったのだ。そのイメージは不思議と、今も変わらない。あれから5、6年たったがまったく歳をとったように思えないのは、始めから、正夫の中では、熟女というイメージが大きかったからかもしれない。

そのときの、汀子ちゃんは、昼は会社の事務をやり、夜は大学に

行くという非常にハードスケジュールなOLであった。疲れているOLの黒の網タイツの熟女、というのが、正夫の長年抱いてきた汀子ちゃんのイメージなのである。

だが、彼女はそんな生活からはおさらばしようと、大学を卒業すると、市村さんと同居して、仕事をセーブして自分の趣味の世界に生きることにしたらしかった。前にも書いたが、彼女はミステリー作家志望でもあったのだ。

そして、その時期から、正夫の中での「疲れているOL」というイメージが合わなくなっていたのである。汀子ちゃんは、だんだんほわん、というような感じの女性になって、前に見せていた苦労人めいた言葉使いもしないようになって、まったく別の女性に変わっていったのであった。

それを良いとるか、悪いとるか。別にどちらでもいいし、本人がそつちの方がいいというのなら、かまわないが、正夫は疲れているOLというのも好きだった。

いずれにせよ、他人の恋人のことなのだから、正夫には関係がないのであるが、しかし、考えてみると正夫にもチャンスはあったのである。というよりも、市村さんが告白した時点では、正夫の方が汀子ちゃんと親しかったのだ。正夫は汀子ちゃんに東京の大学から千葉の家に帰るのが面倒なので、アパートに泊めてくれよ、と迫ったことさえあった。もちろん冗談であるが。

とにかく、二人は普通に親しくて、小説の話などをしていたが、今にして考えると、小説の話は、正夫が小説に関して思いついたことを一方的に、汀子ちゃんに話しているだけであった。彼女はミステリー小説が好きだったのであるが、正夫は何か別のものを書くこととしていたのである。

しかし、それは他人がわかるようなものであつたらうか。正直な話、それは自分でも何を書いているんだかよくわからない小説なので、自分でもわからないから他人にもわかりようがない。正夫は、多分、一生、自分の書いている小説は理解されないと思っている。

そして、書いている当人も理解してやらないと決意しているふしもあった。

正夫は、ふと、車の外のサービステーションの看板を見ながら、「もし自分と汀子ちゃんがつきあったらどうなるか」をシユミレートしてみたが、残念ながら、それほど明るい未来が予測できなかった。恐らく、お互いに苦虫を噛み潰したような顔をして送る最下層の人間の同棲生活なのであろう。しかも、その想像の中の彼女は、疲れたOしなのである！これこそ、汀子ちゃんにとって、およそ考えうる中でも最悪の未来のひとつではないであろうか？

第75話 「山荘にて 3」

それにしても、ある日、いきなり告白した市村さんは頑張ったものである。汀子ちゃんと、正夫と市村は、サークル員として親しくしていたのであるが、汀子ちゃんが今つきあっている男について、いろいろな不平をいつていたのであった。それについて、正夫はアホのようなポカーっとした顔できいていたのであるが、市村さんは何か思うところがあつたのであろう。ひよっとしたら目を光らせていたのかもしれない。

そして、このままでは、彼女は幸せになれないと、急に思い立って、市村さんは電話したらしかった。

「俺と結婚してくれ」

と彼はいつたらしい。

後で語ったところによると、どうやら市村さんは、トイレでそのことを思いついたのらしい。

その時は、痔だったのか痔ではなかったのか、覚えていないが、正夫の記憶では、市村さんは、ここ数年、痔になったのであり、最近の話ではないから、多分、違ふと思うが、もしかすると痔の始末をしながら思つたのかもしれない。しかし、痔の始末をしながら、そんなことは思いつかないから、この時は痔ではなかったのである。関係ないが、前にも書いたが、市村さんはもう少し肉料理を抑えた方がいいかもしれない。料理といったら、肉。という彼の気性は、土佐人気質なのだろうか。それは痔にもなる。

痔のことはともかくとして、こうして二人は結ばれたのであった。二人が結ばれる前か、それとも直後だか忘れたが、そういえばドイツニーランドに、男連中と汀子ちゃんとで行く、というイベントがあった。そのイベントは強行イベントで、前日に、正夫と市村さんは、延々、家で夜通し語り、睡眠時間が一時間しかないのに、ドイツニーランドに行く、というものであつたが、(まあ、寝ればよか

ったのであるが）、途中で、正夫は音をあげて昼にデイズニールランドから退出したが、市村さんは粘り強く最後の夕方のパレードまでいたのだ。

デイズニールランドのことはともかくとして、二人はつき合うことになったのだった。正夫はよく市村さんの家に泊りに行っていたから、凄く良く覚えていて。二人は、いつもお互いの体を探り合っていて、いちゃいちゃいちゃいちゃして、見詰め合って笑い、額をぶつけて人間の言葉ではない何かを囁きあっていた。それがその内エスカレーターとして、目の前で抱き合ったり、キスしたり、それはもう傍から見ていると恥ずかしくなるほどであった。あるときは、市村さんの灰色のスウェットのズボンの股間のあたりを、汀子ちゃんがぐねぐね撫でさすっていたときもあった。

「うわあ、なまなましいな」

と正夫は思ったものである。

また、あるときは、市村さんのアパートに行こうとして

「あつ、ごめん。」

今やっているから」

といわれて入れないこともあった。

そして、三十分後に行くと、ドアが開いて、市村さんがいて、彼女が布団で寝ており、市村さんは彼女の中の具合とか形状とか行為について別にこちらもきいていないのに、話すこともあったのだった。

そういった期間を経て、彼女は正夫の中で「疲れているOL」から別の女性へと変貌していったのである。まさに蛹かまぼこが蝶かまぼこになるかのように…。

二人は同棲して、幸せを獲得したのだろうか。市村さんは同棲してから数年して

「まあ、そんな幸せじゃないかな」

とつぶやいていた。

しかし、それは現在の幸せな状態に慣れているのかもしれないし、

もつとも、市村さんはアルバイト、彼女もアルバイトだから、告白の言葉に反して、結婚しているわけでもないの、社会的に見たらそれほど幸せではなかったのかもしれない。とはいえ、それだつて上を見ればの話であり、一人暮らしでもてない、後輩の女の子に手を出そうとして、遠まわしに断られるような正夫と比較したら、ずっと幸せに決まっている。

だが、そういうことをいうと、市村さんはこう反論するに決まっているのだ。

「マサさんねえ…そういうけどさ。同棲つてやつは結構、互いに気をつかって、ピリピリ神経の糸を張り巡らせる、神経戦になることだつて多いんだよ。だつて、お互いに、生まれたときから、いろんなルールがあつて、それに従つて、生きてきたんだから、それを帳尻合わせしなきゃいけないんだよ。狭いアパートで。まあ、俺はこれでも『他人に合わせること』というのを学んだと思うよ。それは勉強になつたが、ひとりの方が気楽でいいや、つて思うことだつてあるんだから。まあ、それは向こうもそうかもしれないけれどもね。人間なんてそんなものだよ」

正夫はいろいろなことを妄想していたが、最終的にはミツチャのところへ行き着くのはこれは当然といえば当然であった。正夫にとってもっとも切迫していたのはミツチャのことであった。車内でも話をふられると常にミツチャのことを話していた。まるでミツチャ評論家のようにであった。いや、もし、ミツチャ評論家になれるのならなってもいいとさえ思っていた。

それほどのご執心であったのだ。

そもそもがミツチャの思い出は膨大なものがあり、そのどれもが美しく記憶の美化によって彩られていて、恍惚としたものがあつたが、追憶の大輪の花の花びらのいくつかを紹介してみよう。

冬のある日に、コートを着た新入生のミツチャが、サークルの部屋に用もないのにやってきたことがあつた。正夫はそのとき、だらしのない格好で、古本屋にて百円で買った小説を読んでいたが、いきなりミツチャがきたので姿勢を正した。

「寒いですねえ」

ミツチャは、正夫からほんの少し離れた席に座った。

「ああ、そうだねえ」

「先輩、何読んでいるんですか」

「うーん、まあ、ややこしい小説だよ」

「そうですか。」

へえ」

「ややこしそうですらう」

「そうですねえ」

正夫は、無関心を装おうとしたが、正直、そんな演技もできなかつた。

「それにしても珍しいねえ」

「休講だったんですよ。」

だから、早めにきたんです。」

ああ、もう講義って退屈ですね」

ミツチャは、猫のように、テーブルに身を投げ出して伸びをして、こつちを見つめた。

その可愛らしいことよ。

寒いからであろうか頬が赤らんでいて、目が黒めがちで本当に壮絶なほどの美少女であった。いや、一般的な尺度では美少女ではないかもしれないが、よくよく見ると顔の形とかそれほど美人の黄金比になっているとかそういうことはないが、生命のオーラが感じられた。あと五年ぐらいでおばさんになるだろうな、という兆候さえもあったが、それでもあのとき、その瞬間はまぎれもない美少女であり、それは仮に彼女が80歳になっても正夫にはわかるような根本的な美少女のもつきらめきであった。

もうひとつのシーンは、一緒にキャンプに行ったときのことであった。

周囲の人間が「マサさん」と呼ぶのに対して、彼女は「マサ先輩」と呼んでいたのであるが、キャンプで朝起きて水でもくもうかと思ったら、

「マサ先輩」

というミツチャの独特な甘い声がきこえてくる。

「朝ごはんですよ。」

マサ先輩」

ミツチャは微笑んで、ソーセージ入りのパンを手にもって振っていた。

もう、この場面だけ切り取ってみると、新婚生活のワンシーンみたいになっているではないか。

しかも、正夫は

「ああ、何て幸せなんだ」

と感激していた。

いつそ、このまま二人でこのキャンプ地、森で暮らしていたい。
毎日、毎日、彼女はソーセイジ入りパンを手にして、正夫を呼ぶ
のである。

たまには、ソーセイジ入りパンでなくてもよいが…。

とにかく、そういった恍惚になるほど美しい思い出がいくつあ
ったのだ。

第77話 「山荘にて 5」

山荘へ向かう車はまだ山荘へは着かず、途中のサービスステーションに止まったのだった。そこで一行は、おやつを買って、ベンチで休んでいたが、市村さんのカップルが少し離れたところにある小型な日本庭園みたいな道が八の字になっているところを散歩する。正夫は、美園さんに、延々とミツチャについて力説していた。

美園さんは、体は大きいが高かった。錆び付いた鈴がコロコロ転がるような声であった。

「で、マサ君は、そのミツチャという娘とデートでもしたのかい」「いや、していませんよ」

「何だ、まだ手を出していないのかい」

「はい。けれども出します」

「そうかあ。」

はつきりいって、僕はもうデートを数回したのかと思ったよ。

何かそんな口ぶりだったし

「いや、違うんですね」

「すべては君の妄想だったのかい」

と目を細めて煙草をふかした。

「妄想っていうか現実ですよ」

「ほう、そうかい。」

じゃあ、マサ君のために、明日、恋愛の占いをする神社に連れて行ってあげようか

「いいですねえ。」

ありがとうございます。

本当に美園さんっていい人だわ」

「それは、他ならぬ市村君の親友だし、せっかくだから、それくらいはするよ。」

そのかわり……」

美園さんは、正夫を睨みつけると、肩をガツとつかんだ。

「もし、恋に破れたら、そのときは、俺にその娘を紹介するんだよ。」

フフフフフフ

「そりゃ、無茶ですよ」

「何だい。」

僕のいうことがきけないっていうのかい」

という和美園さんが組み付いてきた。正夫は身長が高い方であったので、大男が大男に組み付かれるという図は、周囲からしたらものすごく目立つ。

「やめてください。」

やめてくださいって。

わかった。

紹介します」

「よおし、解放してやるう」

という和美園さんは不適に微笑んだ。

もちろん、これは冗談であり、美園さんもそんなことを本気でしてもらおうとは思っていないであろう。

では、何でそんなことをするのか。

多分、理由はない。

どう説明したらいいかわからないが、美園さんは、こういうことをよくする人であった。

第78話 「山荘にて 6」

サービスステーションからさらに進んで、山地みたいな景色が広がり、だんだん夕闇が深まってゆくところに駅について、車は止まって、蕎麦屋に寄ったのだった。石原裕次郎や、美空ひばり（違うかもしれない？）の色紙が壁にかかっている蕎麦屋で、確かに麵に腰があつておいしかった。

しかし、正夫は基本的にアレルギー性鼻炎で常に鼻がぐしゅぐしゅしていて、そんなに味はわからなかった。下手をすると、コンビニやスーパーで買った蕎麦を出されても勘違いするかもしれないかった。美園さんにしては、うまいものを食べさせる甲斐のない部類の人間、それが正夫であつた。

「ああ、ミツチャをここにつれてきて、うまいものを食わせて、別荘とかに泊まらせたら一発で落ちるに違いない」

と頭の中がミツチャでいっぱいな正夫は小さく叫んだ。

「それは落ちるかもしれないね。」

もつとも、その場合は僕に落ちるんだろうけれどもね。

フフフフ」

と美園さんは不敵に笑った。

それから車は出発して山中の道を進んで、正夫もテレビで見たことのあるおしゃれなタイルを並べた通りに出た。左右に都会的な店構えの商店がひしめいている。美園さんはその中の蜂蜜屋に行き、蜂蜜を買って家族へのお土産にするつもりらしかった。

「この蜂蜜はすごく有名で特別にいいんだよ」

といっていた。名前は忘れたが有名なのであろう。

夕日がすっかり落ちて辺りの森林が真っ暗になったところに、車は山道の入り組んだ道を上つてようやく山荘の前まで到着した。山荘は、傾斜地に立っていて、丸太で組んであつて、外観はチラッと見

であるが結構大きかった。

「美園さん」

「何だい」

「俺は美園さんのあの、おニヤン子クラブの踊りを見たいんですよ。今夜こそ、見せてくれますよね」

「もうね、車を一日中運転してクタクタなんだよ。まったく、市村君か君でも運転を変わって欲しかったね。」

正直な話」

「いや、すみませんねえ。免許もってないし」

「とにかく、おニヤン子はなしだな。」

オニコクラブって、エロ本なら見せてあげるけれども」

「あ、いいです。」

俺もそんな元気ありません。

今日は寝ましよう」

いったん別荘の玄関前に止まり、市村さんと汀子ちゃんと正夫を降ろして、美園さんは車を別荘の庭に止める。

この二泊三日のバケーションにおいて、どんな出来事が起こるだろうか。正夫は少しはワクワクしていたが、ほとんど眠気の方が勝っていたのは、まぎれもない事実であった。

第79話 「山荘にて 7」

門を開けて美園さんは山荘の中に入る。入り口近くで転びそうになった。少し、傾斜がかかっているのだ。そして玄関は普通の家よりも少し小さく感じた。左手が倉庫室みたいになっていて大量の漫画がおいてあった。暇なときには、市村さんがその部屋にある漫画、たしか「バツ&テリー」を読んでいた。玄関のすぐ前に、地下へと通じる小さ目で急な角度の階段がある。それとは別に廊下はまっすぐ奥へと続いていた。玄関のわきの靴箱には、木彫りの熊の人の形があった。

「大したものですねえ」

と正夫は感心しながら急な階段を降りる。するとそこは結構広いダイニングルームになっていて、台所があった。ベランダもあって、真っ暗な森が広がっている。この山荘は傾斜地に立っているから、ここは地下室というよりも一階であった。

部屋には趣味のいい調度品が溢れており、液晶テレビ、カラオケセット、DVDなどがあって、棚には洋酒がたくさん並んでいた。ソファ、ガラステーブル、カーペット、どれをとっても非常に瀟洒で上流階級のものであった。

「じゃあ、まずはショートケーキ食べようよ」

という和美園さんは、途中で買ってきたショートケーキの入った箱をテーブルにおいた。コンビニで買って来た、烏龍茶などの飲み物もちゃんと用意している。

「うわあ。」

「何かいいなあ」

正夫は、テレビをつける。

衛星放送で、黒人女性がジャズを歌っていた。正夫はこんなところでジャズがきけるなんて、と少し感激して涙が出そうになった。

「やっぱ、美園さんは最高だよ」

と思わず叫んでしまう。

シヨートケーキはたくさん種類があったが、何故か、いつもこういうときに、汀子ちゃんと正夫の好みは被った。

「マサさんっていつも、私の欲しいものをとるんだもの」

と汀子ちゃんは笑った。

しかし、それは人間に關してもそうだったかもしれない。汀子ちゃんも、正夫も、市村さんのことを気に入っているわけだ。とはいっても、それはもう、どっちが好いたとかではなくて、大きく見て、縁なのかもしれない。そう考えると、すべては縁なのか。よくわからないが、引き寄せられるものがあつたのだ。だから五年六年とつき合いを重ねているのであつた。そして、今、この山荘で、美園さんと一緒に、四人でケーキを食べている。

「よきかな」

よきかな」

と正夫は笑顔であつた。

汀子ちゃんと同じく正夫にしたって、市村さんが好きであるが、当然のことながら、その好きのありかたは、少し違うのかもしれない。男というものは最終的には自分が好きなのであって、どこかで自分を肯定している人を求めるのだ。

それは逆もそうで、どこかで市村さんにしても、正夫に自分を肯定してもらいたい、というのはあるのだろう。たとえば、市村さんは正夫に自分のギャグのセンスを肯定して欲しいと思うかもしれないが、正直、正夫は他人のギャグに関しては目茶苦茶厳しい人であり、市村さんのギャグで笑うということは、出会ってから一年目くらいで一切なくなつたといつてもよかつた。

しかし、それにしても会っていると非常に楽しい。何だかわからないけれども、彼は楽しい人なのである。それにしてもギャグはつまらないが、しかし、自分で意図してやらないが結果としてギャグになっているところが多く、たくさんあるし、人の話をよくきくし、他人のギャグに巧妙に突っ込むし、そこにおいて、楽しい空間を作る天才であつた。この彼の楽しい空間を作る天才なところをもっと多くの人が認めても良いような気がするが、なかなか、知られていない才能だと思う。

ということではやはり、正夫は市村さんをかなり買っているわけであるし、肯定している。それはあまり本人にはいわないことであるが、もつと声高に叫んでもいいのかもしれない。

「市村さんはすげえやつなんです！」

彼は楽しい空間を作る天才です！」

というわけで、市村さんの良さを多くの人に知らしめたいのであるが世間は、彼が大学を八年で卒業して（これは読者には初めての情報かもしれない）、家でニートみたいなのをしている時期があ

って、そういう時期のことをあげつらったり、現在、派遣社員をやめてファミレスの厨房をやっているのであるが、それをあげつらったりして、せつかく人の良いところを冷徹な社会的な観点で、切り捨てようとしてしまうのだ。

「あああ、社会、糞食らえ！

社会的、糞食らえ！

どっちも糞食らえ」

と正夫はそれを考えるたびに腹が立つ。

「どうした。

マサさん」

と市村さんは、風呂上りでソファーに座った。

「いやあ、ふと、俺は社会に対して腹が立ってきましたよ。

何なんでしょうかね、社会ってやつは」

「いや、俺はそれよりも派遣に腹が立っているんだ。

派遣は悪魔のシステムだ。

あれは人間を奴隷にしようとさせる最悪な制度だね」

「そうなんですか」

「何か、俺、派遣社員をやっていたときに、ムカムカムカムカしていたんだよ。社員とか無言で人を見下すじゃない。で命令するんだよ。そいつの目が語っているんだよ。

『はははは！

何、派遣なんてやっているんだ！

俺は社員だ。勝者だ！

てめえら、俺のいう通りに働け、ボケエ』

ってな」

「そうなんですか」

「だから、これだけはいつておく。派遣社員だけはやめておけよ。それをやるのなら、まだアルバイトの方がはるかにましだよ。派遣制度を作ったやつの家になら、俺は火をつけてもいいね」

「うおっ、過激ですね。」

とにかく、社会つてやつは、たとえば、市村さんの良さとかを評価しませんよね。それはまあ、理屈で考えてれば当たり前なんですが、俺のこの感情では理解できないですね。それこそ理不尽ですね」

「そうか、そうまでいわれると、うれしいね。」

俺を褒めても何もでないけれどもさ」

「何の話をしているの」

と美園さんが入り込んできた。

「いやあ、派遣がいけないって話をしていたんです」

と正夫がいう。

「派遣がいけないのか。」

で、派遣のどこがいけないんだい」

そのとき、美園さんの目が怪しく光っていることに、真っ先に、

正夫は気づくべきであった。

このときは、まさか、あのような悲惨なことになるとは、つゆにも知らずに、正夫は何も考えずに、悪夢のような魔の議論に足を踏み込んでいたのであった。

第81話 「山荘にて 9」

「あつ、派遣がいけない、というか悪いですね」
と正夫はいい直した。

「そうか。」

で、どこが悪いんだい」

と美園さんは追及してきた。

「そりゃ悪いでしょう。」

人間を機械でしかみていないんだもの」

「それは、派遣が悪いんじゃないのじゃないの。」

それは職種によるんじゃないの」

「けれども、ねえ、市村さん。」

そもそも派遣という制度自体が…」

と同意を求めようとしたら、市村さんが座っていたソファアームはもぬけの空になっていた。しょうがないので振り返り、話を続けることにする。それにしても話の空気がおかしくなってきたような気がした。美園さんの顔が真剣というか、何者かにとりつかれたような顔になっている。鼻息も荒くなっている。

「俺は大学を卒業してすぐに派遣やっただんですが酷かったですよ。」

コールセンターやっただんですが」

「それは、派遣が悪かったの。」

本当に派遣が悪かったの」

と美園さんは、正夫の目を直に覗き込んだ。

「俺はそうだと思いますよ」

美園さんは鼻から大きな息を吐いた。

「それは、派遣がどうのこうのというよりも、コールセンターの問題だよ。ああいうところは、常に電話との向かい合わせだ。ノルマもあるし。そうだとしたらどうしても機械的になるよね。はつきりいって。僕はやったことはないけど」

「まあ、そう考えればそうなんですが」

「じゃ、悪いのは派遣じゃないじゃん」

と美園さんは断定するように大きな声でいった。

「いや、悪い部分もありますよ。保障がないし」

「アルバイトも保障がないよね」

「アルバイトよりも時間多く働くじゃないですか」

「だから、アルバイトよりも時給がいいんだよね」

というソフトアールに座りなおした。

「まあ、そうですね」

「僕はね、やっぱりね、被害者意識はいけないと思うんだよ。皆、

被害者ぶっている。それで社会がよくなると思うのかい。被害者意

識である内は、被害者にしかならないよ」

「では加害者意識になればいいんですか」

「加害者意識とか、そういうことじゃないよ。」

被害者意識が駄目、といっているんだよ。それだけの話だよ。そ

れと加害者とはまったく別の問題だよ。

そもそもが派遣社員になることによって、何の加害者になるんだ

よ」

「じゃあ、何がいいんですかね」

「何も良くないよ!」

という和美園さんは上気した目で、正夫をにらみつけた。

しばらく沈黙になる。

「何も良くない。つていわれても…」

正夫は心の中でつぶやいた。

美園さんは、しばらくして急に話を復活させた。

「まあ、僕は今は運送会社の社員だけれどもさっ。

それでも、高校のときは、

『東京六大学以上出ないやつとは口をきかないぞ』

つていつていたんだ。

それが病気になって、やっと高校を卒業するだけになってしまっ

たんだよ。

僕は、笑われたね。

結局、そのころの友人は総スカンさ」

「あつ、俺も似たような経験ありましたよ。

俺、頭の悪い高校に通っていたんですよ。

それで、有名大学のH大というところに受かったんですが、高校の友人たちのところに電話しまくりましたもの。

『俺、H大受かったんだけども』
つて。

すごく嫌われましたよ」

という話を終える前に、美園さんは話を続けた。

「僕は落ちたんだよ」

「あつ、全然、違う話でしたね」

「僕は落ちて、それでいろいろあつて、運送会社に就職したんだよ。こんな僕でも社員だよ。だから派遣社員は甘ちゃんなんだよ。そして」

美園さんは叫ぶようにいった。

「派遣社員には反対なんだよ」

そういつているときの美園さんの目がおかしかった。空中の何かを見ていた。

「やばい。

これは、やばい」

正夫は、理不尽さ、というよりも、恐怖を感じて、獣に追われる小動物のように市村さんたちのいる寝室へと逃げた。

「いやあ、すごい目にあつた」

「寝室に行った正夫は、横になつてゐる市村さんにささやいた。何故か、寝室は、二部屋に分かれていた。」

市村、汀子、正夫ともうひとつ、美園さんの部屋であつた。

「あ、何か議論したんでしょ」

「ええ」

「あの人はああいう人だから議論とかはしないほうがいいよ」
「ですね。」

「つていうか向こうから仕掛けてきたんですがね」

「どちらが仕掛けてきたとか、あの人の中ではどうでもいいんだよ。」

「あの人の中では世界は静止しているんだ。」

「自分中心世界があるんだよ。」

「そこから、論理の網の目が伸びている。」

「中華思想みたいなものだな。」

「俺も、話していて、切れそうになつたことが、今日で五回はあつたからね」

「と市村さんはいう。」

「えつ、あんなに仲良さそうに話していたのにですか」

「そうだね。」

「まあ、いつものことだが。」

「人間誰だつてそういう部分あるじゃないか」

「まあ、それはそうかもしれない」

「俺だつて、大学八年生だつたしな。」

「アッハハハハハ」

「市村さん」

「はい」

「俺いつも思うんですがね。」

俺たちの周りのやつらってなんで、いつも一癖、二癖のある、欠陥不良車みたいなやつらばかりなんですかね」

「そりゃ簡単だよ」

と市村さんは笑った。

「だって、それは、俺たちが一番の欠陥不良車だから、引き寄せられてゆくのださ。そういう人々がね」

「そうか。」

そうなのかもしれない。

ああ、今にして思えば、小野田ちゃんは欠陥不良車だったなあ。

そして、ミツチャモだ」

「ミツチャは、大物だよ。」

果たして、マサさんに太刀打ちできるかなあ」

「美園さんが明日、占いの神社に連れて行ってくれるので、そこで判明すると思うんですよ」

「まあ、占いで何が出ても行くんだろうから、同じことだけれどもね」

「向かい風か追い風か、それを知るきっかけにはなるじゃないですか」

「そうだねえ」

市村さんは、窓から外の暗い森の中を見ていた。空気が澄んでいくのだろう。

「人間って愚かだな」

「愚かですよ。」

しかし、愚かじゃなかったら、多分、人間じゃないでしょう。

それは」

というとき正夫は少しふくれて布団を被って寝た。この布団がまた綿がちゃんと入っていていい布団だった。ちなみに部屋には、武者小路実篤の絵があった。何でも一気にポンと言いつ切る彼らしい簡素な風景画であった。山があり、木があり、田があり、家があった。

美園さん曰く本物がどうだかわからないらしい。

市村さんの隣では、汀子ちゃんが横になっているが、寝ているかどうかはわからない。この前、汀子ちゃんが寝ていると思って、市村さんとかかなり際どい女の話をしたことがあって、それが原因でシクシク泣いていることがあった。

次の日の朝、正夫は浴槽に体を浸らせて、窓の方向を見ながら人生というものは何か、ということを考えていた。その浴槽は真っ白の珧瑯であつたが、大きさが2メートルくらいあつて、正夫のいつも使っている狭いやつとは違った。しかもスポンジみたいな枕みたいなのでついている。これは極楽である。窓の向こうでは森林の中で小鳥が鳴いている。体を半分浮かばせて、正夫は自分の臍を眺めつつ、心に浮かぶよしなしごとを自分の中で反芻していた。

波を手で作り、鼻のところまで顔を埋めて、水面を潜水艦の気持ちで眺めたり、意味もなく潜ったり、「美園のバカヤロウ」とつぶやいたり、正夫は非常にリラックスしていた。そういうときにいいアイデアが思い浮かぶものであるが、今までいいアイデアをどういうことに使っていたのかが思い出せない。強いて言えば、二ト生活を送るとするのが一番いいアイデアだったのかもしれない。

そして、ついついミツチャのことを思うのは人の常であろう。あの学者によると若者の考えていることの四分の一は、異性のことらしい。これは違う風な言い方だったかもしれないが、大方こういうようなことだと思う。

ミツチャは、正夫が好きだったところの一年生のミツチャとは別人になっている。ということは付け加えなくてはいけない。彼女は蛹さなぎが蝶になるように、まったく別の女性へと変化していったのだった。

二年生になって、正夫のいた創作班から、小野田ちゃんとともに脱班して、人形劇班に所属したミツチャは、まずその班にいた同年のYという男をたらしこんで恋人になった。それはまさにたらしこんだ、という表現が当てはまった。正夫は傍で見ていたが、ミツチャが必死になって、甘い言葉をかけて、体にタッチしたりして、アプローチしていたのだった。清楚な人間だろうと勝手に思い込んで

いた正夫はそのミツチャの豹変振りに驚いたものであった。

そのミツチャの罫にはまったYは、人間としての毒気を抜かれてしまった。正夫が思うに、Yという人間はミツチャの甘いエロティックな攻撃によって、人間としての生気を抜かれたのだ。それが証拠に、ミツチャとつき合ってから、めつきりとYは人間としての活気がなくなつて、卒業後は、日本という土地に耐えられなくなり、今は東南アジアで働いているという。

正夫にいわせると、それもミツチャのせいである。ミツチャは毒物なのだ。Yの蜜月は三ヶ月で終わった。それはミツチャという吸血鬼がYのエネルギーを吸い取ったのである。だから気をつけなくてはいけない。本当に魔性の女なのだ。

「正夫さんつて電波系ですね。」

「アハハハハ」

と自信をつけたミツチャはそうやって正夫をからかったことさえある。

「あたし、一年のときは猫をかぶってました。」

「今が一番自然でいいかな」

「なんてことをいったときもあった。」

「正夫はそれに対して、曖昧な笑顔を浮かべるだけであった。」

ミツチャ三年のとき、飲み会で一緒したが、そのときにTという小柄な女性がいて、酔っ払った二人は、お座敷で蛇のように、正夫の前でグネグネ絡みあったことがあった。

「何てエロいんだ」

「と正夫は思ったものである。」

あ のとき、体のどこかでも触っておけばよかったかもしれない。もしくは加わつてもよかったのかもしれない。と正夫は数年たった今でも思っている。

「マサさん。」

「そろそろ出発するよ」

市村さんの声であった。

さあ、今日は恋愛について占ってもらおうのだ。

正夫は風呂からあがると、腕をYの字に伸ばして

「うおおおおおおおおお」

と叫んで

「しゃあああああああ」

と気合を入れた。

「かかってこい、ミツチャ」

と叫んだ。

正夫の中で、恋の前哨戦は始まっていた。

第84話 「山荘にて 12」

美園さんは車を運転して正夫たちに、この別荘地の中でも有名なところを案内したのであった。この人は、たまに変なことをしてく
るが、人間としては善人の部類に入る人なんだろうなあ、と正夫は
思った。もつとも本当の善人ならば、そんなことを改めて考えさせ
ることもないわけであり、それは何かひっかかりがあるということ
でもあったが。

それから、火山岩の山積した「鬼押し出し」や火山博物館に行く。
火山博物館はわざわざ入る必要もなかなあということが入場はし
なかつた。そして滝に行く。滝は、非常に綺麗で清涼感があって、
しぶきが飛んでなかなか楽しかった。

市村さんは、
「こつちやっているいろいろなところに引つ張りまわされるのは嫌なんだ
よ」と不機嫌であった。

しかし、そういうのがなかつたら、何のために旅をしているのか
わからない。市村さんにはそういう無茶苦茶なことをいう部分があ
つた。もし、市村さんの望みどおり、山荘にいただけで外に出歩か
なかつたら、それはそれですごく詰まらない。というかニートの正
夫にしてみれば、それはいつもの彼の普通の生活であった。

そして、地鶏をたくさん飼っている定食屋みたいなおとこへ行き、
地鶏の料理を食べる。

店を出た後で、市村さんがいった。

「あの鶏の肉つて固くて不味かつたですね」

「固かつたかい」

「ええ。すごかつたですよ」

「そうだつたかなあ。」

地鶏つてみんなああいうものだよ」

という和美園さんは車の中に入った。

正夫にしてみても、地鶏はたしかに固かった。しかし、自分の味覚は無茶苦茶なのであまり文句はいえないような気もした。だが、市村さんが同じことを思っているので、心強い気持ちになったことも事実だった。

「やっぱり固かったですよええ」

「それは君が地鶏を食べたことがないからだよ。」

ああいうのを上品な味というんだよ」

と美園さんは反論した。

その問題は、その日の夜にまた再発することになる。

それから恋愛占いをやる熊野神社に行くことになった。

正夫は少しワクワクしながらクジを買う。

心の中で、ミツチャのことを情熱的に思いながら。

引いたクジの結果は、一文一文詳しくは思い出せないが大体このような感じの文章であった。

「あなたの運勢 大凶

今、あなたが心の中に思っている人と、あなたは決して結ばれることはないでしょう。いち早く手を引く方が身のためです。もし、無駄な抵抗をして、強引にことを進めるのならば、信じられないような恐ろしい不幸があなたの身にふりかかるでしょう。

あなたにとって、思い人は魅力的でしょうが、あなたとつきあうことによつて、思い人も不幸になります。二人は最悪の組み合わせであり、万が一にもうまくいくことはありません。そもそもが結ばれる可能性もありますが、もし結ばれたとしても非常に不幸な恋愛になるでしょう。

だから、この恋からは身を引いた方がいいのです。身を引いてしばらくすれば良い人が現れると思いますので、体勢を立て直しましょう。捲土重来という言葉もあります」

正夫はこのクジの結果を読んでしばらく絶句した。

「細木数子だって、ここまで酷いことはいわないよ、これ」

正確にはこのように書かれてはいなかったが、ありとあらゆる占いの項目がマイナスの結果を表していて、まるで、この占いクジがいや、この神社が全力でもって、この恋を止めているようにも感じられた。

もちろん正夫の情熱はこのような占いの結果で萎えてしまうようなものではないが、それでも、この日に感じていた正夫の名状しがたい不機嫌さを三倍増しにさせてくれた出来事であった。

正夫は、夜になると、例の寝室で市村さんから、

「あの鶏肉は固かった」

という話を延々、一時間近くきかされて、この旅は何だったんだろうかと思わざるをえなかった。

あの恋愛神社から、山の上の茶屋に行き、そこでは珍しい餅を食べたりして、満足であったが、それから急に下痢になり、車に乗っていて、限界かと思えるところで、コンビニのトイレに行き、便器にしゃがんで、無上の幸福を味わった。

尻より下が溶けるような感覚で、本当に、これはなかなか気持ちが悪かった。あまりにも気持ちがいいので、もうこのまま便器から移動したくなかった。

トイレのドアを開けると、汀子ちゃんに市村さんがこんなことをいつていた。

「お前は都会の女だなあ。

ここら辺の女性じゃ適わないよ」

汀子ちゃんは、目元に隈が何重も描かれていて、あきらかに厚化粧になっていた。正夫は、そのことについて、山荘に帰ってから、市村さんに忠告する。

「俺はファッションについては、よくわからないけれども、汀子ちゃんはあるな厚化粧する必要はないですよ。

あれだったら素のままの方が綺麗だし、そもそもあれが都会の女性ってことはないですよ」

油断しちゃいけない。

というか、いくら恋人同士の会話でも我田引水もはなはだしい。

そもそもこの山荘近辺には、結構、クオリティーの高い女の店員さんがたくさんいる。

もちろん、そんなどうでもいい指摘をしなくてもよかったが、それでも正夫の良心がそれを許さなかった。

こういう場合、良心というのか。

何だかわからないがぶつけてみた。

この意見には、美園さんも賛成だった。

「彼女は結構いいよ。」

まあ、今朝、市村君が寝ているときに、マサ君と、一緒に居間で話そうって誘ったら断られたけれどもさ」

それも事実であった。しかし、それを根に持つ心の狭い正夫ではないが、無意識で根に持っていたかもしれない。

そして、それから、山荘の近くのピザ屋に行くが、混んでいるせいなのか、その店員の態度も悪かった。

しかもそれに露骨に市村さんは切れていた。

いろいろなことが、正夫の神経を逆なでしていた。

美園さんは、話を通じないし、市村さんはすぐに切れるし、汀子ちゃんはこつちを適当にかわしているだけだし、何か、正夫は自分は何故生きているのだろうか、ということまで考えたくなくなった。

「本当に寂しい男だよ。」

俺は

とつくづく思えてきた。

寝室での市村さんとの会話は続いていた。

「やはり、マサさんはミツチャを追い続けるのかね」

「そうですね。」

他にすることもないし」

「そうか」

「小説に書くこともないですしね」

「だろうね。」

まあ、もう俺がマサさんにできることってないな。

俺はね、空手を頑張る、それだけの男だよ」

「いや、いいじゃないですか。

それは素晴らしいことですよ。

俺だつて小説を頑張るだけですもの」

「そうか。

けれども、それでいいのかね。

とにかく、それでも俺は思うんだよ」

市村さんは、腕を組んで仰向けになつて天井を見ていた。

「あの鶏肉は固いつてね」

「もうね、その話、いいですよ。

固いことは確かですから」

「もうこうなつたらこの思いを小説に書いてくれ。

百年後、二百年後、誰かが俺の思いをわかつてくれるだろう」

「そうですね。

俺もそこはわかつていますから」

ということと話していると、ふすまが開いた。

「君たち、きてくれ」

美園さんであった。

第86話 「山荘にて 14」

廊下をさっそうと歩き、地下室みたいな一階の部屋への階段を降りてゆく美園さんのがっしりとした背中を見ながら、二人がついてゆこうとすると、

「あっごめん。」

階段の上で待ってて」

と美園さんはドアを閉めてしまった。

「美園さん。」

何をするつもりだろうか」

正夫は市村さんだったらつき合いが長いし、知っているかもしれないからきいてみた。

「わからない。」

何だろうかね」

市村さんも不思議そうな顔をしていた。

「俺はね、けれども、美園さんは何かをしてくれるとは期待していませんよ。」

彼には俺たちには計り知れない大きなものがある。

ってね、それは思っていますよ。」

絶対にどこかが突き抜けていますからね」

「まあ、悪い方に突き抜けている方が多くて、いらいらすることもあるが、それはそうかもしれない」

大きな足音が迫ってきて、血走った目をした美園さんの顔が、開いた戸口からニユツと出た。

「さあ、スタンバイOKさ。」

はじまるよ。」

俺のリサイクルがっ」

例の部屋に行くと、カラオケセットが準備されていた。

美園さんはマイクを取る。

「どうも、みなさん。」

今日は僕のために集まってくれてありがとう！

今日は、鶏肉が固いかいうクレームがあつたり大変だったけれども、僕の中では、みなさんに十分、満足ができる観光ができたと思います」

「ブラボー！美園さん！」

何故か知らないが、正夫はソファーに腰掛けて、熱狂的に美園さんに叫んでいた。

「ありがとう。」

マサ君。

では、これから、僕が、大好きな『おにゃん子クラブ』の歌を振り付けつきで歌います」

しばらくカラオケの装置をいじってから、ソファーで座っている二人を前にして、美園さんは『おにゃん子クラブ』の歌を宣言どおり振り付けつきで歌ったのであった。

天然パーマの大男が、床をどしどしいわせて、汗を流し、シャツからはへその辺りが毛むくじやらのを覗かせながら、ときにはトランクスからお尻を見せながら、必死になって踊る姿に、そして決して上手くはないものの熟練しているようで、一音も外さないタイミングがばっちりな彼の歌のパフォーマンスを目の辺りにして、正夫は、これは前衛芸術かと思った。

彼の踊る姿が邪魔して、歌詞の内容がまったく入ってこない。彼は声を高くしてときには裏声になって歌っていた。それでも歌詞はわからない。彼の柔らかい高音と、ドタドタいう足音と、BGMだけが耳に残った。

彼は全身で、「かわいいこぶりっこ」を演じていた。まるで若い時の松田聖子の霊が背後霊になって操っているかのようにであった。

首をかしげて、グーを突き出して、舌を出すポーズをする。これは美園さんのオリジナルであろうか。

「あっ、やばい。」

「何だこれ」

「思わず正夫は呟いてしまった。

「何だかわからないが美園さんの全身から、オーラが発生して、揺らぎ始めていた。空間が歪曲しているような気になった。」

「何か、オーラ…」

「市村さんは真剣な目で見ている。」

「ああ、それは俺も思った。」

「これはまさか。」

「武術でいうところの「ゆる」かもしれない」

「ゆる？」

「そうなんだ。」

「武術の達人になると、「ゆる」っていうのができるようになるって、どこかの本で読んだことがあるんだよ。」

「俺は良く知らないけれども」

「じゃあ、これは…」

「そう、美園さんは、この踊りを通して、俺の知らない新たな領域を切り開いたのかもしれない」

「ええっ…」

「それが証拠にだんだん、何か動きが滑らかになっていくだろう」

「はい」

「確かに、初めの一曲はどこか固いものがあつたが、二曲目辺りから、妙な動きが始めて、三曲目から完璧に変質した。それは外側にあつた彼の動きが、内面化したようであつた。彼の体がふにやふにやし始めたのである。声にも張りが出てきて、女のものとは思えないが男のものとも思えないものになった。」

「じゃあ、ね」

「といってウインクして、片足をピョンと上げ、腕を真っ直ぐお腹の脇に降ろして、手を水平に伸ばしたポーズをとったときに、正夫は」

「あっ、ミツチャがここにいる！」

と思わず呟いてしまった。

結局、美園さんは八曲歌って踊り、パフォーマンスが終わると、二人は惜しめない拍手を送る。

寝室で寝るときに、市村さんはいったのだった。

「マサさん…。」

美園さんは、君にこういいたかったのかもしれない。

ゆるめと！

「ゆるむ？」

「そう、マサさんは、ミツチャ、ミツチャとかたくなになり過ぎて
いる。」

もっとピーンと張り詰めないで、過程を楽しめ。

つまり、緊張するな。

ガチガチになるな。

ということをいつているんだ。

今のマサさんは肩に力が入りすぎているからな。

ミツチャ。

ミツチャ。

ミツチャ。

と、ミツチャに居ついているからな

「そうですね」

「そうだよ。」

口を開けばミツチャのことじゃないか

「そうですね」

「ああ」

「俺も知らない間にみんなに迷惑かけていたんだなあ」

と正夫はため息をつく、その日は寝た。

こうして、次の日に一行は東京中野まで、美園さんの運転で帰ってきて、正夫にとって意味があったのか、それともなかったのか、あまりよくわからない旅行は終わったのであった。

第87話 「ミツチャ、俺の愛のすべてをここに捧げる」

(ここから先は、正夫がミツチャに書いたものすごく長いラブレターになっていきます。)

よって、俺、という一人称で小説を進行してゆきますので、お気をつけください。

もし、この章の中で、俺、という呼称が使われたときは、正夫のことを指しています。

そして、君という呼称が使われたときは、大体がミツチャのことでしょう)

ミツチャ。

俺はもう自分を嫌いになっています。もう駄目です。俺は道端に捨てられたボロボロの雑巾みたいなものです。都会の汚れたいろいろなものに染まってしまいました。

ミツチャ。

とこうやって書くと、俺は、ミッチー・ミラー楽団を思い出します。有名なのは「黄色いリボン」でしょうかね。

彼女は首に黄色いリボンを巻いている

この春、遠くに出征している

騎兵隊の彼のものだ

彼は遠くにいる(ファーナ・ウエイ)

彼は遠くにいる(ファーナ・ウエイ)

彼女は騎兵隊の彼を待っている

もちろん、この歌はミツチャ、君のこととは何の関係もない。残

念ながら、俺は騎兵隊どころか、馬に乗れもしない。前まで自転車に乗っていたが、最近、自転車は盗まれた。コンビニの脇に置いた少しの時間を悪党に盗まれたのだ。俺は泣いた。もうやりきれない人生とは何であろう。俺はそのとき、真剣に考えた。そしてわかったことは、人生とは少なくとも

コンビニに駐車した自転車を盗まれる

という事件が起こりうる何ものである。ということであった。

だが、自転車のことはどうでもいいのだ。俺は今、盗まれた自転車よりも、もっと大きなことを書こうとしているのである。

ミツチャ。

薄々、気付いているかもしれないが、それは君に関係することである。と書いたら吃驚するかもしれないね。

そう、それは君に関するもろもろのことを俺がどう引き受けるか、という問題なのだ。つまりは、そういうことなのだ。つまりは、ミツチャ、俺は君を愛しているのだ。

ここから出発しなければ、すべてが始まらない。この気持ちは何だろう。そう。愛なのだ。

ああ、ミツチャ。

とうとう言ってしまった。俺は、君と接していた気の長くなるような時間のすべてにおいて、冷徹な傍観者であったが、もう人生の傍観者はうんざりだ。すべてを投げ捨てて、俺は告白する。

ミツチャ。

愛している。

本当だ。これはもう、そうとしか考えられないからだ。もう、どうしようもないのだ。火事が起きている。俺を止めることはできない。

ああ、まさにこのフォーリンラブ。俺の心はファイヤーのようにメラメラだ。

この気持ち^が君には伝わらないだろうか。伝わるだろうか。それはわからない。

だが、俺にもチャンス^をくれ。

この手紙を通じて、俺がどれほど君の事を思っているかがわかれば、あるいは君の考えも変わるかもしれない。いや、もし、俺がここに告白したことによって、君の心に俺への愛が生じたとして、更に愛が深まることであろう。

第88話 「ミツチャへの手紙 2」

ミツチャ。

俺は今、君に手紙を書いている。俺は手紙を書くしか能のない男だ。ごめん。俺は、前に君と会ったときに、ひどく落ちぶれていたかもしれない。

ひよっとしたら体重が減っていることを気にしているかもしれないが、それは一日二食に食習慣を改めたからだ。今の日本は本当に飽食の時代だと思う。俺はその今の日本の状況に耐えられない。だから、俺はニートなのである。

しかし、安心してくれ。いつまでもニートなわけではない。俺は小説を書くことと思っている。

それは、

『渡部博文のくだらない日常』

という渡部を主人公にした小説を書くことと思っているのだ。それは、十二章に別れていて、俺の友人であり、後輩である渡部博文のことを描こうという試みだ。彼は、おかしかっただろう。やっぱり、どう考えても変なんだ。彼は。

あれを、渡部本人の視点から描いてゆこうという多分、斬新な小説だ。今、いいところまで書いている。

せつせ、せつせと書いているよ。これが完成すれば、俺は、どこか雑誌社に出してみようと思う。やはり出版してナンボだしね、小説ってやつは。

ミツチャ。君も確か漫画志望ではなかったっけ。君は、砂漠の王子様が、夜の月か、何かを見つめて、ぶつぶつ内面のトークをするような、そんな漫画を描いていたよね。はっきりいって、俺は漫画のことはまったくわからないんだが、正直、俺にはその漫画もわか

らなかった。

まあ、俺も下手な絵で漫画は描くけれどもね。君が一年のころに、俺に年賀状を書いてくれて、

『正夫さんの漫画には根底に寂しさみたいなのがあって、それがとってもいいと思います。今年もよろしく』

って文面だったと思うけれども、さすがミツチャだと感心したね。俺の創作の根底は寂しさにあるんですよ。まったく君の目は慧眼だね。あつという間に、貫かれたね。俺の本質を。あの年賀状は今でも実家の机の中にあるけれどもね。

ああ、ミツチャ。

俺たちは創作ということ、また新たにチームを組めるかもしれない。俺は君に何も求めない。いや、求めるものは一つあるかもしれない。求めるものがあるとしたら、それは、

君の幸せだよ。

ああ、愛している。愛している。愛している。もう、自分でこれを書いていて、俺は何ていいやつなんだ。と俺は感動した。俺は多分、忠犬八子公よりも泣かせるいじましい人間かもしれない。

まだまだ書くことはある。

ミツチャ。手紙が長くなるが辛抱してくれ。

ミツチャ。

何かこうやって、ミツチャと書いてみて、俺は、はっとするんだが、蜜がネバついていているようなそんな語感があるね。ミツチャという言葉には。しかし、それは本当にそうなのだからしょうがない。もうこれは否定できないほど、君の記憶は、俺の脳に粘着しているのだ。

なかなか離れてくれない。それは俺が現在、ニートだからということもあるだろう。つつい、女性のことを幻想化して見てしまうのだ。昔から、俺はそういうところのある人物だった。

ある女性を好きになるとする。すると、もう一人の俺がある人物にとりついて、その人物のことを勝手に考えてしまうのだ。まるで人形遊びのように。ちなみに、俺は人形遊びが大好きで、一人で延々、人形遊びをしていた。その延長なのかもしれない。

俺は、いつも家の六畳一間の寝室で、リプロックとかレゴブロックとかを使って、戦争をしていたような気がする。もうそこには壮大なストーリーが勝手に作られていた。今回、こうやって手紙を書いているのも、俺の考えたミツチャに手紙を書いているのだ。現実の君へは愛着はないのかもしれない。

しかし、ミツチャ、ということにおいて、どこか通じるものはあるかもしれない。名前がお互いを引き寄せるといふことはあるかもしれない。しかも、今回の恋愛妄想において、俺はリアリズムを大切にしているから、ミツチャが勝つてに話し出すなんてことも一切ないのだ。それは他のときと比べて大きな違いであろう。

「あれ？そうかしらね」

はっ、誰だ。

君は。

「あたし？あたしはミツチャよ。お望みどおり出てきたわよ。あなたは、いつも自分と自分とで対話をしているよね。そうやって、ミツチャという人間も作り出している。あたしも、その一人というわけね。」

はっはっはっ。

あなた、もうあたしが、一年生のときみたいに、あなたに『先輩』なんていうと思ってているの？あたしは女子高の出身だった。だから、あなたみたいなのが珍しかったのよ。それでついつい『先輩』って

「ミツチャ。」

それは俺に惚れていたってことじゃないか」

「いや、そうじゃない…」

あたしはただ…」

「嘘をつくんじゃない。ミツチャ。俺は知っているんだ。お前は俺に惚れていた」

「キヤアア。」

恥ずかしい」

なんて具合な問答をするのは朝飯前なんであるが、もちろんそんな妄想はしている。しているが、そこは、リアリストである俺のことであるから、現実の君ではないことを知悉している。そこは安心して欲しい。とはいえ、部分的に君の要素はあるかもしれない。というか下手をすると、俺の鋭敏なる知性が真実を描いているかもしれない。だが、そうであったとしても、この愛は一緒に一から作り上げよう。

第90話 「ミツチャへの手紙 4」

俺は君に何かをいう言葉をもたない。

では、どうしてこんなにくだしく手紙を書いているのか、ときいてくるかもしれないが、ミツチャ、違う、そうじゃない、言葉をもたないからこそ、人間は、余分な言葉を空費してしまうんだよ。

そこは間違えないでくれ。ミツチャ。

こつやって長くなる、ということはどういうことかというところ、空虚だからであって、はつきりいって、現実世界において、俺はミツチャへの決め手を欠いている状態なんだ。

まさに、あの駿吉のようにね。

覚えているかい？

ミツチャ、あの駿吉のことを。

あいつは、君が二年になってから、つきまとい始めたんだよね。

君の手下、いや、奴隷といってもいい存在だった。

いつも

「ミツチャさん。

ミツチャさん」

と甲高い声で、かまって欲しそうな愛玩犬のように、君について離れなかったね。

浅黒くて、髪の毛がチリチリしていて、目が大きくて、太っていた。あいつは、君の番犬だったのかもしれない。

君に対しては、非常に愛嬌のある顔つきをするのだが、俺に対しては、ものすごく白けた顔つきになるのだ。

駿吉は、皆から、

「駿吉！

駿吉」

とかわいがられていた。

そして、彼は実は早稲田のどこかの学部に受かったのに、この大
学にきているということや、モーニング娘をエスコートしたことあ
る、ということや、いろいろな嘘八百を述べて、周囲を沸かせてい
た。

「ああいう浅黒い太った奴は、嘘つくんだよな」

と俺は他の人にいうと、

「それって、自分のことじゃないの」

とミツチャ、君は笑ったね！

あれは覚えておく。

あれだけは本当に腹が立ったね。

俺がいつ嘘をついただろうか。

駿吉の方がよっぽど不実じゃないか。

あの

「ミツチャさん。」

ミツ／＼チャさああん」

とついて回るのもあれも嘘なんだよ。

のぼせ上がるんじゃない。

あいつは、君の肉体が欲しいんだよ。

しかし、君はあいつをうまく操縦したものだね。

結局、そういうことしている間に、君はＹとは別れてしまった。

もちろん、それから駿吉とつきあうということもなく、何だかわか
らない間に、君のことが、うやむやになってしまったが、俺の中で
ははつきりしていることがある。

それは、俺の中でのミツチャというキャラクターが最高の女性に
なりおおせた、ということだ。ミツチャと比べたら、小野田ちゃん
にはまったく色気がない。たんなる小柄な娘でしかない。それは人
によつては、綺麗だと褒めるかもしれないが、ミツチャほど、どう
いったらいいのか、コーナリングが効かない。小野田ちゃんは直線
コースしか、もしくは決められた通路の上でしか、走れないんだ。
それに対して、ミツチャは、機知にとんだ女性だった。気の強い女

性だった。まさに現代のクレオパトラだった。

そして、駿吉はクレオパトラに操縦されたアントニーというところか。俺は、君が活躍する史劇において、どんな役回りをするか、それは当然、ジュリアス・シーザーだろう。

ああ、ミツチャ。

君は俺を知らない。

知らなすぎる。

もし、君が本当に俺のことを知ったときに、驚くだろう。そして俺の輝きにひれ伏すだろう。これでも、俺は輝きを三分の一くらいに落としているんだよ。君は俺の無尽蔵のポテンシャルを知らない。それが君のためを思うと非常に残念だ。

駿吉と、俺の前で、俺を無視して、一年間、本当に楽しそうにしていたね。あの一年間、本当に深刻に苦行だった。俺は部屋に帰るしかないのです、部屋で寝ていたら、延々、

「ミツチャさあん。」

ミツチャさあん」

とあの駿吉が発情のうなりをあげているのだ。

一回、俺は

「ぎゃあああああああ」

と叫んで、部屋を出て、そのまま市村さんのアパートまで帰ったこともあった。

あれを何回もやったら面白かったかもしれない。

ああ、ミツチャ。

君には、まだまだ面白いエピソードがたくさんある。しかし、これは君の面白いエピソードなんだか、俺の面白いエピソードなんだかわからないけれども。

他にも、K川というやつのことを覚えているだろうか。あいつは、君に対して本当に恨んでいたよ。

裸の女帝、ミツチャさんよ。

俺はこのままあなたの本質を暴いてやる！

第91話 「ミツチャへの手紙 5」

おうあ、ミツチャ。

おうあ、ミツチャ。

おうあ、おうあ、ぎゃあ。

ミツチャ。

毎回、毎回、ミツチャへの手紙を俺は風呂上りに書いていたんだが、そのためか、ちよつとハイテンションになっているかもしれないが、気にしないで欲しいが、もちろんこれは命令ではなくて依頼であるが、それでもやっぱり俺の願いを聞いて欲しいなんて思うが、しかし、それはそれでミツチャの自由であるが、自由でなくてもいいし、その自由をねじまげて、俺のいうことをきいてくれ、なんてこんな男のエゴだよ、っていうことまで考えて、はつとしたのは、恋なんて所詮、男のエゴかもしれない。

ちなみに、今日で五日目だ。ミツチャへの手紙を書くようになって。毎回毎回、一日、一回ごとに区切りをつけてそれで五回目で、五日目になっている。まとまった量になったら、君に送ろうと思うが、果たして、俺はこの手紙で何をいいたいのか、わからなくなってきた。

まず、俺はミツチャの幸せを第一に望んでいると書いたが、それは本当か。ミツチャが何をどう考えているか、感じているかなんてことは、俺には知覚できないのだ。知覚できないものを、厳密にいつて、望んでいると主張するわけにはいかないような気がしてきた。

本当はみんな自己満足なんだ。俺はミツチャのことなんか本当はまったく考えていない。むしろ嫌いだ。

いや、嫌いなわけがないが、嫌いだったらこんな手紙を書くわけはないが、しかし、嫌いなのもしれない。それは好きという感情の中には、何だかわからないが、そういう光と影みたいな感覚が混

入せざるをえないものがある。

お昼にやっているドラマなんかまさしくそうではないか。好きと
なったとたんに、すぐそこには極端な所有欲との戦いが始まるので
ある。もちろん、俺はそういう人間ではないが、ミツチャ、君を前
にして、自分のそういう一面が出ないとも限らない。

いや、むしろ、ミツチャ、君は俺にそういう感情を起こそうとし
ているのかもしれない。ミツチャよ、君こそが俺の不幸の源泉なの
かもしれない。

じゃあ、手紙を書くなよ、と君は思うかもしれないが、しかし、
それでは無意味なのだ。やはりここまで書いたということはルーズ
リーフがもつたいたいなし、送らなくてはいけないのだ。しかも、俺
は自分の文章に自信をもっている。それは言い換えれば、ミツチャ
への愛に自信をもっている。

ああ、K川のことを書こうとして、ついつい寄り道になってしま
った。K川のことは明日に書こう。ミツチャ、楽しみにして欲しい
といっても君はページをめくればすぐに読めるんだから楽なものだ
よ。まったく、何で俺はこんな無用な長い手紙を書いているのだろ
うか。すべては、君への愛のためであるが、今日のところは眠くな
ってきたので、愛よりも睡眠を優先するが怒らないでくれ、ミツチ
ャ。

俺は睡眠第一の男なんだ。

第92話 「高田伸司への手紙」

(ミツチャへの手紙の中に、高田伸司への手紙が間違っって挿入されていましたが、ミツチャはこの手紙を見たことと思われそうです、ここに載せておきます)

「何でメッセージを送っているのに、返事、こんの?」

というのが私の今思っている一番書きたいことなんです…あ、お元気ですか。

高田さん、あなたにメッセージを送っているのにも関わらずまったく返事がない正夫です。

わかります。

それは、8月13日にオフ会を開きました。

そして、貴君は、PCのSNSサイト、「ミクシイ」の私の日記にコメントを書きました。たしかに、貴君が私にメッセージを送っても梨のつぶてでした。

貴君の腹立ちは、まさに今私に起こっていることと同じなので

「んだ!

このやるつ。

俺がメッセージ送っているのに返事こないんか。

われ、ぼけとんのきゃ、こん畜生!」

なんて思っているに違いありませんが、しかし、考えてみてください。さい。

当日にいきなり、しかも、会が始まってから、コメントくれても対応できません。そもそも俺の携帯ではミクシイ、見れないようになってるんです。新事実かも知れないけれども、そういう人間だ

っています。何ですか、そういう人間がいちゃいけないんですか？
ここにいます！すみません。そして、私はそれでも生きます！
いや、私がいつも高田君のことを恋人のように思い続けているの
なら、連絡をとることは可能だったでしょうが、そもそも貴君はそ
んなことを望んでいるのでしょうか？

否！

貴君もそこまでは望んでくれてはいないはずですよ。

私は、貴君の望みどおりに、普通の友人として、ある程度、距離
をおいてみたんです。

なのに何故怒るのでしょうか。

何で私に文句をいうのでしょうか。

それは連絡に不備がありました。

しかし、当日まで何のアクションも起こさない貴君も貴君ではな
いでしょうか？

たしかに私は携帯のメルアドを変えました。

しかし、それは無断ではないのです。

ちゃんと報告しているのです。

私の携帯のメルアドは、確実に、百パーセント確実に、約半年前
の4月18日18時ごろに、

「メアド変えたよ」

と行って送ったのです。

それに対して貴君は、

「何でミクシイでメッセージ送るかな。

登録したらんもん、そんなとき忙しかつて！」

というコメントを残しましたが、しかし、高田さん、それは、私
がいわゆる二トだから通用することであって、一般社会でそんな
ことが通用すると思いませんか？

それはあまりにも、悲しいほどにも詭弁じゃないでしょうか。それはわかります。

たしかに私は貴君がわかりにくいように忙しいときに、

「ミクシイ」

という趣味の、そしていささかマニアックなSNS（SNEかも
しれない…あつ違う。それは「GMともの」召還ワードだったWW
W）を通じて、連絡はしましたが、しかし連絡は連絡なのです。

それは、私から、あなたへ確実に送信された事実なのです。
その事実をあなたは認めてください。

つまり、貴君は、

「あ、何か正夫先輩からメッセきたけれども、メンドイから放置」
という判断をしたのではないですか！

もちろん、私も

「もう送ったから、いいや。」

あとはあいつの問題だ。

俺の携帯にあいつのメアド入れるのメンドイから、送ったよ、と
いうことにしておこう」

という判断をしました。

もちろん、お互い様です。

高田君、そもそも何で番号ポータビリティ使わないの。

って、いう質問がくるかもしれないんですが、そこには先に答え
ておきます。

まあ、それは何となく気まぐれです。

何かエーユーにしたかったんです。

急に。

っていつか考えてみると、何か…俺が悪いような気がしてきた。

はいはい。

もうわかったよ。

俺が悪いですよ。

皆、俺だ。

班長の俺が悪いんですよ。

あの創作班がボロボロになったのも俺のせいですよ。

俺が二トトなのも俺のせいですよ。

もうわかったよ！

福田さんの歯が出ているのも、俺のせいですよ。

酒井法子が薬をやったのも俺のせいです。

東名の道路崩落も俺のせいです。

SNEと文字を入力すると、足跡に絶対、「GMともの」がくるのも、俺のせいです。

俺が悪い！

バツキャロー！俺！

バツキャロー、SNE！

バツキャロー、のりピー！

けれども…本当に…本当に、8月17日、18日(x)、20日、もしくは9月26日に会いたかつたんだお。それだけは、本当だよ、GMともの…じゃなくて、高田君…。あつ、ごめん、18日は会えないから、本当は17日、20日、もしくは、9月26日(土)なんだけれども、俺は真剣に貴君に会いたいね。

何か最近、わかつたが、俺、市村さんに嫌われているみたい。っていうか市原さんの兄弟子の美園さんをミクシイで罵倒した上にアク禁にしちやのが原因だけれども。

だってさ、美園さんさ、俺が東国原のことを文句言っているのは、嫉妬のせいだ。とかさ、何か無茶苦茶なことをいつてくるんだもん。俺は思いつきでミクシイの日記を書いているだけだつていうの。しかも、俺の日記に病的な粘着コメントを延々書いてきて、それで切れたんだよね。俺はね。

「あのさ。俺は東国原よりも自分の都合の悪いことには決して言及しないで好き勝手な妄言ばかり書いているあんたの方が腹が立つわ。仮に、東国原が総理大臣になっても、今より腹が立たないもの」

って書いたからね。

あの美園ってやつ、本当に織田信長だよ。まったく織田信長、もしくはアインシュタインだよ。だから多分、天下取るだろうね。そのときは、今度は俺が粘着的にネット、コメントしてやって、「結局、それって嫉妬だよな」

っていうんだ。

それが俺の夢。

いや、本当は関わりあいたくないんです。

真剣に。

っていつか、高田にせよ、市村さんにせよ、この調子でいつか会えるのかな。もう、会えないような気がしてきた。まあ、もうこうなったらどうでもいいかな。

明日には明日の風が吹くさ。

人間は成長に応じて友人が変わってくるのかもしれない。もう彼らは、俺とは縁がないのかもしれないね。そうなんだろう。これはもう宿命だ。いや、それは寂しいな。本当に。っていつか、友人じゃないか。俺たち…。

しかし、主に俺の無茶苦茶な行動によって二人とは会えないのだろう。そうだ。俺が悪い。俺が悪い。すべては俺が悪い。俺が悪いんだ。ごめん。

うおおおおおおおおお！

うるせええええええ。

俺が悪いわけねえだろ！

いいかげんにしやがれ！

いつも手前ら、勝手な歪んだ価値観を俺に押し付けやがって！

武術馬鹿に、オタリーマン野郎が！

俺は、君たちのことなど知らん。

もう、俺をさらし者にするな。

いいかげんにしろ。

はっ。

それは二人が俺にいいたかったことなのかもしれない。

いずれにせよ、思い出をありがとう。

そして、俺は君たちを忘れることにしよう。

さらば、青春の友よ！

P S

プレステ1で、「DOOM」ってゲーム見つけたんだ。
いつかやりたいね。

生まれ変わったら…。

どうやら僕たち、今生では会っこの無理っばい。

オホ。

オホホホホホホホホ。

(B Y 福田)

第93話 「ミツチャへの手紙 最終回」

ディアー ミツチャ。

俺は今まで君の事を一縷の望みと思つて生きてきたがどうやらそれも違うような感じがしてきた。そもそも望みとは何であろうか。望みとは、夢。ありえないもの。手に入れてしまえばまったく別のものになってしまうものなのだ。

本当は、俺は自分の日常生活からあふれ出る実感に従つて、その延長で生きてゆかねばならないのかもしれない。そういう意味でも、ああ、ミツチャ。俺と君とでは世界が違うのだ。というよりもミツチャ、君がどういふ世界で何をしているのかさえ、実は知りもしない俺なのだ。

ダメだ。君がいくら望んだところで、俺は遠い。俺は遠い、遠い。だから、君は、俺にとって、外国人であり、他人であり、ああ、もうそうなのだ。

俺は、最近、友人の高田と、市村さんに、居酒屋の「甘太郎」で、会つて、延々、ミツチャのことを話したがそうしたら、

「マサさんは、もう何年も前から、ミツチャ、ミツチャいつているんだよ」

と市村さんは俺に諭してくれた。

「もう、ミツチャ、を求めることがライフワークになっている。

それが、最近、小野田ちゃんに鞍替えしたかと思われたら、またミツチャに戻っている。

どういふことなんだい」

「どうもごうもないのかもしれない」

俺は、深刻な顔をして答えたんだ。

「俺は本当は女を欲していないのかもしれない」

「じゃあ、何を欲しているんだ。

古本か、ゲームか」

と市村さんは、つまみの焼き鳥を食べながらいった。

「何だろう。」

古本、ゲーム、女、これが三位一体になって、交じり合ったような存在を求めているのかもしれない」

「それはあれですね」

高田は、携帯をいじっていた。

「それは…問題だわ」

「問題だよ」

俺は呟いて、肴のステーキを食べた。

「肉の味付けが濃いですね」

「たしかに」

と高田。

「まあ、薄いよりかはいいけれどもな」

と市村さん。

このエピソードから何がいたいのか、というと、別に何も無い。ただ、俺は放浪者のように何かを求め続けている。それが俺の人生なんだ。いや、誰だっけ何かを求め続けているんだろう。本当は、それは俺の生活の中にあるのかもしれない。

本当は、君が

「生理的に受け付けない」

と悪口をいっていたK川のことを詳しく書くことと思ったんだ。彼は人から、君の悪口をききつけて、

「あかさ。」

俺、K川だけれども。

ミツチャさんさ。

俺のこと生理的に受け付けないって、どっぴり意味かね。

俺さ、サークル辞めるけれどもさ。

その言葉だけはきつちり覚えておくからな」

と行って、電話を切って、彼はサークルを辞めたんだった。

彼は、非常に神経質な男で、いつも目が真剣で血走っていた。それを君は軽い気持ちで

「生理的に受け付けない」

とふざけたんだろう。

しかし、それは彼の心の傷になった。

いや、君を非難するつもりはないんだ。

ただ、事実として、そういうことがあつたんだよ。

だから、どうしたということではないんだ。

ただ、事実はそうだから。

これだけはしょうがないのだ。

本気で。

もちろん、誰だつてそういう軽口は叩くからね。

ただ、事実、彼は傷ついたろうね。

可哀想に。

今でも俺はその事実を思い出すたびに、涙ぐむね。

K川のために。そして、ミツチャ、君のためにね。

俺はね、そういう君の悪い癖だけは、生理的に受け付けないわ。

っていうか、まあ、俺はその数倍、悪口をいっていたりするんだ

けれどもね。結局、俺にせよ、ミツチャにせよ、善人ではないんだよな。

というわけで、この手紙は何を書きたいかわからなくなってしまったが、それでも郵送するでしょうね。

うーん。

俺ね、君のことを夢見るよりも、もっと自分の生活を充実させてみる。そして、俺が精神的にも豊かな内面生活を送れたときに、ミツチャ。君みたいな人を俺の生活に招き入れることができるのかもしれない。

本当は俺は何でも良いんだよ。誰でも良いんだよ。

ミツチャだろうが、小野田ちゃんだろうが、どうでもいいんだよ。

俺は愛とかそういうものは、信じないね。いや、愛そのものを拒否しているわけではなくて、愛って主観的なものでしょう。それは客観的じゃなくて、悲しいことに、他人には通じないものなんだよ。だから、愛を感じさせてくれて、ありがとう。ってだけのことなんだ。愛は求めるものじゃないんだよ。そもそも、気持ち悪いじゃないか。愛を求めるなんて。いくら求めても、それはわからないし。実感できるものじゃないし。

いや、これは違うっていくらでも思えるじゃないか。だとしたら自分がどう思つかなんだと思う。その上で、相手が気に入ってくれたら。ということもいえる。というよりも、相手が気に入ってくれらんだったら、誰でもいいような気もする。自分が気に入っても相手が気に入らなかつたら撤退した方が良いよね。

つまり、俺は誰でも良いんだよ。もし相手が気に入ってくれるのなら、俺はそれに答えようじゃないか。どんな人間にもいいところ、悪いところあるし、悪いところが実はいい、ってことだってあるだろうし。相手の長所を、いかに見つけるか。ってことが人間関係の鉄則なわけでしょう。

すべての人間は、生きる、ということにおいて、平等に能力をもっているんだよ。たとえ天才だって、馬鹿者だって、トータルは変わらないはず。ただ、生きる環境において、自分の能力をどれほど出し切れているか、ってことなんだ。

もし愛に客観的な要素があるとしたのなら、他人のそういう良い部分をいかに引きずり出すか。というものなのかもしれない。俺は君の中にも、すごくいい部分を見つけている。

天真爛漫で非常に強くて勝気でいい女性だ。君は。

俺は君のその部分をどうやって引きずり出せるか。わからない。

しかし、自信はある。もし、君が俺を通じて、何かをえたいと思ったら、返事をくれ。

俺はいつでも待っているぜ！

第94話 「ミツチャの返事」

正夫さんから非常に心のこもった、暖かいというよりも、暑苦しいほど（失礼！）熱烈な手紙を受け取りましたが、残念ながら私は、正夫さんの気持ちに答えることはできません。

はつきりいつて、あまりにも唐突です。それは親しくしていた時期もありましたが、告白されるほど、親しくしていなかったし、まさか私のことが好きだったとは、意外でした。というよりも、私のことも、というべきでしょうか。

とはいえ、それは正夫さんの自業自得な部分もあると思われれます。やはり、私の中では、あの小野田ちゃんにいきなり襲い掛かって、寸止めパンチをしたというあの凶行の意味がわかりません。あれは人間としてやってはいけないことであるし、しかも何故に小心者の小野田ちゃんにやったのでしょうか。いかにハイテンションで笑いを取る芸風だったとはいえ、あれには笑えませんでした。

あれを見て、私の中では

「あ、こいつ、終わっている」
と思いましたがね。

その気持ちは今でもそのまま続いています。

手紙の中で、やたら「君」と呼びかけられていましたが、あの「君」という呼びかけもイライラしますね。もう私にはあなたは遠い存在なのです。いや、そもそもが近い存在になったこともないので

す。
いつか、私が友人を部室に連れてきたときも、正夫さんは熱心にその女性にトークを一时间近くしていましたね。

それでその友人は、

「このサークルではやっていけない」
と思つて入部しなかったみたいです。

あの人につきまとわれるのも怖い、といっていました。

「正夫さん、あなたは、一体何なんですか。

何をしようとしているのですか。

どこに行こうとしているのですか。

生きる目的は何なのですか。

私にはさっぱり見えてきません。まるで沼の主みたいな、何かそんな存在ですね。

実は、私は近々、結婚しますが、もし結婚の報をきいたら喜んでいただくと幸いです。

もちろん、私も正夫さんが結婚ということをきいたら嬉しいと思います。

こうやって読み直してみると、この手紙、悪口ばかり書き連ねましたが、そちらもK川氏のことみたいなどうでもいことをさも大事なことのように書いていたのでお互い様だと思えます。それに書き直す時間もあまりないので、ここらで失礼します。

ちなみに、変な手紙が入っていましたね。

市村さんと高田君とは仲良くやっているのですか？手紙の最後の方を読む限りでは、仲良くしているみたいですね。私は男の友情には憧れてしまっんですよ。

それは非常に結構なことだと思います。

月並みな言葉ですが、お幸せに。

第95話 「中野の日常風景 1」

もう、完璧に四方八方袋小路、やることなすこと失敗ばかりさ、俺の人生は、とミツチャの返事を読んだ後、正夫は心の中でため息混じりに慨嘆した。万年床に寝転んでさすがのように、天井を見上げてるが、天井は何も答えてくれない。

「ドンドン」

と戸の音が響く。

そういえばドアホンは何かの拍子に故障したまま、ずっと放置されていた。

「開いていますよ」

もう玄関口に行くのさえおっくうになっていた。

「あいかわらず、霸気のなさを感じるね。」

さすが、正夫君だ」

首を少し動かして見ると、いつもの見慣れた顔、文学者、勝間速人であった。

「恋のロマンスはどうなったのかな」

返事の代わりに、正夫はミツチャの手紙を渡した。

「ありふれた恋に身を投げようとしたんだが…」

勝間はミツチャからの返事を読む。ところどころで苦笑していた。

「まるで我がことのように恥ずかしいね」

「そもそも俺には恋愛は向かないのだな」

「いや、それはアプローチのしかたとか、そういうことなんじゃないかな。どこかで、正夫君は、何でも寝ていれば勝手にいろいろなもの転がり込んでくる、と思っっているんじゃないかい」

「楽天というやつかね」

「そうだよ」

「まあ、楽天じゃなければ、ニートなんかやっていないな」
「そうか」

勝間はそれから何か言葉を継ごうとしたが、特に、思い浮かばなかった。その流れとはまったく別なことを話した。

「猫でも飼うというのはどうだろうかね。」

「それでその生態を延々、観察し続けるのだよ」

「その猫にはアカプルコと名づけるのかい。」

「君の小説じゃないか」

「いや、俺の小説は、あれは猫の幻想を描いているんだ。それが証拠に俺は猫を飼った覚えはないからね」

「どうでもいいよ」

「何だって」

「いや、もう、どうでもいいと思ってさ」

「どうでもいいのかい。」

「文学もいいのかい」

「文学って何だよ」

「何だよっていわれても」

「一人の人間の悲しみを救えない文学って何だよ」

「そういうと正夫は起き上がり、引き出しから爪切りを出した。」

「救われたいのかい」

「いや、そういうことじゃなくて、俺は、何ていうんだろうか。」

「俺は俺でいたいんだよ」

「そうか」

「ああ、俺は百パーセント俺でいたい」

大きな音がする。爪きりの音であるが、爪にしては大きすぎた。ふと見ると、プラスチックの爪きりが根元から壊れている。

「百円スーパールのバカヤロウ」

「正夫は小さな声で叫んだ。」

「それは君の扱い方が悪いんじゃないかな」

「ああ、ミツチャモな」

「ミツチャはもういいよ」

「俺は思うんだよ。」

彼女は手紙の中で『K川のことはどうでもいい』みたいに書いていたが、あれは非常に重要なことだな。

ある人間に対して、『生理的に受け付けられない』なんてことは絶対にいつちやいけないね。

それならいつそ、『死ぬ』っていった方がまだ親切じゃないか」

「もういいじゃないか。過ぎたことなんだから」

「俺は引きずるよ。いつまでもいつまでも引きずるよ。ふざけんじやない。ミツチャにせよ、小野田ちゃんにせよ。俺を愚弄しやがって！」

「いや、それは君が勝手に好きになっただんだけ」

「いや違う」

そういつているときの正夫の目は赤かった。

「俺はあの二人に引き寄せられたんだ。向こうが誘っただよ」

「そうなのか」

勝間はぎよつとした顔で、正夫を覗き込む。

「ああ、そうだ。」

だから、俺は彼女たちに飛び込んで行って、ふられてやったんだ」

「正夫君」

勝間は、いつの間にかガムを噛んでいた。

「それは寂しいことだね」

正夫は、万年床で寝転んで壁を見つめていたが、背後にいる勝間の声が壁に反響して、よく心の中に残った。壁の下の方に、何だか知らない小さな虫がいるので、それを掴むと、窓を開けてぶん投げる。

二、三分、正夫はじっとしていた。自分の中で起きていることを整理していた。結論は、「ミツチャ許すまじ！」という恨みの念であったが、はつきりいって、初めっから、望み薄なことのような気が

がした。ミツチャは自分には合わないのだ。そう考えると、正夫は自分があらかじめこうなることを知っているような気がした。下手をしたら、ミツチャが「イエス」と答えたら、それこそ変な違和感を抱いたのかもしれない。

「まあ、いい。」

もう、このことはいい。

腹が減っては戦はできぬ。

飯でも買いに行くか」

勝間は、座布団の上であぐらをかいて、新聞を見ていた。

「戦って、戦っているのかい、今」

「ああ、戦っているよ。」

ニートとは戦いだ。

それは非常に辛い戦いなのだよ」

第96話 「中野の日常風景 2」

正夫は文学者勝間氏と連れ立って、普段あまり一人では行かない総菜屋T商店へと足を運んだ。

「おう、勝間君」

総菜屋のおやじは、ゴマ塩頭で目つきが鋭かった。声はとても低い。見た目は50くらいであるが、60かもしれない。もちろん、40代の可能性もある。

「久しぶりだねえ」

店には他にも客がいて油にまみれて曇ったショーケースの前にあるベンチに腰掛けていた。この総菜屋の前には、コインシャワーがあつて、正夫は自宅に風呂がないので、常にそこを利用していた。この総菜屋から東南へ50メートルくらいのところにコインランドリーがあつて、洗濯機がない正夫は常にそこで洗濯をしていた。つまり、正夫の生活圏だったのだ。

しかし、滅多にこの店には入らなかった。どうしてかというところのおじさんが正夫は苦手だったからである。ちなみに、渡部博文も苦手だった。何でだかは知らないが、行きたくないのだ。どうしてかは、自分でもわからない。渡部は、店に行こうと、誘うと顔を真っ赤にして否定した。それを見ると笑ってしまったが、実は正夫もそんな感じなのだ。ひよっとするとこのおじさんには「反カリスマ性」というものがあるのかもしれない。

勝間の方はすっかり仲良しになっており会話をしていた。

「たまに、近くの友達の家にも泊まらせてもらったり、するときに行こうかなあつて、いつも、思うんですよ。ここの店の惣菜おいしんじゃないですか。今日もきましたよ」

「引越しちゃうんだものねえ。本当に残念だよ」

勝間は引越したのだった。その引越は、正夫も手伝った。正夫は、一緒にいた大学の教授をやっている勝間のお父さんから、お

礼として寿司をおごってもらった。

「あ、でも近いんですよ。」

今度、麻雀でもやりましようよ」

「おう。」

いいね。

で、お兄ちゃん、何にする」

正夫は、ぼんやり話をきいていたが、いきなり自分に話がふられたので驚いた。

「の…のり弁で」

とかるうじて答える。

勝間は、

「僕は、ご飯（大）と、この茄子のマヨネーズ和えと、白身魚と、ほうれんそうのおひたしね」

と楽しそうに答えた。

「あいよ」

二人には二人の親しい空気が出ていた。しかし、正夫にはそういう空気はなかった。正夫は、その点において、勝間に負けたと思った。とはいえ、その点だけである。

正夫は、そんなことを思いながら、メニューを見ていると

「ディナー 2000円」

というのがあった。

この小さな総菜屋に、ディナーがあるとは。どんなディナーなのであろうか。気になったが、もし、ここでそれを質問したら、正夫の負けになると思って、決して質問しなかった。

そして、二人の食べ物包み終わったので、戸を開けて、外に出ようと思ったら、菱沼智美に会った。

「あ、正夫さん」

智美は、正夫の方をまっすぐ見る。背が高く、ひよろひよろして、気の弱そうな女性だったが、体は頑丈そうだった。髪の毛は茶色にしていて、ついこの間まで一緒に、コンビニのバイトを

していたのだった。

「久しぶり。」

「どうしている」

「うーん。」

「普通ですよ」

「そうか。」

「今度、君の家に行つていい」

「いいですよ」

「じゃあ電話する。」

「そんじゃあねえ」

と別れた。

好奇の目でじろじろ見る勝間のことを推測しながら、何事もなかったように平常心を装って、正夫は歩いていった。心の中で、負けを挽回したどころか、一気に勝ったような気分になっていた。

第97話 「中野の日常風景 3」

「俺って、もてるって知ってた」

「帰り道で正夫はいった。」

「いや、知らなかったよ」

「何か、勝手に、俺のことを皆は、もてないキャラみたいに思っているけれども実は、そんなことはないんだよ。それはいつも俺が強調していることなんだけれども、なかなか納得してもらえないんだよな」

「そうなんだ」

「そう！」

今回の菱沼ちゃんのことだって、当然の帰結でしょう。俺のどうしようもない魅力に吸い寄せられてしまったんだよ。しかし、そのとき、俺はミツチャダか、小野田ちゃんだかにこの身を捧げつくそうと決意していたので、断ったんだ」

「本当に」

「ああ。」

「遠まわしにだけれどもね。」

『ああ、夏祭り行きたいなあ』

『正夫さんって、彼女、いるんですか』

「っていつてきたのは彼女だよ」

「へえ。」

「またもつたいない。」

「何で拒んだんです」

「うーん。」

「俺もわからない。」

そのときは、多分、俺は現実目覚めていなかったんだろっね。

現実、ミツチャにも小野田ちゃんにも相手にされない、もてないたんなるニートだって、わかっていればね」

「もてないじゃないの」

「いや、もてない、と認めることによって、もてるんだよ」

「待ってくれ。おかしくないか。」

もてないなら、もてない。

もてるなら、もてるだろう」

「だから、自分はもてていると勘違いをしているときは、当然のことながら、自分ではもてている、と思っっているわけだろう。それは勘違いにせよ、何にせよ、自分はもてているんだよ。だって、自分がもてているか、どうかを判断するには最終的には自分しかないんだから。」

そして、俺には、もてないとわかったときに、相手をするべき人をすでに見つけていたんだ。だから、彼女にもてればいい。そうなると、確かに、今、この一瞬において、もてない、という空白状態は発生するかもしれないが、次の瞬間にはもてているんだよ」

「でも、それじゃあ、今は、もてていないんだろ」

「いや。あの返答を見ればわかるじゃないか。俺はもてるはずなんだよ」

「もてるはず、という推測までもてている内に入るのか」

「それは主観的なものだからしょうがないじゃないか」

「だったら、俺だってもてるさ」

「本当に、君みたいなのへっぽこ文学者がか」

「へっぽことは失礼だな。俺はもてるんだよ」

「そうか。だが、それは君の話だ。俺には関係がない」

「ああ、そうだな。まあ、俺はもてるってことをわざわざ主張するようなそんな小さな人間にはなりたくないから、俺はことさら、そういう話は自分からはしないがな」

「確かに、俺はそんな話を自分からしたかもしれない」

と正夫は自分のアパートのドアを開けた。

「確実に、したじゃないか」

「そうだ。したことは認めよう。」

ただ、君が俺のことをもてていないんじゃないか、と事実誤認をしているようなら、それは間違いのもとだから、それを正すためにいったんだよ。もしそこで、変な勘違いが発生したら嫌だからね。

俺だってわざわざ、自慢たらたら、自分がもてているなんて吹聴する気はないさ。君じゃないからね」

「おい！」

俺は、いつ、自慢した」

「自慢したじゃないか。

だって、君はもてる、っていったじゃないか。

それが何よりの証拠だろう」

「はいはい、もうね、この話はやめよう！

弁当を食べよう。

はいはい！もう黙って！

はいはい、終了！」

勝間は、そういうと、黙々と弁当を食べた。

正夫は、こいつ、俺のあしらい方を知っているな、と感心した。

弁当を食べ終わると、正夫はまた寝転んで、窓から空を眺めたが、建物が接近しているの、それほど広い空を見ることはできなかった。それでも、どこかで、開放感のようなものをえることはできた。考えてみると、この中野という町は本当に建物が接近しすぎである。

「もうね、思いつかないよ」

正夫は、満腹になっていい気持ちだったので、文学者仲間の勝間に対して、少しだけ心を許す気になっていた。

「小説がかい」

「うん」

「今は充電のときなのかね」

勝間はまだ食べていた。もっともこれは正夫が食べるのが早すぎるのだった。

「そうかもな。」

勝間君も、前にいていたよね。

『結局、文学って何を書くんだらうか』
って」

「ああ、いつていたね」

「それでわかったの」

「まったくわからないね。」

そもそもわかる、ということと、文学ということとはまったく違うものなのかもしれないしね」

「わかる、ということを巡って、くるくる回ってゆくのが文学なんだからね。」

まあ、それはいいとして……、俺は文学理論は苦手なんで……、これから俺はどうしようかって話さ。

今日は、これから小田がやってきて、多分、何か面白いことをし

でかしてくれるに違いないが、それまでに何をしようか」

「風呂に入ることだね。」

さつきから思っていたが臭いよ」

「そうだった。」

もう三日も入っていないからね。」

よし、行くか」

正夫は先ほどの総菜屋への道をまた戻り、コインシャワーの四角い昭和じみた建物の中に入った。管理をしているおばさんが、奥のポンプ室の方で何かをしていた。このおばさんは、髪の毛が短くて、居酒屋などに行くと、レスビアンに間違えられて、その筋の人から誘惑されるらしい50くらいの女性で、声がハスキーだった。

コインを入れる。三分で百円と昔は書いてあったが、正確に三分ではないらしくて、クレームがきたのか、『分で百円』と書いてあった。これもこれで問題だと思いが、そんなことはどうでもいいと、少ない時間で体を石鹸で洗ったのだった。頭にシャンプーもつける。そして、手でワシャワシャとかき回す。そこから速攻で、すべてを流す。しかし途中で止まったが、今回は髭もそりたいので、いいやと再び百円を投入した。

このコインシャワーで、自殺した女性がいる。という話をきいたことがあるが、本当かどうかはわからない。おばさんの話によると、他のコインシャワーで、自殺した人はいるらしい。となると、ここで死者が出て不思議ではない。何せ、今、電車に轢かれて自殺する人が年に二百人もいる時代ではないか。だとしたら、死んでいても何もおかしくはない。

正夫は、このコインシャワーを題材に小説を書いたことがあった。

『コインシャワーのゴースト 中野区の幻』

という作品であるが、もちろんタイトルからして、怪談を馬鹿に

した

小説であった。主人公の男がシャワーを浴びていると、女の幽霊が出てきて、そこでお互い、変な気持ちになり急に性交することになってしまふのだ。この小説は幽霊との性交を、ほぼ八割の分量を割いて延々と描いていた。これは、児童文化研究会では出版できないので、勝間君のいる文学サークルの同人誌に載せてもらったことがある。

などというろくでもないことを思い出しつつも、正夫は着替えて身支度を整えた。そして、おばさんに挨拶をすると、アパートへ歩いてゆく。夜風が心地よい。着物姿の女性が何人か横切った。正夫は、菱沼という女性がまだいたことを喜びつつも、
「さあ、どうやって、彼女の家に転がり込もうか」

ということを考えていた。三年近く中野で一人暮らしをしていたが、もう正直、限界であった。正夫は、もう、一人で生活するのは寂しくてようがなかった。実は、小野田ちゃん、ミツチャに性急に迫ろうとして、失敗したのには、そういう理由があったのだ。

「ああ、もうやだ。」

一人暮らしなんて、絶対いやだ、いやだ」

夜空に浮かんでいる月に向かって、まったく関係のない愚痴を呟いては、正夫は坂道を登って、アパートの階段を上がって、ドアを開けると、少し頬が赤くなって、ウイスキーの瓶をもった小田がいた。小さなグラスを手でかざして小さく揺らして、

「マサさん、先にやっています」

と嬉しそうな顔をしていた。

小田和孝は、チビリチビリと酒を飲みながら、いろいろなことを話していた。テレビを見ると政権交代のニュースがやっている。小田は誰にいうでもなくニュースに突っ込んでいた。

「俺はね、思うんだけど、民主党って大丈夫なのかなってね。だって、あれでしょう。アメリカで何か騒がれているじゃないですか。党首の鳩山由紀夫がとんでもない論文を書いたって。まあ、多分、あの人は目立つためにそういうことをやるうとしたんだろうけれども、結局、総理大臣になると、それほどのことはできないんじゃないかなあ、ってことになるんだよ。」

だからって、別にアメリカと同盟を解除しろ、なんていうつもりもないけれども、俺思うんだけど、アメリカってあれじゃないっすか。何か、上に被さってくるなあって思ってる。

アメリカって暑苦しいじゃねっすか。あれって何だろうなあ、って。本当に冗談抜きで。あんまり、下手なことをいったら、まずいかもしれないけれども、他に思いつかないんで結局いうけれど、やっぱり、日本ってアメリカに負けちゃっているなって、そこだけは本当だから。

負けたとしても、日本は、もっと、しゃきつとしなきゃいけないのに、いつでもアメリカに頼ってばかりじゃないっすか。それがダメなんじゃないかなあ、って思ってる。」

勝間は、そういう政治の話、というかそもそも、おおよそ話というものは全部好きだったので、質問した。

「じゃあ、日本はどうするの」

「まあ、俺が思うに、別に今、このままでいいと思うんだけど、どこかで、アメリカふざげんな、ってところを見せていた方がいいかもしれないね。俺が思うに、アメリカは随分、いい気になっっているからさ」

「けれども中国も危険だよね」

「中国も危険だけれども、俺が思うに、やっぱりアメリカの方がいい気になっているんじゃないかなって」

そこに正夫が乗っかってきた。

「北朝鮮も危険だよ」

小田は、焦点の合わない目で応戦する。

「まあ、北も危険だけれども、俺が思うに、大した核とかもってないから、どうしようもないし。初めの一発だけしかうまくいかないと思うし。だから、それはそれでいいのかもしれない。それよりも、アメリカは、その内、もつと酷い目にあうと思うね」

「どうしてだい」

勝間は、参考書を見ながら聴いていた。

「アメリカがいい気になってるから。俺、思うんだけど、これは冗談抜きで、アメリカは、ベトナム戦争で反省しなきゃいけないのに、ジョン・レノンとか戦争反対とかいつているじゃないですか。だから、やっぱ、戦争はやっちゃいけないし。それなのにアメリカは戦争をやめないじゃないですか」

「あれはしかし、いろいろあるんだろう」

正夫は、寝転んでいた。

「いろいろあっても、やっぱり、やっちゃいけないと思うし。だって、イランとイラクだって喧嘩していたんだから、放っておけばいいし。それは、他人が入るもんじゃないし。あの中東の問題とかも、アメリカが口を突っ込まなくてもいいじゃないですか。もう石油なんてやめちゃって、燃料電池とかにしちゃえばいいし。そっちの方がよっぽどエコだしねえ」

「それはそうだよね。」

けれども、イラクで戦争は続いている。

これは問題だよな。

けれども、それを俺はどうこういうことはできないね」

正夫は、下手をしたら寝そうなので、起き上がった。

「何ですか」

「それは俺がニートだからさ」

「ニートでも政治的な発言をした方がいいんじゃないかな。別にニートでも関係ないよ。マサさん」

「いや、俺は政治に関してはニートだから。」

「やっぱり、ニートは政治に関わっちゃいけないんだと思う」

「全然違うよ、マサさん。」

「ニートみたいな人たちが立ち上がらなきゃいけないんだよ。」

「それに、政治家なんてみんなニートみたいなもんだよ」

「ときなり怪しい目をして勝間が反論した。」

「もうね、俺はいわせてもらおう。」

「こうなったら、たくさんのたまった鬱憤をここで晴らしてもらおう」

「よー」

「よし、やれっ。」

「それでこそ、文学者だ」

と小田はウイスキーのコップを揺らして話をうながした。

勝間が演説を始めようとしたときに、正夫は部屋の隅にあるかごの中に入った洗濯物が気になってどうしようもなくなつて、

「ごめん。」

俺こいつを洗ってくるわ」

とかごを持って、アパートの階段を降りていた。

大体、勝間がどんなことをスピーチするのはわかっていたので、そんなわかり切ったことを聞いていたくはない、というのと、来客があつたことにより、余分なパワーが発生していたので、パワーのあるうちにコインランドリーに行つておこうという気がしたのだった。

本来なら、シャワーを浴びるついでに行けば、面倒くささも半減するのであるが、もうちょっと粘つておこうかな、と思つていたのである。

コインランドリーにつくと、茶髪の兄ちゃんが、椅子に座つてマガジンを読んでいた。よくある風景である。その脇を通つて、洗濯機の丸型の入り口の中に洗濯物を入れる。水の匂いがする。プールを思い出したが、そういえばもう何年もプールに行つていない。正夫はかなづちだった。小学生のころ、さんざん頑張つて、13メートル泳げたことを思い出す。ビート板があれば、25メートルは泳げる。

30分くらいこの部屋で、何をしてくるかわからない茶色い髪の少年といても嫌なので、正夫はいったんアパートに帰る。するとそこでは勝間が演説を続けていた。

日本は環境立国をするべきだ。高度な技術力で地球を救え。

みたいなことをいつていた。

「それは確かにそうだと思う。日本は昔から高度経済成長で、拡大、拡大やってきたが、持続可能な社会を作らなくてはいけない。」

俺が二トなものも、拡大、拡大ではなくて、持続可能な社会の間になる、という意味もあるんだよ」

と正夫も賛同していた。

昔から思うが、正夫はどんな人の意見も昔から賛同していた。たまには二ト批判もあるが、そうになると、

「いや、俺は正確な意味では二トでないから」

と逃げてきた。

どうしてか。議論に意味を見出せないからである。

だが、小田にしても、勝間にしても、議論をすることによって、自分の考えをまとめようとするタイプであった。もつとも、小田はたんに酒を飲んで話す相手が欲しかっただけであるが。

「だから、俺が思うに、アメリカっていい気になっているじゃねえっすか。これだけは、はつきりいって、許せないっていうか。まあ、白人だからそう思うかもしれないけれども…アメリカって、昔から馬鹿でかいから、発想も馬鹿でかいというか、大雑把じゃねえっすか。そこが気に入らないなあ、っていうか。日本人には合わないんじゃないかな、とは思っね。」

まあ、マサさんも大雑把だけれどもさ」

と、小田までスピーチを始めた。

「俺も大雑把だけれども、アメリカみたいに戦争をしようとは思わないね。アメリカは競争社会だが、まさに、俺は二トをやって競争社会から降りることによって、アメリカ的資本主義に警鐘を鳴らしたいのよ」

正夫は、適当に答えながら、コインランドリーの時間が来ると戻った。茶髪の兄ちゃんは消えていた。洗濯物はあと五分でできあがるので、そこでイライラしながら待っていた。こういう時間が正夫は嫌いであった。正夫は二トの癖に、何もしない時間が嫌であった。とはいっても、家ではほとんど寝ていたが。

前に、家にて待っていたときに、コンビニ夜勤の疲れが出て、熟睡してしまい、気がつくとき12時間、コインランドリーの洗濯物を

放置していたことがあった。そのときは、ゴミ袋みたいな袋の中に入れて洗濯物が隅っこにおいてあった。もし、もう少し取りにこなかったら、管理人によって捨てられていたことであろう。恐ろしい話だ。

洗濯物を取り込むと、正夫はアパートに戻る。夜風がとても涼しかった。そしてこうやって歩いたことにより、少し汗ばんできた風呂に入りたくなってきたが、それは我慢して、途中、コンビニに寄り、アイスを買って、また二人の議論に参加した。

「マサさんってあれじゃねえかなあつて」

と、小田が酒をのみながらつぶやいた。

「本当はもてるんじゃないかねえかなつて……」

「いやあ、そんなことないよ」

と、正夫はいいながら、テレビの画面をゲーム画面にしてディアブロを始めた。

「何、それ」

勝間君はきいてきた。

「これはプレイステーション1のすごいゲーム、ディアブロじゃないか。」

勝間君、知らないのかい。

君ほどのファンタジー好きが、この有名なゲームを」

「いやあ、俺、そういうファンタジーとか詳しいけれども、コンピ

ューターゲームになると、もう何年もやってないからねえ」

「とにかく、今、俺が一番、はまっているんだ！

これは、渡部もそうだし、市村さんもそうなんだよ。

っていうか、俺、渡部、市村さんにとって、このゲームは魂のゲームなんだ」

「何か地味なゲームだよな」

「そうだよ。」

ただだんに、冒険者になって、洞窟に入って敵を倒して、戦利品として、優れたアイテムを手に入れるだけのゲームだよ。

しかし、この単純さが面白いんだよ」

「そうか」

「俺はね、こういうゲームのような単純でありながら、それでいて面白い小説を書きたいね」

「こういうゲームってどういうゲームなんだよ」

一時間ぐらい、正夫は二人の前でゲームした。

その間に、小田は自論を展開していた。それに対して、正夫はゲームをしながら適当に答えていた。

「つまり、マサさんは、もてるんじゃないかなって。

俺が思うに、あのミツチャにだって、攻略のしかたを間違えなければ、行けたんじゃないかって思うんだよ。

それがマサさん、すぐに他に気が散っちゃうじゃないですか。

あれ、何なのかなって思って」

「違うんだよ。

それは、何だろう。

いつも思うんだが、ああいいなあ、という人が現れると、すぐに違う人が俺の前に出て来るんだよ。で、どうしたらいいか、考えているうちに、次々と、俺の前を通り過ぎてゆくんだよ。そういうパターンになっているのか。

あの三人の新生生なんてまさにそうじゃないか。俺は力点を一人に集中できなかった。その間に、いろんなやつが盗っていったんだ。そして、俺が出馬するときには、すでに時間切れというか時期遅れなんだよ。

俺が思うに、運が悪いのかもしれない」

「運が悪い、それはあるかもな。

とにかく、マサさんは女運がない」

「もうね、それは本当に思うね。

昔からそれはそうなんだよ。

何なんだろうかね。

多分、ものすごくかっこいいやつが、そういう人間だったらいいんだけど、俺みたいに平均以下の顔の人間が、こんなに不運だと、もう、本当に悲しいよね。

さっきも、菱沼さんに会ったんだが、思うに、俺がミツチャのことを考えていなければ、菱沼さんに行けていたんだ。しかし、ミツ

チヤのことを考えていた。そしてミツチヤのときには、小野田ちゃん
んがいた。そして小野田ちゃんるときには、ミホツチがいたじゃな
いか。あれは何だろうかね」

「うーん。」

何だろう。

あれなんじゃないですかね。

集中力が足りないんじゃないですかね」

小田は、あたりめを食べていた。

勝間は、いつの間にか帰っていた。

「それはそうかもしれない。

俺はゲームだったら少しは集中力があるんだけどもな」

「いや、それはダメでしょう。」

とにかく、菱沼という人に集中しましょう！」

「わかったよ。」

頑張ってみるよ」

しかし、そう答えて、ゲームをおいとして、深夜にアイスを買
に行ったコンビニでまた無駄なロマンスが芽生えるのだった。

何気なく夜の10時ごろにアパートのすぐ近くのコンビニに行く
と、レジをやっていたのは、小野田ちゃんに似ている小柄な女性で
あった。正夫は、彼女のことを心の中で「小野田ちゃん二世」もし
くは「小野田ちゃんの遺伝子を継ぐ者」と呼んでいた。よくこのコ
ンビニを利用するので、少しは会話することもある。

「あれ、この時間にいるのって珍しくないですか」

と正夫は思わずきいてしまった。

「そうなんですよ。夜勤の人が遅刻するらしくて、11時まで入っ
ていなきゃいけなくなっただんです」

「大変ですね」

という会話をした。

店を出てアイスを齧りながら、正夫は急に嬉しくなってきた。振
り返るとガラスの向うに彼女はいる。少し顔を赤らめてレジの台に
向かっている彼女の後姿をとて暖かく感じた。

そのことをアパートで酔っ払ってひっくり返っている小田に話す
と、小田はとがめるような目をして、正夫に吼えた。

「マサさん！」

それですよ。それがダメなんですよ」

「何だよ」

「すぐに、ふらふらしちゃうんだ。」

もっとコシのある人間にならねえと」

「いいじゃないか。」

あの娘に俺は、今日、告白してもいい気分だよ。

だって、けなげじゃないか」

小田は、酒をチヨビチヨビ飲みながら、真っ赤な顔をして反論す
る。

「そういうもんじゃねえんじゃねえかなって。」

恋愛つて。

俺さ…まあ、浪人時代のように、女の子と同棲していたけれども…やっぱり面倒見なきゃいけないし…だから、マサさんみたいなフワフワじゃ、女の子も困るんじゃないかなって。

地に足をつけた方がいいと思うし、冗談抜きで」

「そうかあ。

そうかもな。

俺はいつも空を飛んでいるようなのかもしれないな」

「やっぱり、何をするにしたって、着実に、安定したところがないと、つまりバランスが取れていないと、いけないんじゃないかって、俺は思うんすよ。そこは、本当に。

だから、やっぱり、マサさんも、その菱沼さんに決めたってさっきいつていたんなら、そつちに一本化しなきゃいけないんじゃないかかって、俺は思うし…まあ、そのコンビニの女の子でもいいけれどもさ」

「そうか」

「まあ、俺なんか何も考えずに生きてきたから…、それでもまあ、浪人時代に同棲したけれども…、それで何ていうかな、俺、苦手なんですよ。女の子にかまうのが。本当に他の人はよくできるなあ、って思つて。女の子って、かまつて、かまつて、って甘えてきますからね。それに無限につきあう訳にもいかないの、かわしたり、すかしたりしなきゃいけないのかもしれないけれども、そういうのが全部、面倒になつてきちゃつて。

とにかく、わかるのは、マサさんは、相手に気をつかうつてことができないじゃないですか。そこが問題かもしれない。

この前、雨の中、一緒に歩いてたときに、マサさんが、松の枝を傘で弾いたら枝がしなつて、枝についていた雨粒がたくさん俺にかかつてきたことがあつたけれども、あれで上半身ビショビショになつたけれども、そういうのも直していかねえと。

さつきも、唐揚げを平気で床にコロコロ転がしても、拾って食べ

ていたし、あれはうちの親父が見ていたら、ぶん殴っていたかもしれないし……」

「ああ、気をつけるよ。ところで寝るわ」

といって正夫は先に寝てしまった。

そして翌朝、コンビニに行くとき、朝勤のおばさんが、小野田ちゃんに似た女性は引越してしまふことを、他のおばさんと話していた。

「どうやら昨日が最後のコンビニだったらしい。」

店から出た正夫は、青空を見上げる。

「恋って切ないね」

不意に、小田の白くて四角い顔が現れる。

「あれじゃねえかな……マサさんって……やっぱ、そこは直してゆかねえと……冗談抜きで……」

という声が聞こえてきそうになったので、ブルブルと首を振ると、アパートまで戻ったのだった。

正夫は決意した。

今まで自分をニートとみなしていて、世間に戦いを挑むのを諦めて、逃亡奴隷のごとく生きてきたが、これからは世間に戦いを挑もうと思ったのである。

それはある日、お茶漬けを食べようとして、米が気道に入り、むせてしまい、米粒が三粒床に落ちてしまったのを拾って、ゴミ箱に捨てたときに浮かんだ非常に素晴らしいアイデアであった。

ひよつとすると二粒落ちていたら思い浮かばなかったかもしれないし、お茶漬けも普通のやつではなくて、梅茶漬けだったら思い浮かばなかったかもしれない。

この喜びを急に誰かに伝えたくなくて、高田伸司に電話した。

「あ、高田？」

「はい…何ですか」

「あのさ。俺、ニートをやめようと思うんだよ」

「何か職に就くんですか」

「いいや。そうじゃないよ」

「職に就かなきゃニートをやめられないじゃないですか」

「そんなことはないよ。」

その人の心がけ次第だよ」

「はいはい。」

つまり、ニートをやめたわけじゃなくて、ニートをやめたい気になっただんですね」

「そうそう」

「あの今、忙しいので…」

「あつ、ちよつと待…」

「ガチャ」

正夫は、こんな高田のあしらいにも特に何も思わなかった。今や、

非常に自分の思いつきに熱く燃えていた。

二トをやめるには、現在、進行中の「小説 渡部博文」を完成させなくてはいけない。

正夫はコンピュータに向かつて、必死になって作業を進めたのであった。ちなみにOSはウィンドウズXPであり、中野サンモーにあるジャンク屋で19800円で買った中古品であった。

小説というものは、気合を入れて、一気に書き上げるものかもしれない。正夫は、そのときまで、三分の二しかできていなかったものを、一気に五時間くらいで完成させてしまった。

これは、小説という形式を借りた、友人の渡部博文との魂の会話であった。考えてみると、彼はこの「小説 中野」においても、序盤で登場しているのであるが、はっきりいって、存在として非常に薄いものであり、おぼろげな塵気楼のようなものであったが、今回、この小説を書くにあたって、彼の濃すぎる人間を直に感じさせてもらった。

そして、結論として、やはり、正夫も含めて、渡部博文こそが、この「小説 中野」に登場する人物の中で抜群に一番面白いのだ。

普通、面白い話をするときに

「これって面白いんだよ」

って説明してから、話すというのは、あまり良い方法ではないが、それでもあえて、これは面白いと書かなくてはいけないような気が、そのときの正夫にはしていた。

だが、ひよつとするとこの話の面白さは他人にはまったく伝わらないかもしれない。あまりにも突き抜けた面白さというものは、なかなか伝わりにくいものだ。あたかも禅の公案が、一読して何の話だかわからないのにも似ている。

しかし、もし彼の話の面白さを知ったならば、これは閉塞した現代への爽やかな清涼剤となるかもしれない。

元提案型二トとして、正夫は、本当に素晴らしい作品を完成させたものだ、しばらく喜びに打ち震えていた。

(読者へ。)

次回からは、小説 渡部博文が始まります。

この小説で語りかけている僕とは、渡部博文のことです。
混乱なきよう、お願い申し上げます)

第104話 「渡部博文 1」

前書き（というか寄せ書き）

僕は、渡部博文と申します。

これから僕が主人公の小説が始まりますが、この小説の作者である正夫さんには悪いんだけど、彼が主張するほど、僕ってそんなに面白いとは思えないんですよ。僕の場合は、面白いというか、まだまだ未成熟だったんじゃないかと思うんですね。あの当時のことは。

まあ、僕ぐらいになると、その未成熟が女性への武器になったりしたりするんだけど、それはそれでいいとして、僕みたいな平凡な人間を主人公にすえて、何を書くのかということがもうはつきりいつてまるつきりわかりませんね。

もともと正夫さんはそういう人なんです。そもそも僕は先輩であり友人でもある正夫さんの作ってきた作品の意味が全然わかりません。いや、これは良い意味で、突き抜けているとかそういう意味ではなくて、自分とはどこか感覚が違うんです。彼の作品を読んで理解しようとする、常に思考にストンプがかかるとは。まるで相撲をしている人がフットボールをやらされるようなものです。

正夫さんの作品は、本当にそれほど僕にとっては謎なんです。いや、正確に言えば「どうでもいい謎」

なのかもしれない。僕は謎に関してはせっかちなんです。謎は早く解けて欲しいのです。そうでなかったらまったく無視です。僕は思考型の人間なんです。自分の感情をどう表出していいかたまにわからなくなるときがあります。そういうときはどうするのか、

というと、まあ、どうもしません、その感情表現のゆがみが、ひよっとすると正夫さんにとっては、不思議なのかもしれない。

僕は思考型なので、謎に関しては、一応は考えますが、しかし答えは出てこないことが多いですね。下手な考え休むに似たり、という言葉がありますが、まあ、僕の考えというのは、大体がそれほど合っていないことがほとんどのような気がしますね。ということは、僕は思考型ではないのかもしれないですね。まあ、僕が思考型なんてそもそも考えてみたらおかしい話で、何で自分でさつきそう思ったのかもよくわかりませんが。

段々、話が曖昧模糊になってきましたが、つまり、僕の方としては、いくらでもおやんなさい、って感じなんですね。正夫さんに僕のことばかりっこないし、どこまで行っても、それは結局、「こいつってわからん」

ってことにしかならないでしょうから。だから、別に僕は何でもいいんですね。前に僕は、正夫さんにいったけれども、僕は社会に出て変ったんですね。もうすっかり、昔の未熟な自分とは、おさらばしたんですよ。それにも関わらず、僕の古い脱ぎ捨てた外皮を探しているようなものですよね。それは懐古趣味であるし、ある意味、ロマンチックかもしれないけれども、もう僕とは何の関係もない断絶された過去の僕なわけです。

ちなみに、僕は、もちろん監視しとるよ。

そりゃあ、自分が主人公の小説なんだから何を書かれるか不安なので、もし、自分が腹が立ったら、すぐに顔を出そうと思っっていますので、読者の方もお気をつけください。

(読者へ)

これから三人称の小説が始まります。

この前書き(というか寄せ書き)だけは「小説 中野」の作中人

物、渡部本人の陳述です。

そして、たまに、僕、という書き出しで、小説が中断するかもしれません。それは渡部博文です。

一応、混乱を防ぐために、

「僕は渡部博文です」

という注釈を書いてから登場してもらおうことにします。

正夫が渡部博文と初めて会ったのは、彼が新入生として大学のサークルの新入生歓迎コンパに来たときであった。正夫はそのとき、この児童文化研究会に入って、数ヶ月たったところであり、二年生だったので先輩であった。

渡部博文はどんな人物だったか。一目見てわかる非常に特徴的な人物だった。初め、こいつは銅像みたいな人間だな、と正夫は思った。顔は浅黒く、頬はふくらんでいて、目は愛嬌があった。それに加えて、何か変な雰囲気彼の回りに立ち込めていた。あきらかに異彩を放っていた。

それは手に傘を持っていたからかもしれない。その日は快晴であり、傘を持ってくる理由は少しもない。しかし、彼は平気な顔をして傘を持っていて、頑なに周囲に溶け込もうとしなかった。

正夫はそんな彼を一目見て、笑ってしまった。そのとき、親しくなっていた市村さんに、すぐに報告する。

「ふふふふ。」

あいつ、何なんですかね。

濃すぎる」

「マサさん。」

ああいう奴いるんだよ。

新入生歓迎コンパになるとああいうやつが毎年一人は出て来るんだよ。

無視しておいたほうがいいよ。

勝手に消えてゆくから」

と話している内に、渡部はとんでもない行動を取り始めたのであった。

何と、黒い傘を広げたのだった。そして、不思議そうな顔をして

内側から傘の骨を覗いている。

「うわっはっはっはっ。」

「あいつ、誰だよ」

正夫はそれを見て爆笑してしまった。

「あれ、何なんだよ。」

「かまって欲しいのか」

正夫は同輩の川俣に話したのだった。

この川俣はもともと空手をやっていた男で、色白で端正な顔つきをしていて、ハンサムといえばハンサムであったが、近年だんだん太り始めて、ハンサムが崩れてきていた。とはいっても、太り始めたという意味では正夫も同じであるし、正夫はハンサムでさえなかったが。

「マサシ〜！」

「アツ、ヒヤツヒヤヒヤツヒヤア〜！」

と川俣は大笑いした。

「すげえ受けるわ」

ちなみに、川俣は、正夫のことをマサシと呼んでいた。何故かというところ、「正夫氏」が、縮まって、「マサシ」になっただけ。もちろん、何で正夫氏と呼んでいたのか、そこが謎のままであるが、彼の中ではそれが論理的に成立しているらしかった。

「マサシ〜。」

「あいつ変だわ。」

「あれ、ジミー大西だわ。」

「ヒヤツヒヤツヒヤツ〜」

それからしばらく、渡部は傘を広げて骨を見ていたが、腹を立てた三年生の先輩の一人に（たしか宮路さんだと思うが）注意されて、その奇行をやめたのであった。

「あいつやばいわ。」

「やばいっすよね。」

市村さん「」

と二人で道々話していて、ミーティングをしていた学生会館から、部室に戻ると、噂をしていた当の本人の渡部がいたのであった。

「どうもです。」

渡部と申します」

「あつ、どうも」

「はづふえゝ」

はへゝ

はへゝ

はふへゝ

はふへえ」

渡部は部室の鴨居に手を当てて、わけのわからない歌を歌っていた。ふと見ると、ネクタイをしているが、ものすごく緩めてあって、首もとよりはるか下の部分で二つにわかれている。

「うわっ。」

やばい」

正夫はその状況を見てショックを受けた。

「こいつ、半端者じゃねえ」

市村さんも啞然としていた。

「無視、無視……」

と正夫にいうと、二人は、新入生の渡部を残したまま、黙って部室を去ったのであった。

新人生歓迎会の季節が過ぎると、どんどん新入生の数が減ってゆき、これからサークル活動をしてくれる人の数が絞られてゆくのであるが、市村さんの意見に反して、渡部は残り続けた。

それどころか、サークルの部室によくくるようになっていた。その原因は、三年の福田さんの人当たりのよさもあったのかもしれない。福田さんは、欠点が多かったかもしれないが、人当たりの良さに関してはずば抜けていた。市村さんは三年であるが、創作班ではなくて、児童班である。ちなみに、児童班の先輩たちは、ほとんど先輩たちとは、児童館などの活動で仲良くしていたし。人形班も人形劇というものは、人形の操り方なども教わる必要があるの、仲良くなるのである。しかし、創作班だけは、それほど仲良くなるきっかけがないので、その先輩個人の接しやすさが問題になるのであるが…。

創作班の他の三年生は、本当に最悪だった。ちなみに福田さんの他にも二人、三年生の正夫にとって先輩がいるのであるが、こいつらが人間としても最悪だった。

まずは、江尻さん。この人は、まず一年下の女の子のサークル員とできていた。それだけでも最悪であるが、女性と自分と仲の良い人間以外には一切話しかけなかった。彼は、送別会の際に、泣きながらそのことについて反省していた。

「僕はもつと後輩と仲良くしておいた方が…うつつ…」

しかし、その送別会でも、女性と自分と仲の良い人以外には一切話しかけないという人だった。その場で、そしてそれ以降も、正夫や男の後輩は、話しかけられたことが一切ない。もちろん、正夫も話しかけなかった。多分、今でも女性と自分と仲の良い人以外とは一切話しかけない人であろうし、もともと、悪気はなくて弱気というかそういう人なんだと思う。この人は最悪であるが、許せる例だ

と思う。

そして、もう一人は、正夫がこのサークルで一番気に食わなかった人で、鍋島さんといった。彼は、話していると、典型的な

「俺の方がもつとよく知っている！」

といたがるタイプで、何を話しても、

「っていうか、ああ？それはね、俺の知っているところによると、こういうことだよ」

「っていうか、それならね、もつとすごい話があるよ……」

と何を話しても、それよりもすごい例をあげて、人の話をぶち壊しにしてくれるのだった。

江尻さんは、正夫は無視していたし、別に嫌な人物とは思ってことはなかったが、鍋島さんには、積極的にいたるところで、

「最悪の人間だ」

ということを触れ回っていた。

そもそも、正夫が、今思うとそれほど面白くない小説を、文集のために書いたのに感想があるというので、

「どうですか」

ときいてみたら、

「っていうか、僕はね、君の富士見ファンタジア（ライトノベル）みたいな小説は読まないから」

と返答したのには、正夫はものすごく腹が立った。

読んだ上で批判するのならまだしも、読まないわ、って。

それを当人にいう無神経さ。

何だ、こいつ。

何様だ。

と、そのエピソードを、自分の話すことができるサークル員すべてに触れ回った。

しかし、鍋島さんの性格ってのは、皆知っていたみたいで、

「あの人はそういう人なんですよ」

「子供っぽいっていうか、まだ成長できていないのよ」

という反応であった。

それから数カ月後であるが、どこかに合宿に出かけたときに、後輩と先輩少して、鍋島さんの話になる。そこで悪口が噴出した。

「結局、鍋島さんってのは都会にいるべき人じゃないんだよね」

と小田和孝がいった。

「あのね、あの人は人と接する仕事とかできないだろうね。俺は気の毒だと思っよ」

と同輩の川俣がいった。

「俺はね、むかつくんですよ。」

俺の作品を、読まないって…ざけんじゃねえ…って叫びたくなり
ましたね」

と正夫は激怒する。

「あれはね…もうしょうがないよ。」

あれはもう、病気なんだよ」

と福田さんは悲しそうな目をして口をすばめていう。

「あの人は何をいうにも肯定ってのがないからね。」

何をいうのも『っていうか…』って否定形なんだよ。

だからあの人は『っていうか』の鍋島さんなんだな。

俺はそう呼んでいるよ」

と市村さんは話していた。

「そうですね。」

これからは、『ってゆうかの鍋島さん』って呼ぶことにしましよ
う。

また、あの『ってゆうか』がうるさいよ。

とかね。

ハッハッハッハ」

と正夫は締めくくる。

そして、正夫がトイレに行こうと席を外すと、その部屋のすぐわ
きの部屋に当の鍋島さんが薄目を開けて、寝ているふりをしていた
のだった。

正夫は、それを見て、思わず笑いそうになったが、こらえて知らない顔をして、トイレに行き、そしてまた通り過ぎて部屋に入る。

そこでは鍋島さんの悪口がヒートアップして、もう本人の現実のありさまよりも、何倍増しになってしまい、そんな凶悪な人間が誰にも殺されないで生きているのが不思議だ、というくらいにまでなっってしまった。

ようやく、悪口話は出し切ったが、正夫は、部屋の外に行くと、鍋島さんは起きていた。

「寝ていたんですか」

「ああ、よく寝たよ。」

これから何もイベントはないんだろ。

また寝ようかな」

正夫は普通の顔をして、

「そうですか」

と答える。

鍋島さんは、そのとき、目を真っ赤にして

「俺はこれから寝るけれどもな。」

いいか。

俺が寝ている間に、悪口をいつたらただじゃおかねえぞ！」

という毛布を引つかぶって向こう側を向いて横になったのである。

もう悪口は出し切っているので、あれ以上、話が出ることもないだろうが…。

正夫は、この場合は、心が痛むというか、反省心よりも、大笑いしたい気分だった。正夫にとって彼はそれほど最悪の先輩だったともいえる。

彼が引退した後からは、普通に接するようになって飲み会などにも一緒に行くようになったのであるが、当時はそれほど腹の立つ存在であったのである。

渡部博文は、初めこそ、おかしな行動をしていたが、部室で接してわかったのは、別にそれほど変な人間ではない、ということであった。では、何故、あの行動をしたのか、それは謎であるが、たまにああいうことをするらしい。

だが、いつもそんなことをするわけではないので、というよりもそもそもが、いつもそんなことをしていたら大学に入学はできないであろうし、人懐っこいところもあつたので、正夫は普通につきあっていた。

正夫は、講義を終えて、午後6時ごろに部室に行くと、渡部がいた。すっかり部室の住人になってしまったのである。

「よく、くるねえ」

という正夫は、本を取り出した。

「正夫さん。」

僕はですね、寂しいんですよ」

「まあ、俺もそうかもしれないなあ。」

大学つてところはこれは誰も指摘しないけれども、寂しいところだよね」

「ですよね。」

名古屋から東京に来て、困っていますもの。

何でこんなに寂しいんだって」

「それは、東京の寂しさと、大学の寂しさがダブルできたんだよ。やけに苦しいよね。」

だから、宗教とか政治活動とかするのかなあ、若者たちは」

「そうですね」

ということと話していると、二部生の市村さんがやってきた。

「おう、マサさんに、渡部」

「どうも」

「何をしているんだい」

「いやあ、寂しいなあ、という話をしていたんです」

「寂しいか。」

たしかにそれは俺も感じるなあ。

わかった。

じゃあ、今日は俺のアパートに泊まるか」

「え、いいんですか」

「別にいいよ」

というわけで、三人はアパートに向かったのであった。市村さんは講義があつたが、それよりも三人の集まりの方を重視した。これは後に、大学八年生になるその片鱗をうかがわせるものであった。

飯田橋から山手線で五反田に行き、そして駅からしばらく歩くとザンビアの大使館があつて、そこからしばらく行くと古いアパートがあるのだった。

六畳一間であつたが、正夫には妙に広く感じられた。壁には道着がかかっていた。市村さんは古流の空手をしていたのだった。

「ゲームでもやるか」

プレイステーションがあつた。

「やりますか」

三人はプレイステーションをやったり、テレビを見たり、近所の雑貨屋で弁当を買つてそれを食べたりしたのだった。

そんなことをしている間に夜は更けてゆく。

「いやあ、何で大学つてあんなに寂しいのかね」

市村さんはため息をついた。

「彼女とかができれば寂しくないのかなあ」

正夫はプレイステーションのオメガブーストをやっていた。

「そういえば、俺は、前に女の子ができて、デートして、一目でホテルに誘つたら断られたよ」

「市村さん、かっこいいですね。」

まるで映画「タクシードライバー」のロバート・デニーロじゃないですか」

「そうかな」

「そうですよ」

渡部は、ゲームをニヤニヤしながら見ていた。

「楽しいかい」

「ええ、楽しいですよ。」

正夫さん、僕はですね、ゲームを見ているってのが本当に好きなんです。それはやれたらやりませんが、シューティングみたいなのは苦手なんです。だから、この場合は、見ている方がいいですね」

「そうか。」

何か、俺は、君が傘を広げるのを見て、どんな奴がきたんだ、って思ったが、君は思ったより全然普通だったねえ」

「ええ。もちろん、普通ですよ」

「そっだよねえ。」

「ハハハハハ」

と正夫は安心して笑ったが、渡部は普通でなかったのである。それはこれからおいおい明らかになってゆくことである。

渡部にはサークル活動を通じて巨大な敵が二人いた。それは先ほど書いた愛想の悪い先輩たちではなくて、渡部と一緒に入ってきた小田和孝と、長山健太郎であった。小田については、書きたいことがいろいろあるが、とりあえず、飛ばしておこうと思う。彼は、「あれじゃねえかな…」で始まる特徴的な語り方をする日陰者の酒飲みであった。という説明で足りるであろう。

一方、長山健太郎については、これは長い説明を要するのである。彼は、一年のころは、別の校舎にいたのであるが、転部してきた。一年生のころは少数の友人たちと非常に暗い学生生活を送っていたらしい。

そして、二年になって、このサークルにやってきたのだった。長山は、正夫と同じ二年なのですぐにうちとけることができた。初期のころの彼は、いつも正夫と一緒に行動していた。しかし、同じ二年の川俣には、それほど親しくなれなかった。長山曰く、「あいつには裏表があるから」だそうであった。

小田と長山は、渡部を非常に嫌ったのである。小田は、彼に対してこんなコメントを残している。

「俺、初めて、あいつと会ったときに、ああ、こいつ、かわいそうだな、って思っつて、まあ、年下だし、面倒見てやるうかなって思っつたんですよ。」

けれども、あいつ、何か勘違いしていて…俺に対して、すげえ失礼というか、馴れ馴れしいというか、まあ、腹が立ってきちゃって…あいつ、空気とか読めないじゃないですか。

もうあれはしょうがないかなあ、って思っつて「
そして、長山はこんなコメントを残している。

「俺、あいつのこと、わかるんだよ。」

あ、こいつは、昔の俺だなあって。

俺もあいつと同じだったけれども、そこからいろいろな人に注意されて、成長したんだよ。

何か、周りを見ていて思うんだけど、渡部を甘やかしすぎなんじゃないの？

あいつ、あのままだと、調子に乗っちゃうよ！」

と、非常に今考えると、上から目線なのであるが、しかし、彼ら二人の意見も一理あった。明らかに、渡部は、どこかずれていたのだ。それはそうとして、長山の説明に戻ると、彼は、初め、正夫と一緒に創作班にいたのであった。

しかし、「ポンコツ博士の乱」という歴史イベントが発生して、長山は、人形劇班に移ってしまうのである。

そのポンコツ博士の乱とは何であったかという点、長山の作った脚本である「ポンコツ博士」が、人形劇用に作られていたのであるが、それを演劇でやろうという案が急浮上する。

その意見の対立が、ついには、激論になり、口論になり、創作班を二分する大喧嘩になってしまったのである。とはいっても、その喧嘩を引き起こしたのは、長山が原因であった。彼が先輩たちに対して口角泡飛ばして、ほとんど罵倒に近い感じで反論したから、その場は凍り付いてしまい、熱いバトルが巻き起こったのであった。

正夫は長山に味方した。長山についたのは他にも数人いて、福田班長は、真ん中にいるべきはずなのに、反長山派に回ってしまった。ものすごく仲の悪かった江尻、鍋島と、福田班長はすぐに意気投合して、長山を追い込んだのである。

結局、「ポンコツ博士」は、人形劇になったのであるが、長山はその公演が終わると怒って、別の班に行ってしまった。

しかし、その戦いで、創作班は、親長山派と、反長山派に分かれてしまう。親長山派のリーダーは正夫であり、児童班から移ってきた市村さんであった。

正夫の同輩の川俣は、先輩とも、正夫とも親しかったので、（長

山にいわせると、そういうところが裏表がある、のらしいが)、非常に困惑してしまった。

そして、ある日、長山に

「このサークルが目茶苦茶になったのは、お前のせいだぞ！」と抗議をしたのだった。

これによつて、長山と川俣の仲は決裂してしまうのであった。

創作班は、長山によつて、ドロドロの人間関係になってしまふのである。しかも、長山が班を移ると、福田と、江尻、鍋島は仲が悪くなり、反長山同盟は崩壊する。

長山は、人形劇班に移ると、我々からエグ子と呼ばれている悦子という女性とつき合つて、次の年には班長になるのであった。

悦子は、何でエグ子と呼ばれているかというところ、サークルの男、3人と順々につき合つていたからである。その3人の内には、正夫の同輩の川俣も入っていた。

カラオケで、正夫は、沢田研二の「サムライ」をもじつて、歌つたものであった。

「片手に、佐山さん。」

心に、長山。

唇に、川俣。

背中に、渡部。

あああ

あああ

あああ

あああ

ありがとう…エグ子…」

何で渡部がいるのかというと、エグ子は、渡部を可愛がっていたので、渡部が惚れてしまったのである。

長山とエグ子のカップルは、二年ぐらい続いたのだと思う。

今から思うと、エグ子と結ばれ、人形班の班長になった長山は、慢心していたのかもしれない。

正夫の高校時代からの親友が、このサークルに遊びにきたときに、

「あ、これが正夫の友達か」

と云って、

「これって何だよ」

と、ものすごい顰蹙をかったこともあった。

長山はいろんな意味で、破天荒な男であった。

最終的に、三年のころには、人形劇班の公演をやらないうで、学祭で、ライブをやってしまうのであった。しかも、長山は声量もよくないし、はつきりいって、歌はうまくなかった。

彼は、浅黒くて長髪で、中肉中背であり、結構、カッコいいのであるが、姿勢が悪く、目がギロギロしていた。

正夫は、彼のことを陰で

「水墨画の仙人みたいな顔してやがる！」

とか

「肛門付近の黒い皮膚」

とか呼んでいた。

合宿にいったときに、正夫は長山の真似をしたことがある。

猫背になって、薄目になって、

「チツ、チツ、チツ、チツ」

と連発で舌打ちしてから、

「おう、正夫！」

おう、正夫」

と云って、テーブルの足を蹴って、倒れるという芸であった。

これは、実際に長山が、学祭の公演の後に飲み会をやって、そのコップなどが朝になっても片されていなかったもので、怒って蹴り上げたら、足を骨折して病院に送られたという事件があったから、それをふまえてやったのであった。

こうやって、今、考えると、渡部よりも長山健太郎の方がよっぽど酷い人間のような気がするのであるが、それでも彼は渡部につい

ては、意味もなく、非常に厳しかったのである。

この小説の作者、正夫は困ってしまった。書いても、書いても事柄の方が圧倒的に多すぎて、話が進んでゆかないのである。先ほどの、長山の話にしてもかなりの部分を省略している。それでも何とかして、渡部を話の中心にして述べてゆかなくてはいけない。

今回は、バカノートの話になる。これが成立する過程においてまたややこしいことがあるのであるが、つまりは部室に気楽に書けるコミュニケーションノートのようなものを用意したのである。

しかし、それはチラシの裏みたいな落書きみたいな文章の寄せ集めになって、執筆陣は、大体が、渡部、正夫、小田和孝、長山健太郎であった。

このノートは、ものすごくロングランを続けており、たしか15冊くらいまで続いたのであった。ほとんどが、正夫が書いている回もあった。正夫は常にものを書くのが好きで、部室でも暇があったら書き物をしていた。その持続力は異常であった。

今、手元にバカノートはないので、正しくあっているかどうかわからないが、思い出せるだけ紹介してみようと思う。

月 日 正夫

俺は何のために生きているのだろう。はあ…、俺は一年のころ、はつきりいつてもものすごく孤独だった。俺の友人は、寺尾聡みたいな顔をした男と、小野やすしみみたいな顔をした男と二人だけであった。そして、俺はクラスでかわいい女の子とうっすらと仲良くなって、「サザンクロス」というテニスサークルに誘われたが、俺はテニスサークルなんか行けなかった。だって、テニスなんて怖いじゃん。俺は文章を書きたかったので、文学のサークルに入ろうとしたがどれもつまらなそうだった。そのときに、このサークルがあった

のだ。俺は、そして、今、このサークルに入ったが、何なんだろう。俺。

俺、死んでしまえ！

月 日 小田和孝

まあ、そんなこともあるさ。マサさん。俺も気落ちするときもあるよ。今日は、メロコアの（名前失念）というバンドのCDを買う。なかなかいい曲があふれているね！それから、カップラーメン食って寝る。

月 日 渡部博文

僕は：何だろう。正夫さんも疑問に思っているようだが、僕も、自分が何で東京にきたのか、あんまわかってないかもしれない。そもそも、東京のこの寂しさは何だろう。まあ、名古屋に行っても、いじめられていたけれどもね。それでも、周囲は僕に対して、かまってくれたような気がするんだ。今、僕はコンクリートの中にいるね。ひよつとすると、僕のことを慰めてくれる女性が出てくるかもしれない。、電車に乗っていると、僕のことを誘ってくれる女性がいるかもしれない。その未来の女性に、僕は今、会いたい…。

月 日 小田和孝

何か、日記がものすごく暗くなっているのは気のせいかな。今日は、ジャニス・ジョップリンのCDを聴いて、テレビで、めっちゃいけを見て寝る。しこたま酒を飲んだせいか、頭が痛い。

月 日 正夫

ああ、俺は高校のときに、ある女性がいて、その女性のことが忘れられない。ひょっとしたら告白するかもしれない。今になって告白。それも何だかなあって思う。本当に生きていて、辛いというか、恋人がいて、それで解決する辛さなんだろうか。この辛さは……。っ
ていうかこういう風に書いてみると、辛さを忘れるんだがね。

月 日 渡部博文

最近、思うのだが、僕の周囲は本当に冷たい。特にクラスの連中は、僕を気の毒そうに見ている。この前、クラスで飲み会があったときも、正夫さんに語ったが、クラスの連中は、僕がトイレに行っている間に、店から消えたこともあった。まあ、お金は払ってあったけれどもね。僕は一瞬、一人ぼっちになって、悲しい気分になった。それでも追いかけて、追いついたけれども。

月 日 正夫

渡部君。君は、また人通りのない横断歩道で赤になったときに、周りは歩いているのに、自分だけ止まっている、とかそういうことがあったんじゃないの。

っというか、まあ、俺もクラスじゃあ、浮いている。俺の友人は、寺尾聡と小野やすしだけだからね。

この前、小野やすしの与太話を6時間きいて死にそうになった。あいつ、自分の高校がどんなに荒れていたのかを延々話すんだよ。自分は不良じゃないのね。だから、

「うちの高校は悪かったよ！」

っというて、自分以外のやつらがいかに悪さをしていたかを、数時間語っているわけ。そんなのに興味ねえよ。っていいたかったが、友人を失うのが怖いので、強くいえなかった。けれども、もう限界だ。いつかフラストレーションが爆発するかもしれない。

月 日 渡部博文

クラスでは浮いていますね。まあ、僕はそれほど社交的な性格ではないので、それほど気にしないけれども。正夫さんは、それでも友人がいるからいいんじゃないかなあ。って思う。まあ、僕には下宿に勝間君という友人がいるからいいかもしれないけど。

月 日 小田和孝

このノートは、オニーノートと決定いたしました！（ものすごく大文字で）

第110話 「渡部博文 7」

月 日 正夫

はあ…

皆、きいてくれるか？

俺、今、小説「渡部博文」というのを書いているんだが、正直、書いている途中で飽きちゃってさ、もうやめていいかな。

何か、もう過去のこと遡るの、どうでもいいみたいな気分なんだよ。

月 日 長山健太郎

俺は、正夫の才能はあると思うよ。

だって、この前、みた「にんじん」って人形劇は、いいシナリオだ
と思うもの。だから、何を書くにせよ、才能を伸ばせばいいと思う
よ。

俺は、正夫にゲームブックを書いて欲しいがね。

月 日 正夫

健さんの紹介で、ステーキ屋の万世で、皿洗いのバイトをすること
になった。

交通費くれるし、まかないうまいし、いいね。

月 日 長山健太郎

正夫、がんばれよ。

月 日 渡部博文

僕は一体、何なんだろう。このごろ本当にそう思うね。悲しいとか、鬱とかではなくて、そういうことではなくて、もっと、自分の意味を問い直したい。といっても、問うてもろくな答えはでないかもしれない。何故なら、クラスの連中に無視される、僕はそんな存在だから…。

月 日 小田和孝

マ かいで、寝ろ！

月 日 渡部博文

最近、やはり思うが、クラスの連中の僕を見る目が冷たいね。別にいいけど。僕は自分の道に行くから。考えてみたら、僕はすっと一人ぼっちだった気がする。このサークルにいても思う。たまに寂しくなる。

月 日 小田和孝

それ以上でも、それ以下でもなし。
何だか人間って限界があるのかね。
わからないやつには、何をいつてもわからないし。
わかるやつには、大体、説明が要らないし。

月 日 正夫

ごめん。
バイト、やめるわ。
一週間やって思った。
皿洗い、俺には無理。

月 日 長山健太郎

正夫！
一体、何なんだ！
紹介した俺の顔に泥を塗るつもりか！
ふざけんな！

月 日 正夫

何か奢るよ。
ごめん、ごめん。

月 日 渡部博文

クラスの連中を前にして…諸行無常という言葉が浮かぶときがあるね。なかなか、自分の劣等感から自由になれない。劣等感というか、やつらは現実に、僕を劣等だと思っているね。思いたいんだろうね。

月 日 小田和孝

アホくさ

月 日 市村さん

モヒモヒモヒモヒモヒ。

シャワー、浴びてくる。

マサさん、待ってて。

第111話 「渡部博文 8」

月 日 渡部博文

僕はねえ…クラスの連中のことを思うといつも暗くなりますね。何でかわからんけれども。別のことを考えようと思ってもクラスの連中のことを思ってしまう。クラス…クラス…クラス。

月 日 小田和孝

だから、のけ者にされるのは、そうされるようなことをしているからだろ。

このオ ニー野郎。

もう愚痴を書くんじゃないやねえ。いいかげんにしろ。

月 日 正夫

まあ、まあ、小田君。
抑えて、抑えて…。

俺も思うんだけど、渡部君！君は人生の深い闇に気付いてしまっただよ。それは今の君の年齢では、誰も知らない深い闇なんだ。その闇を通り抜けることによって、何かをえるね。多分。

ま、何をえることもないかもしれないけど。

月 日 渡部博文

クラスの連中は、どうして僕に冷たいんだろうか。それをずっと考えている。何で僕が教授から指名されて発言するとき「くすくすと笑う人が出るのか。それはおかしい。」

月 日 正夫

君はそういう宿命を背負っているんだよ。
俺は、この前、すごくかわいい新入部員を前にして、上着をいきなり宙にかざして、眺めるといふパフォーマンスをやってきた君に笑ったもの。
その女の子は暗い顔をしていたけれども。

月 日 正夫

今日は、小田と長山と三人でいろいろ語り合う。
彼らは、人形班であるが、話の内容は、まあ、いつもの愚痴なわけだ…。

閉鎖的、閉鎖的、閉鎖的！

それはしょうがないと思うけれどもねえ。やはり児童文化研究会つてところは、閉鎖的なんですよ。新入生に対してもそれは先輩たちは、親切じゃないよ。特に創作班の…いや、これは書かないことししよう。

創作班の文集の編集をしたことがあるが、すごかった。特に、例の三人の先輩たちは、罵詈雑言のぶつけあい、作品をきっかけに罵倒合戦をしているだけのような…

「鍋島君やってしまったね！」

最後の最後で、猫が笑うってのは、気持ち悪いんだよ！

あれは、最大のミスだと思う。

いかに、猫が少年に変身して仲良くなったとしても、そこから元に戻って、猫が笑うって風にするのはおかしいだろ。

猫が笑うのを、思い浮かべられないのか？

「イマジネーションの欠如かね」

とかね。

まあ、福田班長の感想だけでも。

もっとも俺も猫が笑うのはどうかって思うけれども。つていうか、鍋島むか…いや、何でもない。

月 日 長山健太郎

俺も人形班に移ってよかったよ。

あの創作班つて、本当に胸糞悪くなるわ。

月 日 正夫

そういう部分もあるよね。

つていうか鍋島むか…いや…なんでもない。

月 日 長山健太郎

正夫、すれすれなやつだな。

月 日 正夫

鍋島むか鍋島むか鍋島むか

いや、なんでもない。

月 日 渡部博文

今日は、散歩をして、そして、授業に出て、このノートを書いて、帰って寝ようと思う。

一瞬、心の中が明るくなったがクラスの連中のことを思い出すと、また暗くなった。

いつもクラスの連中のことを考えないようにしようと思っているのについつい考えて暗くなる。そんな自分を叱りたくなる。

月 日 正夫

むかつくんだよおおおお！

いや、なんでもない。

月 日 小田和孝

あのすれすれトークは面白かったなあ。
つていうか、すれすれラインから突破しているからね。

月 日 長山健太郎

死ね！死ね！死ね！
死ね！！

何より、自分、死ね！

あと正夫、死ね！

月 日 正夫

何で俺が死ななきゃいかんの？

月 日 渡部博文

自分はいつも殻の中に籠っているような気がするね。
そして楽しそうにしている人を眺めている。
それは自分には関係ないんだ。
楽しそうにしている人たちは、ことう名づけられている。

「クラスの連中」

とね。。

月 日 市村さん

モヒ？

第112話 「渡部博文 9」

月 日 正夫

うおおお！

何だ。

何か、光っている…。

あうあ。

月 日 渡部博文

マサさん…。

相変わらず、わけのわからないテンションだね。

羨ましくもある。

僕は、気分がようやく復活してきた。

この気分ってやつはサイクルになっているのかも。

今は、ようやく上り調子だ。

クラス…いや、考えない、考えない。

月 日 小田和孝

ジャンジャンと音楽をかけて寝ていたら気持ち悪くなったので、窓を開けたら、派手な服を着た女がこつちを睨んできた。同棲していた昔の女を思い出す。

月 日 正夫

うおおおお！俺は過去に遡って何をやっているのか。今、ここにいるのは過去の人々だ。俺はそんなやつらに興味はない。今だ。今を見せしてくれ！

あらゆる人生論の究極は、今、今、今だ！

今に目覚めよ！

みんな、今なんだよ！

わかるか！

月 日 小田和孝

今に目覚めている人間が、こんなバカノートに文章を書かないだろ
うなあ、なんてことを思い、家かえって、梅サワー飲んで寝る。

月 日 正夫

昨日、小田、長山と人生について語り合う。

その席で、

「渡部、あいつ何なんだよ」

という話になる。

俺はこう答えるだろう。

「渡部？」

あいつは、君たちであり、僕たちだよ！」

二人はきよとんとした。

「わかるかね？」

渡部は、僕らだ！

渡部とは、真の人間だ！

忘れ去られた何かなのである！

僕はいいたい。

人間よ。

渡部に還れと！

その素晴らしさを感じて欲しい！」

【渡部エピソード】

学祭のときに、変な色のバンダナにねこじゃらしを差して、列になっっている席を前にして

「一号車！」

「二号車！」

と点呼する。

それを見て、先輩が（多分、宮路さん）

「やめろよー！」

と叫ぶと

「僕はやめませんよ！」

と怒鳴り返す。

【渡部エピソード その2】

皆が福田班長の悪口をいっているときに、急に

「シクシク」

と泣き始める。

【渡部エピソード その3】

車通りの一切ない横断歩道でも、信号が赤になると止まる。
たとえば、連れの人間10人が歩き出しても、じっと止まっている。

【渡部エピソード その4】

エレベーターで降りるときに、エレベーターがガタガタ揺れていた。

「このエレベーター古いんだろうね。」

「やたら、揺れるね」

と話しかけると、厳かな声で渡部は、こう答える。

「アースクエイク！」

【渡部エピソード その5】

「コーラと、チョコレート買ってきてくれ！」

と市村さんが渡部にいう。

すると渡部は、指定されたものと全然違う、烏龍茶とプチシユーを買ってくる。

そのときに、たまたま、市村さんのアパートにいて呆れた俺は、

「お前のことはバカとはいわないよ…」

「バカとはいわないが…」

渡部の顔を見て言い放つ。

「死ね！」

どうも。読者の皆さん。

僕は、渡部です。

読者の皆さんに対して、正夫先輩があたかも僕のことを、アホみたいに書いているような気がするので、安心できなくなったので、ここで筆をとることにしました。

まあ、個々の出来事に関して、反論すると長くなるので、僕はもつと違うことを書くのかなあと思います。

が、そう考えると、あんまり書くことないんだけども、それでもせつかくだから、何かを搾り出してでも書くようにもってゆきたいが、しかし、読者の皆さんは、僕のことをアホだともうすでに思っているの、何を書いても信用してくれないような気がしますね。

そんなことはないのです。

アホは、正夫さんの方なんですな。

僕は今、小さな事務用品の会社の営業をやっておりますが、正夫さんはずっとコンビニをやっていて、今や二トではないですか。

これこそ、アホの最たるものです。

といつても、別に僕は差別主義者なわけではないのですが、人間として特に問題がなければ就職すればいいのになあ、とは思いますがね。

もつとも、今更、そんなことをいつてもきく耳をもつような人じゃありませんがね。

僕はね、今から小田和孝に電話をしようと思っているのです。

何でかという、正夫さんが何回も、僕と小田との不仲のことを話題にしているのが腹が立ってきたんですね。

しかも、どうも、小田が腹が立っているのは、僕がアホだから、

みたいな書き方をしているではないですか。

本当に失礼な話です。

だから電話するのです。

「あ、誰」

「あつ、小田君」

「うん…、誰？」

「僕、渡部だけれども」

「ああ、渡部…何？」

「何って別に何ってほどのこともないんだけどもさ」

「今、寝てたんだよ。」

「朝の9時だからな」

「あ、ごめん、ごめん」

「まあ、別に休みだからいいけど。」

「何かあったの。」

「OB会でもあるの」

「ないよ」

「じゃあ、何の用？」

「小田君さ、僕は特に何かの用があつて電話したんじゃないんだよ。いいじゃないか、別に、何の用がなくても」

「用がないの？」

「じゃ、切るよ」

「待って！待って！」

「何だよ！」

「小田君さ、君はどうして僕につっかかるんだい」

「いや、用がなきゃいいかと思って」

「君は僕のことを誤解しているんだよ！」

と、僕は小田君にいつてやったんだ。

その真剣な語調が向うに響いたようだった。

「誤解って、何の話…」

「僕はね。」

怒っているんだよ。

正夫さんは、僕や、君を小説「中野」に出して、僕たちを食い物にしようとしているんだよ。

知らないの」

「あ、俺、あんまり正夫さんの小説に興味ないからなあ」

「じゃあ、プリントアウトして持っていくよ。」

今日会える？」

「まあ、暇だからいいけど。」

あ、ついでに、今日、俺、健さんとも会っただよ。

偶然だね。

三人で、飯でも食べるか」

「いいね」

「中野の北口で、11時に会うことになっているから、きてよ」

「わかった」

ひよんなことから、僕の学生時代の最大の敵である、小田和孝と長山健太郎先輩と会うことになったのだった。

僕は罷にはまったんじゃないか、という直感がしたね。けれども、もう今となつてしまつては、何も他に行動もできないので、こうなつたらしょうがない、観念するかと、中野駅に向かつたのだつた。

正夫さんの小説「渡部博文」をプリントアウトして、電車に乗りながら読んでいたんだけど、ひとつ不審な点が見つかつたのだつた。

長々と、長山健太郎について説明するのはいいとして、どうして創作班のあまり仲がよくなつた先輩、江尻さんと鍋島さんのことを書いたのだろうか。

これはひよつとすると、正夫さんのメッセージだつたのかもしれない。もしくは小説的なテクニクだつたのかもかもしれない。

時代は繰り返すというが、この鍋島さんと江尻さんと福田さん、この三人の関係が、そのまま、渡部、長山、小田との関係に似ていると、正夫さんは指摘したかつたのではないだろうか。

誰が、誰に当てはまるかはすぐにわかつた。

まず、あのおしゃべり出っ歯の福田さんは、間違いなく僕である。僕は別にそれほどおしゃべりではないが、彼みたいにやらなくていいことを言つたりしたりして失敗するタイプである。

そして、鍋島さんは明らかに、小田和孝である。この二人は、性格の陰湿さ、酒飲みなところ、説教くさいところ、メンタリティーは全部一緒だつた。

いつか、小田和孝自身も

「俺って、鍋島さんだからよ。

ヒヤッ、ヒヤッ、ヒヤッ」

と笑つていたものである。

長山健太郎氏は、江尻さん。これはあまり似ていないかもしれないな

いが、実は小心者、あまり男の後輩、先輩には受けが良くない、という意味で一緒であった。

正夫さんは、上の三人と、そして今の三人とを同一視して、そこからいかに三人が仲良くしてゆくのかの方法を考える、ということをしようとしていたのかもしれない。

もちろん、今考えたことは、僕の妄想かもしれないが、何となくそう考えるとじっくりきそうである。しかし、仮にそういう風に当てはめたとしても、どううまくやっていくのかがさっぱりわからない。

そもそもが、僕が福田さんだとしたら、何もしない方がいいだろう。彼は簡単な算数の問題ができなかったのらしい。本当に天才的に、思考力に難ありの人なのだ。そんな人間に何ができるだろうか。それこそ、歯を出しているだけしかできないのだ。

そうこうしている内に、電車は中野について、改札口にいくと、小田和孝がいた。彼は、うつむきかげんにして、立って待っていた。

「あ、渡部。

久しぶり」

と小田は、時計を見る。

「何か、健さん…。」

あいつ、遅刻するみたいなんで。

どうする？」

ときいてきた。

「どうするか、つてきかれてもねえ…。」

話を最後までできないで切り込んできた。

「お前、中野に詳しいんだからさ。

ちよつと案内してくれないかな」

「どこを」

「中野ブロードウエー」

「別にいいよ」

「じゃ、行くか」

というと、小田は歩き出して、止まった。

「俺、どこに行けばいいか、わかんねえからさ。」

お前が先に行ってくんないかな」

「まあ、僕が案内するんだから、そういうことになるよね」

「じゃ、早く行くか」

僕は段々、腹が立ってきたね。

何てぶっきらぼうな男なんだろうか。この僕が案内して当然だと思っっているんだ。それは違う。案内というものは、相手に好意があつてするものだ。何で僕がしなきゃいかなの。という問いがふつつ沸いてきた。

しかも、駅からブロードウエーに歩くときにこんなことをいったのである。

「お前とき、二人きりで歩くのって珍しいよな。」

あの時、以来かな。

ほら、箱根の旅行で、俺たちだけ行つたじゃない。

サークル旅行の下見でさ」

「あ、あつたね」

実は、その下見の旅行で、腹を立てた僕は、旅先で彼を残したまま、電車に乗って帰つたのだった。

「あんときのことは…」

といいかけて、小田は黙った。

「まあ、昔のことだからさ。」

俺は別にいいけど…」

「そう」

俺は別いいけど。

周りは良く思つてねえなあつて思つて」

「うん」

「あれ、仕事だったし。」

仕事を途中で放棄しちゃいけねえんじやなねえかなつて」

「まあ、ね」

「昔のことだから、別にいいかもしれねえけど」

「そうだね」

「けど、やっぱ、あれだから……」

「うん」

「仕事だから。」

「仕事はやっぱ、手抜きちゃいけねえなって、思って……」

「ほら、ここがブロードウエーだよ。」

「もう、昔のことは忘れよう」

「ああ。」

「別に俺は気にしてねえけど」

「というと、僕は彼を、まんだらけに案内したのだった。」

一時間くらい中野ブロードウエーを散策してから、僕と小田は「小説 中野」に良く出てくるSというファミレスに行ったのだった。随分、古いファミレスである。

窓際に座ると道路の向こう側に、コンビニがあつて、中が良く見えた。大学生らしき男がレジに立っていた。

「ところで、何で中野なの？」

と当然のことをきいてみた。

すると小田は

「マサさんに会うためじゃないか」

と答える。

「あ、俺、とりあえずドリンクバーね。」

頼んどいて」

というと、トイレに行く。

アゴを引いて顔を少し斜めにして、小田はトイレへと向かった。茶色い髪をしていて、サラサラしているが、それほどカッコいいということもない。ただ清潔そうではあった。

正夫さんがくる。

という話をきいて、僕は大分助かったような気になったが、もちろん、それを明言することはしないであろう。

小田は、トイレから帰ってくる。

「何か、健さんからメールがあつてさ。」

あいつ、Sの場所知らないっていうんだよ。

だから、俺が連れてくるわ。

それとも、お前、連れてくる？」

僕は、急いで首を振ったね。

怖くて何をされるか、わかったもんじゃない。

「まあ、それはそうだろうね。」

「じゃあ、行ってくるからさ」

「頼むよ」

僕は、窓から小田の背中を見つつも、小田と長山先輩との人間関係のことを考えていた。

改めて思うに、小田と長山さんとはそれほど仲が良くないはずである。

どうしてかというと、昔、小田と長山さんは、一緒に人形劇班にいたのであるが、小田の人形扱いや、台詞回しがものすごく下手糞で、それをバカにされて、怒って、創作班に移ってきたのではないかと、という噂があった。

たしかに、小田のパフォーマンスは最悪であった。まず、ガチガチに緊張しているのだ。

たとえば、人形が倒れる演技があるとす。人形が、地面に消えてしまうのである。そして、急に猛スピードで、上に浮き上がってきて、

「あい

たた…

たた…」

とすつとんきょうな声を上げるのだ。

ここにいたる段階で、操作や演技の間違いが4、5箇所あるのであるが、そのどれを指摘しても、決して小田の演技はうまくならず、混沌化してゆく。

しまいには、教える方も疲れてしまい、教えた結果どうなったのかを見ると、確かに、前のは違っているが、やはりおかしい、というか、下手をしたら何も教えなかった方がましだったかもしれない、という感じになるのである。

特に、人形の動かし方は、どう教えても、早すぎた。人形が超スピードで動くのである。遅くしてといっても、肝心なところで、妙に超スピードになり、「力むな」といってもどんどん力んで、しま

いには、人形を落としてしまうのであった。

そんな小田を、長山さんが文句をいわないわけがなかった。長山さんは、誰かに不備があつたら、延々とそればかり数時間もいつている人間である。もちろん、小田も傷つくだろう。

創作班に移ってきたときの小田は、顔面が蒼白だったような気がする。もつとも、普段から顔は白いので、区別はつかなかったが。

小田は音楽は好きなのに、リズムをとるのが下手糞なのだ。どうしてだかわからないが、変なこわばりがある。手は緊張するということも震えているし、カラオケも声が小さいから誤魔化せていたがそんなにうまくはない。

しかも、自分がそんな感じなのに、他人への批判は、結構苛烈である。さっきも、散策している途中に

「ま、俺はいいんだけども」

といつては、延々と、サークルの旅行の下見について、しつこく話しかけてきたので、僕は、

「じゃあ、もう一回、一人で行ってくればいいじゃないか」

と叫んでしまっただくらいである。

そうしたら、

「それはないだろう。」

もう何年も前の話だよ」

と小田も圧倒されたようであった。

「何年も前の話をしているのは、どっちかね」と僕は追撃をする。

「だから、いつているんだろ。」

俺はどうでもいいんだって」

「じゃあ、話すな！」

僕は、鼻息が荒くなつたね。

小田は打ちひしがれて、優しく、

「まあ、そんなに怒るなよ」

といつてきた。

しかし、目は妙に光っていた。

これは、長山さんと合流したとたん、大規模な、反撃が始まるかもしれない。

僕の心臓は、だから、ドキドキしていた。

しばらく、窓の外を見てみると、小田がやってきた。背広姿の長山さんもやってきた。相変わらず顔は浅黒く、目は半眼で、切れ者の素浪人みたいな風貌をしていた。

僕は、これから、どうなるのだろうか。

正夫さんはいつになったらくるのだろうか。

「助けて。

マサさん！」

と、僕は叫びたくなった。

僕の中では、長山さんは同じ歳でもあるわけだし、それほど緊張はしないだろうとついさつき、一瞬思ったのだけれどもまったくそんなことはなかった。やはり人間としてのオーラの差というか、長山さんには常にダークオーラが発動していて、僕はその渦に巻き込まれそうになったね。

長山さんは、僕の斜め前に座った。店内は閑散としていた。隅っこの方に、黒人がいる。

三人はしばらくたって、お互いが話すべき話題がないことに気づいたようだった。

僕にしても何かしら語っても良かったのであるが、何を語るにしても長山さんに否定されそうで怖かった。そもそも、僕を前にしての、長山さんの詰まらなそうな表情がそれを物語っていた。

僕は今、付き合っちゃいけない別世界の人間と顔を合わせているんだ。ということがわかったね。こういう場合は、無視しておいた方がいいんだけど、僕は無理をして話題を作ることにした。

「そういえば、長山さんは悦子（エグ子）さんと別れたんですか」「いきなりの僕の質問に、長山さんはギョツとした顔をしてから、」「ああ、別れたよ」

と横を向いて不興気に呟いた。

「だから……」

「いや、正夫さんからきいたんですよ」

「そう」

「それは大変でしたね」

「まあ、大変だよ」

「というと、長山さんはそれで話を終えてしまった。」「最近、どうなの。」

先生の方は」

と、小田も話を促す。

「まあ、可もなく、不可もなくかな……」

「そう」

というと、小田もそれ以上、話をしようと思わないのか、黙ってしまった。

「あのさ……」

長山さんは二人にきいた。

「正夫はいつくるの」

「もうじきなんじゃないかなあ」

「何か間が持たないな」

「うん、そうですね」

さすがの小田も長山さんには怯えているようであった。

「やはり、正夫がいい潤滑油になっているんだよなあ。

はあ、正夫、こないかな」

といている間に、携帯にメールが入る。

正夫さんからであった。

「件名 すまん、渡部君！

どうも朝から胃腸の調子がおかしくてさ。アパートから出られないから、今度にしてくれないかな。二人にはそう伝えておいて。本当に、ピーピーなんだよ。ごめん。行けない」

僕はこれを見て、顔面が蒼白になったね。

「あの〜、長山さん。

これ見てください」

「ああ〜」

長山さんは、携帯を見る。そして、

「チッ！」

と舌打ちをする。

「正夫…死ね！」
という。

小田も、携帯を見ていった。

「あいつ、もつと早く、そういうことは決めるよ。
どうするんだよ。」

あのバカ！」

僕は、いいチャンスだと思って、二人に「渡部博文」のコピーした原稿を見せたのだった。

「あの人は、君たち二人をバカにするような小説を書いているんだよ。これ、ほら読んでみて！」

二人は興味を示したみたいであった。

長山さんは、正夫さんの書いた小説を一気に読んだ。さすが高校の国語の先生をしているだけはある。読み終わったら、その紙を後を追いかけて読んでいる小田に渡し、コーヒーを飲んでから毒を吐いた。

「正夫：あいつ。」

「いろんな意味で、死ね！」

「そうでしょう。」

「やっぱりひどいでしょう。僕たちの悪口を書いて」

「渡部や小田に関しては、本当のことだから俺はかまわないけれども、俺への扱いがひどいな」

「えっ、そう感じました」

「これでも、同学年の友人で、割りとうも心を開いていたと思っていたんだよ。俺、自分の家にもあいつを泊めたしね。あいつ、いびきがうるさかったよ」

「もう、悪口ばかりですよ」

「あいつにもひどいところは、いっぱいあるけれどもね。何か、あいつがまるで、仏様や仙人のような人格者になっている感じがするじゃない。次元の高いところで、俺たち愚かな民を見下ろしているみたいなさ。」

「事实は、まったく逆だからね。」

「そもそもあいつ、ニートなんだから」

「提案型ニートとかいってますよ」

「ブツ。」

「何だよ、それ。」

「ハハハハハハハハ」

と長山さんにしては初めて、僕のいったことで笑ったのだった。

「あいつ、バカじゃないのか。あいつが何を提案するんだよ。どうしたら女の子にもてないか。女の子にもてないハウトゥー本でも書けばいいんだろ。あいつの女の子の好きになり方は異常だからな。」

変質者、正夫だからな」

「そこまでいいですか」

「あいつが同学年の女の子たちにどんな風に思われていたのか、この場で俺が全部、情報公開したらあいつもへこむし、この小説全体を根本からぶっ壊すことになるよ。もう、そうしてやろうか。」

そもそもがツッチーのことを書いてないしね」

「あつ、ツッチーさんに、もう信じられないくらいに入れ込んでいましたよね。正夫さん」

それをきいて、

「ヒヤッヒヤッヒヤッ」

と、小田が反応する。

「マサさんって、何だろうかね。ツッチーってはつきりいって、そんなに美人な女性じゃなかったじゃない。髪が短くて、どこか岩みみたいな顔をしていたし、目は大きかったけれどもさ。そのどこにもいるような平均以下の女の子に対して、『君は宇宙の象徴だ』とか、変なポエムをバカノートに書いたりしてさ」

「今でも俺は覚えているよ。もう、あいつ、ツッチーを前にするとガクガク震えちゃってね。道で会っても挨拶もできないんだよ。もう硬直状態になってるの。もうあそこまでいくと、好きなんだか、怖がっているんだか、わからないね」

「その割りには、ポエムを書くし」

と小田がいうと、三人は爆笑した。

「あいつ、何なんだよ。」

渡部さ、この小説はもう、お前のことはどうでもいいから、正夫が書いた、ツッチーへのポエムを載せて終わりにしろ、って伝えておいて。あと、俺の元彼女をエグ子、とだけは書くな、ともな。

あれはひどすぎる。

何か、俺の恋愛の1ページが汚された気がするし」

「わかりました」

「あとは修正しないでいいよ。」

俺も多分、そんなもんだよ。学生時代も今も俺は変わらない。そんなぶちきれた男だよ。

俺の通ってきた道が、俺の正しい人生なんだ。

ってな。

それも伝えておいてくれ。

後になつたら、俺の行動の意味もわかるだろう。ってな」

「はい」

どこからどこまで伝えればいいかわからなかったが、僕は頷いたね。

「何か、長山さん、かつこいいわ」

小田はビールを飲んで顔が真っ赤になっていた。

「当たり前だよ。俺にはもう破壊力しかないんだよ。言い換えれば、前に進む力しかないんだよ。いらぬものは、全部捨てちまうんだ。まあ、高校の先生の職はやめないけど」

と長山さんは威勢の良いことをいった後で、好き勝手に正夫さんの悪口を散々撒き散らしてから、帰ったのであった。

長山さんが、消えた後で、小田はビールをもう一杯頼みながら、いったのだった。

「毒吐き男が帰ったか…。」

健、あいつ、浪人とかしてねえし、挫折とか知らないから。

だから、真っ直ぐにいろいろいえるし、真っ直ぐに生きれるんだな。

ま、それが悪いってわけじゃねえけれども…やっぱ…人間、挫折知らないといけないんじゃないかな、って思ってる…。

けど、あいつ、仕事やるから、ちゃんとそこはやる男だから、いいと思うし。

それに比べて、渡部は仕事しなかったし。

あのサークル旅行の下見のときも……」

「やめろ！」

と途中で僕は叫んだね。

「もうその話はいいだろ」

さすがに温厚な僕も切れたのだった。

とまあ、そんな一日だったね……。

読者よ。本題である渡部博文のことから離れるかもしれないが、長山健太郎のリクエストである正夫のツツチーへ贈られたと思しきポエムをここに紹介しよう。

まるで、精巧に作られたガラス細工のような、ちよつとでも触れたら壊れるようなピュアな世界観なので、じっくりと味読していただきたい。

『春そして君』

春先に君のことを思い出す
もつだめだ
道で倒れそうになっている
まるでトウヘンボクさ

『天才』

サリエリはモーツアルトの
天才を憎んだ
僕の中にもあるよ
君を愛することにかけては
誰よりも天才だよ

『出て来い』

お〜い、犯人、出て来い
お前はもう完全に
包囲されている
僕の愛によって完全に
包囲されている

『宇宙』

君は宇宙の象徴だ
僕は窓から眺めている
あまりにも神々しくて
君の毎日がわからない

『インベーダー』

古い喫茶店で
インベーダーゲームをやっている
どんどん点数が増えてゆく
いつになったら
君はくるの

『スウィーテスト』

もう弾けちまいそうだ
僕の右脳には
君の魅力がカーニバル状態

普通のお祭りの三千倍ぐらい
君が繁殖している

『ワイルドな君』

丘で君は笛を吹いている
まるで少年のように
木の陰で僕はみている
まるで少女のように

『道でばったり』

僕は君と出会って
心臓が止まった
何もできなかつた
君の背中を見て
恋の季節を知る

『コーヒー』

コーヒー飲むと
君の楽しげな姿が
水面に浮かぶので
マスター、ごめん
このコーヒー飲めないや

唐突かもしれないが、今回で小説版「渡部博文」は終わってしまった。彼にはまだまだ多くのエピソードがあるが、もしその細々とした出来事を並べても、読者には退屈だと思うから、最後の最後で、一番、インパクトのある、

「ザッツ渡部！」

とでも叫びたいようなエピソードを紹介しよう。

彼の書いたあの文章は、それを読んだ正夫の頭の中に革命を起したほどであった。

「本物だ！」

こいつ

と叫んだものである。

その彼の文章を紹介する前に、彼がどんなきっかけで、この切れまくっている文章をかくことになったのかの説明をしなくてはいけない。

確か、彼が一年のころに、創作班は文集をいつものように作って、その後ろの方に

「私の薦めるもの」

というサークル員の趣味を紹介するコーナーを設けたのである。

その中で、正夫は、映画「死霊のしたたり123」を、長山健太郎はRPG「ウィザードリィ」を、小田和孝は洋楽のCD（アーテイスト名を忘れる）などを紹介したのであるが、渡部博文の文章は他を圧倒するできあがりだったのである。

ここに全文を掲載しようと思う。

『僕の薦めるもの（渡部博文）』

このコーナーは、僕の薦めるものを書く、ということらしいですが、僕の中では、何を薦めたらいいのの前に、僕がこんなことを書いて、はたして誰が本気になって読んでくれるのか、ということが気にかかりますね。

もちろん、読む人は読むでしょうが、中には僕のここに書くこうとしていることを、バカにする人がいるかもしれないからです。そういう人は、まあ、少なくとも僕の文章を読みはしないかな、とは思いますが、中には、僕のことをバカにするために、読む人もいるんじゃないでしょうか。とはいっても、それは、まあ、僕のことを気にしてくれるのでいいような気がしますね。

考えてみると、読まないでバカにはできないので、バカにしようという目的をもった人は常に読むことになりませぬ。多分、彼は冷笑を浮かべて、僕の文章を一読するのです。

そして、ニヤニヤ笑いながら、僕をバカにするようなことをいふらすのでしよう。しかし、僕のこの文章を、ひいては、僕のことをバカにする前に、よくよくその書かれてあること〓この文章を、吟味して欲しいのです。

ひよっとしたら、僕のこの軽薄な存在（まあ、自分ではそんなことは思ったりませんが）、これが僕の薦めるものに迷惑をかけるかもしれません。

けれども、ここまで書いてしまった以上は、僕にはこの文章を書き捨てにしないで、ちゃんと終わらせるといふ責任が生じていますので、何としても、この僕の薦めるものに対しての、アクション、もしくはリアクションをとらねばならないのです。

言い換えれば、僕はこうやって、ここに書いた以上は、書いた縁で、僕の薦めることに関して、聞かれたとしても、自信をもって答えられるようなものを書かなくてはいけないのです。

繰り返すかもしれませんが、もうサイは投げられたのです。取り戻すことはできません。いくら僕が悔やんでみたところで、ゲームは始まっている。いや、ゲームなんて軽薄なものではありません。

もつと荘嚴なものです。

それほどの気合が、僕の中には満ちていることは確かなのですが、では、何を薦めるかという点、それほど何も無いような気がします。意気込みだけが空回りしているのです。今や、頭の中は限りなく透明に近い状態ですね。

ここまで書いて、しかしながら、何も薦めるものはない、なんてまさか書けるわけないし、そんな終わり方にしたら、僕のことをバカにする人は、大笑いするでしょう。

いっそのこと、

「人をバカにしない心」

と書こうか、と迷うくらいに僕の心は、彼らに対して頑なになっています。何度、サークルをやめようかと思っただことか。

僕もね、生きてきて、まあ、客観的には短いかもしれないけれども、主観的には長いこの人生において、これほど騒がしかったことも本当にまれですからね。

最後に、僕のいえることは、ゴミなどをできるだけ細かく分別して捨てた方が、環境問題のためにはいいよ、ということですね』

第120話 「ニートよ、さらば！」 1

「この小説は出版社に採用されませんよ」

高田伸司は、正夫の代表作である小説、「渡部博文」の原稿を読んだからズバツと直言したのだった。場所は、中野のいつものファミレスのSであった。

「そもそも一番の不満は、僕が出ていないじゃないですか。何で出さないんですか」

「だって、どう考えたって、高田君が出るまで書いていたら冗長になっちゃうんだもの。」

それに、微妙に今まで書いてきたことと被るし」

「長山健太郎さんなんか、最近、連絡とってないでしょう。出しても意味ないですよ」

「意味ないかもしれないけれども、渡部と一番、対立していた人間を出すことによって、彼の性格を浮き彫りにしようと思ったんだよ」

「いずれにせよ。」

仮に、僕が出ていたところで、この小説はどうかなあ。だって、まとまりがないもの。」

あのマサさんのポエムとか、いらなかったし」

「いや、あれこそが、あの小説の肝なんだよ！」

と正夫は意味もなく叫びたくなつたがやめておいた。冷静に考えるとしたしかに不要だからだ。

「ああ、そうか。」

俺の必死になつて書いた小説が、そんな評価か。

悲しいねえ」

「マサさんも、もうそろそろ、身を固めたほうがいいんじゃないですかねえ」

「そうかもな。」

そろそろお金も尽きてきたしな」

「常に貯金の残りぐあいに怯えるような生活なんでしょう」
「たしかにねえ。」

けれども、最後に一発、大きな花火を打ち上げたいなあ」

「前から、そればかりじゃないですか。」

もう、花火は打ち上げたでしょう。」

小野田ちゃんに失敗して、ミツチャに失敗して、小説に失敗して
…この上、どんな失敗を重ねればいいんですか」

「何だよ、それ」

正夫は声を荒げる。

「それじゃあ、まるで、俺が小説もろくに書けず、女にももてない、
ニートのダメ人間っていつていつているようじゃないか!」
「何もそこまでいつてませんよ。」

ただ、人間には向き、不向きがあるんじゃないかなあつて思っ
てですよ」

「何それ」

「今から、ハローワークに行つて、給料の安い、忙しくなさそうな
会社に就職するんです。それが一番ですね」
「そうだね。」

俺にはそういう地味な生活が合っているかもしれない。

そもそもニートにしたつて、そういうものだし」

「じゃあ、その線で」

「しかし、その前に、俺にはやり残したことがあるんだ。」

あの菱沼智美という女性を、君は忘れたのか。

あの娘と付き合う。

それが俺の望みだ」

「だから!」

高田の顔が赤くなった。

「それは、仕事をしながらでもできるでしょう。」

女の子に手を出すのに、何でニート生活しなきゃいけないんです

か！

小説だって、仕事をしながらできるでしょう。まずは、仕事でしょう。

仕事、仕事、仕事おおおお！」

「はいはい。

わかりましたよ。

両方、一緒に頑張ります」

しかし、読者はわかっていると思うだろうが、正夫はそういうことをいわれると、意地でも変えない男であった。

もし、高田が、

「菱沼さんにアタックするんです！

それから仕事を探しましょう」

といったら、逆のことをしたかもしれないが、もうそういわれてしまつては、まず、菱沼智美にアタックするしかないのだ。

そう考えると、ひよっとしたら、正夫の人生の目的は、

「高田のアドバイスとは逆に行くこと」

なのかもしれない。

彼のアドバイスとはまったく違う方向に行くことだけに、命を燃やしているような気がした。

中野駅まで高田を見送り、彼の背中を見て、正夫は心の中で呟いた。

「お前は、たしかに幸せな結婚生活を送るかもしれない。

そんな堅実な人生を送るかもしれない。

だが、俺はもっと別な人生を描く。

そして、中央突破するんだ。

それが何かはわからないが、進んでみるよ」

第121話 「ニートよ、さらば！ 2」

正夫は家路を辿りながら、菱沼智美との付き合いの歴史を思い出していた。

彼女は、正夫がコンビニをやめる数ヶ月前に、朝勤として入ってきたのだった。背が高く、自信のなさそうな顔をしていて、声が少し低く、髪は茶色く染まっていた。歳は正夫よりも二歳下であった。

もともと、パチンコ屋で働いていたそうで、社員としてパチンコ屋の寮で生活していて、家賃が月1万円ですんだので非常に助かったらしい。それが、働いている途中で嫌になって、転職しようかと思ったら、なかなかできなくて、この店の近くのアパートに住んで、コンビニの朝勤をすることになったのだという。

正夫は仕事を教えながらも、彼女といろいろな話をした。本当に気楽に話ができる娘であった。正夫は、自分の好きな娘と話すのは緊張するのであるが、どうでもかまわない女性と話すのは、全然平気であった。もちろん、これは正夫だけに限らず、ほとんどの男はそうだと思う。

正夫は、本当にたまに、前にも登場した総菜屋さんに足を運ぶのであるが、そのときに、彼女とばったり会ったこともあった。

総菜屋さんは

「おねえちゃん。

次の仕事は何をしようとしているの」

いつのまにか仲良くなっていたみたいで、気さくに話していた。智美が、

「水商売になっちゃうかなあ」

というと、総菜屋さんのおじさんは、忠告をしたのだった。

「水商売はね、あれは、結構、楽なのね。」

楽だけれども、あれに慣れちゃうと他の仕事ができないし、金銭感覚がおかしくなつて、逆に不幸になるよ。

だからやらない方がいいよ」

この言葉は、妙に正夫の頭の中に残っている名言であった。

ある夏の日、智美は、窓から公園のある方を見ながら正夫にいったのだつた。

「今日つて夏祭りがあるんですよ」

「ふうん」

「一緒に行きませんか」

「うーん。」

俺、家で忙しいから」

「あつ、そうですか」

後で考えてみると、誘われたのであつたが、正夫はそのとき、家でゲームに忙しかつたのである。家では大体、ゲームか、読書か、小野田ちゃんなど好きな娘の妄想をしていた。他の人からしてみたら、暇人であつたが、それでも正夫にしてみれば、忙しかつたのである。

その数日後であろうか。

夜勤をやっていた正夫のところに、彼女が尋ねてきたこともあつた。正夫はレジをやつていて、彼女はずっとすぐ近くの事務室スタッフルームに座つて、じつとしていた。

何の目的があつたのかわからなかつたが、よくよく考えてみると、それは、たんに一緒にいたかつたのらしい。

たまに話をふると、友人の話になり、

「あたしの友人にキャバ嬢つていっぱいいるんですよ」

といつて笑つたのが印象的だつた。

あるときは、

「すみません。」

今、雨が降っているじゃないですか。

ちよつと家に帰つて洗濯物を取り込んできていいですか」

ときいてきたので、許可した。

そして、家の話題になる。

「数ヶ月前に彼と住んでいたんですけども、今は別れたんです」ということらしかった。

「ふーん」

と正夫は思ったが、それっきりであった。

あるときは、正夫は夜勤明けで、事務所でノートに小説を書いていた。

「それって何ですか。

勉強ですか」

「いや、違うんだ。

小説を書いているんだよ」

「そうなんですか」

恋愛小説ですか」

「恋愛なのかなあ」

「正夫さんって、恋人いるんですか」

「いないよ」

「恋愛つてする気がありますか」

「うーん。

ないなあ。

今のところは、小説を頑張りたいねえ」

と、彼女にとっては、けんもほろろであった。

これはどう考えても、もてない正夫には千載一遇のチャンスなのであるが、意外なことに、このときは正夫は、別に女性を欲していなかったのである。

ちなみに、このとき書いた小説は落選した。

第122話 「ニートよ、さらば！」 3

その数日後の夜、鷺宮にある市村さんのアパートの炬燵に寝転びながら、正夫は、うわごとのようにいろいろなことを呟いていた。市村さんは、プレイステーションの「タクティクスオウガ」というゲームをやりながら応答していた。

「結局、俺は何なんだろうと思いますね」

「何が」

「俺は、どうも自分から女性を避けているんじゃないかってね。

本当に思うんですね。菱沼さんにしたって、脈ありの状態のまま放置していたわけだし」

「うーん、そうだねえ。」

「あっ、レベルアップ！」

「ん？あ、そうですね…。」

とにかく、俺は考えてみると、女性を自分から避けている、というか、本当にうまく行きそうになると、いつも及び腰になっちゃうんですよ」

「マサさんの特徴として、それはあるかもしれない。」

「そういえば、小田もじれていたしねえ」

「でしょう。」

「それは多分、親との関係に原因があるかもしれないなあ」

「それは大有りかもねえ」

「俺のお袋は、統合失調症だし、親父はアルコール依存症だし、親父の両親は、アルコール依存症で、心中未遂をおこなっているしね。」

しかも親父の親父、つまりお爺さんは、軍刀で老婆さんの首を切断したらしい。その写真を親父は、裁判中に見たつていうんですよ。ってこれ、話しましたね」

「うん。本当にすごい話だよな」

「多分、俺の親父の両親の関係から、いろんなものが、伝染しているというかね。もつとも、お袋の両親も父親が死んで、新しい親父になっっているいろいろあったみたいだけれども」

「そのお袋さんとの関係がまだ清算できていないのかもね」

「お袋は近いうちに退院するらしいんですよ。」

ただ、問題があつて、うちの親父をどうするかなんですね。

酒を飲んで本当に手がつけられない状態になっている」

「それは何とかしないとねえ」

「だから、引越すかもなあ。」

まだ、わからないけれども」

「本当にマサさんはいろいろあるねえ」

「あのお袋が、わけのわからないことを延々、ギヤーギヤーいうのをずっと俺は聞いてきているわけじゃないですか。当然それは、女性に対して恐怖感をもちますよね。」

あとうちの親父が

「女なんて下等な生き物だ」

みたいな男尊女卑みたいな考え方を根本でしている人で、つていうか、それはお袋がギヤーギヤー騒いでいるからなんですけどね。

とつとと病院に送ればよかつたのに、何年も放置していたんですよ。」

俺は、あの親父の存在が許せないつてもあるし、お袋なんかに対しても本当に憎悪みたいな感情をもってますねえ。

それが、女性全般に通じているのかもしれない」

「そこなんだよねえ。」

けれども、やってみたら」

「そうですね。」

俺の中で、解消できるかもしれないし、解消できないかもしれない。

しかし、それは、体当たりで、何とかしてみようって思いますね」

「そつだね。」

考えるよりも感じるよ！だよ。

そこはもう」

「懐かしいなあ。」

市村さんの俺に送ってくれた唯一の年賀状に書いてあった言葉です
ねえ」

「マサさんだつて、俺に年賀状をくれたのは一回くらいしかないよ」

「あつ、そうか」

とって笑いながら、深刻な顔をして正夫は話し続ける。

「そう考えると、俺たちの周りの人間って、人間としてみんな歪んで
いるところがありますねえ。」

市村さんは、お兄さんが統合失調症ですしね。

渡部は、両親が離婚して名前が変っているし。で、俺、前にあいつの
両親と会ったんですが、新しい親父が、これが大学の教授で、相手の話を
きかないまま、延々、自論をしゃべりまくる変な人なんですよ。お袋さん
も息子に対して、離婚しているから、どこか遠慮している。多分、あいつの
独特な性格の原因もそこにあると思うんですよね。

たしか、浪人時代に、予備校に通う途中で、パチンコ屋のパチンコを毎日
拾って、お袋さんに、渡部は渡していたらしいんですよ。

そういうことをしても一切、
「何、バカなことをしているの！」

ってツツコミがなくて、お袋さんは普通に受け取っていたらしいです
からね。そんな家庭は何かあるに決まっている。っていうか、あいつの存在
自体が、それを如実に物語っている。普通のコミュニケーション
ーションがとれた家庭からは、あんな傑物は生まれませんから…。

小田は、アルコール依存症の疑いが濃厚でしょう。

高田は、どう考えてもマザコンだし。たしか、母親が教師なんでしょう。
親が教師とか真面目な職業だと、子供って厳しくしつけら

れて、おかなしくなるって例が多いらしいですね。

あいつが、最終的に、どこか吹っ切れない、つまらないやつって
いうのもそこにあると思うし…。

勝間君は、もうおかしいですね。親がどうだかわからないけれど
も会ってすぐに思ったのは、こいつは変人だ、って感じだったし。

『俺と彼女とアカプルコ』なんか、あれ、全編、狂気の産物ですね。
あの人の親は実は東大の教授なんですよ。それから考えても、もの
すごく厳しくしつけられた子供で、その怨念みたいなのを小説で放
出しようとしているみたいなのがありますね。

あと長山。あいつは典型的な甘やかされっ子だし」

市村さんはゲームをやりながら大笑いする。

「言い過ぎ。」

マサさん、それね、言い過ぎだから。

いやあ、毎回、毎回、思うけれども、マサさんって切れるねえ。

特に、ひと寝入りして目が覚めたときのトークがものすごく切れる
んだよ」

「その知性が自分に回せばいいですがね。

なかなか自分のことはわからない」

「とにかく、菱沼ちゃんにアタックだな」

市村さんは、ゲームをやめると、座薬を塗りにトイレへと行った。

正夫は、窓から外をぼんやり見る。真っ暗な闇であった。下の階で
は、インド人が数人で話し合いをしていた。

第123話 「ニートよ、さらば！ 4」

市村さんは、正夫が寝てからしばらくゲームを続けていたが、正夫のいびきが爆発的に大きくなった。

「クカ。」

グオオオオオオオオ。

クカ。

グオオオオオオオオ」

となつたので、これはいくら何でもあんまりだ、と思い、枕を少しずらして、正夫を起こした。

「はっ…。」

市村さん」

「いびきがすごすぎるから起こしたよ」

「あのね。」

俺、自分でも聞こえたんですよ、いびきが。

自分でビツクリしましたよ」

「いや、こつちも驚いたよ」

「水飲もう」

と行って、立ち上がり、流しまで行ってコップ一杯の水を飲み干した。

「はあ。」

それで何か俺、話をしていませんでしたっけ」

「ああ。」

人物評みたいなのをしていたね」

「あつ、そうだった。」

あれね…、悪い側面を見ると、ああなるんであって、みんな良い人だよ思いますよ」

「それはわかるよ」

「たとえば、高田は、つまらないかもしれないけれども、そのつまらなさが何かおかしみを感じさせるでしょう。それにマザコンって、良いことですよ。親からの愛情をちゃんと受けて健康に育っているんだから。彼は何か自分に危機がおきたとき、ここぞというときに冷静に判断を下せるタイプだと思いますね。」

小田は、酒飲みだけれども、批評家みたいなところがあるでしょう。あのものを分析する能力には、一目置いた方が良いのかもしれない。

あと、渡部は天然だけれども、他の人にはないインスピレーションみたいなものを持っているじゃないですか。

たとえば、あいつが、「ジャングルジム」という小説を書いたときに、最後のシーンで、ジャングルジムが光って空を飛ぶんですが、

「それはおかしいだろ」

といったら

「そうですか、わかりました」

と行って作り直してきて、その新しい小説はどうなっていたかというところ、

「MERFISSORAFU」

とかいう謎の言葉を発して、ジャングルジムが光って飛ぶんですね。

もう、わけがわからない。

わけがわからない上に、ジャングルジムが光って飛ぶことは頑なに、変っていないんですから！

「このM…に何か意味あるの」「
ってきくと、

「意味…？ないですよ」

とあっさり答える奴ですからね。

あと、長山氏は、やはり織田信長のな勇猛果敢さがありましたよね。ああいう奴が時代を切り開くかもしれない。

勝間君は、もう天才です。

あの傑作『俺と彼女とアカプルコ』って、酒井法子のドラッグの事件が起きる前に、のりピーという女性を出現させているからね。

あれは、実は、のりピーの旦那の存在を予言していたわけでしょう。

だから…

だから…

皆、最高なんですよ」

「はあ、さつきと喋っていることがかなり変わっているんだが」

「あれ？あれはなかったことにしましょう。」

あれは、俺の中ではカッパにしておいて、ここを小説に載せておいて、皆に配ることにしますね」

「いや、あれも載せるべきだろう。」

あれもまた真実だよ」

「そうですか。」

じゃあ、どっちも載せよう」

「それがいいね」

と話しているうちに、窓の外が明るくなってきた。

「とうとう夜が明けたよ」

「何か、俺、いつもここにくるとしゃべりすぎちゃいますね。すいませんね。寝ます」

「ああ、俺も寝るよ」

こうして、三人（隣の部屋には汀子ちゃんもいた）は寝たのであるが、その数時間後に

「ドンッ！」

ドンッ！

ドンッ！」

と巨大な太鼓が叩かれる音がする。

それで飛び起きる。

窓から見ると、町内会の人々が神輿をかついでいた。

「でかい。」

音がでかすぎる」

と正夫は唸ると、また寝た。

それから、正夫の生活はいつものようにニートらしく何の変化もないその代わりストレスもない、平凡なものに戻ったというか、もう半年近くそんな感じであった。小説を書くという目標があってもなくても、基本的にそれほど生活は変らなかつた。

正夫は常に、自分を援護してくれるような雑誌の記事などが出てくると、安心してそれを何回も読んで、ニート道を極める方向、極める方向へと自分の精神を駆り立てるのであつた。

本当に、ニートとはアナーキズムである。これほど革命的に反社会的な行為はない。といつても正夫のニートは親のすねをかじっているのではなく、自分のお金でやっているのだから、別にそれほど大した非難も来ないことであろうが、正夫は社員になる気なんかさらさらなかつた。

未来には労働が生活に必要な時代は終わってゆくであろう。現在、これだけニートが増えているのはどうしてかということ、人々は悟っているのである。俺たちは本当は働く必要はないのではないかと。

そうなのである。本当はないのだ。金さえあつたら働く必要はない。ただし、老年になったらどうなるかわからない。そして、日本という国を支えなくてはいけない。だから働くのだ。他に理由はない。

個人の実感としては、働かないと不安だから働くのである。しかし、本当は働いても不安は解消されない。だから政治をよくしようと思うのであるが、日本国は今や何百兆もの借金をしている。もうだめだ、終わっている。

と思う人もいるであろう。だが、正夫はそんなことはないと思つていた。何とかなるさ、という気もした。いや、むしろ正夫がこの日本を何とかしなきゃいけないのかなとも思う。

政治じゃだめなのだ。何か革命的に、「面白いこと」を個人がやるしかないのである。そうすれば、日本だって、その人の発生させる「面白ムーブメント」に影響されて、この自殺率の多さもなくなるだろう。

正夫は、自分のことを、「選ばれた人」だと思っていた。何故か、最近、ニート生活をしているうちに、さらにその思いは強くなっていっていった。

「これは何なんだ。

この波動は何なのだ。

俺はまさか」

正夫はハツとして、百円スーパーで買った手鏡で自分の顔を眺める。

「天才？

いや、そんなはずはない。

そんなはずはない」

正夫は首をふる。

「多分、俺は秀才なんだ。

天才なわけがないじゃないか。

いつもそれは思っているが、多分、俺は自分のことを秀才と思っている奇才とか、そんな感じのものなんだ。

天才なはずはない。

天才…はっ」

正夫は、鏡の向うの自分をみて、いつのまにか痩せて綺麗になっている自分を発見する。

「では、どうして…

どうして…

自分は天才なんじゃないか？

と疑うのであるうか。

普通の人間は疑わない。

火のない中には煙は立たない。

ひよつとして、疑うということは。

俺って…天才…」

そんなときに、ドアを叩く音がする。

「はい！」

遠慮しがちに開いて、

「あの智美ですけれども」

「あああ、智美ちゃん、待って！」

今、パンツ一丁だから！」

急いで、正夫は壁にかかっているズボンを手にとって、寝たままズボンをはこうとして、

「ゴン」

と頭をしたたかに壁にぶつけて呻いた。

第125話 「ニートよ、さらば！」 6

ちゃんと服を着た正夫は、菱沼智美と一緒に話しながら歩く。

その日は快晴でありもう5月になっていて、日差しが暑いくらいであった。

「まったく、俺にとって高田伸司って何なのかな……」

と正夫は、それほど智美が興味のない高田のことを話していた。

「あいつ、何だかわからない議論を俺にふっかけてきて、それで俺がものすごく切れて、

『一体、何のための議論をしているんだ』
って叫ぶと

『いえいえ、これはたんなるゲームですよ』
っていうんだよ。

どう思う」

「それは酷いわねえ」

「酷いでしょう。」

わかる。

そういわれたときの俺の無力感。

俺は、お前のゲームにつきあっていたのかよ。

俺は、少なくともあのときは必死だったんだよ。

それを、お前はゲームのひとつことで、すましやがった！

そんなもんじゃないだろう。

人と人とのつきあいというものはっ。

って叫びたくなっただね」

「叫んだの」

「いや、叫ばない。」

だって、何だか恥ずかしいじゃない」

「それはいわなきや駄目かもっ。」

トモもね……（彼女は自分のことをトモという）。

仲良くしているチー子とよく喧嘩するんだけれども、これだけははっきりしておきたいと思ったことはちゃんというの。

だってさ、それを放っておくとあとで、いろいろぎくしゃくしてくるじゃない」

「そうだよね。」

こう、自分の中でぎくしゃくしてくるよねえ」

「けれども、それをいっちゃうと、その場がギクシャクしてくるんだよね。」

だから、マサちゃんがそういたいけれども、いえない気分ってわかるなあ。トモっ！」

「そうだよね。」

俺もね、いつも高田にいつてやるうと思つたのよ。人生はゲームじゃない。

一期一会だ。

議論をゲームにするな。

俺はいつだって真剣勝負なんだ。

わかったか。

ってね」

「そうよ。」

いっちゃんえばいいんじゃないかな。

トモ、応援しちゃうよ」

「応援してくれるの。」

さすが、トモちゃん」

「だって、あたしのマサちゃんのためだもの」

というと、智美は、正夫の腕を組んで、ぶらさがってきた。

「重いつ重いつ、それやめて」

「ごめんなさい」

「俺は、マッチョマンじゃないんだから」

「つつい、前の彼氏のときの癖がついちゃって」

「困るなあ、トモリンにはっ」

「えっ、今、何ていった」

「トモリンには困ったものだよ」

「えっ、やったあ。」

マサちゃん、トモリンだなんて。

あたし、そんな愛称、誰にもいわれたことない」

「じゃあ、僕が始めての人だね」

というと、正夫は、にっこり笑ってゆっくり繰り返す。

「トモリン」

「いやああん」

「トモリン」

「いやああん」

と、智美はまた正夫の腕にぶらさがろうとした。

「重い、重い…痛い、痛い。」

俺、そんなに丈夫な体してないからっ」

「あっ、見えてきた。」

レストラン」

「おう、あそこだよ」

目的地の中野ゼロホールの中にあるレストランであった。

全景ガラス張りなので眺めが素晴らしい上に、とても広くて綺麗で、その割には、料金もそれほど高くないのである。

正夫は、外食をするとき、ファミレスでないときには、このレストランで済ませていた。

第126話 「ニートよ、さらば！」 7

レストランについて、二人はいちゃいちゃしていた。今回、三日目のデートなのであるが、三日目とは思えないほど意気投合していたのである。いきなり、熱々のところを見せ付けられて読者も驚かされたかもしれないが、これは事実なのでしょうがない。

「にしてもさあ。

あれだよね」

「なあに、マサちゃん」

「俺の中で何だろうかね。

高田って」

「どうでもいいんじゃないの」

「まあ、どうでもいいんだよ。

それは悪い意味ではなくて、良い意味でも俺の中でどうでもいい存在であることだけは確かなんだか、何故か気にかかるんだよ。それは何だろうかって思っているんだよね」

「まさか、同性愛」

「そんなわけないだろう、このう」

と、正夫は智美の額を指で軽くついた。

「いやあん」

智美は、フォークでコロッケを刺して、

「はあい、マサちゃん食べる」

「わあ、くれるの。ありがとう」

「あ〜ん」

と、ものすごくベタな仲良しぶりを発揮したが、正夫の中では、未だに、高田伸司のことが気にかかった。

「そもそも、俺は、高田のことをずっと気にし続けていたのではないだろうか。

それは恋ではなくて、何かこう文学的な人間的な探究心というか、

何というか」

「そうなの〜。」

あ〜ん」

「あ〜ん、パクッ」

「おいしい」

「うん、おいちい」

まずい。正夫は、好きな女の子が出来ると、ついつい幼児化してしまう癖があった。これだけは何とかセーブしなくてはいけないが、だんだん、心のたががゆるんできている。

「じゃあ、今日はこれからどうするの、マサちゃん」

「うーん、どうしようかな。」

僕ね…トモリンのお家に行こうかなあ。

いや、それよりもカラオケかなあ」

「どっちも名案ねえ。」

「じゃあ、先にカラオケ行こっか！」

「うん、行こう行こう」

そして、腹ごしらえをしたので、ふらふらと、中野駅の方まで歩き、中野サンモール通りの方まで行き、ごみごみとした町並みの中を歩いて、カラオケ店へと入ってゆく。

智美はいつの間にか、正夫と腕を組んでおり、たまにぶらさがろうとするので、また「イタイイタイ」と注意されたが、それが面白かったのか、何度もそれをやると楽しくニコニコ笑っていた。

正夫は、自制心みたいなものを保とうとするのであるが、どうも相性みたいなものがあつたのか、それがかつちりと合わさって、彼女を前にすると、何かいろいろなもの溶けてゆくのを感じた。

それを考えると、今まで、自分は何て緩んでいない人間であり、石や木のような人間であつたかと、改めて、実感させられた。

恐らく、高田伸司のことを延々と考える癖もそこに原因があるのかも知れない。

今は、溶けていいのだ。

もうこうなったら、智美を相手にどんどん、ズブズブと行くところまで行って、とろけるところまで、とろけて見ようではないか。
なんてことをぼんやり思いながら暗い部屋につくとマイクを手にとった。

智美とカラオケに行くと、彼女は遠慮もせずいきなり歌い始めた。そして、正夫は彼女の美声にやられた。それは好きだったからかもしれない。すごく感情がこもっていて、まるで彼女の言葉が世界を紡ぎ出しているようであった。彼女は知っていて歌っているのであろうか、知らないで歌っているのだろうか、よくはわからないが、正夫は、カラオケのテレビの画面を見ながら、心は宙をさまよった。

彼女の第一曲目は、タイトルや歌手は知らないが、風を題材にした歌であった。恋に破れそうになっている二人が、抱え込んでしまった思いや、恋、もしくは現実を、気にせずに、とりあえず外に出て空気を吸って、気を落ち着かせて、また新たに恋に励みましょう、という歌であった。

それとも、恋そのものをクールダウンして、新しい視点で、いったん友人という状態にして、また出会い直しましょう。という意味なのかもしれないが、とにかく、風に当たって、冷静になろうということらしかった。

正夫も、恋などをきっかけにして、ウキウキした気分になってしまい、周囲が見えなくなつて、よく失敗するものであるが、そういうときは確かに、外に出て風に当たってみると、落ち着くものである。

彼女は熱唱を終えると、カラオケの冊子を広げて、次の歌を探し始める。とうとう、正夫の番になった。正夫はここはまず、海援隊の「JYODAN」で行こう、と決意した。もし、このノリが受ければ、一気に二人はハイになれるであろう。

しかし、正夫は歌えど、それほど智美は注意しているわけでもなく、自分の歌選びに集中しており、終わったと勝手にマイクを握った。どうやら、本当に歌が好きなのようである。

彼女の第二曲は、ある男性がいて、その人が好きなのに言い出せない歌であった。告白、もしくはアプローチが出来ないので、本当に淋しい。という内容である。その中で注意を惹いたのは、「幼い恋」というフレーズであった。智美も実はそういう気持ちをもっているのかもしれない。正夫に対して。

読者よ！今まで、さんざんイチャイチャしておきながら、それはないだろうと思うかもしれないが、実は、正夫はまだそれほど智美が心を許しているとは思っていないのである。やはり女性というものは、心に鎧をまとうているもの。それを徐々に優しく脱がせなくてはいけない。それが男の役目であろう。

さて、正夫は、得意中の得意、松山千春の「男と女」を歌うが、選曲を失敗したことに気づく。というのもこの歌は殺人的に、言葉の進行が遅いのだ。だから聴いていると眠くなる。歌っていても眠くなる。

「ごめん、トモリン！やつちやつた俺！テヘッ」
というワンコーラスでパスした。

そして智美の第三曲は、夏になったら一緒に出かけ、海岸沿いの白い家で幸せに暮らしましょう。という歌であった。それを聴いて、正夫は、フランス映画のジャック・タチ監督の「僕の伯父さんの休日」を思い出した。叔父さんだったかもしれない。海岸沿いの宿に泊まった中年の男が、いろいろな騒動を巻き起こす話で、面白かったが途中で退屈になって見るのをやめた記憶がある。しかし、何だかほんわかしした人間愛のようなものを感じることができて、名作だとは思う。

そして、その映画とは別に、東金に向かう道路の光景を思い出した。九十九里まで山を越えて続いている国道126号線を、正夫はよく自転車で行き来したものであった。そして海岸に出て、自転車を止めて、少し海に浸るのだ。このときに可愛い女の子が脇にいたらどんなにいいだろうかと思ったその感情を、今、くっきりと思い出し、涙ぐみ、歌が終わると、

「夏になったら行こう。」

「一緒に海にね。」

と智美の手をとった。

「えっ？」

うん。

わかった……」

というとき智美は、どう思ったかわからないが、少しうつむく。

その姿を見て、正夫は満足しつつ

「アイオブザタイガー」

を歌った。

映画「ロッキー」のテーマソングである。たしか「3」だと思っ
たが、ひよっとしたら、「2」かもしれない。

リズムカルな英語を連ねた歌詞が徐々に高くなって最後に、

「イエエエエエエ！」

と頂点まで絶叫した後に、

「アイオブザタイガー！」

と見事に決まるべきところを咳き込んで、

「イエエ…ゴッホン！…」

となってしまうたのはご愛嬌だ。

智美の第四曲目は、急にゆったりとしたバラードのようになって、
少女が、

「ああ、あなたに会いたいなあ」

と、体育すわりして窓辺で、しつとりと訴えているという感じの
歌であった。恋をこじらせている感じの胸に迫ってくる歌詞であ
った。多分、相手はそれほど知らない男性なのであるが、彼女の中
で素晴らしいイメージが出来あがってしまい、恋が飽和状態になっ
ているのである。そんなときは、その男性の肛門付近を思い浮かべ
るといいのである。なかなか女性には、そこまでのリアリズム
はないというか、そんな糞リアリズムは男にもないし、多分、正夫
にしかないであろう。

歌を聴いていると、正夫は、自分が歌われている男性になったよ
うな気がしたが、そろそろ歌が終わりそうなので、選ぶことにした。
加賀文史の「JYANAI」にしようと思って入力し終えたと同時に
に歌が終わって、正夫は身振りを交えて歌う。

本当に能天気な歌であり、

「あんたは多分、天才だ。だから踊ろう、体操しよう」

ということを英語交じりで歌っているだけの無内容なノリだけの
歌であった。この歌の意味は、彼女の心には届かなかったようであ
るが、仮に届いたところでどうなるかは正夫にもわからなかったし、
ひよっとしたら届けるようなものは何もなかったのかもしれない。

第128話 「ニートよ、さらば！」 9

カラオケボックスから外に出ると、夜風が心地よく、上昇気流に乗っているような気持ちの高まりを止めることができなくなった正夫は、

「いやあ、今夜はいい夜だ」

と言葉にしたら内容空疎なことを呟いた。

智美は曖昧な笑みを浮かべて、先を歩く。

「とりあえずコンビニに行きましょう」

そのカラオケ屋から少し離れたコンビニに寄って、智美はハッピーターンとジュースを買った。正夫は、ポテトチップスと烏龍茶を買った。

「烏龍茶といえば、前にコンビニにいたときに、俺に

『何で烏龍茶を冷やすんだ。』

烏龍茶を冷やすのは間違っている』

と叫んだおじさんがいたんだよ」

「へえ」

「そのおじさん曰く、

『中国では烏龍茶は冷やさない。』

冷やすと毒になるからだ』

だって」

「それは大変だね」

「でも、多分、そのおじさんの頭がおかしかったんだと思うよ。

あつ、ごめん。わけわからない話して」

「いやいや。別にそんなことは」

「じゃあ、これでお別れだね」

「いや、あたしの家で休憩してもいいでしょ、別に」

「そうかい。」

では「一緒にしよう」

従順に正夫はついてゆく。もう二人の間で無言の内にいろいろなことが合意に達していた。こんな恋つてのもあるんだな、と正夫は感心した。ほとんど何もせず、自動的に彼は智美と結ばれた。

もちろん、智美にしてみればそんなことは普通のことだろうと思っただろうし、正夫にしても、そうであれば別に反論する必要もないのであるが、ただ、そうすると、今までの苦労というか、四苦八苦というのは何だったのだろうか、と自分自身に問いかけたくなってくる。

無駄なことをしていた。確かにそれはそうである。今までの妄想二トト生活が無駄であるといえ、まさにその通り、砂上の楼閣であった。だから、今の幸せの方がいいのであるが、しかし、それにしてもしこり、というか後遺症というか、残尿感のようなものがあった。

すべてがあまりにもあつさりとしていて、本当にあつけないものであり、今までの妄想していた、小野田ちゃん、ミツチャ、には魅惑のオーラが渦巻いていたが、しかし、今度のは、現実の方が先制攻撃をかましてきたのである。

しかし、ひよっとすると現実とはそういうものなのかもしれない。今まで正夫がこの中野という少し浮世離れた町で、フラフラ歩きながら、女体をチラチラ見て夢想していた美しい恋なんてものは、実はどこにもなくてあるのはただひたすら具体的な、友情のような明るい笑顔、楽しい会話、心地よい夜の行為、朝になって一緒にコンビニで買った食べ物を食べ、そして彼女が出かける。

そんな日常の繰り返しのおちよつと新しい一コマなのであった。そういったことは正夫は、ぼんやりと見ていたテレビのドラマなどで予習していたので、すぐになじめるようになった。ただ、少し軌道修正をすれば良いだけであった。

二人は、ほどよく合う仲であった。智美のアパートに通ったり、自分の下宿部屋に戻ったりの生活は、二週間が過ぎて、そろそろ正夫も職を探そうという気になったのであった。そして、同時に小説

も書こうと思っていた。でも、どのような小説を書けばいいのかは少しわからなくなっていた。あの妄想状態のまま小説を書いた方が良かったのかもしれないし、現実と妄想生活の二つの落差がわかった今だからこそ、小説を書くのに向いている時期かもしれないし、下手をしたら、今の生活こそ妄想で、あの二ート状態こそ現実生活ということもあるのかもしれない。つまり五里霧中だった。

今日は正夫がニートとして最後の日であった。ハローワークに行き、新しい仕事を見つけようとしたらあっさり仕事が見つかったのである。家電製品の修理のテレアポの仕事である。派遣社員として働くのらしい。まあ、これならできるだろう。あのコンビニ夜勤の苦行生活を乗り越えた俺ならば問題はない、と思いつつ、勤務日を翌日にひかえても何の不安や感慨もないままに、正夫は普通にいつものたるんだ精神状態のまま、朝、九時ごろに起きて、アパートの一室で、テレビを見ていた。

「行ってきます。さっき、ご飯作っておいたから」
「ありがとう」

智美が出勤の時刻であった。彼女は部屋の中を何かを探しているようだったが、しばらくすると見つけたみたいであった。

「どうしたの」

「メモ、メモッ！」

「あっ、これ読んで」

「うん。わかった」

小さいメモのようであった。

「じゃあ、今日は早く帰ってくるから」

「うん」

と答えながら正夫はメモを読んでいた。

『ダーリン！』

あのね。

あたし、できちゃったかもしれない。

え？何がって、それはね…

それは…

フライパンの蓋を開けてごらん！』

できたというから、子供でもできたのかと一瞬びつくりしたが、これは彼女特有のジョークだった。そんなことよりも、フライパンの中身が気になったので、開けてみるとふっくらとしたオムライスであった。

「くそっ」

正夫は、悲しくなった。というのも、どっちが先にちゃんとしたオムライスを作るか競争していたのである。真っ先に彼女が作れるようになっていた。こうなったら一週間以内に、リターンマッチをするしかないであろう。

オムライスを食べると、本当に玉子がふんわりして、炒めたご飯とよく合っておいしかった。ケチャップの量が少し多いかもしれないが、及第点である。正夫にはこのようなものは作れない。特にこの玉子のふっくら感、は、才走っていた。ひよつとすると、智美には、本質的に料理の才能があるのかもしれない。いつもは料理しないのだそうであるが、正夫が料理をするようになってから、真似し始めたのである。

正夫は、ガスコンロのない下宿部屋から、彼女のアパートに移って、急に料理に凝り始めた。ひき肉を使って、餃子、ピーマンの肉詰め、チャーハン、ハンバーグ、いろいろなバリエーションの料理を作ったり、午前中に料理のテレビ番組があると欠かさず見るようにした。料理は本当に楽しいもので、下手をしたら正夫があれほどはまっていたゲームよりも楽しいのかもしれない。テレビゲームはいくらやっても何にもならないが、料理はおいしいものが目の前にできあがる。下手をするとレストランのものを上回ることもあるくらいであった。

「マサさん、いますかね」

「というと、渡部が入ってくる。」

「おう、今日は休みか」

「ええ。」

暇になつたんで来ました」

「そうなんだ」

渡部は、上下がスウェットで、サンダルという実にラフな姿でやってきた。偶然にも家が近かったのである。だから、ちよくちよく来るようになっていた。ちなみに彼女の家には引越してから一ヶ月たっている。二人の間に特にどうという波風は立っていない。ひよつとしたらこれから立つのかも知れないが。

第130話 「ニートよ、さらば！ 11」

渡部はいつものように、この部屋で、自分の部屋以上にリラックスして新聞を敷いて足の指を切り始めた。そんな彼を寝転んで眺めながら、正夫は小説の構想を練っていた。

「うーん」

「どうしたんですか」

「思い浮かばないんだよ」

「小説がですか」

「ああ。」

ひょっとしたら、これも俺がニートではなくなったからかもしれない。俺の中のパワーが消失してしまった」

「ああいう生活をしていても、何かパワーをえるってことがあるんですねえ」

「あるよ。」

「そして、今はどうもそれがないように思える」

「それは困りましたな」

渡部はゆっくりと足の爪を切ったら、爪のかすを新聞をつまき使つてゴミ箱に捨てた。

「ところで、ご飯食べましたか」

「さつき、オムライス食ったね」

「そうですか。」

僕は、実はこれから、勝間君といつものバイキングで会うことになっっているんで、一緒にどうですか」

「あ、いいよ。」

そうか、勝間君に会ったら何かヒントをくれるかもしれない……」

「オラララララララ！

オララララララ」

と勝間が先ほどのカラオケで南米だかどこかだかの歌をいきなり歌ってきた、その音程を無視して力いっぱい腹からひねり出した歌声が今でも耳に響いていた。何というインパクトであったらうか。三人は会ってすぐにカラオケに行き、それから、マクドナルドで昼食をとった。しかし、渡部は不満顔であった。

「正夫さん。」

僕はですね。

食べ物に関しては唯一つだけの要件があればいいんですよ。食べ応えのあるもの。つまり、がつつりと食べたいんです。

それなのに、何で、ここで食うの」

と勝間がトイレに行ったときに訴えたが、正夫は

「まあ、まあ」

と宥める。

そんなことよりも勝間にきくことが先決であった。そもそもそういうことを何で店に入る前にいわないのか。いや、抗議したのかもしれないが、それは分かりにくく小声で抗議したに決まっている。渡部にはいつもそういうところがあったので無視した。

「しかも水も、Lサイズを頼みたかったのに、Sサイズの水だし」
渡部は不満タラタラであった。

「勝間君。」

俺、小説を書けなくなっちゃったみたいなんだよ」

というトイレから帰ってきた勝間はうなづく。

「当たり前だよ」

「何で」

「だってこの小説はもう終わっているからだよ」

その勝間の言葉は、正夫の胸に突き刺さるようであった。終わっているとはどういうことであるうか。

「どうしてだい」

「スタート地点で、女欲しいよ、ニートだよ。」

と悩んでいた主人公が職を得て女を得た。

もう終わりじゃないか。

他に何をつけくわえることがあるんだ」
「そうか。」

この小説、終わっていたのか」

正夫は、勝間の説に納得しそうになったが、しかし、それでも小説は終わらない。どうして終わらないのか。この小説には、ゴール地点がまだ他にもあるのか。すべてはまったく闇の中であった。

「でも、現実問題として、終わらないよね」

「ああ、終わらないよ。」

でも、ここで声高に、終わりです。

って僕たちが宣言すればいいんだよ。

ジャンプして

『ジャン』

って音が鳴ってあとは静寂になるように、フィニッシュを決めればいいんだよ」

「そうかそれだけの話なのか」

「そうだよ」

正夫はにっこりと笑って宣言した。

「では皆さん、今までご愛読ありがとうございました。」

小説 中野

これで終わりです」

しかし、小説はまだ続いている。そこには何か理由があるのかも
しれない。仮にそうだとしても、今の正夫にはそれがさっぱりわか
らなかった上に、マクドナルドの他の客から、

「何この、変な奴」

という冷たい視線を浴びてしまった。

第131話 「ニートよ、さらば！ 12」

「何だよ。終わらないし。恥ずかしいじゃないか」

正夫は赤面して席に着く。

「そうか。」

もしそれで終わるんだったら、とっくの昔に終わっているのか。カラオケで、僕がウラランランラララ！って歌っている場面で終わってもいいわけだ」

勝間は、ナゲットを口の中に放り込む。そして、食べ終わってから呟いた。

「うーん。」

何がいけないんだろうかね。

ひよつとしたら、旅立たなきゃいけないんじゃないの」

「へ。」

俺が」

「そうそう。」

よくドラマとかで終わりにするときって、旅立ちじゃない。あれをやるんだよ」

「どこに旅立つんだよ」

「千葉に帰るとか」

「いやあ、正直、帰りたくないもの。」

それは千葉に何人が友人がいるけれどもさ。

でも別にそんなに会いたいとも思わないなあ」

「そうか。」

じゃあ、うーん。

もうお手上げだね。

ひよつとしたら、猫を飼って、アカプルコという名前をつけて、『まさかこの現実には、勝間君が書いた『俺と彼女とアカプルコ』という小説の中の話なんじゃないか』

と現実と虚構がごっちゃになって、発狂するところで終わる、つてのはどうだろうかねえ」

勝間の目がキラキラに光っている。正夫は、その勢いに気圧されそうになったが、危うく踏みとどまる。

「無理にでも『アカプルコ』を俺の作品に結び付けようとするねえ。まあ、絶対に、結び付けさせないけれどもね」

と牽制するようにいった。

「ちょっと、高田に電話するわ」

高田はすぐに電話に出た。

「何ですか」

「あ、どうもどうも。」

あのだ。

ほら、俺って小説書いていたじゃん」

高田は、ほんの少し黙ったがすぐに思い出した。

「ああ、大久保でしたっけ」

「違う、中野だよ、中野」

「ああ、そうでしたね。」

それが何か」

「終わらせようとしているんだが、終わらないんだよ」

「そうなんですか。」

そういえば、俺は小説を書いたら、その小説は終わらない、永久運動のように続くんだよ、っていつていたのはマサさんじゃないですか」

「は？」

何それ。俺、いつそんなこといった？」

「いいましたよ。」

何ヶ月か前に」

「いやあ、記憶にないなあ。多分、それ別の人の話だと思うよ」

「そうですか。」

まあ、いいや。

何で終わらないかですね」

「ああ」

「それはひょっとすると、小説『中野』と題している割りには、まったく中野という場所について書いていないからなんじゃないのですかね」

「あ、それかもしれない。」

「そうだよ。」

「さすが、俺の知恵袋、高田だよ」

「じゃあ、忙しいので、頑張ってください」

「ああ、頑張るよ」

「はい…。」

「もう、いいですか」

「何が」

「電話切つていいですか」

「あ、いいよ。」

「じゃあね。また今度」

というと携帯をしまい、正夫は、二人に高田から示唆された新しい解釈を説明する。

すると急に渡部が、歯をむき出しにして、

「僕う。」

「福田あ。」

「マサほおう。」

「この小説はもう終わりなんだほう！」

と出っ歯の福田班長の真似をした。

「いつになくハイテンションだな」

「正夫は苦笑する。」

「渡部もニヤニヤ笑った。」

「これで終わるかなあ、と思ひまして。」

「終わらないですね」

「そのタイミングのずれっぷりが君らしいよ」

正夫は、何かひらめいたようで、急に手を打った。

「どうしたんですか」

「わかったよ。」

中野といったら、絶対に行かなきゃ行けない場所があるんだよ。

この東京都中野区という所を、他の場所とは違うものになっている場所があるんだ」

「どこ、それは」

勝間は、分厚いモンティ・パイソンのハンドブックを読んでいたが、目を上げる。頬が少しヒクヒクしていた。

「中野哲学堂だよ」

正夫の中で、すべてがそこにあるような気がした。実は、前から行ってみよう、行ってみようと思っていたのであるが、つつい、いろいろなことがあったり、面倒臭かったりして行っていなかったのである。だが、今までついつい失念していたが思い出してみたらまるでそこが聖地のように思えてきた。一度、テレビで見たことがあるのだが、そのテレビでは当たり障りのない場所をサラッと紹介しているだけであったが、危険思想みたいな匂いさえ、漂っているところだったのである。ひよっとしたら、そこに行って、悟りを得るかもしれない。今まで足りなかったものがあるかもしれない。なるほど、確かに考えてみたら、中野哲学堂に行くことなく、小説『中野』を終わらせるなんておかしな話であった。

(つづく)

「人生とは、その人の気の持ちようなんじゃないのか」

と、正夫は、中野駅北口から、北へ歩く途中で思ったのであった。人間はいろいろ計算ずくで行動しているが、人間の周囲には、計算できないものが渦巻いている。それをどう測るか、というと、もうそれは感覚、そして勘でしかない。となると、それは気のようなもので受け取るしかなくなる。もやもやとした曖昧なそれは決して西洋的ではない。西洋は何でも計測しようとする。おかげで科学は進歩した。だが、人は幸せであろうか。ひよつとしたら江戸時代が一番幸せだったのかもしれない。それにしても幸せとは何か。それは、気楽に死ぬることではないだろうか。今の時代でも気楽に死ぬるかもしれないが、そこには、悲惨さがつきまとう。中世には「あつ死んでら」というほど人がぼろぼろ死んでそこら辺に死体が溢れていた。ある意味では、今でもそうなのだ。電車はしよつちゅう止まる線路で電車に轢かれて死ぬのは、自殺なのだろうか。ひよつとしたら人間が電車という交通機関に耐え切らないで死んだのかもしれない。電車にはどこか人を引き込むところがある。ひよつとしたら鉄道マニアの一番の願望は、電車に巻き込まれて死ぬことではないだろうか。もちろん、そうではないことを祈りたい。

正夫にも死への願望があつて、それはいつそ死んでしまえ。と思うことによつて何か清々しくなるものがある。だが一般人にとつて正夫は向学心のないろくでもない男であろう。資本主義の鉄則として、消費者が必要なので、そのための最低限の要因だ。くらいには大目に見られているであろう。正夫の小学校の友人がそういうタイプで、彼は太つており、蛙の死体のようなその体を横向きにして、「死んだら、死んだでいいや」

といつて、赤信号の道路を横断した。死にはしなかったが、その場にふんわりとしたマイルドで優雅ともいえそうな気が充溢した。

それを見て、正夫は驚いたものである。何かが彼の体から伝わってくるものがある。

彼は中卒で高校には行かなかった。バイクを乗り回しているな、というのを目撃した辺りでもうどうなっているか、わからないが、彼は今でもそんな人生を歩んでいるのかもしれないし、下手をしたら人生そのものもなくなってしまうているかもしれないが、でも、彼のそういう生き方は何となく納得ができなくもない。

「人は気楽に死ぬために生きている？」

と正夫は急に自問したくなった。

小林信彦のエッセイで、

「生き様という言葉はない。死に様という言葉から新しく生まれた言葉だ、これは。だから生き様という言葉の肯定的に使うのはおかしい」

という意見があった。

様というのはたしかに

「こんなざまだ」

とそんなに良い意味で使われない。

昔の人は自分の生き様なんて恥ずかしくて使わなかったよ。ということであろう。いつからか、テレビでも何でも自分の人生を平気で美談めいて語っている人々がいる。しかし、それはそんなものなのであるうか。もっと語りつくせない何かがあるはずであり、それはものすごく恥ずかしいものではないのだろうか。口に出したらそれこそ死にたくなるような。

そしてそれこそ生き様なのか。

私は不意に中野哲学堂の前で、思いついた「人生は気を持ちよう」という意見もかなり恥ずかしいものであった。この中野哲学堂にしてもかなり恥ずかしいものである。

そして、門の前まで来て、門が閉まっているのに啞然とする。開門は午前八時なのに、七時に来てしまったのだ。これは時間をつぶすしかないが、周辺には特に時間をつぶせる喫茶店もなかったのだ。

歩くといいんだ。

第133話 中野哲学堂めぐり 2

哲学堂の前の通りを過ぎて丁字路になっていたのも、そこを左に曲がり何も喫茶店のような店がないしあっても多分この時間ではやっついていないかな、と心配しつつ進むとその道路の左側が公園になっていた。左手に山があつて、遊戯施設もいくつかあつて、東京には狭いだけの公園の体をなしていないようなたんなる空間みたいな場所が多いがここは普通の公園であつた。

そもそも何でこんな早い時間にここにいるのかというと、別に大した理由でもなく朝起きたら急に思ったよりも中野哲学堂が近くにあつたので行ってみようと、朝もやのたちこめる中を少し寒さに震えながらやってきたのだ。

鞆の中には、昨日、ネットで知り合つた友人からもらった携帯ファミコンがあつた。ドンキホーテで四千円くらいで売っていたものであり、正夫は彼の前で

「欲しいなあ。欲しいなあ」

といつていたが、勿論、ねだつていたわけではなかつた。しかし、彼はそんな正夫のことを察してくれて、携帯ファミコンをプレゼントしてくれたのだ。だが、正夫はそれほど嬉しくもなかつた。ここに書いたら失礼かもしれないが、今や、正夫はゲームに食傷していたのである。今の日本はTVゲームで溢れている。日本が世界に誇れる産業らしい。わかる気もするが、ゲームとはそんなに良いものであつたらうか。大したものではない。と思ひながらやるのがゲームの良いところだと思う。

といいつつも暇なのでベンチに座つて、彼がくれた「マイティーボンジャック」をやる。カセットの上の端の方に名前がマジックで書いてあつた。よほどの年代ものなのであろう。これはピラミッドの中で、すごく跳躍力のある覆面を被つてマントを羽織つた男が、独特な操作感のするジャンプで怪物をよけつつ宝物をとってゆくゲ

と、このような態度を貫くことこそ、大物の態度なのだ。高田は、もう少し私から大物のセンスを勉強して欲しいと思う。ひよっとしたら本人が思っているものよりもいいものがあるかもしれないし、ないかもしれない。

時間が来たので門から入ってみると、まず目を引くのが看板とトイレと散歩している通行人で、意外にも朝なのに人の数は多く散歩コースにしている人がたくさんいるのであろう。看板には、この哲学堂の主な施設の名前が書いてあった。七十箇所くらいあってそれぞれに、電波系の名前がついていた。正夫は、こういう系統のものはどちらかというと好きなのであるが、そこまで深入りする必要もないや、とあきらめていた。だから、それぞれの施設と置物の呼称の説明は、この小説ではしないことにする。あくまでも、正夫の中に何が飛び込んできたか、それが問題なのだ。

辺りは鬱蒼と木々が生い茂っており、日の光が木の葉から控えめに差し込んでいる。さっそく正夫はトイレに行くと、そこにはちゃんとトイレトペーパーがあった。正夫は、アレルギー性鼻炎なので鼻をかんだ。ちなみに、どうも卵アレルギーなのかもしれない。最近、そんな気がすくするので、卵をできるだけ食べないようにしたらたしかに、前よりは酷くなくなってきた。が、もちろん、卵をとらない分、何か他のもので栄養補給をしなくてはいけないのであるが、ホウレンソウなどにしてもいいだろう。どうしてかというのと、ふと、今、アニメのポパイを思い出したのだ。

トイレから出て、道をまっすぐ歩くと、小さな池みたいなのや、時空を超えた哲学みたいなことが書いてある石像と、左側に細い坂道があつて、山のようになっている。そこを登るのもいいが、とりあえずいったん、下で行きつくせるところは行きつくそうと思ひ、そのまま進んだ。

左手には山、右手には川が流れていて水は澄んでいた。しばらく行くと、右手に橋が現れる。その橋を渡ると、何ともいえない変な広場に出た。多分、何か名前があるのだろうが、それを見るのが面

倒なので、携帯で写真を撮ることにした。

その広場は、円が二つある感じになっていて、一つ目の下段の円は、中央に噴水ができており石像が四体並んでいた。意味ありげに古今東西の聖人らしき人々が噴水を前に語り合っているかのようだ。一人だけ、地面に伏している像があつて、確かハムラビと書いてあつたような気がした。ハムラビというと、あの目には目を歯には歯を、のハムラビ法典の人である。どうして、このような中野の片隅で平伏しているのだろうか。それはよくわからないが、多分、この哲学堂を作った人が呼んできたのだろう。それだけでも、この園はすごいものがある。四つの像のもうひとつはソクラテスだったかもしれない。もう、多国籍軍のようになっていたのだ。

噴水の水は吹き上がってはいない。もちろん、こんな朝早く吹き上がっても迷惑だし、寒いのでそれはそれでいいと思う。正夫は、昨日行つた、中野ブロードウエーの地下一階のアフリカの置物が置いてある店を思い出した。アフリカの置物は、我々の想像では及ばないところをピンポイントでついでくるので、はっとするものがある。やけに、頭頂部の長いのが、カッコいいのか、気持ち悪いのかわからない謎の置物がたくさんある。店名は忘れたが、中野ブロードウエーの地下一階にあるので、興味のある方はそこに行つてほしい。

そして、この噴水の像の一体が、あきらかにアフリカの置物っぽい空気を醸し出しているのだ。頭が落花生のような形をしているのである。一瞬、布袋様にも見えるが断じてそうではない。着ている服が中国風ではなく、オリエンタルみあいである。しかし、ひよつとしたら彼はシルクロードを通じて布袋や、アフリカの置物へとなったのかもしれない。というよりも、シルクロードは果たしてアフリカまで通じていたかどうかかわからないが、人類のルーツはアフリカというから、アフリカから伝わってきたものだと思えば、間違いはないだろう。

それにしてもどうしてこんな四体があるのか、不思議なものであ

る。この哲学堂を作った人は何がしたかったのだろうか。宇宙を演出したかったのであるうか。それとも世界的な集合意識を暗示しようとしたのだろうか。ユングのいうところの隠者みたいなものを描いたのであるうか。七人の賢者。竹林の七賢。という言葉があったのを思い出す。中国の話だ。関係ないかもしれないが、中国の文化は時代を遡れば、遡るほど素晴らしいものになっているのだ、と誰かがいつていた。そういった中国の偉大なる古代文明が、根本的な何かと二重写しになっていてもおかしくはないと思う。だが、こんな思いつきを書いていても埒が明かないので先に行こう。

東の方にもう三体像があったのだ。これこそは東方の三賢者か。キリストが産まれたときに、現れたという彼らとは、遠目でもすぐにはわかるが、あきらかに無関係そうであった。正夫は、その写真もとることにして、四段くらいしかない階段を上がり近づくことにした。

その三体の像の中に聖徳太子がいたのか、それとも四体の像の方にいたのか忘れたが、正夫は、聖徳太子の像に近寄ってみた。すると、ビジョンが浮かんできたので、これはテレパシーということがわかった。彼は正夫に何を伝えたかったのか、よくはつかめないが、建物の影が浮かんできた。これはあの有名な法隆寺かもしれない。

正夫の頭の中にはそれ以上にいろいろなものがある。たとえばそれは同時に十人の話をきくことができる、聖徳太子脳についての解説などもあった。人間は自分の中で能力を制限しようとしており、そのストッパーを外すと自然と自在に同時に能力を発揮することができ、十人同時にも話をきくことができるのだ。

正夫は、しかし、同時に十人の話をきく必要性を感じなかった。正夫は英語は好きであるが多分、一生読み書きはできないし、話すこと聴くこともできないであろう。というのももそうする必要がないからである。テレビなどで見ると、老年のジャーナリストがすごく日本語っぽい英語で、各界のアメリカの著名人と語っていたりするが、あれを見ていると、意外と簡単なのかもしれないが、でもしないだろう。

アメリカに興味はなかった。外国に興味はなかった。かといって日本が素晴らしい国かというともない。では何に興味があるのか。国という狭い枠を超えた何かに興味があるのだ。

すると聖徳太子が正夫にいった。
「その考えはいい考えだよ。国は関係ないんだ。みんなこだわらざるなんだよ。そこをこだわらずに、突破して欲しい。」

俺が君にいいたいのは、抽象度を上げて欲しいってことなんだ」
この言葉は正夫にグサツときた。

苦米地英人のことをいつているのだとしたら、まさに正夫が考えていることであった。そうその通りである。抽象度を上げなくては

いけないのだ。この小説なり何なりが行き着くところは、最終的にはそれに尽きてしまう。

「あああ、抽象度、上げなきゃナアア」

と正夫は小さい声で叫んだ。

正夫の近くをランニングしている老人がげげんそうな顔をして通り過ぎる。

それから、橋をまた戻ってきて、森の中を進み、河の上を複雑に錯綜しているように見える橋の上を通って、別方向の出口を見つける。ここから出ようとすれば出ることはできるが、まだ、左手にある山の上を征服していないので、登ることにした。

石の段を上りながら喉が乾いたのでバッグの中の壮健美茶を取り出して喉に流し込むと、とてつもなく良い気持ちになり、この哲学堂にきたすべての経験というか記憶よりも、心地よいほどであったが、しかし、これは哲学堂の製作者がそこまで考えていたのかもしれないので油断はできない。

そしてさきほど思いついた抽象度を上げること、をもう一回思い出して、自分はどれほど抽象度の低い人間だったかを思い出して愕然とする。ただ美しい女、金、うまいご飯などを目指して生きていくだけではないか。それを夢だの何だのいつて…。

しかし、そう反省しようとして、自分が実は割りと隠者みたいな感じであったことも思い出した。そういう意味では半分、仙人みたいなところもなかったであろうか。いや、そういう部分は確実にあった。

いずれにせよ、この哲学堂の森の中にて、抽象度を上げることが考えなくてはいけないのだ。もうこの森の中にある説明書きの看板などどうでもよかった。とにかく、スケールを大きく、抽象度を最大まで上げてゆくと、宇宙を越え、無限よりもさらに先の空になるのだ。

その空の次元ほどではないにせよ、抽象度をどんどん上げてものを見るようにすると、有能な人間になれるらしい。正夫はそんな説を思い出すにつけてワクワクしてきた。

正夫は、自分の中にはどうも人望というか魅力がないことを実感していた。この小説が面白くないのは、正夫は周囲のせいにしてい

だが、実は中心人物である正夫がつつい防御の構えを見せてしま
うからである。かといって本当の正夫なんてものを見せようとした
ら、これも酔っ払いの千鳥足みたいなことになるのは明白である。

では、どうすればいいのか。簡単である。空という視点から見
たら、正夫がどうのこうのなんてことは大した問題ではないのだ。正
夫はもう魅力がなくてもアホでも何でもいいから、メッセンジャー
になるべきである。何のメッセンジャーかは知らないが、とにかく
できるだけ空に近い抽象度の高い、一見、現実には役に立ちそうも
ないものを伝える人間である。

「俺の使命はそこにあつたか」

と正夫は何やら確信をえたのであつた。それは神の啓示にも似て
いた。山を少し登ると、開けたところに出て、江戸時代に作られた
感じの蔵がある。多分、知恵の蔵とかいう風なのであろう。

正夫は、

「ふーん」

と行って足早にその蔵を通り抜けてゆく。

そしてしばらく歩くと赤い五重の塔みたいな建物が出てきた。五重もなかったかもしれないが、多分、それくらいはあってもおかしくなかった。この場所は、地井武雄の「ちい散歩」というテレビ番組にも出ていた。彼は腕を組んで、

「うーん」

と唸って、

「実は俺、こういうのも好きなんだよね」

といった。

深遠なる哲学というムードが辺りに漂っていた。正夫は、携帯で写真をとることにした。実はこれまでもいくつか撮っていた。

正夫は、昨日会ったキャサリンのことを急に思い出した。キャサリンとはハンドルネームであり、ちなみにトニーとは、正夫のハンドルネームで、ネットで知り合った女の子なのであるが、いろいろ不幸な生い立ちらしくて、男と同棲してハッピーなのか、と思いきや、お金が足りないらしいが、働きもせず、

「辛い辛い」

いうので、いろいろきいてみると、男と同棲しておきながら、自分のアパートを引き払っていなくて、家賃を払わなくてはいけないので、それで辛いのだろう。

正夫は、お好み焼き屋で、長い間、彼女の愚痴をきき、すべての辛さの原因は、そんなくだらないことにあつたことを知ると愕然として

「だったら引つ越せや！」

と叫びたくなった。

でもニュアンスを変えて優しくいうと

「だって、もし仲が悪くなったらどうしよう」といった。

「一ヶ月我慢して引越せばいいし、結構、仲はうまくいっているんだから大丈夫だよ。引越そうよ」

と正夫はアドバイスした。

「でもなああ」

とキャサリンは渋る。

「もうこいつアホ。」

しらねえよ。

金が欲しければ働けよ、ボケ」

と思いつつ、お好み焼き屋はおごつてあげた。

正夫はキャサリンのことを考えるとムカムカしてきた。20くらいだからしょうがないが人生を舐めているのが透けて見えるのだ。しかも、存外、そんな感じに生きて、そのまま何とかかなりそうな運のよさもあった。

運の良いのはいいことなのであるが、彼女は絶対に働かないという感じなのでそこが嫌だった。しかも同棲している相手の愚痴を平気でいった。もう、頭の中が

「ムカムカムカムカムカムカムカ

ムカムカムカムカムカムカカ」

してくるのだ。

「いかん、ここは哲学堂だった」

と正夫はそんなどうでもいいことは忘れることにした。

ちなみに正夫の盟友である市村氏も、キャサリンに会ったことはないが、腹が立っているらしい。多分、それも人生舐めているからであろう。いや、彼女にはそんな気はないのだ。彼女はひたむきに生きているということになっている。というよりも、人生舐めている、という風に見えるのは、正夫や市村の偏見である可能性も高い。

もう、くだくだしく書いてゆくのはやめよう。彼女はひよつとしたらすごく純粋な優しい心の持ち主で、ガラスのようなハートを持っているために、不幸に悩まされているかもしれないのだ。彼女はそういう意味では汚れを知らないお嬢様のタイプともいえた。ただ外見はそんな感じとは真逆であり、普通の地味な女の子であったが。

そんなことよりも、正夫が一番、腹が立つのは「引越そうよ」ということだけなのである。

それも愛情ともいえた。ひよつとしたら、正夫はキャサリンを愛していたのかもしれない。だから腹が立つのだ。

では、どうして一度も会っていない市村が、腹を立てるのだろうか。それも簡単で、市村も愛していたのだ、彼女を。

つまり何が言いたいのかというと、キャサリンは非常に印象深い人物であった。出会ってよかった。ということである。

正夫はこの問題はそういう結論でいいだろうと、赤い塔を越えて歩くと、また広場に出て蔵があつて階段で猫が寝ていた。

正夫は

「ニヤオ」

と喋って近づいた。

猫は逃げない。

正夫は猫の背中を撫でた。すると猫は目を開けたが、無視している。何故、この猫は見も知らぬ正夫にこんなに友好的なのだろうか。猫にも人間と同じように相性があるんだろっなあ。と感心した。

正夫は抽象度を上げようとして、自分の抽象度が地に落ちていることに今更、驚いた。あんな女性のことはどうでもいいのだ。

もっと空高く天馬のように羽ばたいて、思索の翼を広げ、宇宙まで行こうではないか。ひよっとしてこの猫はカンパネルラかもしれない。正夫は昔やっていたアニメの猫がやっている映画の銀河鉄道の夜を思い出した。

そもそもが人生舐めているといわれかねないのは、正夫の方ではなかったらうか。この小説にしても小説が踏むべき手続きをちゃんとしていないし、日本語としても話としてもおかしいし、ほとんど、素人の便所の落書きのようなものでしかない。

それを考えると、人生を舐めていない人種つてのは、どういう人なのかというと、プロの人、ということになるだろう。小説家であればプロの小説家のようなものである。

正夫はそれに関連して、萩本欽一の番組を見たことを思い出した。コント55号というのは、突っ込み側の萩本欽一が、いきなり坂上二郎を困らせて、それで、アドリブでやっている、今までにない斬新なコントであり、萩本欽一の司会業も、素人っぽいものであり、彼の出た番組で成功した番組は、素人をうまく使っている番組であったのだ。

アドリブ、素人、スベリ芸、リアクション芸、と、今のバラエティでは、当たり前前にある分野を萩本欽一はどんどん開拓して行ったのである。だから、彼は視聴率100パーセント男になれたのだ。しかし、彼は、急に善人っぽくなってしまった。たとえば24時間テレビの司会を十年連続でやったりして、段々、飽きられてしまったのだ。

正夫は思うに、彼の本質は素人であり続けることだったのだろう。それなのに最近の彼は、どうして、善人トークをしてしまうのか。だから、今の彼は視聴率が取れないのだ。

それは

「それっていいね」

みたいに言うこと、褒めることが大多数の賛同を与えることを学習してしまっただろう。

でも、萩本欽一の凄さは、そこにはなくて、どこに行くかわからない素人芸の迫力だったのである。ちなみに、現在、司会業で大活躍している島田紳助も、急に、「深いイ話」みたいなことをし始めて、欽ちゃんが失敗してしまった善人路線を行こうとしている。

行き過ぎた善人志向は、たんなる権力志向にしかならないというのに。そもそも、島田紳助は、何度も無意味に激怒して、人々に迷惑をかけている。そんな人間がどうして急に善人ぶろうとするのか、どう考えても視聴者は納得いかないであろう。

それはそうとして、正夫が思うのは、全盛期の欽ちゃんのやってきた素人芸、素人いじり芸ってものの可能性である。これはひよつとすると、すごく面白い可能性に満ちているのではないだろうか。

正夫がやるべきことは、素人芸をどんどん極めてゆき、善人なんてこじんまりしたものではなくて、壮大な未完成の輪をみんなに見せてゆくイリユージョニストになることなのだ。多分、この中野哲学堂は、正夫にそんなことをいいたかったに違いない。

それを思えば、この中野哲学堂にあるものはどれをとってもプロの技ではなくて、へばい素人芸の延長線上であった。正夫は、山から降り、途中の劉備と関羽の祭つてある（孔子だったかもしれない）お堂を携帯のカメラでとったが、ぶれてしまって、まるで、たたりでもあったかのように辺りの景色がグニャグニャになってしまった。

撮り直すのも面倒なのでそのまま入り口に戻り、正夫は、一人でこう呟いたのだった。

「精神世界、舐めているわ」

第140話 「最終章」

正夫は数日前に高田伸司と市村とに会ったのであるがそこで、「抽象度を上げる」

ということを繰り返し強調していた。

今でもそんなに変化はないが、でも、ひよつとしたらあれは言いすぎだったかもしれない。というのももそんなに話題がなかったからということもあるのだ。数時間、彼ら二人は、話していたので、邪魔をする形になっていたかもしれない。

しかし、そんなことを乗り越して、苦米地英人のいつていた「抽象度を上げる」

ということは大切なのである。

ヒデト、といえば、正夫は前に「HIDE TO」という小説を書いたことがある。TRPGが好きで男と、正夫とのバトルという内容であり、途中の議論は、実際にお互いがやったものを無断で載せているのであるが、それを読み直して思ったのは

「お互いに抽象度が低いな」ということであつた。

こつちの英人ならば、容易にこの二人の問題を解決できるであろう。つまり、そんなに嫌なら、お互いにTRPGやんきやいいでしょ。しかも、そこで合意できているんなら、いいんじゃないかと。

後はお互いに、俺は有能なんだあ、と主張したいだけであるが、それは自分たちだけでやればいいんで、もうこういう関係になつてしまつたら、それは無理だろう。ということであつた。

これであつさり解決である。

正夫は久しぶりに「HIDE TO」を読み返して、自分は自分のことを天才と思つていたんだな、ということがわかつて、なるほど、と思つた。これ自体は、苦米地理論で言うと、良いことなのである。

ゴール地点を上になげれば上げるほど、よいのである。正夫は、自分のゴール地点をもっと上げようと思った。この小説を通して地球を活性化させよう、とまで思った。そうしたら、自分もおのずとさらに高いステージへ引っ張られてゆくのだ。

第141話 「最終章」

そして、正夫の

「抽象度を上げる」

という意見に対して、高田伸司は後日噛み付いてきた。

「それは悟るとかそういう意味なんですかね。」

俺はそんなに悟りたいとも思わないですけどね。

しかも、この前会ったとき、別に正夫さんも悟っているわけではないように思えましたがどうなんでしょうかね。

人間にはいろいろ感情があつて、それを楽しめばいいじゃないですか。

悩んでもいいし、苦しんでもいいし」

という内容であつた。

まるで、山田洋治監督みたいな反論であり、正夫はこれを読んで、関係ないかもしれないが「皇潤」のCMを思い出した。往年の名俳優が出てきて、

「皇潤いいですよ」

とっているCMであり、あのほんわかした甘い雰囲気を高田は醸し出していた。

正夫は、これはたしかにそうだ。と思つた。

人間、悩んで生きてゆく。それでいいのだし、変に悟ることはないのである。そもそも常に悟っている人間なんているものか。いたとしたらそいつに内閣総理大臣を任せて、そいつが死ぬまで政治を任せればいいのである。

なかなかそんな人間はいない。今の総理もそうであるが、結局、人間だから細かいところを間違えるのである。

正夫の小説だつてそれで、これだけ構成がグチャグチャなのも人間性を表現しているともいえる。もし、正夫が悟っていたら小説な

んか書いていない。

だから、高田の指摘は間違っているが、人間として彼の主張は正しいのである。いや、そもそも間違っているのが人間なのだ。

第142話 「最終章」

ゴールを高めるという意味でいえば、酒場で、たまたま、嘘つき入道の話になった。

これは、学生時代のサークルにいた、嘘を64個いった人物のことであり、正夫の愛していた新入生三人衆の一人と仲良くなって、どこかへ消えた人物のことである。

たしかこの小説にも書いていた。書いていないかもしれないが、それを読み返す気力も時間も正夫にはない。

彼の話が出ると、いつもクソボロにけなすのが癖になっているが、正夫は今回だけは

「あいつはいいやつなんだよ」といった。

「あいつは間違っていないんだよ。モンゴルで馬に乗るとか、中東に20回以上行っているとか、国体でピッチャーやったとか、幽霊を刀で切ったとか、競馬では負け知らずとか、ああいうエピソード自体は、滑稽だけれども、みんなそれを嘘だとわかって接していたんでしょ。」

あいつは多分、ゴールは高かったと思うんですよ。だから間違っていないんじゃないかな」と正夫が言うと

「そうなんですかあ」

と高田は少し引き気味だった。

「たとえば、市村さんも世界一の格闘家を目指す、でいいと思うんですよね。」

とにかく、ゴールを高く設定するのがいいんですよ。

苦米地理論ではね」

と正夫は力説する。

正夫は苦米地理論のことを少しかいつまんで話すと、市村は

「ああ、それわかるよ」

といった。

「わかるんでしょうねえ」

と正夫も納得した。

彼も武術論などをよく研究しているのでよくわかる分野なのだ。

高田は取り残されたようであった。

それが後日の反論に結びついたのである。

第143話 「最終章」

ここで苦米地英人の本の内容を書こうと思ったがそうすると下手をすると盗作ともいえわれかねないので、とにかくここでは

「抽象度を高くする」

「ゴール地点を高くする」

ということだけを書いておこう。

後は、それぞれが彼の本に直接に当たって欲しい。

正夫にいわせれば、そんなところで十分なような気もするのだ。抽象度を高くする。

という意味では、正夫は、今まで非常に抽象度の高いことをこの小説にも書いていたと思う。つまりこの小説を皆さんが読んでいただければ、抽象度が高い世界なのはどういうことなのか、ということが明白に記されている。

ゴール地点を高くする。

これも、正夫は世界に「面白ムーブメントを俺が起こす」と前に宣言しているので、そこら辺を読めばわかるであろう。

つまり、この小説こそ正しいのだ。

この小説を読んだ人は自動的に、ニートから富豪になっていることであろう。

正夫は今、なっていないが、多分、それは自分の正しさに気付いていないだけなのである。

まさに童話の青い鳥のようなものである。

そして、もうこれ以上、この小説には書くことがなくなってしまうった。

後は、思いつくことだけをダラダラ書くだけである。

ここでは三人が、中野のメンバーについて語っていたことを書いてゆこうと思う。

第144話 「最終章」

しかしそこに行く前に抽象度を上げるとは具体的に何なのかをここに書いてゆこう。

具体性のあるもの、から人間は抽象的な意味を作り上げる。たとえば、椅子があつたら、「椅子」と意味づける。

これも抽象的な行為であるが、その度数を上げるとは、「椅子」から「座るもの」という風に、さらに広範に定義できるものにしてゆくことである。そうすることによって、「座るもの」は、椅子という具体から少し飛翔することになる。切り株なども椅子と「座るもの」という意味では同類になる。

「座るもの」以外にも「木でできたもの」という上げ方もできるであろう。その椅子が木製ならばの話であるが。「支えるもの」という上げ方もできる。

そうやって、抽象的に意味を上げてゆく。

さらにそれは「物質」というものになり、最終的には、「空」になる、というのが苦米地さんの考え。

これなんかもなるほど、とうなってしまう。

普段から抽象度を上げる訓練ができていれば、問題解決もそれだけ早くなるのだ。

たとえば、この小説を読んで高田伸司は、

「何じゃこら」

と思うかもしれない。

しかし、この小説にきつちりと高田伸司を礼賛するようなことも書いておく。そうしておけば、高田伸司も怒らないであろう。高田伸司は恐らく、この小説の中で自分は人生を知らない愚か者だ、みたいに見えるかもしれないことを恐れているだろうが、そんなことはまったくくないのだ。

正夫なんかよりもよっぽど優れているのである。彼は、恋人を作

り、成功している。家も買ったらしい。もう彼にはこれ以上、何も望むものはないだろう。

しかし、この小説で扱うことはそういうことではないのである。さすがの高田伸司もこんなことまでは思い及ばなかった。いや、もともと思い及んでいたんだが気付かなかったということを書くということなのであるが、もう疲れたので、今日はこれくらいにしておこう。

ちなみに、正夫は今日はコンビニで昼に出勤しなくてはいけない。暑いのに大変なことだ。

でも、それまでに時間があるのでこの小説を続ける可能性もあるので、読者は油断してはいけない。

第145話 「最終章」

さらに抽象度について書くと、「町」「市」「県」「国」「アジア」「地球」「宇宙」「空」という風に上げてゆくことなのである。そこを思えば、ゴール地点を高くするという話も頷けるであろう。

酒場の席で、渡部博文の話にもなった。

彼は最近、農業関係の仕事をしており、

「今に世界が食料不足になりますぞっ。

そのときのために、有機農法です。

農園を確保しなくてはダメですぞ」

みたいなアドバイスを高田伸司にしてきたのだ。

「まるで新興宗教のようだね。

とでも言いたいようだな」

と正夫は先回りしていった。

「いや、そこまで言うつもりはないですけどね」

「いや、わかるよ。

そう思うかもしれない。

でも、彼は正しいよ」

と正夫はいった。

「ただ、彼には抽象度の高さ、そして、ゴール地点の高さが足りないのだ。

たとえば

『世界中から飢餓を根絶する』

みたいなゴールを考えて動くようにすれば、彼は立派なものだと

思うよ。

彼は正しい。

でも、そこまで行けていないだけ。

だから、一見、ダメな新興宗教のような感じの物言いになるんだ

「よ

「ああ、そうなんですか」

「そうそう」

正夫はにっこりと笑うと、後光が光った。後ろでは天使が舞っている。

第146話 「最終章」

その酒場で正夫は白目になり口から泡を吐いて

「人間は正しい。」

人間は正しい。

人間は正しい」

と続けた。

すると雲間から、渡部博文の顔が見えて

「ほう、そういう話になっているんですね」

というので

「そっだよ!」

と叫ぶと、渡部は消えた。

「でも、マサさん、さっき人間は間違っているっていつていなかったっけ」

と市村が言う。

「そうです。」

人間は正しいですが、間違えます。

あるいは間違っているから正しい。

もしくは間違っていて正しい。

正しいときに間違っている。

間違っているときに正しい。

間違っている。正しい。

間違っている。正しい。

間違っている。正しい。

あるない

あるない

あるない

あるない

あるない

「あるない」

と呟くと、男の店員が出てきて

「お客さん、他のお客さんの迷惑になりますので
と注意してくる。」

「あ、すみません」

という目目の前の手羽先を食べた。

「あるない、あるないか。」

俺も良くそう連呼していたな」

と市村が笑う。

そういえば高田も1、0、1、0と呟いていた。

みんな知っているんだな。

と正夫は思った。

「でもその先があるんです。」

その先とは空なんです」

と正夫はいう。

それに加えて、市村氏の昔やっていた「ゆる体操」にも似ている、
「ぶるぶる気功」というものがあることを、
「いかいまいか迷ったが、これはまた今度ということにした。」

第147話 「最終章」

以上、こういったことを正夫はベッドで寝転がりながら回想していた。長く付き合ってきた友人たちと久しぶりに会い、まったく変わっていないかった。高田伸司も、市村も、年齢を感じさせない二人であった。十年後にもまた会うのかと思った。十年後、正夫は二人に何を話しているだろうか。抽象度を高くなんて電波みたいなことをまた話しているだろうか。渡部博文にはまた会えるだろうか。

彼は、正夫が小説に書いたことを読んで、絶望しているかもしれない。自分の中ではこんなに楽しく生きれているのに、どうして理解してくれないんだ。と慟哭しているかもしれない。多分、渡部は農業で、スローライフみたいな生活を営むことだろう。そして有機農法や、食育ということもやるだろうし、環境団体みたいな活動もするかもしれない。彼の中ではそれが正解なので、正夫は、まったくいいことだと思う。ひよっとしたら、それを高田は騙されているというかもしれない。正夫は、前に、渡部が簡単にキャッチセールスに騙されそうになり、注意したら、さらに高額なキャッチセールスに騙されそうになっていたという故事を思い出したが、しかし、そうだからといって、今回がそうだとは限らない。

最終的に、自分で本当にその生活が幸せなのか、考えられているかというか、いや、最後まで、つまり死ぬまで騙され続ける気迫があるか、なのだと思う。そういう意味ではこれは、たんに渡部の問題ではなく、正夫の問題でもあった。

正夫は、最後まで自分は小説を書くという思いを持ち続けることができるだろうか。最近、そんな気持ちがあんまりなくなっている。小説と見せかけてエッセーみたいなのでお茶を濁してはいないだろうか。そんなことではダメなのだ。ザッツ小説みたいなのをちゃんと書こう。そして、そんな自問するのを小説に書くのも止めよう。小説は小説だ。にしても、そうだとしたら小説って何だろうか。

それやこれやを思ううちに、つまりはものすべては空、ということに至るのであり、空だからこそ、もう書くことはない。というか書くことがないということがデフォなのだ。芥川龍之介はそこに気付いたのではないだろうか。書くことはない。という念に常に脅かされながら生きている生活というのも大変なものだ。

しかし、正夫はそんなことはまったくなかった。書くことがなければやめればいいし、こういったかなり長い小説でも簡単に最終回と題して終わらせてしまうこともできるのだ。正夫は芥川龍之介になるつもりは一切なかった。あんなに苦勞して文学をやって何になるだろう。それよりももっと肩の力を抜いて、思いついたことを書いて文学だといった方がはるかに楽だ。

どうせ空なのだから、空の周りを低回すればいいし、この小説が後の世に残ることなんて望んでもいないし、馬鹿らしいことだ。正夫はこの小説を自己承認のために書いてきたような気がするが、結局、そんなものはないのだ。そういう意味では、承認されるなんてことは永久にない。それよりもいつも承認されうるような状態に自分を高めていくような生き方がいいのだ。

そういう意味で、正夫にとっては、渡部が農業で失敗しようが成功しようがどうでもいい。渡部は、あの調子で生き続けるのだろう。正夫にとってはそっちの方が大切である。あいつはとぼけた奴であったが、あの感じをもったまま生きてゆく。それを遠くでもたまには近くにでも、眺めていることのできる幸せというものがある。それこそが友情というやつなのである。

あいつが不幸になっても構わないし、まあ悲しむだろうが、あいつが幸福になっても構わない。幸福の方が嬉しいだろうが。あいつはあいつなのだ。夜に体をゴロゴロ這って、「僕の昔のあだ名はナスピだったんです」と悲しげにつぶやくあいつのまんま、あいつは

生きている。それでいい。正夫も正夫だ。

どこまでも生きている限り正夫は正夫であろう。雨の日も晴れの日も春も夏もいつでも、正夫は正夫だ。それだけの話であり、それ以上の何もない。そして、いつか死ぬのだろう。死んだら死んだで、また物語があつたりなかつたりするのだろう。この小説はここで終わるが、本当は何も終わつちやいない。無限に無限にあるがままに続いてゆくのだ。そして本質的にそういうものすべてひっくりかえり空なのだろう。そうだとしたら悲しくもないし嬉しくもない。ただ、虚空に向かって、歩み続けるのみ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6818g/>

小説 中野

2011年8月22日18時51分発行